新しい風俗文化雑誌

風俗草紙



特集 雑誌オール實話 改題

8

風俗草紙



定価百円

8



Der heilige Sebastian
Gemälde von Giovan Antonio Bazzi (Sodoma)
Florenz, Uffizien

受難者の像

矢は官能……血は快楽……昇天の受難者の貌(おも)に
みなぎる神々しい被虐の極致……。

◇後記◇

お待たせ致しました。第二号をお送り致します。盛夏の候、暑熱に倦み、そこはかとなく獰奇を求める紳士淑女諸君の一夜の好伴侶となつて、本誌が多少とも空想の悦楽、美の妄想を援け得れば幸せです。

さて本号から、関西在住の喜多玲子氏と併んで、新たに東京の北原環氏が登場致しました。その得意とする官能的画風は必ずや読者の絶讃を博すこと、存じますが、今後両氏共に毎号活躍下さいますので、御希望の構図題材がありましたら読者からもどしどし御申越下さい。

又作家にして劇通の正岡容氏の「ぐろてすく芸談」を新たに連載致します。凄惨艶美の芸術を巨匠の足跡に拾う好読物です。御愛読賜わらんことを——。

(U)

◎直接購読者募集◎

御購読は直接申込が一番確実で御便利です。又随時、出版通信を優先的に御送付します。

三月分三冊（送料共）三百円
半年分六冊（送料共）六百円

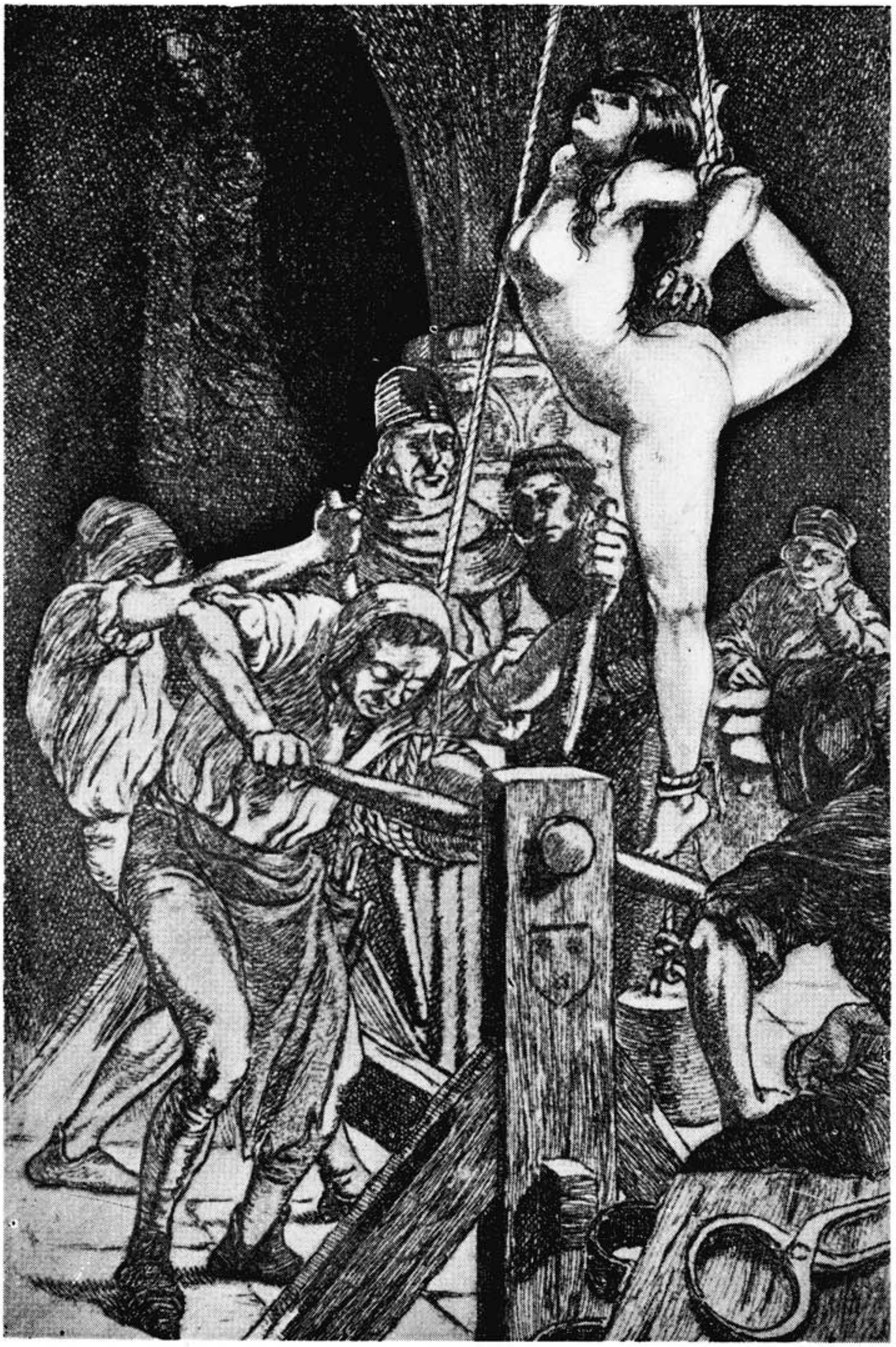
風俗草紙 第一巻 第五号
毎月一回一日発行
特集雑誌 オール実話 改題 定価百円
昭和二十八年七月二十五日 印刷
昭和二十八年八月 一日 発行
編集人 氏家富良
発行人 野村佳秀
印刷所 内海印刷株式会社
東京都文京区戸崎町十三番地
発行所 日本特集出版社
東京都千代田区神田神保町二の三四
電話 九段(33)三四二七番

（九月号）風俗草紙次号予告

病癖に憑かれた若き処女の手記・特集

淫らな密室……金沢美樹子
汚辱の令嬢……和田淑子
陽子を虐めて！……木暮陽子
悪臭地獄……北原ミドリ
愛犬アムール……林道子
日本刑罰史 第三回 吉原惨虐私刑秘史……深田徹
（強盗秘話）俺が縛つた女……増富次平
愈々絶讃 責め絵二大画集……喜多玲子 北原操
好評連載 まにや地獄……日夏由紀夫
秘色大阪城絵巻……岩堀光
ぐろてすく芸談 第二回 鶴屋南北……正岡容

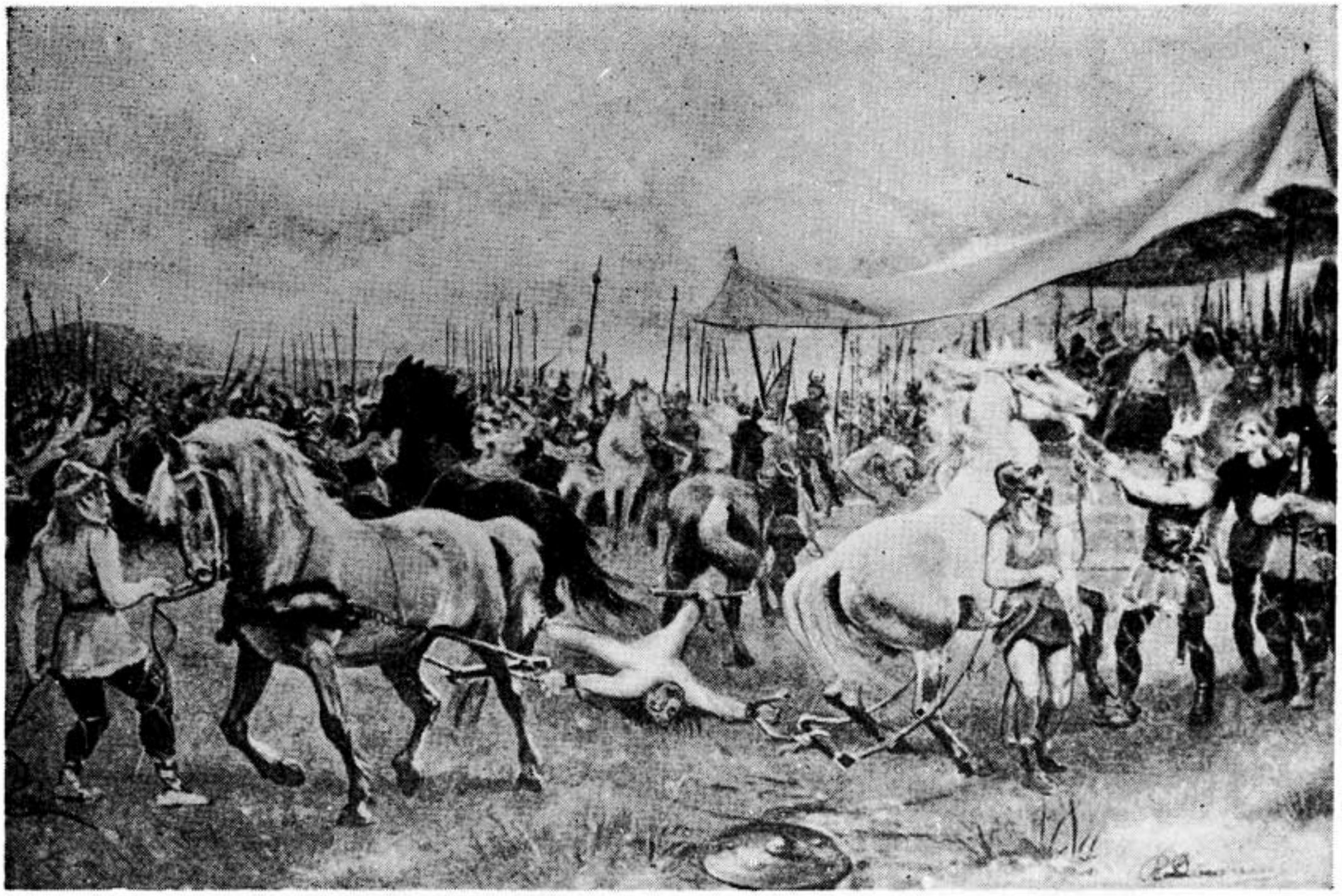
風俗美術館



西洋刑罰圖

滑車責め

ギリ、、ギリ、とロクロが無慈悲な音をたて、廻されると、「アーッ」苦痛の絶叫が女の唇を洩れて陰惨な拷問室の壁に反響する…

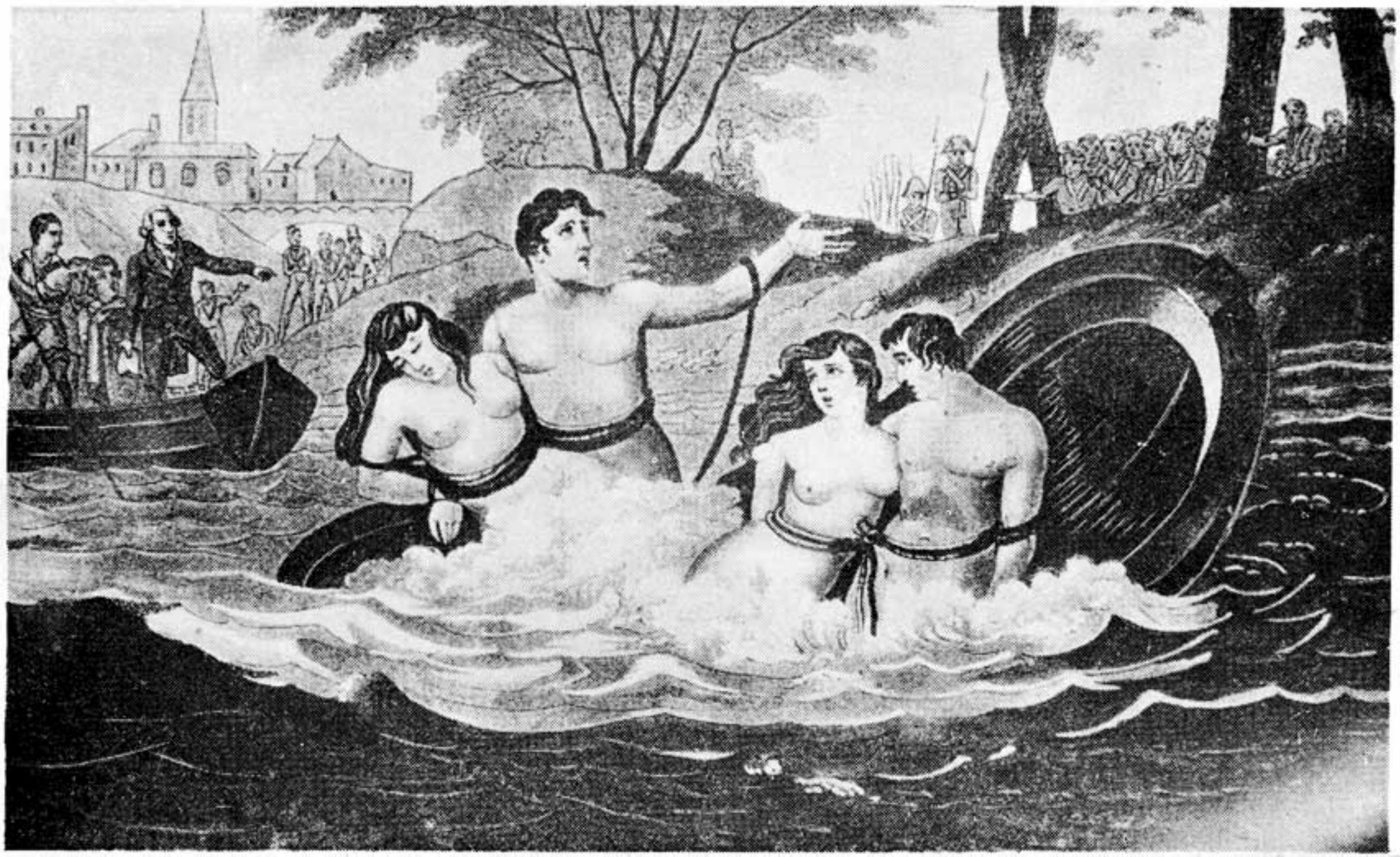


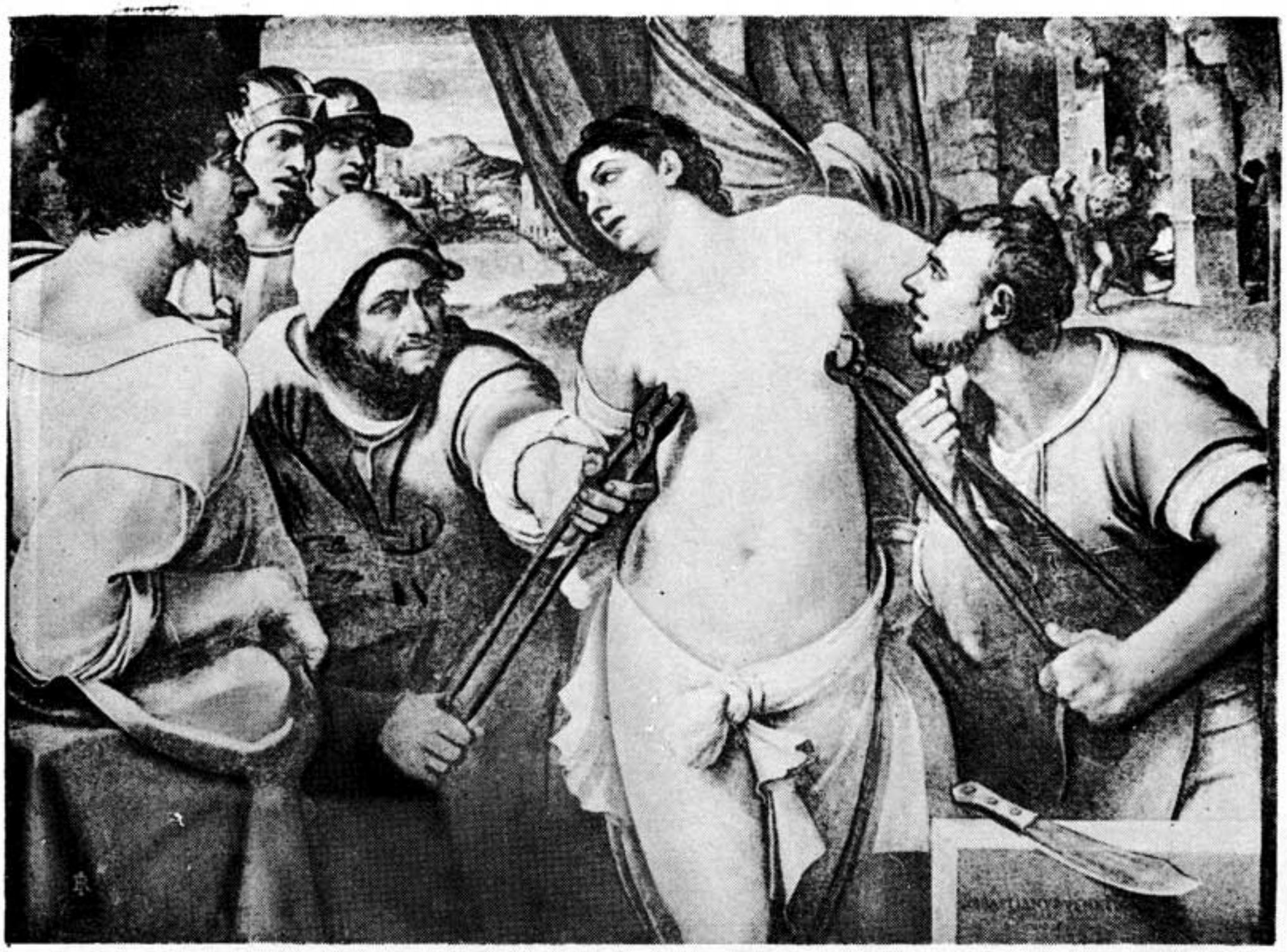
八つ裂きの刑

四頭の馬に手足を縛りつけて、その馬を別々の方角に矢駆させれば、無惨や罪人の体は八つ裂きとなつて相果てる。

水死の刑

敵将とその妻を素裸にして縛り、わざと穴のあいた舟に乗せて海え放てば、忽ちブクブクと波に呑まれて行く。最後の救けを天に求める男、失神した女、悲鳴をあげる女、グロとエロとユーモアの織り交つた奇妙な絵である。



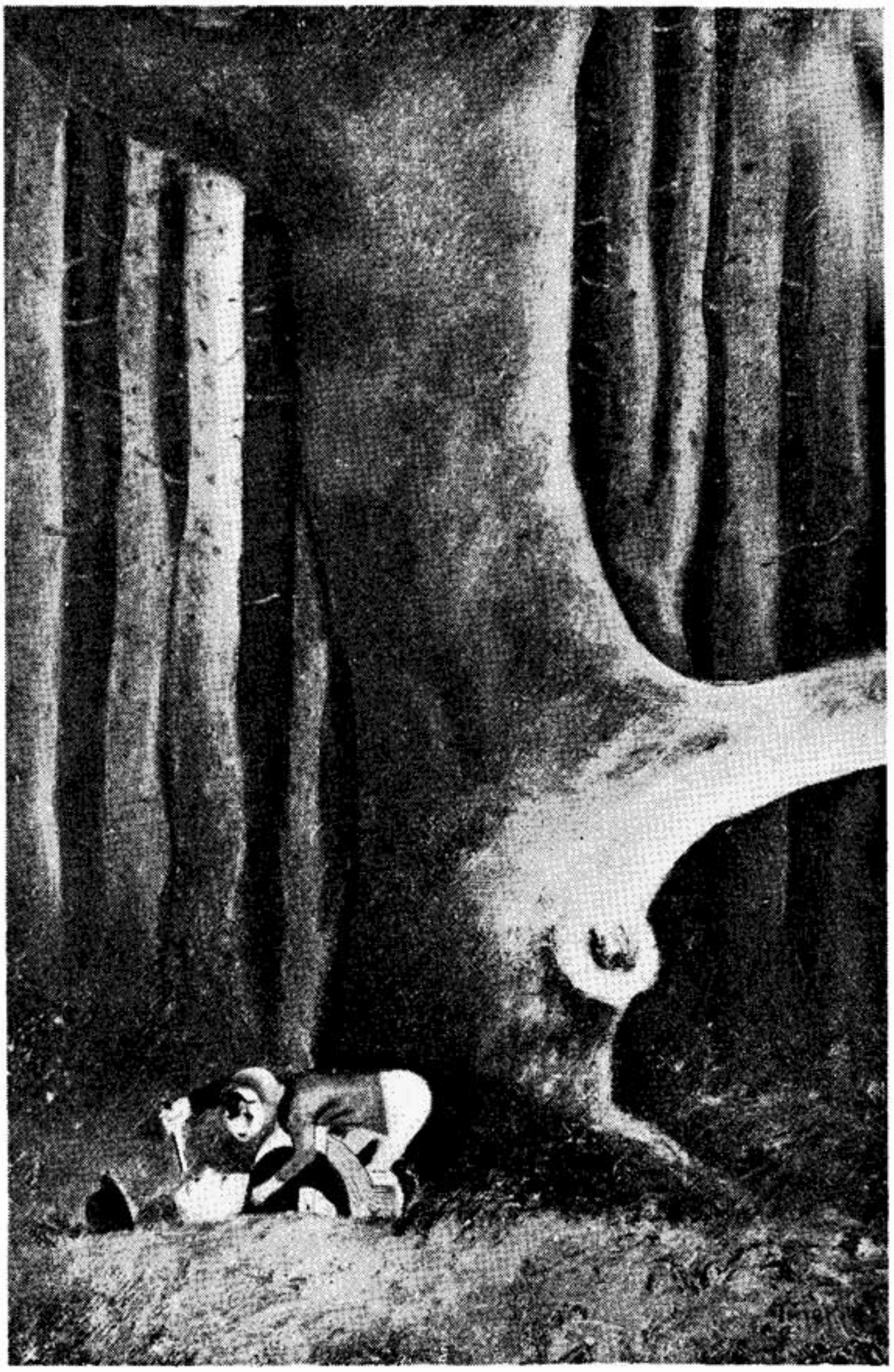


上・乳捥(ちちもぎ)の刑

下・曝(さら)しもの〻刑

金テコで乳首をもぎとる変つた刑罰である。女スパイや敵将の妻などに試みられたものである。

褌にされて衆人の前に曝される女。時代が進み女性の羞恥心が高まつて来るとこれは苛酷な刑罰だつた

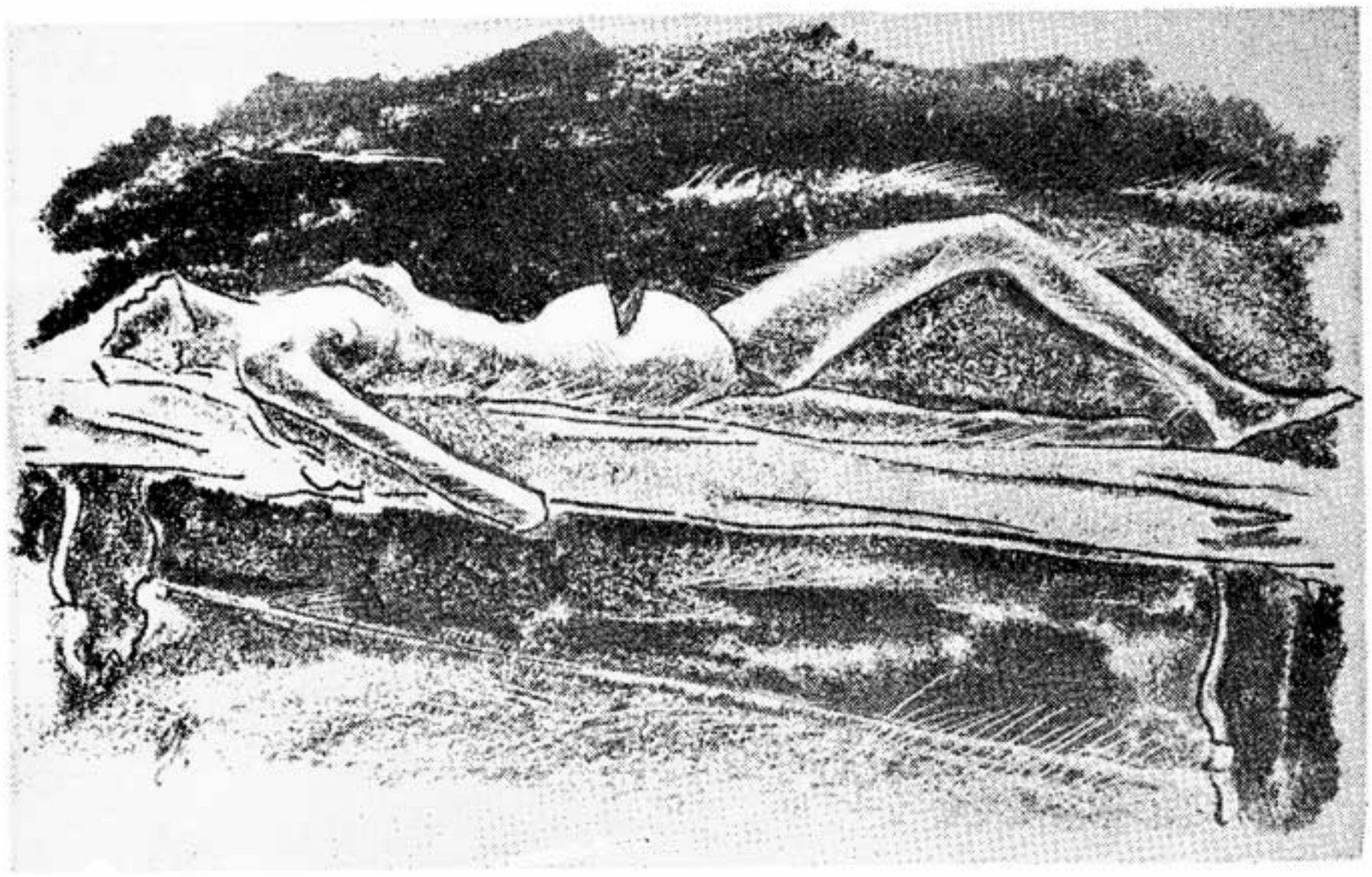


林の中で……

殺されようとする男の悲鳴が、凄々たる林の梢に吸い込まれて行く……深沈たる森の中で行われる兇行……

殺人名畫集

暑いので、少し肌を冷やす名画をお送りしよう。こゝに並べたのは、殺人の美を、病的な幻想のうちに開花させた芸術である。ルノアールやセザンヌが太陽の下に絢爛と咲いた大輪の花なら、これはジメついた陽陰にポツチリ開花したアザミか……。しかし見る人によつては、より珍重に価するものであろう。



屍の女

バックリ腹を割られた女が死んでいる。誰が殺したのか……。夏の夜の怪奇……。

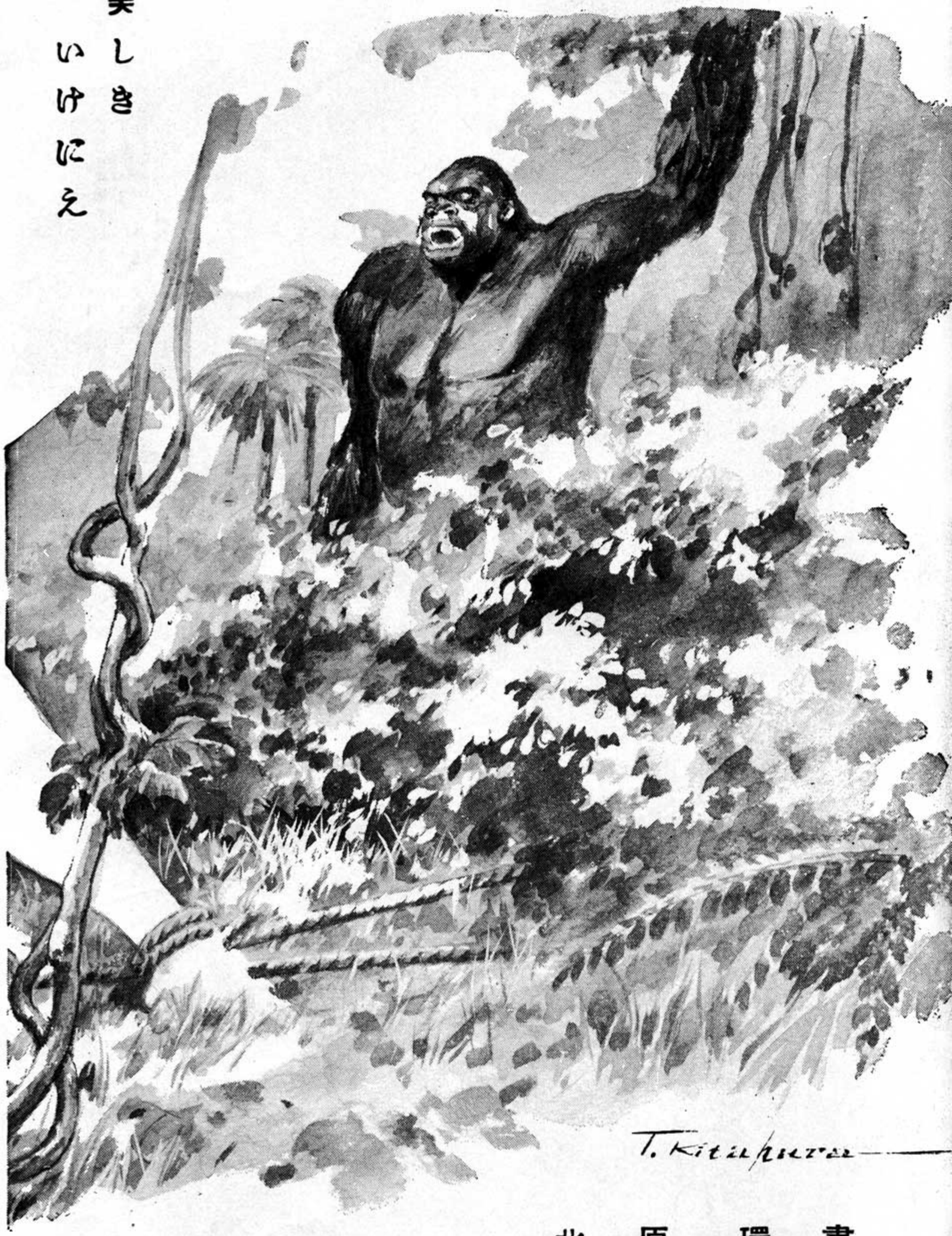


血！　黒と白の巨匠ビヤズレエの傑作。一人の女は死に、一人の女は生きて勝利に笑つている。うずくまつた男は嫉妬の象徴ででもあろうか。



この一突き！　探偵小説の一場面のようだ。幻想的な殺人事件が突発する……

美しき
いけにえ



北　原　環　畫

陽の目を見ぬ蔓苔たるジヤングルの奥にも黄昏が迫つて来た。なまぐさい風が突山樹々の梢を揺がせて吹き抜けたと見る間に、密林の王者ゴリラの巨像がのつそりとえじきを求めて現れる。「キヤーツ」一番人にとらはれて、いけにえとなつた白人の女は、恐怖に顔をひきつらせて絶叫すると、全身の力をこめて遁れようともがく。しかし功妙に編まれたシユロ繩はやわ肌に益々喰込むばかり。……うごめくこの美しいいけにえに、ゴリラの眼は淫らにランランと光つて来た。……

鞭！

ヒユウッと空を切って鞭が飛ぶ。「アアッ」悲鳴をあげてのけぞる女！　真珠の首飾が女のさつきまでの誇りや虚栄を嘲笑うように砕け散る……



T. Kitahara

妖蟲図

元 玲子



風俗草紙 八月号 目次 特集雑誌 オール実話 改題

絵口
妖蟲図……喜多玲子画 (3)
いけにえ二題……北原環画 (3)
風俗美術館……(3)

ぐろてすく芸談 河竹默阿彌……正岡容 (18)

特集・囚獄の記錄

腐つた性臭（女囚）……中山麗子 (152)
少年監獄（審判院）……安野洋治 (136)
刑罰千夜（感化院）……大塚ルリ (114)
男色営倉（営倉）……松尾亮 (96)

西洋拷問考……矢野目源一 (38)
釁られた繩と鞭……武野藤介 (57)
変態ようろっぱ紀行 ベルリン夜話……峯岸義一 (42)
★コント★海浜の暴君……竹岡杏平 (143)

風俗瓦版……(176)
★コント★夏の夜の狂想……南章夫 (37)
アクロ・ダンサーの手記 肉の曲芸師……原純子 (62)
絶え間なき鞭と、死の不安に曝された訓練と、団長の愛慾によつて実現し成長するアクロダンサー
責められる女の表情……伊藤晴雨 (84)
責め体験記 木馬責め・滑車責め……上田青柿郎 (144)
続・悦虐の部屋 やわ肌を責めて……喜多玲子 (131)
日本刑罰史第三回 女切支丹拷問秘史……深田徹 (68)
雪をあざむく女の肌が炎々と燃え上る火に包まれて……刑場を圧する叫声と斬り！殉教像虐秘史

あぶのーまる・まにやの手記

私が責めた六人の女……林譲介 (108)
共同便所の秘密……宗方綾子 (90)
まぞひすとの街……吹岡清一郎 (77)

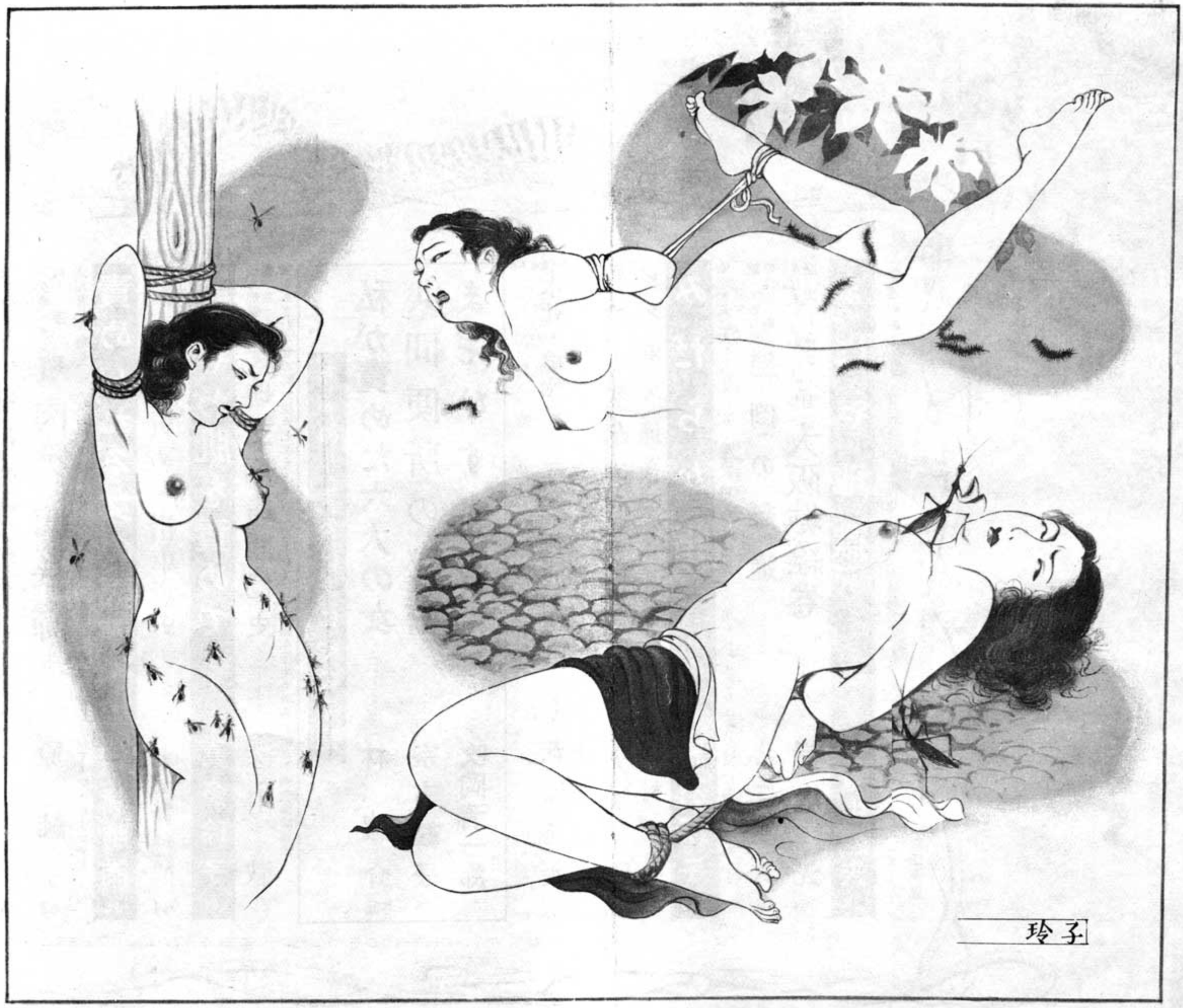
犯罪変態考
水死・縊死による女体の苦悶表情……萩原秀夫 (105)
創傷と兇器……井田喬雄 (120)
そどみあ通信（そどみあの秘密な交歓室）……藤井晃 (158)
レスボス通信（女性だけの秘密な愛のサロン）……園村恵子 (148)

みだらな指……鳥羽瑛子 (122)
美しき未亡人を気死させる不思議な指！顔を見せぬ闇の男を慕つて彼女は夜の寝台に悶々とする……

続・アポロ街の錯倒の鋪道……志摩雪夫 (48)
さじすちっく歴史小説 秘色大阪城絵巻……岩堀光 (164)

まにや地獄……日夏由紀夫 (26)
（新連載あぶ・すとおり）奇怪なこびとと嬌慢な美女が繰り拡げる妖しき官能の白昼夢

★表紙 秋吉巒
★目次絵 新田英児



玲子

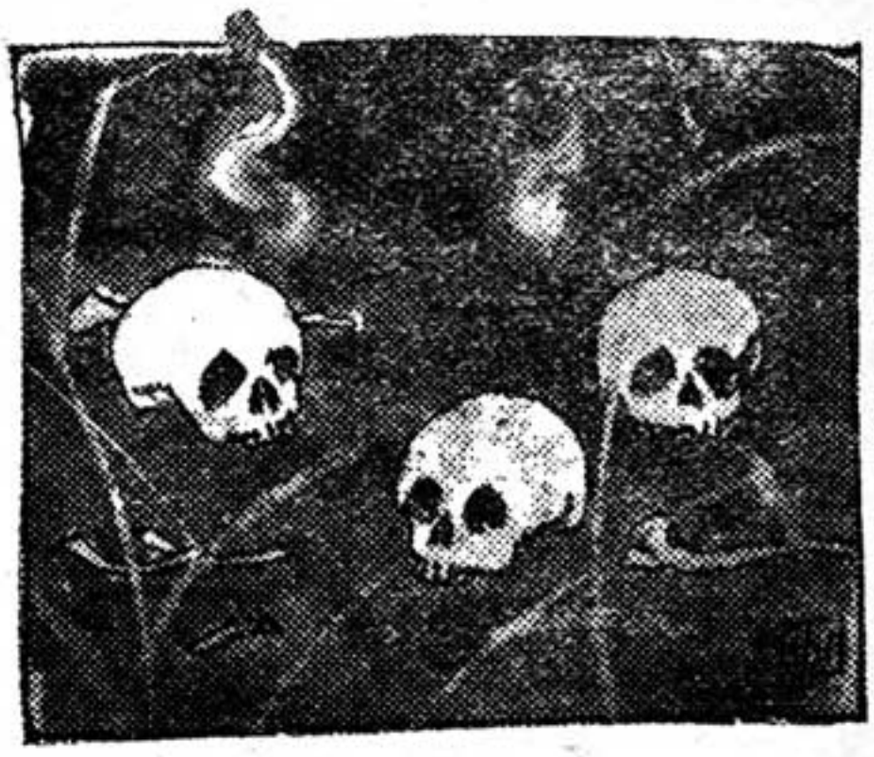
風俗草紙

現代人の新しい趣味雜誌



特集雜誌・オール實話・改題

八月號



ぐろてすく藝談・第一回

河竹默阿彌

本釣鐘と大ドロドロと糊紅と……舞臺にみなぎる慘虐の美、腥風の藝術を巨匠の足跡に拾うぐろてすく藝談。暑氣を拂う凄艶の變態美……

正岡容

画 山崎百々雄

一

先づ「加賀見山再岩藤」（骨寄せの岩藤）から、紹介しよう。

主人尾上の仇たる局岩藤を殺害して二代目尾上と出世をしたお初が嘗て、岩藤の屍骸を放棄したとつたへられる汐入堤多賀家馬捨場へとおりかゝり、

「悪人なれども岩藤殿、佛果菩提、南無阿彌陀佛々々々々々々々々」

と念佛唱名するところから、怪奇場面は展開されて行く。

「大ドロドロになり、尾上悶絶する、と直に唄淨瑠璃になり、

〽往事茫々としてすべて夢に似たり、急湍零落して半泉に帰す往きては帰る世の中に本来仮の地水火風、空より出で、又空に帰る道さへ迷いぬる。魂魄又も立戻り、歩むともなくよろ〳〵と、佇むともなくたよ〳〵と、風の間に間にうなづくは、げにのざらしのあな目の薄。

トこの文句の内薄きドロ〳〵になり、舞台の草むらより陰火ひら〳〵とあちこちへ立登りては消え、立登りては消え、よろしくあつて、あちこちにある白骨段々と一ところに寄つて、トド大ドロドロにて件の骨消えると、直ちに草むらより

岩藤の亡靈、髪おどろになり、黒絹の小袖、紅絹裏白の下着
奥庭仕返しのなり、日數經て腐れたる好み、肉脫したるこし
らへにて立上る」
やがて尾上が我に返ると、
「岩藤。おのれに怨みを言おう〳〵と待つていたに、よう来た
なあ」
と云うような物凄い台詞のやりとりがあつた末、尾上の差付
ける守り刀の威徳で、
「岩藤。今にぞ思い知らしてくれん。
ト大ドロドロ、岩藤の姿、仕掛にてこんもり高なる荒塚にな
り、卒塔婆を振り出す」
こゝで黒幕が切つて落され、綾瀬川の遠見が見え、通り合わ
せた長谷部帶刀と望月彈正と尾上が絡むだんまり模様になる
が、その内、
「大ドロドロにて、以前の荒塚砕け、内に腐れたる早桶、立
廻りにてドンと當る、早桶ばらばらに砕け、内に岩藤の吹替
への死骸、蛇、總身におびたゞしく纏ひある」
と云う趣向は、なか〳〵に物凄い。因みに吹替とは岩藤を演
じた役者でなく、下廻りの役者が代演しているとの意味で、な
ぜならばこゝで一たん幕が引かれ、花道へ人魂が飛び、再びす
ぐ幕を開けると、一めんの花の山で、こゝへ岩藤の靈がありし
日の絢爛たる姿でせりだす、即ち岩藤役者はこの仕度に忙しい
から早桶の場へまでではられないためである。
それにしても、こゝで宙乘りになつて、二つの蝶を追いなが
ら妖しくも美しく飛んで行く岩藤の靈が、華麗な行列の鳴物を
伴奏としながら、あくまでも幽靈であるからと始終派手やかな
鳴物のなかへドロ〳〵の鳴物が配されているのもおもしろい。
大正中世歌舞伎座で先代梅幸の岩藤の靈の、春霞の空を飛行
くおほどかな舞台姿に恍惚として眺めてから、已に卅有余年の
「時」がながれた。
吁、おもいでよ、昔の夢よ——。

二

默阿彌のざんぎり狂言——明治開化を背景とした作品の一つ
に「恋闇鵜飼燎」がある。
甲州笹子峠で、多くの男を詐した莫連女の芸者小松が、狼に
咬殺されるシーンも、默翁の怪奇な血沫れた「面」の代表とし
て見逃せまい。
「〽簾を隔てゝ狼の、鳴く音に小松は吃驚なし」
と云う淨瑠璃で、三疋の狼があらわれ、小松の逃込んだ辻堂
の戸や羽目の破れを噛砕いて、なかへ飛込んで行く。程なく崩
れかゝつた狐格子を壞して、逃出して来る小松の手足はもう血
だらけである。
流石の小松が両手を合わせて狼に命乞いをするが、狼は前後
左右から飛びかゝり、そのうち左手を喰い取られる。もはや全
身血みどろの小松が、一生懸命逃出そうとするが、狼は裾を咬
えて引戻す。

こゝではじめて人の世の「業」の深さに戰き、慄えた小松が、

「小松。かゝる非業な死をなすも、十四の年から家出なし、親に不孝をした罰と、多くの人を欺した報い、自業自得で仕方がねえ、早く己を殺して吳れ」

と狼に述懐するのは、時が時丈け、札付きの惡婆丈け、一そうに哀れである。

ところで小松のこの台詞であるが、「仕方がねえ」とか、「己を」とか云つているのは、鉄火な江戸芸者の伝統の用語であつて、かの「梅暦」の仇吉、米八の話中にもしばゝ見られる。

さうして最後は、

「〽言う声さえも四苦八苦。

（ト小松ひよろ〳〵と立上り、辻堂の縁へどうとかける。狼一疋後から襟へ噛付き二疋は左右の足へ噛付く。）

〽哀れなるかや。

ト本釣鐘を打込み、仕掛にて小松の襟より糊紅（註——血）流るゝ。本釣鐘、山嵐三重にて」

で、暗澹慘酷なこの一と幕は終るのである。

血糊の使用が大正中世以降ほど当局から制限されず、随分無慘な血みどろ血がいの舞台を見馴れているはずの当時の観客たちにして尙且、この場の慘たらしさにはおもわず目を反け、目を覆うものが少くなかつたと云うから、以てその空気が想像されよう。

三

「因幡小僧雨夜噺」は、本文の怪盗因幡小僧新助の物語より、挿話的存在である神原と云う大名屋敷の腰元小萩なる佳人と、そこへ出入りの小間物屋で美貌の才次郎との悲恋と怪異談の方が芸術的価値も高く、ストーリイとしてもスリルに富んでいて面白い。

先づ甲府をさして駈落をした小萩才次郎は、小佛峠で追手に捕われ、才次郎の方は谷へ突落され、そこで亘きな蟒に一と呑みにされるのだから奇抜で、その谷の名が「黒闇谷蟒河原」であることも亦、物凄くていい。

〽こゝに年古る全身の苔むす大蛇、宝剣の奇特によつて惱乱し」と云つたような大薩摩があつて、その後のあと、

「この唄の切れにて山荒れの鳴物になり、正面の崖の熊笹の茂みより、眺への大蟒頭を出して口を開き、火炎を吐いて苦しむこなしあつて、のたうち廻り、トド頭を引込ませ、上手の崖の所へのたり行く。これにて正面の崖へ胴中の所出る。よき程に胴中を割き、才次郎蟒に呑まれし好みのこしらへにて短刀の白刃を抜き、持出で崖より下へ落ちる。これにて蟒は狂ひながら、上手の岩蔭へ入る。

才次郎。嬉しや、命が助かりしか。（中略）年古る大蛇が死ぬる時は、雷鳴ありという事は、物の本に記してあつたが、今時ならぬ雷鳴は、ハテ爭われぬ。



ト空を見上げるを、木の頭、ものだなあ。

ト此模様、雷の音、稲光りにて

幕」

一方、捕えられて神原邸へ連戻された佳人小萩は、かねて殿様が執心で、妻になれと勧められるが、彼女は才治郎の上を想つて肯はない。

殿様は手を代え、品を代えて口説く。

小萩は、なか〳〵応じない。

そのうち、才次郎はあのとき崖から突落され、死んでしまつたと誰からか聞かされるので、泣く〳〵あきらめて殿様の意に従おうと承知をする。

で大嬉びの殿様が、小萩を引寄せて酒宴の最中、病癒えしも路金なく、乞食のような姿をして漸くにかえつて来た才次郎が事情を聞いて激怒、小萩へ怨みを云いに来る。

たゞそれ丈けなら普通なのだが、蝮の毒のためあたら美男の才次郎が、頭は丸坊主、目も鼻もない、化物同然の容貌となつているところに、私は、明らかに作者の警抜至極な才能を感じないわけには行かない。

才次郎は、誰のためにこんな生れも付かぬ片輪になつたのかしかもそれを殿様の妾になるなどとは情ないと、かず〳〵の愚痴を述立てるが、殿様の手前、真意が述べられず、たゞ彼女は泣いてばつかり。

やがて家来たちに手取り足取り才次郎が、邸から突出されて

しまつたあと、申訳のため小萩は懐剣で咽喉を突いて自殺をする。

然るに君側の奸たる馬淵運蔵、戸倉伝八は、才次郎が生きていてはいくら容貌醜怪になつていても、小萩の心が動揺しようから、いつそ彼を殺して了おうと彼女が自決の寸前、突出した才次郎の後から仲間権兵衛を連れてそつと従けて行く。

この本所小梅〆切堤の殺し場も凄い。

「**權兵衛**。さぞ悔しかろう〳〵。手前は以前は小萩様に、二つ枕でしつぽりと汗をかゝせたことがあろうが、今は御前の妻となり、その楽しみに輪をかけて、嬉しい思いをするだろう。不悶やそんな面になつては、人は愚か雌犬でも手前と一しよに寝やあしねえ」

とか、

「**傳八**。しかし乍ら我々は、小萩どのにどのような旨味(うまみ)があるか知らないが、それを知つてる才次郎、思出したら腹が立とう。さぞ悔しくつてたまるまい」

とか、さん〳〵毒付いて口惜しがらせた上、さて殺害の章りになると、

「〆しち面倒と運蔵がはつたと蹴れば、才次郎、川へどんぶとおちこちに鳴居る蛙も音を止めて水音残る川中より、岸へ縋りて這上るを、ぐつと突込むとどめの刀、走る血汐に水の面は、芽出しもみぢの唐紅、物凄くこそ見えにける。

（中略）ドロ〳〵のやうな水の音にて、波布へ血汐にじむ仕掛よろしく」

と水面が血染になる技巧も凡でなく、さらに亀戸の下屋敷怪異の場では、小萩の自殺、才次郎惨殺以来、殆んど発狂にちかい殿様が才次郎の幽霊に導かれて伝八、運蔵、権兵衛を斬殺すが、一と幕であるが、幽霊の出現に際し、十間川から汐入りになつている泉水の水が、あの夜の〆切堤のごとく真赤な血に染まり、そこへ陰火が燃出すと云うに至つてはいよ〳〵作者の技巧の冴えが見事に鮮やかに感じられる。

本所小梅に〆切堤の名はもはや絶えて久しいが、余程寂しかつたところらしく、モーパッサンの「父殺し」を飜案した大円朝の「名人長二」でも、指物師の長二が幸兵衛夫婦を斬殺すのも亦この〆切堤である。

四

「紅皿欠皿」はわが住む下総市川の真間の世界で、邸の苗字も真間に由縁の継橋となつている。

継橋家の後妻片もひは己の実子紅皿のみを愛でて、兎角に先妻の娘欠皿を邪慳にするが、本人同士は瞳じく、共に美しい。

篇中で特に愉しめるシーンが三つあるが、先づその一つは欠皿の荒果てた部屋（継母がいい部屋を与えないのだ！）で、此も恋人同志である家来の真吉郎と渡鳥のとりもちで、左近と欠皿とが同衾しようとする章りである。

固い欠皿がどうしてそうした味な心持ちになつたかと云えば真吉郎たちが惚れ薬を入れた酒を飲ませたからで、

「眞吉郎。イヤ、あの酒は不思議な酒で、上らぬのを無理やりに、おすゝめ申して上げたらば。

渡鳥。いやだ〳〵と仰言つた鉢皿様が、ツイ××××。

缺皿。アコレ、恥かしい、そのようなことを。

左近。ほんにあれは、銘酒であつた。

脚平。さてはいよ〳〵いもりの利き目であつた。

イヤサ、妹背を結ぶも酒の徳で。

渡鳥。すぐにそのまゝお床入り。

脚平。折角俺が仕込んだも。

左近。エエ。

缺皿。エエ。

脚平。イヤ、とんだお役に立つたなあ。

（ト唄になり、脚平思入あつて下手へ入る）

渡鳥。サア、お早うお休みなされませ。

眞吉郎。私共もお次にて。

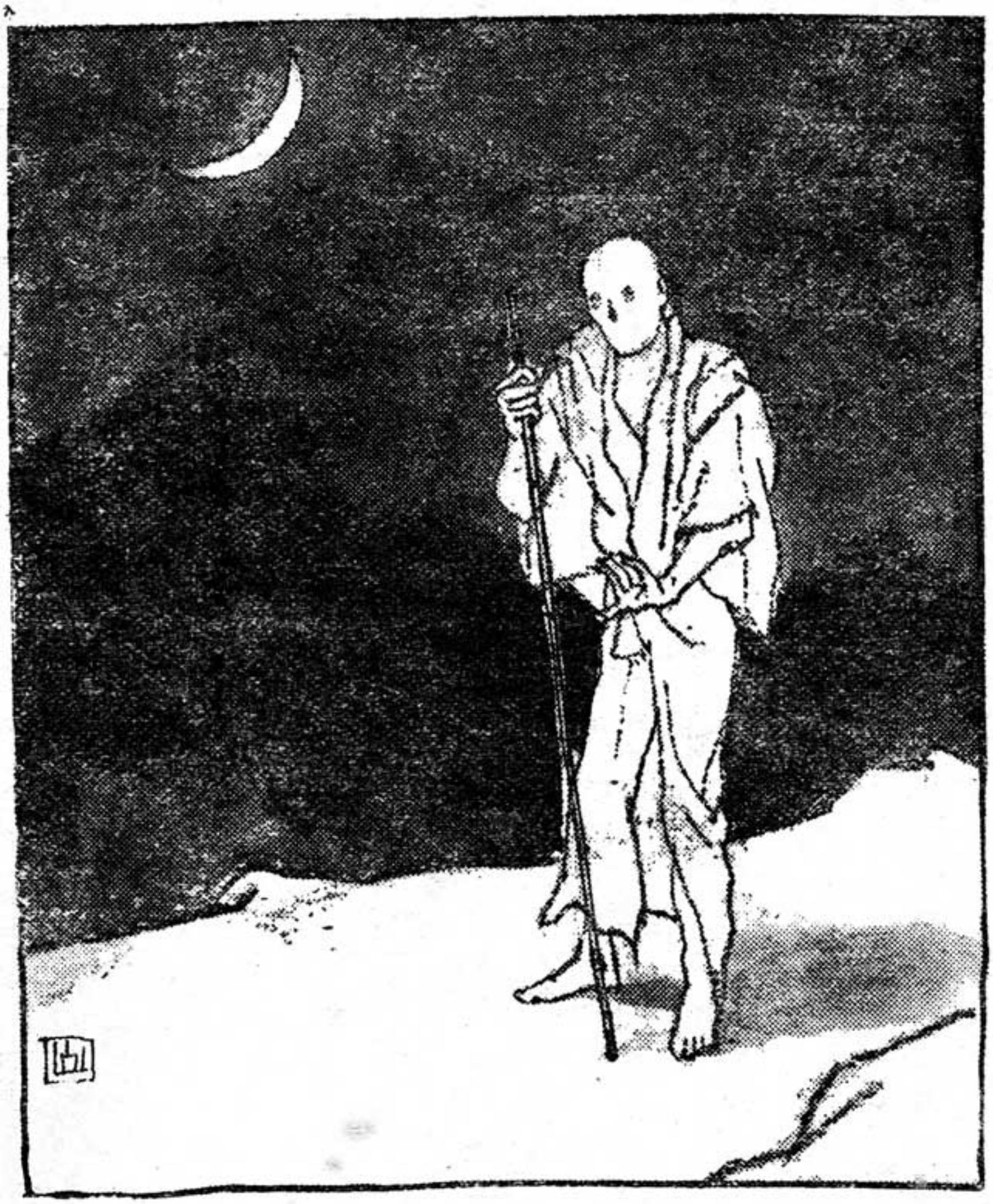
渡鳥。お夜伽をいたしましよう（ト立ちかゝるを）

缺皿。アコレ、渡鳥（ト缺皿さゝやく）

渡鳥。エヽモ、おたしなみの悪い。

ト懐から紙を出し、缺皿に渡し、ちよつとつく、缺皿ひよろ〳〵として左近へこけかゝり、

缺皿。アレ、あぶないわいの。（ト左近其まゝ引きよせ）



左近。どこぞ打ちはせなんだか。（トぐつと引寄せる。缺皿顔を袖にてかくす）

渡鳥。サア、お邪魔にならぬその内に。

眞吉郎。ドレ、こつちも早く行くとしようか。（ト渡鳥の手

をとり立ちかゝる」）

荒廃した部屋を背景に美男美女の歡会は、金ぴかな御殿に於る艶笑場面よりも、さらにセンジュアルで惱ましく媚めかしい。

次は、庭先に於る缺皿の責め場で、およそエロテイックな世界とグロテスクな世界との一大交響樂であると云えよう。

先づ縛られている美しい缺皿へ、好色の下男脚平が挑みかかる章りがある。

脚平。アヽお逃しは申しますが、あなたを逃した其後で、どんな目に逢おうも知れませぬ、それを承知でするからは、お礼が受けとうござりまする」

と抱付く。

もちろん、缺皿が承知をしようわけがない。

それを強引に脚平は、

脚平。主であろうが家来であろうが、恋に上下の隔てはねえ。殊にやあどうで責殺され、今に命をとられる体、後生をすりやその功力で、来世は必らず極楽往生、念佛講に逢つたと思い、珠数の玉をば数取りに、堪能さして下さりませ」

と口説くので、いよ〳〵情なく缺皿がいつそ死度いと嘆くなら、

脚平。その××××を上声で、言わしてお礼が聞きたいのだ。

〽傍若無人に抱付けば、アレエ〳〵と缺皿は身をもだえて泣叫ぶ」

そこへ継母の片もひが、老婆つめとあらわれて、脚平に劇竹で打叩かせる。

つゞいて針の束ねたので、無慘に美しい顔を突つかせる。

片もひ。オヽ痛かろう〳〵。初めの内は痛いものだ。

つめ。今にだん〳〵よくなります。

脚平。笑い本ぢやあるめえし」

此から片もいのことにすると本来なら実子の紅皿を嫁がせ度かつた左近と彼女との抱擁を難詰して針の束を片手に、

片もひ。サ、此の手でしつかり抱きしめたか。（トつく）

缺皿。ヒイ―。

片もひ。イヤサ、此の足でからんだか。

〽急所もわかずめつたつき、痛さ苦しさ悲しさを、こらへこらへて喰いしばる歯の根の音は車井の、きしる音にぞ異らず。

ト片もひ方々を突く。其度毎に缺皿ヒイ〳〵と苦しき思ひ入れ」

そこへニヨロ〳〵と大きな蛇がでて来る。

で、わかいとき蛇つかいだつたと云うおつめ婆さんがその蛇を捉えて、

つめ。モシお嬢様、思い切つたと仰言らぬと、これを××入れますぞえ。

〽目先へつき出す青大將、見るより缺皿たえ入る許り、

ト おつめ蛇を缺皿の鼻先へつき出す、缺皿びつくりなし、ふるへながら



缺皿。アコレ、それば かりは許してくりやいの。」

かくておもい余つた缺皿が気絶をすると、気付けの水を口写しに脚平が飲ませて有頂天になる諧謔もある。

しかし最後は芝山仁王尊の加護あつてこの缺皿、大力無双の勇婦となり、真間から鴻の台かけて大洪水の真只中、流れ来る人家の屋根の上で、お家に仇なす悪人ばらを討取るのであるが葛飾の野の晩夏の大出水をバックにしての復讐が大団円となつていろなど、いかにも季節と事件とがピツタリと美しく調和していて、いよ〳〵默阿彌の手腕に敬服の他はない。殊に私はこの物語の展開される辺りに居を卜しているので、一そう感慨が深いのである。

慶応の昔、かの脫疽で両手両足を切断した美貌の名優沢村田之助が缺皿に扮したのであるから、その凄艶哀婉さは一としおだつたろう。昨春、かたばみ座で上演したのをあとで知り、いか許りか私は残念におもつた。

默阿彌作品にあらわれたグロテスクシーンは、未だ〳〵少くない。

が、南北や円朝や種彦や一九や京伝や、いろ〳〵の作品巡礼をした上で、殊更にこゝへはかき遺した默阿彌物に幾度かまた触れさせて貰おう。

英泉ゑがく祕戯画の美女をそのまゝの缺皿が悩ましい抱擁に身心を痺らせ、怖しい継母の責め折檻に身の毛をよだたせたこ下総市川真間の里は、きようも梅雨曇りの暗鬱な空模様で、漸く咲きそめた庭の紫陽花やつゆ草の花に、「紅皿缺皿」大詰の大水の場をおもわせる大雨が、多分夕かたまけて降出すだろう。

どこかでいま名知らぬ鳥の声がしきりに寂しく聞えている。

——終——



白い陶器の壺のなかには、豐滿な女體から出たうす黄金色の液體がたゝえられ、その眞ん中に水中花のようにねれた櫻紙が、花をひらいてひたつてゐた……

日夏由紀夫

画　北原環

1

「まア、本当に、御冗談を……およし遊ばせつたら……」

美彌子は、男の、おそいかかつてくる唇をさけながら、ソファのはじへ軀をくずすようにして、笑いにむせながら、云つた。トキ色のハンケチをもつたきやしやな手は、男の胸を押すようにしている。

「冗談じやありません。今夜こそは、本当にあなたの心をおきしないでは歸れませんよ。……いつまで、じらさないで、本当にもういい加減に返事してくれてもいいじやありませんか」

男は、酒のせいか、あるいは、さつきからのダンスのせいか真赤に興奮した顔を、なおも、美彌子の方へ近づけて、おおいかぶさるようにしながら、不服そうに云つて、胸にあてられた美彌子の手をとると、その白い少さな甲に、チユ、チユッとたえまなく接吻して、その唇を、段々に、あらわな、腕の方にみみずがはうようにのばして行く。

「だから、もう少し考えさして下さいつてそう御返事してるじやありませんの？」

美彌子は、コケツトに云つて、男の手をはらおうとしたが、男は、握つた手をはなさないばかりか、もう一方の手で、ソファのはしに追いつめた彼女の柔らかい、豐満な軀を抱きかかえようとして、

「――いつまで考えているンです。きりがない事じやありませんか。失礼ですが、お金はいくらでも出します。僕と結婚してくれれば、僕の財産の半分は、あなたの名儀になるのですよ。どんな、えいようえいも、あなたの意のままですよ。どうです、それが魅力でないでしよう？」

「――ずいぶん、ハッキリおつしやるのネ」

美彌子は、煙のように白いチユールのイブニングのはだかつた胸をなおして、あらわれた乳房をかくしながら、ニンマリ笑つた。

「じや私もハッキリ申上げるわ。それは魅力よ。でも――」

「でも？……もしや、美彌子さんは、恋人でも居らつしやるんですか？　それで、そんなに、僕の申出を澁るの？」

「いいえ！　飛んでもない。何度も申しあげた通り、私、恋人なんて、一人もないわ。それは、羽田さんが、すつかり御存知の筈よ」

「それだつたら、もうそろそろ色よい返事を下さつて良い筈ですぜ」

羽田の接吻は、段々肩の方へ上つてきて、脇の下の、しつとりとあぶらののつたくぼみのあたりへ、くすぐるような、キスを続けざまにするのであつた。

「イヤ、イヤ、止して」

と云いながら、クツと身をもんで、羽田に背をむけて、ソフアの袖に、軀をまるめてしまう。それを、うしろから覆いかぶさるようにして、あらわな背に、唇をおしつけているうちに、羽田は段々興奮した、白い軀をひざの上にすくいあげようとした途端、彼の延ばした足が、わきにあつた小卓子にひつかかつて、その上にのせてあつた、カクテルグラスや、酒のびんを、ガラガラツとじゆうたんの上にこぼしてしまつた。

「ほら、御覽あそばせ。――あなたがあんまり乱暴なさるからよ！」

やさしくにらんで、それをシオに、立ち上つてしまつた美彌子は、

「ちよつと、失礼！」

そう云つて、ずりおちたイヴニングの片そでを直しながら、客間を出た。

「ア、どこへ行くんです。美彌子さんにげるなんて卑怯ですぜ」

羽田が、おいかけようとすると、扉を閉じながら、なまめかしく微笑んで、

「バカネ。殿方の御用のないところよ。ついてみるみる赤くなりと云つたので、羽田もさすがに気がついてみるグラスをとりあげながら、

「あ、そうか、これは失礼！」

と云つて、テレかくしに、ころがつていた。さつきからのて、酒をついだ。……

広間は、煙草の煙がもうもうとこもランチキ騒ぎに、じゆうたんはめくれグラスはころがり、椅子はたおれている。美彌子の死んだ夫の死後、美彌子は、が、金にあかして、たてた邸だから、豪奢な感じの客間だつた

この客間に、遊び友達をまねいて時折パーテイをひらいた。孤り居の淋しさをなぐさめる意味もあつたが、それとともに、美彌子はそこで色々な商取引をした。もつとも、美彌子自身が、商取引をする事はめつたになく、高級官吏や在日外人をまねいて羽田などとの仲だちをするのである。待合や、キヤバレーなどの接待とは又別な感じがあつて、招待がわにも、お客がわにも評判はよく、これが美彌子のぜいたくの費用をまかなつている。この、パーテイの特徴は、ホステス（女主人）美彌子の美しさと、集まつてくる女性が、商売女ではなく、皆良家のしとやかなお嬢さんばかりという点にあつた。今夜も、そうしたパーテイがはてたあとで、かねてから求婚していた羽田が、ひとりのこつたのだつた。

2

美彌子は、廊下の鏡で、ちよつと髪形をなおすと、そのまま化粧室の方へ入つて行つた。

（今夜は、どうしても返事をしなくちやならないかしら）

羽田と結婚するのがいやな訳ではない。だが、今のままの気らくな生活が惜しくもある。

二十八という年増ざかりの軀は、近頃めつきり脂が乗つてきて、美容体操や減食などやせる工夫を色々するが、ちつとも效果がなかつた。

今が美しさの頂上かしら、と考えると、いつまで独りぐらしもしていられないという気になるのだつた。……その焦躁と、それからさつき呑んだカクテルの醉いが今頃になつて発して、なんだか今夜は、思いきりひどいみだらな事をしてみたいような気になる。

化粧室の三面鏡の前で、お白粉をはたきなおす美彌子の頬にこのとき、ちよつと残忍な笑がうかんだ。……

彼女は、つと立ち上ると、次の間のドアをあけた。足がもぐるほどのじゆうたんがひいてある小さな部屋。ビニールのカーテンがなまめかしくかかつて、白いタイルの浴槽と、水洗の便器が、夢のように淡く、間接光のなかにうかんでいる。

美彌子は、豪華なイヴニングの裾をからげ便器に近づくと、レースのついたナイロンのうすい腰のものを、豊満なふとももの下までずりおろした。

女が、本当に女らしさを示す一瞬だつた。美彌子の赤いくちびるに、放心のゆるい笑みがうかんだ。さつきから、我慢しつづけて、じつとしめつけていたものを、ゆるめる快よさがあつた。若い女らしい清冽な勢いだつた。

終ると、美彌子は、かすかにチユッ、チユッと舌をならした。——それが合図だつたのか。

もう一つ奥につづく、扉がさつと音もなくあくと、そこに一人の人間があらわれた。人間——と云つても、ほんの、七つか八つ位の子供の背しかない男だつた。しかも、顔ばかりは、ちやんとひねこびた大人の顔。髪もキチツと分け、部厚い唇のまわりには、こつけいにも、房々とひげをたくわえている。清潔な白い服をきているが、手も足も、それぞれ、一尺ぐらいしかない。見世物などに出る奇型児。——それももつとも醜悪な奴

だつた。

彼は、のびあがつてドアをしめるやいなや、チヨコチヨコつと、物を云わずに美彌子に近づいた。

美彌子の方も、別におどろいた様子もなく、そのままの姿勢だつた。女のもつとも恥かしいポーズ。——これこそ、恋人にも、肉親にも見せない、女のもつとも秘密なポーズだつたが、彼女は、この男の前で、平気で、まるで、彼が人でないように物体か何かのようにこの姿勢をつづけたまま、腰をちよつとあげた。

この奇型児は、手に、もも色のやわらかい櫻紙を何枚かもつていた。そして、もう、なれきつた者の動作で、うやうやしく彼女のうしろにまわると、本来は、彼女自身がすべき事をかわつてした。彼女は顔色一つかえずに、そのおどろくべき事をまかせ、白いももの方へつたわつたしづくまでちやんと仕末させた。

終ると、彼女は、ひざにずりおろしてあるパンテイをひきあげ、たなの香水をとつて、そのあたりに、ちよつとつけると、そのまま、化粧室の方へ出て行つた。一言も口をきかず、後もふりかえらず。……

そして、白い陶器の壺のなかには、豊満な、美しい女性の軀から出てきた液体が、透明なうす黄金色にたたえられていた。そうして、その真ン中に、水中花のように、ぬれた櫻紙が、花をひらいてひたつていた。

奇型児は、そつと、今、彼女が出て行つた扉の方をずるそうにうかがつてから、急に、熱つぽく眼を光らせると、いきなり、両手で便器のふちにつかまり、顔を、その便器のなかにうずめた。そして、そのなかで、劇しく顔をうごかした。荒い彼の息づかいと一緒に、ピチヤピチヤという犬が水をのむ時のような音が、このシーンとした浴室にひびいた。彼は時々、顔をあげて、扉の方を盗み見た。それは禁じられている事を犯している男の顔だつた。

彼の口からは、今、彼女を始末した櫻色の紙がのぞき、そこから、黄色のしづくがたらたらと垂れて、口ひげも、あごのまわりも、その液にぐつしよりぬれていた。しかし彼の醜悪な顔には満足の表情がかすかにうかがわれた。

3

羽田は、美彌子と結婚することによつて、彼女の美貌を自分の商売に利用しようとする下心があつた。それは、美彌子も知つていたが、彼女の方でも、いつまで、こんな不安定な生活はつづけていられない。この一人ぐらしには大きすぎる邸の維持費だけでも彼女には骨がおれた。——それに、たくましい男の肉体の魅力にも引かれた。

彼女は自分のまわりにあつまる男達のだれにも肌を許さなかつた。それは、「たやすく許さない女に引かれる」という男心を計算に入れての事だつたが、もう一つ、彼女だけの私生活の秘密があつたのだ。

それを解決しなければ、結婚は出来ない。しかし、今夜、根気よく求めつづける羽田の情熱に負けて、とうとうキスをうば

われ、結婚の約束をして　ようやく送り出した美禰子は、玄関の灯をけすと、もう、そんな事を考えるのも、億劫なほど、軀がけだるかつた。

両手を思いきり空にあげて、ほしいままなアクビを一つすると、

「まア、なんて、ちらかりようでしよう。……でも、今夜はこのままにしておいて、明日通いのバアヤさんがきたら片づけさせよう……」

そう独りごちて、広間の灯も消し、再び化粧室に入つて行つた。

化粧室のドアをあけると、待ちくたびれた、さつきの奇型児が、足もとに、かけ寄つてきた。

「バカ。お前は、こつちへ出てきちやいけないつて、あれほど云つたのに分らないのかい。……また、ひどい目にあいたいの？」

羽田なんかに云う口ぶりとは人がかわつたような乱暴な云いかたで、彼女は、云うと、その、羽のついたキヤシヤな、スリッパのまま、その奇型児の胸のあたりを、ポンとけとばした。彼がよろよろとするのと一緒にスリッパがぬげて飛んだ。

「ウ……ウウ……」

奇型児はうめきとも、泣き声ともつかぬ声をあげて、それでもひるまずに、彼女のイヴニングの裾にまといついた。彼の目には涙が光つている。

「バカ。エスつたら人並に涙なんか出して……。お止しつたら、……よるんじやないよッ」

彼女は、そう叱りつけると、この奇型児の頭をつきとばした。エスと呼ばれたこの奇型児は、それで一遍にころがつたが、

「さ、お風呂の仕度をおし。今夜はうんといじめてやるから……」

そう云われると、生きかえつたように浴室の方へ飛んで行つた。

エス。——彼女が、こう呼んでいるこの奇型児は、彼女が、M夫人から、ひそかにおくられた玩具だつた。M夫人は、これを、あるサーカス団から買いとつたと云う。M夫人の亡夫は軍人で、その頃は、戦争中だつたから、M夫人は未亡人になつても、夫に貞淑をつくさなければならなかつた。国防婦人会の要職についていたM夫人の貞淑の秘密は、このエスだつた。

年がよつて、もうその必要もなくなつたM夫人から彼女に贈られるとき、「何の用でもする便利な道具よ」といわれたが、しばらくして、それがどういう意味だか分つた。

「私たちも体面つてものを重んじなければならない以上、そのうなものだし、何の権利も主張しないで、用だけたす裏で、どうしたつて、トイレットみたいなものもいるわけよ。……きたないつて云や、きたないけど、そういうきたないトイレ、ゴミステ場つてものがあるので、私たち女性が、雲をたべて生きているようなおすまし顔をしていられるのよ。ね、そうでしよ。……エスは、その点人間つて云つてもチキショウのよ生きてゐる道具みたいなものだから、とても便利、これ以上のものはないわ。……外へ出さなくつたつて良いし、何を喰べさ



みに飼っておけばすむのよ。……そこで、そりやア忠るところなの。……主人が美しい女なら、そこで、そりやア忠実に何の用でもするの。……はじめは、ちよつと気味が悪いようだけど、なれれば、はなせなくなる事よ。……籍もなけりや、名前もないし、口は利けるけど、話してやらなけりや、平気なんだし、——だまされたと思つて飼つてごらんなさい」

そう云われて飼いはじめたエスだつたが、夫人の言葉がウソでない事はすぐ分つた。こうして、美彌子とエスとの不思議な生活がはじまつたのだ。美彌子は自分のなかに、そんな性癖があるとは

せてもいいし口は利かなくつてすむし、私たちのどんな恥づかしいとこ見せたつて、なにしろ相手がチキショウなんだから、平気だしネ、こんな便利なものはないわ。お手洗い所のす

その時まで知らなかつた……。

4

美彌子は、化粧室の真ンなかで、イヴニングのわきのホックを外し、肩から、それをすべらした。雪かなだれ落ちるようにそれが足もとに滑りおちると、パンテイ一つしかつけてない、ヴイナスが、そこに生れた。どこから、どこまで、張りきり、たつぷりと肉のついたヴイナスだつた。このごろはお風呂に入ると、表面に脂のうくようになる彼女の軀だつた。

片かたの足をあげて、器用にパンテイをたくしおろすと、何一つ身につけてない男にはまばゆい程の裸身を、何のためらいもなく、Sのいる浴室へ運んで行つた。うしろから別にくつつけたように、むつくりと飛び出している尻の肉が、動きにつれて、ぷりぷりとふるえた。（羽田たちの評判になつているのもきだつた。）

美彌子の、この尻の動きだつた。

前にさえなにも当てずに、浴室へ入つた彼女は、エスが、あわててかき廻す湯に、

「どう……もう、いいの？」

と、云うなり、いきなり浴槽をまたいで、その湯のなかに、よく延びた全身を、ゆうゆうとのばした。湯が、柔らかい、複雑な波紋を、立てながら、彼女の全身をひたひたとつつんだ。彼女は眼をつぶつて、この湯の感触にすべてをゆだねた。

「ウウ……」

エスは、タイツ一つになり、両手に石ケンを一杯つけ、彼女を待つている。

やがて、彼女は、やおら、身をおこすと、湯漕のなかの湯を半分位、あけた。彼女の皮膚は、櫻色にそまつて、いい匂いが、ただよつているのは、湯のなかにオーデコロンが入つているからであろう。

「さア、やつて！　よく、洗うのよ。なまけるとひどいよ」

彼女が両手をのばすと、Sは、シヤボンを、彼女のなめらかな肌になすり、両手で、まるで愛撫するように、その両手、脇の下（美彌子はわきの下は剃らなかつた。）それから、ふくよかな二つのお乳のある胸などを、その泡のなかで、こすり、ぐりぐりまわし、かるく爪で刺戟するように進めて行く。美彌子は、いい気持そうに、鼻唄をくちずさみながら、身をまかしていたが、時々、

「バカ、いたいじやないか！」

とエスの真赤に上気した頬をはたいたりした。前がおわると背中、それがすむと浴漕のなかに立つてエスの肩に両手をもたせかけ両足をひらきかげんにして、足の先から、ひざのあたりから、急に、ふとくたくましくなつて行くものの、そして、一番やわらかい一番感覚のするどい恥かしいあたりまで、彼の手にまかせたなりで、彼女自身は、手一つさえふれようとしないのだ。

「フウ……フウ……フウ」

Sの荒い鼻息だけが、このあやしい浴室に音立てる一切だ。

全身洗いおわると、もう一度、湯を出して、シヤボン分をすつかりおとす。

「お前が、もつと大きいと、このまま、抱いてベッドまで連れて行つてもらうんだけどお前みたいな一寸法師じやアねエ」

美彌子が、湯気のなかに立ちあがりながら、あざけるように笑うと、湯上りタオルをもつて、美彌子の裸身を包まうとしていたエスは、いきなり、そのまま美彌子の腰をかかえた。

「おや、抱きかかえる気なの？　バカだねえ。お前に私の重い軀がかかえられるはずないじやないの……」

「カ、カカエラレル！」

エスが廻らない舌をあやつつて答えると、美彌子はいきなりはげしい平手打ちを加えた。

「私に口をきいちやいけないつて云つたろ。お前は、ちきしようなんだから、人間の口をきくなんて生意気なんだよ。口をきいたら、またムチだよ」

「ウ……ウ……」

エスは恥からか悲しみからか、真赤になつて、それでも一生懸命、美彌子をタオルにくるんで、かかえようとした。

「じや、面白い。私をかかえて、ベッドまで運べたら、運んでごらん！」

彼女は、水滴が、一面に宝石のようにくつついているふくよかな軀を、この奇型児の一尺ほどの腕のなかにゆだねた。いくら少さくても、筋肉は大人の筋肉だつた。彼はつぶされそうになりながら、この、とろけるようにやわらかい、桃色の肉を、両腕にささえると、あぶら汗をひたいから、たらたらしながら、歩一歩、よろけるように、彼女をベッドまで、はこんで行く。それはまことに異様な光景だつたが、美彌子は、彼の苦しむ様子をおかしがつて、声高く、彼の腕のなかで笑うのだつた。……

5

美彌子が、男をつくらないでいるのは、彼女をとりまく男たちの間での話題になつていた。不感症だとか、小野小町だとかうがつた事を云うものもあつた。

しかし、その本当の秘密は、このベッドにあつた。そこではあらゆる放埒な遊び、背徳的な遊戯が、この「生きているおもちや」を相手にして行われるのだ。

M夫人が、いみじくも喋いたように、この「生きている玩具」は、彼女達のトイレ、ごみをすてるごみ入れだつた。彼は、その境遇に甘んじて居た。——と云うより、そこに彼の生甲斐をみい出しているようだつた。もう、それだけに生きる男と云つて良かつた。

彼は、美彌子が用便をする浴室に住んでいるのだ。その片隅にじつとうずくまつて、女主人が用たしに入つてくるのを一日待つているのだ。そして、食事さえ、皿もなにも使わずに、その床の上で、犬のように喰べるのである。その待遇しかあたえられていないのだ。

口をきくことも、寝室と手洗場以外の場所に出る事も許されていない。

一日に何回か女主人が、用をたしに入つてくるとき、そのときだけが、切ないランデブウの時間なのだつた。しかし、そこ



では、彼の女主人は、だれにも見せない一番恥かしい女の姿態を、惜しみなく彼の前に見せてくれる。だから一番親しいのは彼だと云ってもよいのだ。女主人の液体が、彼の顔や手にかかる事もある。でも、彼は、それをぬぐおうとさえしない。

そして、女主人は、やさしく、彼にすべてをまかせるのだ。これ以上の特権があるだろうか。

夜になれば、彼は、美弥子のベッドで犬のように奉仕するのだ。

全身のマッサージ。肢を曲げたり、折りたたんだり、美容マッサージをかねたこの体操を彼は、女主人の肌が、じつとりと汗ばむほど奉仕するのである。

それがおわると、その汗をすい取るために舌で、彼女の全身をしやぶり廻すのである。

足の裏のしよつぱい所から、指のまたの一つ一つ、背中からお尻のくぼみまで、ただもう、舌だけを生きものようにうごかして、その汗をなめ取るのである。これは、美弥子の肌の美容法の一つであつた。彼女の肌がどこから、どこまで、いつもしつとりと、ぬれたように輝いてみえるのは、毎晩のこの舌によるの刺戟によるのである。

「バカ、もうお止しつたら……しつこいねえ……」

彼女はじつと目をつぶつて、まつ毛をセン細にふるわしながら、こんなうわ言みたいな事を云つて身をもむ事がある。

そうかと思うと、

「……どうしたの、イヤなんだネ。……ヨシ、いやだなんて生意気なことを云うと、こうして息をとめてやるよ……」

そう云つて、真赤に眼を血ばしらせながら、重い軀で、彼をおしつぶし、ぎゆうぎゆう、あばれる事もある。息がつまつてたまらない。

そうかと思うと、なにか小型の本に一生懸命気をとられて、

「ふふふ……まアすごい！」

などと、みだらな笑いにむせながら、彼のことなど、振りむきもしない事がある。そう云うときでも、この『生きているおもちや』は、ひたすらに奉仕するのだ。ただの器具として……。

そして、女主人がこの奇怪な愛撫につかれ果てて、ねむりに入ると、彼もベッドの下の床で、ねむるのだ。勿論布団なんかもらえる筈はない。そのままゴロ寝だ。夜中に、美弥子が眼をさまして、



「ああ、浴室まで行くの面倒だわ」

と云うときがある。そう云うときは、そのまま代りになる事もある。タンなんか、はくときも、タンツボの代りになるのだ。女主人のどんな命令でもそむく事は出来ない。しかし、そのそむけないという事が、彼を切なく感激させるのだ。女主人の出すものなら、どんなものでも貴く、美しく、この上なくうれしかつた。

6

美彌子は、しかしエスの醜悪さに、目をそむけたくなるような衝動におそわれる事があつた。底知れぬ泥沼におち込んで行くようなおそろしさに目をおおいたくなる事があり、羽田との結婚を承諾したのも、それが一つの原因だつた。

それから一月後に、美彌子の結婚式は、テイトホテルで盛大にあげられた。

とりあえず、この邸は、のこしておいて、時おりのパーテイ用につかおうとした美彌子は、エスを秘密のうちに、車にのせてM夫人の家まで、送ろうとした。しかし彼は、悲しげに頸をふつて、なつかしい美彌子の匂いの残つている浴室から出なかつた。

ムチで打つても、タタいても、この「生きている玩具」は、その場所から動かなかつた。と云つて、羽田となおさら行かず困の新しい住居につれて行くわけには、

りはてた彼女は、當座の食べものを、その浴室にのこして、この家にカギをかけた。

この浴室は、そののち、カタリとも音がしなかつた。しかし時々、夜になると、獣の泣き声のような声がかすかに、外からきかれた。

しかし、美彌子は、結婚して一ケ月たつと夫に、この邸にかえりたいと云つた。

どうしても我慢する事が出来なかつた。あの「生きている玩具」を使う誘惑に勝つことは不可能であつた。夫のたくましい愛撫も、新居の目新しさも、それに比べれば、色あせて見え、味気なかつた。ドレイを使う快楽、しかし、その快楽にうちかてないとすれば、美彌子もまた、この「生きている玩具」のドレイではなかつたか？——引づられ、あやつられているのは、彼女の方ではなかつたろうか。

美彌子は、一ケ月間留守にしていたこの亡夫の邸にかえつて、また二人の奇妙な生活はじまつたのである。

（この回終り）

官能的な麗筆を持つて鳴る日夏氏が満々たる自信を持つて読者諸兄にお贈りする**あぶ・すとお**り「**まにや地獄**」が愈々始まりました。病的な性生活にのたうつ人間群像の秘図に御注目、御期待下さい。

愛讀者通信

私共のような、親兄妹にも打明けられぬ、秘密の性癖に悩む者にとつては、貴誌は何よりの慰めです。又、貴誌を通じて、私に満足を与えてくれる方に逢えるかもしれぬ、と云う期待に胸が躍るのです。

私は極端なマゾで、女性（なるべく若い方、十四、五歳の女学生でも）に責められ、虐待されたい希望です。驕慢、残忍を好む女性の方、御通信願います。但しその際には家族にはばかりますので、男名前でお願いします。（大阪　真砂生）

★

神奈川S子様、僕は本年二十四歳ですが、未だ本当に女性を縛つたことがなく、毎夜空想して眠れぬ夜を過して居ります。何卒御交際下さい。縛り方もいろ〳〵研究して居ります。なるべく繩を使わず、効果的な方法、私独特な責めも研究中です。とにかく僕の夢を叶えて下さい。絶対紳士的行動をとりま す。又絶対に拒否されたことは行いません（東京M・G生）

★

私は子供の頃に見た「迷子いじめ」の場面が忘れられず、遂に極端なサジストになつて仕舞いました。然し、私は女が男を責めることには興味なく、女が同性を責めることに喜びと亢奮を見出して居ります。

このような方が居られましたら、御文通御願いします。いろいろ御話も伺いたいし、御見せしたい絵画などもあります。至急御連絡下さい。（行燈生）

夏の夜の狂想

南章夫



遅い夕食を済ませて自分の部屋に帰ると、机の上に開き封の第五種郵便が乗つている。

「あ、来たッ！」

と、茂夫は瞳を輝かせて、飛びつくように手にとつた。丁度B六版ほどの大きさの封筒で、裏には麗々しく、××出版社と印刷してあるから、家の者たちは、専門の参考書ぐらいに思つているのかもしれない。

しかし、今茂夫が封を切つて取り出したのは、某書伯の筆になる、責めの秘画集なのだ。勤め先でも家でも謹厳で通つた彼が実はこうした責め絵の熱烈なファンであることを、一体誰が知ろう！

茂夫は電気の下にうづくまつて、その縛られた裸女の絵を、一枚〳〵、丹念に、まるで嘗めるように眺めているのだ。そのまゝ〳〵な女の苦悶する姿態が、彼にはまで生物のように感じられ、其処から怪しい亢奮が燃え上つてくる。

長い間、飽きずに眺めてから、彼はやつとこの画集から手を離して、ホッと溜息を吐いた。何時の頃からか、責め絵に興味を持つ様になり、こうして出版社から画集を取りよせる程になつたのだが、彼はまだ実際には、縛られた女を見たこともないのだ。永い間、茂夫は立つたまゝ、咲子の寝姿を見下していた。

そして、茂夫はもう先刻の秘画集の、縛られた女と、寝乱れた咲子との区別がつかなくなつていたのかもしれない。フラ〳〵と妹の傍によると、腰紐に手をかけた。

「あ、あゝッ、兄さん、どうするの！」

妹の悲鳴にはおかまいなしに、茂夫は夢中だつた。

「いやつたら、いやッ！　兄さん！」

妹だと云う意識はすでになかつた。彼はたゞ、絵の上でばかり見つゞけた、責められる女を、現実にこの瞳で見たいと云う、怪しい意慾に手までが震えるのだ。

縛り上げた妹を、柱につないだ。そして茂夫は、手近の物指を振りあげた。

「あゝッ！」

悲鳴と一緒に、竹の物指が割れる。だが身をよじる女の、なんと云う美しさ——。茂夫は狂喜のように物指を振り上げるのだつた。暑さのためか、裾が乱れて、白いふくらはぎが見える。

咲子と二人だけだつた。

便所の帰りに、何気なくその咲子の部屋を覗きこむと、明々と電気のついた下で、もう咲子は熟睡している。派手な浴衣の胴がくびれて、如何にも若さの溢れた寝姿だつた。暑さのためか、裾が乱れて、白いふくらはぎが見える。

そして——、今は痴呆したように声も立てぬ妹を、茂夫は無上に美しいものゝように、ソッと抱いた。

まだ〳〵幼い妹だとばかり思つていたのだが、こうして寝姿を見ると、それはもう見事に成熟した、一人の女性として、茂夫の瞳に写るのだ。永い間、茂夫は立つたまゝ、咲子の寝姿を見下していた。

そして、茂夫はもう先刻の秘画集の、縛られた女と、寝乱れた咲子との区別がつかなくなつていたのかもしれない。フラ〳〵と妹の傍によると、腰紐に手をかけた。

「あ、あゝッ、兄さん、どうするの！」

妹の悲鳴にはおかまいなしに、茂夫は夢中だつた。

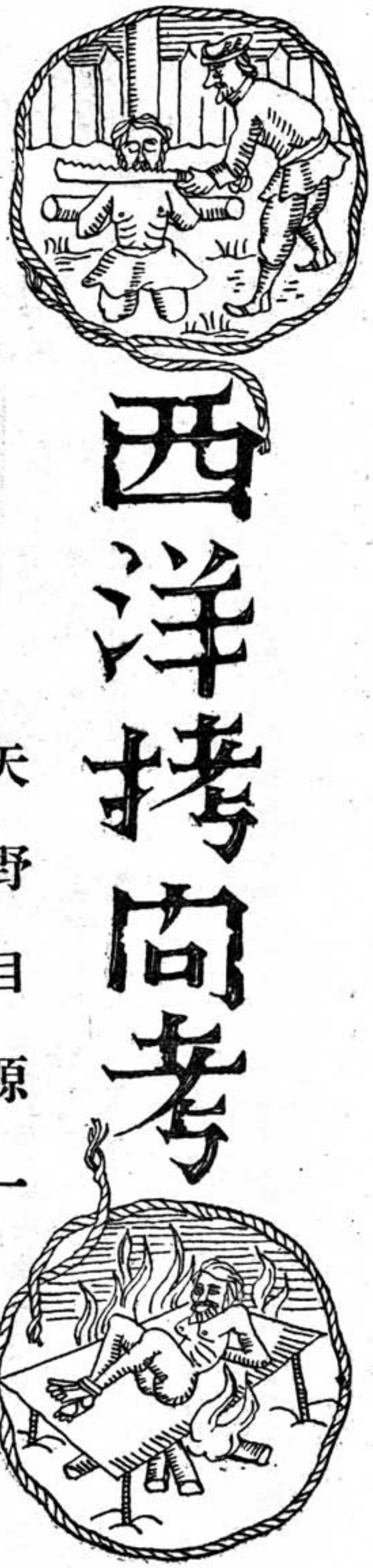
「いやつたら、いやッ！　兄さん！」

妹だと云う意識はすでになかつた。彼はたゞ、絵の上でばかり見つゞけた、責められる女を、現実にこの瞳で見たいと云う、怪しい意慾に手までが震えるのだ。

縛り上げた妹を、柱につないだ。そして茂夫は、手近の物指を振りあげた。

「あゝッ！」

悲鳴と一緒に、竹の物指が割れる。だが身をよじる女の、なんと云う美しさ——。茂夫は狂喜のように物指を振り上げるのだ



西洋拷問考

「神の乙女」ジャン・ダークさえ凌辱した陰険惨虐な西洋拷問史！

矢野目源一

犯罪や軍の機密などの、容疑者やスパイを捕えて拷問にかけた歴史は随分古くから行われている。しかし、これは被容疑者の自白を俟つて罪の決定を、裁判構成の必要手段としたのは法制の発達した時代から始まるので、大昔は、例えば旧約にモーゼの戒めのようなものとか、ギリシヤのドラコーの血法とかに違反した疑いのものには、すぐに死へと導かれたから拷問の要はなかつた。モーゼの時代にあつた一種の拷問で面白いのは姦通をした女に対する方法である。これは自白を肯じない女に、すばらしく苦い水を飲ませるのである。これは「潔白の水」となえられていて、もし実際に罪を犯していれば、その女の腸は腐ると信じられ、貞潔であつたならば、身体の薬となると思われていた　いずれにせよ、この苦杯を喫させることによつて夫の側では嫉妬の復讐が幾分でも間接にできる筈である。

ギリシヤの時代になると、好ましからざる人物は、裁判や拷問を加えることなく、投票の有権者が貝殻の中にその人の名を書いて投票する。この票数が一定数になると「貝殻追放（オストラキズム）」と称して国外に追放されるか、或は断崖に追いつめられて、そこから海の中に突落される定めであつた。

それが今日のような拷問の形をとりはじめたのはキリスト教がひろまり始めてからのことで、当時の新興宗教を圧迫したり、転向を誓わせるために、ずいぶんむごい拷問を加えた記録がある。

ローマの百人隊長（サンデユリオン）であつたセバスチアヌスに対しては、立樹にしばりつけておいて、転向を強要し、それに屈服するまで、遠くから矢を一本ずつ軀に射込むというようなやり方をした。しかし、彼は転向を承知しなかつたので、最後には落命して、殉教者に名を連ねることになつた。

時代は下つて中世暗黒の時代となると、僧侶が勢力を得て來



たので、異端、邪教（キリスト教以外のものを指す）に対する刑罰のために所謂宗教裁判が行われるようになり、その方法の残虐なことは目を覆わしめるものがある。

英軍を破つて祖国フランスを救い、ついにルーアンで捕えられて最後には火あぶりとなつたジャン・ダークは史上あまりにも有名な女であるが、これは神の啓示によつて立つたと云い張り、実際に天使の姿や声をきいたと主張して譲らないので、その宗教裁判ではこれを魔女であると断罪したわけであるが、その自白を途中でひるがえさせようとして、あらゆる陰険な拷問が加えられた。中でも一番ひどいのは、この「神の乙女」に対して、牢番をして代る代る輪姦を加えさせたことである。

彼女が夜、独房で神に祈つていると、荒くれた牢番が一人ずつ現れては、彼女の衣服を剝ぎ暴力をふるつたのである。牢獄の中で

流石のジャン・ダークもこれにはついに音を上げたらしく、ついに魔女のレッテルがはられてしまつたのは人も知る通りである。

宗教裁判の一番残酷だつたのはスペインのトレドの町の牢獄で、ここにはおよそ人間が考えつくあらゆる非道な拷問道具がそろつていた。

ここで取扱われるケースは獣姦者、異端者（キリストの代りに悪魔ルシフェルを信じて、この魔力により呪術や魔法を行つたものをさす）及び宗団に対する反逆者、ユダヤ教などのようなアンテクリストの一派の異教徒を裁いたのである。

私の手許にある中世の獣姦者の裁判記録には拷問のことは書いてないが、犯罪者の殺し方の種々相から見ると、死に到るまでの獄中での待遇は大体想像がつくのである。比較的穏かなもの（といつてもこれを続けられれば死ぬことは同じである）から、過激な責め方まで幾通りもの段階にわかれている。

これは後世ナチや日本の憲兵や特高がやるようになつた拷問の手段にも似通うものがいくつもある。

犬や羊や牛馬などを獣姦したという容疑者は自白するまで完全な孤独な暗闇の独房にほうりこんでおいて水のほかは食事も与えない。別に打つたり叩いたりするわけではないから容疑者は外傷こそ蒙らないが精神的に参つてしまうのである。しかし自白すれば死刑が待つているのは同じことである。もつと程度が進んだのはようやく身体が入るだけの暗函の中に押しこんで

幾日もそのままにされる。これは痛くはないが死ぬ苦しみであるという。暗黒と飢餓が人間にとって最も大きな苦痛である。

それから現責めと称する（これは江戸時代から日本でも行われて来た拷問である）ものがある。これは容疑者から睡眠を奪ってしまう方法である。眠ろうとすると牢番が来て、水をかけたり、針で突いたりして眠ることを許さない。これも外傷は与えられないが、幾日も続けられたのではたまらないことに違いない。

異端者、魔法つかいに対するのはもつと加虐が強くなる。先ず手足の指を一本一本抜くことから始まる。これは非常な苦痛であるに違いない。それから銅の板を熱してこれに罪人を立たせるのである。下から火をたいているので、だんだん熱くなつて耐えられなくなる。しかし、全身に火傷をおわせると人間は死んでしまうことがわかつていたので、死なない程度にするのだそうである。

笞で叩くのは一番単純な責め方であるが、これは背中の肉が破れ、夏期はその傷口に蛆がわいたりする。

人間を吊り下げて苦しめる拷問もある。これには頭を下にするものと、両手を吊り下げるものと、四肢を四つの反対の方向に引張るのと、車の輪にしばりつけて早く廻転させるのと四つの種類にわかれている。

いずれも非常な苦痛を伴い、貧血を起したり、充血しすぎたり、眩暈で失神してしまつたりする。もしこれが若い女でもあれば例外なく失神状態のときに犯されたものようである。

いずれにせよ、トレドの宗教裁判にかけられたものは、余程



の有力者で賄賂を使うかしなければ、散々拷問にかけられた揚句、自白を強要されて、最後には死刑がある。

僧侶たちは手に手に長ろうそくをもち、眼だけ出した三角の白い帽子をかぶつたのに附そわれて、罪人は紙の帽子に火炎につつまれた悪魔の絵をかいたのをかぶせられ刑場に引かれるのであるが、絞首や断頭やはりつけはなく、いずれも火で焼きころされるのである。僧侶たちが持つている長ろうそくは油をそそいだ薪に点火するためのものである。

この宗教裁判はルネッサンスの時代まで続いたから、約二百年間は、こうした残虐が神の御名に於て行われたわけである。

昔は発狂者があらぬことを口走ると、これを悪魔が云わせるものであると信じて、それを拷問にかけた時代もある。ドイツなどで行われたものはその人間を鉄製の籠にとじこめ水の下におろしたり、溺れる直前にひき上げるのを繰返したことがある。ところが、狂人というものは寒暖の感覚が皮膚に失われて



いるから、水の中に出入させたりしても平気で大体は溺れて死んで行つたのである。

日本の狐つきに類する精神病者は猛犬と戰わせて、悪魔につかれたのではない証しを立てる必要があつた。

十五六世紀ごろのイギリスでは魔女（ウィッチ）というものをひどく恐れたため、何かのまじないで病気をなおしたりする呪術者（ほとんどすべてが女である）を捉えて来ては、形式ばかりの拷問を行つてあとは火あぶりにされた。そのときの拷問は鉄の棒を焼いて、肌に触れるのである。これは自白をまつまでもなく、失神すれば罪をみとめたものと考えられたから刑罰の附録で本当の拷問ということはできない。

性的拷問というものもある。これは姦通したと疑われた者を市場のような人の多勢いるところで全裸体でさらしものにして自白を強要する風習もオランダあたりにはあつたことである。

僧侶の破戒の疑いは男の方はさしてひどいことをされなかつたが、尼僧の破戒の方はずいぶん残忍なことをされたようである。当人が自白するまで、修道院の院長の尼が、手に鞭をもつて、臀部を露出させた罪の尼僧を叩くのである。勿論このときは修道院中の尼が全部立会いの上である。

こういう鞭打というものは、禁慾生活を規定されて歪められた性慾のはけ口をサディズム乃至性器を見る変態にかえられてのことであるから、拷問される尼の方はいい迷惑で、これも本格的な拷問とはすこし趣きが異るのである。

日本の特高が共産党のシンパの若い女性にどんな凌辱的な拷問を加えたかを想い起してみれば、拷問をする方の側の変態性がよく理解できるのである。

また拷問の手口から見てヨーロッパ各国の民族性がよくわかる。ドイツのは粘りこく陰性であるし、フランス人は性急であり、イタリヤのは方法が残酷であり、スペインのは熱烈で過激である。

とにかく拷問ということは人類文明史中の汚点である。未開野蠻の程度に従つて拷問が多く行われて来た。江戸時代の責めは昔の中国からの輸入方法であろうが、これが特高や憲兵の時代に伝承されたのはあまり芳しからぬ業蹟である。そして拷問者は支配階級の手先とはいえ、例外なくフロイド風に分析すれば変態性慾者であると断じて差支えない。現在いかに時代が逆コースを辿る傾向であるとはいえ、拷問だけはわれらの同胞に加えてもらいたくないものである。



變態ようろっぱ紀行

ベルリン夜話

惡の華亂れ咲く頽廢のベルリンに結んだ一夜の夢。ニッポンのシロシロを凌駕するアクロバチツクタンスに醉つて、さて何が起つたか……

峯岸義一

世界の民族のうちで、最も優秀な民族に數えられるゲルマン民族つまり独逸国民も、第一次、第二次と続いて敗戦してみれば、いずこも同じ疲弊と困憊の生活環境から、悪の花咲く頽廢の出生はやむを得ない。

その意味に於て、日本の基地の女たちは勿論のこと、東京の上海化も当然なことで、残念なことだが、日本が敗戦処女なら、女も敗戦処女である。普佛戦争で勝つた独逸が、第一次の敗戦で鼻つぱしらをヘシ折られた惨めさと今の日本の現状とはまことによく似ている。

私がベルリンを訪れたのは、第一次大戦後未だ敗戦の傷痕癒え切らぬ暗い独逸の頃で、ヒツトラーがミユンヘンあたりから民族意識の昂揚を獅子吼し、ナチの旗風を辻々に飜えしては、戦後の頽廢を改善しようと試みた当時、言葉通りメンストリートといえども、計画節電で街燈は十時に消えた。

古い映画で、私は名作と記憶している「私の殺した男」というのがあるが、実によくその頃の独逸及び独逸人の性格をとらえていたと思つている。

例えば、塹壕で刺した独逸兵の身許が判りその男が新妻に捧げるか何かで作曲しつつあつた楽譜を死骸の懐中から見出して、終戦後一フランス人が遥々と独逸へ旅して罪滅しのつもりで届ける話であるが、自分が殺したいわば仇敵の仲である彼の新妻だつたか（許嫁だつたか忘れたが）と逢い刻々と恋愛となつていく苦悩を描いている。その一シーンに、独逸の田舎町のさびれ方をオーバラップしていた。四辻のショーウインドウに新流行のスーツが飾つてあるのを見て、恋する女の本能で見窄らしい今の服をあのような小ざつぱりした服に着換えたら、どんなに姿も心も美しくなるか——？と考え淀む心理と、西陽の射す淋しい町角に、何一つ美しいものとてない中にあつて、ただ一着だけの服が、その店の財産でもあり、それに凡ての生活を賭けているといつたギリギリの小商人気質も浮び出ていて、勝つたフランス人（エトランゼ）に売

りつけようとする気持——独逸の女はつましいというが、買おうというそのフランス人に対して遠慮する場面など、今なお私の思い出となつているものである。

町が消燈されて暗ければ、街娼の出没にはもつて来いで、それも半ば大ぴらになつていて、生活のためにはどうにもならなかつた女過多のベルリンだつた。

その時代を背景として、有名な諷刺画家ゲオルググロッスが脚光を浴びたのである。

彼の名作となつている一連のルポルタージュである「エリセ・ホモ」(この人を見よ)は淫売と紳士、獣類としての金持、呆れた貴婦人、早熟な子供たちと社会悪、慾望という名譬等を痛烈な解剖法で描写している。

今一人、日本には余り紹介されていないがオットー・デックスという画家がある。同時代の人だが、油絵やガッシュを以つて、鋭に吹き上げられたズタズタになつた肉体、腐肉にわく蛆虫、腐爛した胴腹を食い破る廿日鼠といつた戦争の虚無感や、町を夢遊病者の如く彷徨う末亡人、それに巫山戯る生き残りの弱つたらしい男、といつた兎に角戦争が作り出した悲劇を抉つている。

事実こうした記録画が当然生れ出る歴史がベルリンの街を埋めつくしていたといつても過言ではない。グロッス画伯にはお気の毒だが、丁度上野駅近所に出没するチョツトチヨツト屋が懐中から大事そうに出す春画か何かと同じように、エリセホモの複製で最も凄い部分や、それに似せたマヤカシ絵を何度も売りつけられたことがある。

今は東独に編入されている筈の、フリードリツヒ・ストラツスの或る科学者の末亡人の家に私は宿をとつた。

独逸では科学者は特に優遇されていて相当の邸宅に住んでいたのであるが、敗戦となり、しかも主人が死んでしまつては今日でいうところの斜陽族だから、異国人のために間を貸すことでもしなければ生きられなくなつたというのが真相である。

爲替の統制で、一マルク、円とトントンという具合になつていたが、どこでも円を欲しがつていたのをみても、マルクの信用が余りなかつた時で、マルク大恐慌のあとだからしようがないけれど、そうしたことで日本人が彼の地でモテたのである。

だが、それは飽く迄お金のため生活の手段のためであつて、腹の中では、日英同盟の義



ベルリン夜景

理とはいいながら、連合軍に加担して青島を攻めた日本人という、好ましからざる感情をもつていた。

そこに問題がある。どちらかといえば日本人に接する機会の少なかつた独逸女が、金にもなるこの際十分からかつてやれといつた気風があつた。俗にいう使つて減るモノではない器械を用いて、東洋人という子か試してやれという気持でもあつたというのはどんな調である。

それは、この間楽町の洋パンと対談した時も、日本の女が外人を相手とする心理に、何か戦争に勝つたとはいうが、閨房では犬のように跪く白色人種を一コロに参らせるのが面白いし、またチョコレート種にしても、可成獰猛な面魂をしていても、あの瞬間は情ない声を張りあげるもので、何んとなく優越感を感じるといつているのと同じものでないかと思われる。それをモテたと自負する御目出度さよ……と逆説出来る訳だが、そうした意味で日本人は随分と色目を使われた筈だ。

或る夜、私に未亡人宿を紹介した満鉄の抜師でHという男が遊びに来た。

彼は、今ハヤリのオンリイという専用女を旅行地の妻としていた。彼女はまた独逸女の家庭的な代表とでもいいたい程の愼ましい型の女で、名実ともにモテていた訳だが、私のチエラーライフに同情して、ドイツ語も満足に喋れず、さぞウヅイていることだろうと察してか、今日は面白いところに案内しようという有難い誘い。一も二もなく賛成して、間もなく引張つていかれたのが、ウンター・デン・リンデンから約半キロ弱の娯楽街であつた。俗にいう使つて減るモノではない器械を用いて、東洋人という子か試してやれという気持でもあつたというのはどんな調である。

スカラ座という、映画とレヴューショウを半々にやる一寸大きい劇場。日本でいえば日劇または国際劇場といつた感じの小屋で、映画は忘れもしない〝南海の情火〟というアメリカ版で独逸タイトルの南国情話。漂流した医師が原住民の女と恋に陥ち子供をつくるが迎えの船が来て女が子供と共に自殺するというつた筋のもの。次がアクロバットを主体としたショウである。

その一場面に、胡蝶を捕えた蜘蛛が、網目に張りめぐらされた巣を伝わつて空中レヴューをやる餌食の舞で、グロテスクであると共に、また瀕死の胡蝶がその網を伝わつてバタバタ跋く有様が何んとなくスリルがあつてよかつた。

節電のため終演が割合早く、たしか九時半頃だつたと思う。Hは、その近くのキヤバレーに私を連れていつた。

春先のことで戸外は寒かつたが、屋内に入ると流石ここだけはスチームが通りはや初夏の感覚、ビールの飲み心地も格好である。独逸国中不景気の嵐が吹きつのつているのに、こんなにも無駄な金を費う人があればあるものかと驚く程、中は一杯のお客で、ゲオルググロッスの諷刺画そつくりのテーブルは猥雑をきわめている。

丁度そのジヤズがベルリンに輸入された時とて、頗るエキゾテイツクなフロアショウが演ぜられた。そのうち、先刻見覚えのあるアクロバットの胡蝶になつた女と蜘蛛になつた女が中央の舞台にやつてきて挨拶をした。万雷の拍手に迎えられて、そこで一曲を踊つた。

併しこの演技は、蜘蛛の巣を縦横にアックルしたのとは違い、平面的で私の期待に反したが、何かが特殊のエロテイツクな雰囲気をつくつたことは見逃せない。

Hがボーイに何か言伝をすると、間もなくボーイに半裸のオーガンジー姿で酌に来たのが、蜘蛛と胡蝶のコンビである。

蜘蛛の方はコルダ嬢といい二十五歳の純独逸娘で、ライプチツヒ生れだというアクロの



ベルリンのキヤバレー

スタア。胡蝶の方は小柄でポーランド生れのサーニアと呼ぶ二十二歳の美女。Hは話がどうやら出来るだけに大満悦の態で、飲む程に酔う程に、消燈十時を余程過ぎた頃だつた。

この二人を乗せてHと私はと或るクラブ風のホテルに着いた。先ず驚いたのはそこに駐車している乗用車の数である。まさに五、六十台もあつたろうか——

表はヒッソリと暗く静まり返つているのに玄関を入るや、煌々たるシャンデリアは目を射るばかりの明るさ。表と裏はどこにもあるものだとこの時ばかりは感に堪えた。

Hに訳を訊くと、このホテルは国際カジノの如きもので、兎に角独逸人の立入禁止区域になつて居り、治外法権で遠慮は無用なのだという。さてそれからが大変である。

青年子女の体位向上を図る〝ワンダーフオーゲル〟裸体生活運動が、独逸の村落に段々浸透して行き、将来の子孫に祖国を託すという意志のもとに、都会の頽廃に反省を加える健全な性交を讃美する傾向が、丁度その頃盛んになりつつあつた。ギリシャ精神とスポーツの奨励という狙いで、美と力への道がウーハー映画の手で製作されたのもこの頃である。

その余波が、ベルリンの街にも押し寄せていたものか、今夜は、その映画の第一回試写会が催されるのだそうで、ポーチには各国の貴顯紳士の自動車が竝んでいた訳である。

Hは、その招待をうけた一人で、アクロバットの踊り子を誘つたのも、先ず衣裳を着た曲芸踊りの魅力を、実際の裸体スポーツに結びつけたら、また如何に素晴しいかを啓蒙するためだつたようである。

地下室で行われた非公開のヌードスポーツ映画〝太陽は限りなく逞し〟を観に来た客は凡そ百人位だつたと思う。

全裸で水浴する若い青年子女の姿、それを統卒する禿頭の親爺（博士だそうな）がこれまた対照的に面白く、野球、テニス、円盤投幅飛び、槍投等が行われるほどに、フイールドで裸馬をこなす裸女の妙技は手に汗を握らせた。特に私の胸をドキドキさせたのは棒高飛びで、それは日本の御家芸である三段飛びの正面撮影よりも素晴しく、バアを手離す瞬間モンドリうつて回転する若鮎のフオームは

何んとも形容しかねる美しさだつた。

今もなお、張り切つた乳房がユサユサと顫動して、腰線からデルタにかけて微妙な弧を描くさまは忘れ切れない程の感動だつた。

成程とても、衣裳つきのタイツアツクルなどとても問題にならないと思つた。この映画には猥褻というものはない。皆健康な明朗な美しさである。之が本当のエロというものだと私は思つた。

映画が終了して、緊張感から解かれた観客は皆一様に虹のような溜息をついたものだ。

Hは、その映画の撮影技師で、裸体の新生活運動の委員をしているドンク氏と昵懇の間柄であつた。

それから別室に私と踊り子たちは案内されて、ドンク氏と、禿頭の某博士とを紹介され再びドイツビールを肴にカクテルパーテイが開かれた。この時位Hが偉く見えたことは後にも先にもなかつた。

禿頭博士の主張によると、こうして良質の種を播いて、畑を耕し、遠からず独逸を昔以上の強国にするのだという。セツクスは人間に課せられた天職の一つであつて、之を陰生植物の如く扱うべきものではなく、健康なそして自然の恵みである太陽の仲介を得て、堂堂と果すべきものである。人間はいつの頃かセツクスを夜の世界にのみ閉じ籠めてしまつた。大いなる誤りである。

その過誤を改めるためには、白晝の美に昇華しなければならぬ。それは、一糸纒わぬ人体という均整美と、そこから発散する男性としての力と女性としての力の結合を、原始の純粋直感に迄リフアインさせなければならない。之が我々の希う理念である。

肉体の美しさは永遠のものではない。青春のみが与えられた特権である。之を病的に使用したり、隠蔽することをゆるさない。その合理化の上に恋愛を認める。

こうして健全な思想を率直に身につけた青年男女が、やがて次の独逸をつくるであろう。我々は決して、今回の敗戦を落膽していない——というのである。今にして思えば、ナチスへのこれは国道筋だつたのである。しかも戦車の走るメーン道路脇に長々と続く人道だつたのである。

この解説を一番よく体得したのは、アクロバットのコルダ嬢と、サーニア嬢だつた。

「では、私たちも入会します、その前祝の意味で、全裸で昆虫の生態ダンスをしてみましよう。」と申出でた。

この突然の美しい賛成者の申出には、流石の禿頭博士も面喰つたようだつたが、それが若し映画に撮ることが許されるなら、そのテストの意味でも願いたいとドンク氏は、特に熱心に依頼した。多少酔つたまぎれでいつたものかも知れなかつたが、コルダ嬢も意を決して、サーニアを促すと、「やりますが、ピアノでバツハの一曲をひける人がいますか？」という。

幸なことに、ドンク氏が多少やれるというので、兎も角伴奏することになつた。

室内を一方照明に変化させて、やがてそこで演ぜられたものは、カマキリの恋であつた。

御承知の如く、蟷螂は性交中雌が雄をムシヤムシヤ、アクメに達すると喰つてしまう物凄い昆虫である。

そのクライマックスに達した至芸というものは、我々を全く感歎させた。日本の白白だとか、レスビアン・ヴイスとかの不潔なアクトのものでなく、アクロバットというフオームが形成する至上のものであつて、女同士の恋愛に似てまた、肉体の相対原理というか、幻想の夢を風のように呼びさますものであつた。

この踊りは、約五分間位で終つたが、全くの大喝采で、私はその瞬間胡蝶の方のサーニアに惚れてしまつた。何しろ言葉の通じない国で我慢していたことだし、全く弱つてしまつた。

さて、その一曲が終つた瞬間、彼女等は裸体のままで、我々四人の男にこういつた。

「私も裸体生活運動に賛成したから、ありのままの姿で踊りました。皆さんだつて、服を着たそのままで私たちに恥をかかすようなことはなさらないでしょう。エチケットとして も裸になつて下さいませんか——つまり私たちはお金を頂戴する目的でヌードダンスをしたのではありません、その趣旨を諒としたからです。どうですか？」

と彼女は四人を見廻した。之には日も私も色を失つてしまつた。

ドンク氏も博士も、裸体礼讃者ではあるが直ぐここで服を脱げといわれると、チヨイとマゴマゴしてしまつた。

すると、彼女は語をついで、

「男がそんなじや駄目じやないの……では賭をしましよう、その上ならいいでしよう？」

ドンク氏は流石千軍万馬の強者だけに

「賭？どんな賭か知らないが、まアその方がいいですね……コルダ嬢よ！宿題を出して下さい……」

彼女はその時、ニツと微笑んで、

「皆さん、すつかり緊張しちやつたのね……実は、私たちアクロの芸を今日迄修練した蔭には、性的魅力を散々試しながらやつてきたのだということを御推察下さい。その研究過程で、七十歳の老人でも、私たちの肉体の魅力に惹かれて若返るかどうかを賭で取引しました。

その一方法として、私たちの踊つたあと、それを観ていた老人が、ワイシヤツを濡らしているかどうか——濡れていた時は、私たちの勝で、千マルクを頂戴したものです。そうでない場合は身体を自由にされても仕方ないという決めで……オホホ……そんな賭をしたことがあります。今夜は、そういふ物慾の混つたものでなく、もつと明快にやりましよう貴郎方が濡れていたら負けですから、一人づつ全裸になつて、私とチークダンスでもしましよう。それならたとえ負けたつて本望でしよう？」

と、朗かに彼女は笑う。

程なく観兵式典の如く彼女厳かに検閲すれば全員敗退そのものズバリで濡れた猿股までいいでしよう？」

脱がされた。まことにいみじくも惨澹たる光景である。

ここに哀れでなくて喜びをとどめしは禿頭博士で、齢六十二歳でいささかインポの気味だつたのが、我慢に我慢を重ねる程のカネアイ…彼女の巡幸に触れた途端に、よだれチヨンガレに相成つたというホンケ返りのことはぎである。

その後のチークダンスは、読者諸子の想像にまかせるとしよう。（この項終り）

愛讀者通信

突然奇妙な通信をしますが、私はソドミーの熱烈な愛好者です。それも普通では満足出来ず、女装したくて たまりません。化粧もし、カツラもかぶり、美しく女らしく装うことが一番の喜びなのです。

しかし、絶対に男娼ではありません。私はこうした交渉に金銭が介在することを、甚だしく嫌悪致します。そのような眼で同じソドミー愛好者から見られるくらいなら、死んだ方がいいのです。ただただ美しく優しく装つて、同性の 方にかしづき たい思いで一杯なのです。

（市川市　藤本）



錯倒の鋪道

続・アポロの街

出口のない林の中に、迷い込んでしまつた感じ——洋は柳澤の底深い魅力にズルズルと引擦られて行くのだ……

志摩雪夫
画 水沢深雪

シヤワーの音が止むと、今度はなにか朗々と詩句を口ずさむ、柳沢の声音が聞えてくる。

フランス語だな——と、洋は思つた。リズミカルなひびきだけれど、なにか抑揚の深い、ニヒルな調子があつた。

洋は絨毯の上に坐つて膝をかかえながら、浴室から洩れてくる柳沢の声に耳をすませた。世田ヶ谷の奥だから、暮れるのも早くて、もう外には何の物音も聞えて来ない。雑然と埃をかぶつた書斎だけれど、何処かに芸術家の私室らしい、潔癖な神経がただよつていて洋はこの部屋で、こんな姿勢で、彼の声を聞くのが好きだつた。

洗髪もしたらしい柳沢が、長髪をバサバサに乱して、厚いガウンのロープを垂らしながら出て来た。

「洋ちやん、君もパス、つかわないか？」

「僕、もう帰らなきや……、この頃ママつたら、とても五月蠅いんだもの——」

しかし、黙つてかすかに苦笑を見せた柳沢の顔を見ると、洋はもうこのまま立ち上つて帰る気持はなくなつて仕舞う。

もう彼の習慣を呑みこんでいて、電蓄の上の戸棚から、洋酒の壜とグラスを取り出してくる。この小さな戸棚の向う側は寝室で、そのベッドの横からも、この戸棚の戸が明けられる。つまり両面から明くのだけれど、洋はひどく面白かつた。

結局、飲んべエな証拠だな、と、思うのだ。

「先刻のフランス語は詩なんでしよう？」

「ああ、ボオドレエル——。こいつはちよつと、いいだろう？

わが亡骸にためらう事なく食入りて
死の中に死し、魂失せし古びし肉に。
蛆蟲よ、われに問へ
なおも悩みの、ありやなしやと。

飜訳すると、ちよつとグロテスクで、洋ちやんの気に入りそうにもないな」

笑つてそんなことを云う柳沢の足許で、自分の膝を抱いたままの洋は、ふつと焦立しい思いに駈られる。それをそのまま、彼は口に出した。

「柳沢さんつたら、何を考えてるんだか判らないんだもの、僕、つまんないや――」

「どうして？　このままでいいじやない？」

やはり微笑している。だが、それがまるで子供をあやす時のようだと、洋は不満だつた。

ランポンの人たちは、畑さんの留守に、柳沢さんが僕を奪つたと思つている。大間違いなんだ。本当は以前から、恐らくは始めてランポンで逢つた夜から、僕はこの人の細長い筋ばつた手や、漆黒の長髪を忘れたことはなかつたのだ――。

默つて酒を飲んでいる彼を見上げながら、洋はなんの連絡もなく云つた。

「柳沢さん、女の人を、愛したことがある？」

云つてしまつてから、洋は赫くなつて、柳沢の顔から瞳をソラした。

「あるさ、昔ね――」

「……」

「どうしてそんな顔するんだい、留学してた頃のことだよ」

「パリで？」

「いや、リヨンでさ。――霧のふかい町だつたね」

洋はかすれた声で、尋ねた。

「どんな女性だつたの？」

「淫売婦さ、リオンの町のね、僕はこの女と半年同棲して、ヴアイオリンまで失くしてしまつたよ」

「それから？……」

「何時の間にか、ランポンの常連になつてたのさ。それからのことは、君も知つてるだろう？」

洋は彼の細長い指をもてあそびながら、柳沢を愛して縊死をとげたと云う、内弟子のことを考えていた。

女と同棲、嫌なことだ、と、洋は思つた。しかし柳沢のもつ非情な雰囲気が、それでわかつたような気もするのだ。きつとそれ以来柳沢は男も女も、誰も本当に愛せなくなつたのだろう。

勿論、僕も例外ではあり得ないだろう――。

彼のガウンの膝に顔を伏せながら、洋は遠い処をみつめるような眼つきになつた。出口のない林の中に、迷い込んでしまつた感じ――。そして、その林の、なんと云う神秘的な魅惑だろう――。

「柳沢さんつたら、ひどいなあ……、嫌だ！　もつとしつかり抱いて――」

「いいさ、洋ちやん、じやあ泊つてゆくね？」

肯くのを見てから、頬を重ねた。テーブルの上のグラスが倒れて

その硝子の小さな破片と、透明な酒が、茶つぽい絨毯の上にこぼれた。

異邦人

洋は校庭の銀杏の木にもたれて、足を投げ出していた。よく晴れた初秋の午後だ。

乾いた草がポカポカと暖かくて、胸組みをしていると、ぼんやり睡気を催してくる。戦災を免かれた古い校舎だが、さすがに由緒ある伝統を保つているだけに、構内にはなかに応揚な好もしさがあつた。

前方の並木がくれに見えるテニスコートには、白いユニホームの人たちと、その白球の快音が爽やかだつた。

半年前には——、と、洋は思つた。殆ど半日ラケットを持つて、くれ彼もこの庭球部の一人だつた。

ぐれて、球が見えなくなるまでも、毎日コートを駈け廻つたものだ。そして、控室に帰つて汗まみれのシャツを脱ぐ時、フッと自分のその汗の臭いに、クラクラするほども、息づまる思いをすることがあつた。

あれは、自己愛というのだつたかもしれない——、今頃になつて彼はそう思うのだ。違うかもしれない。しかし、洋はラケットの音を聞きながら、例え畑や柳沢との邂逅がなかつたにしても、世の常識から踏みはずれていつたに違いない自分を、確かめた思いだつた。

「生方！　君は又、こんな所にいたのかい？」

吃驚して見上げる洋の傍に、高野はドスンと腰を下した。

「どうしたんだ？　なにか事件があつたの、君ん家に行つても何時も留守だし、僕あ、君のマザーに辻褄を合わせるのに、大汗を掻いちやつたぜ」

洋は高野を見上げて、弱々しく微笑した。この中学時代からの友人とも、疎遠になつていた半年を反芻する眼付になつた。

「なにかあつたんだろ？　恋愛事件かい？」

大人びた口調で、生真面目にのぞきこむ高野の視線に当惑して、洋は眼をソラした。今講義が終つたらしく、女子学生の一団が、あふれるように校舎から出てくる。

その女学生の殆どが、云い合わせたように紺か黒のスカート。白のブラウス。白、又は茶のロウヒール。そして、カーデガンの色だけが、華かに色とりどりなのだ。

洋は初秋の陽の中にこぼれた、そのさまざまのカーデガンの色を美しいと思つた。だが、それだけなのだ。

「おい、あの中に居るのか？」

その華かな一団に顎をしやくつて見せる高野に、洋は慌てて苦笑しながら首を振つた。高野の早呑込みも可笑しかつたが、それより彼の無神経な大声も困りものだつた。

「なんでもないよ。少し怠けてただけなのさ——」

「かくすなよ。俺だつて、相談相手にぐらいなるぜ？」

暫く見ない間に、急にいやらしくニキビが吹き出した高野の顔をみつめて、洋はしばらくためらつた。親友だつたには違いないが、

それは半年前のことだ。あくまで健康で、常識家の高野に、この頃の自分を理解して貰う自信はなかつたのだ。

「学生でなきや、近所の令嬢かい？」

「ちがう！　僕は女の子なんかには、なんの興味もないんだ！」

あくまで自分と、女性を結びつけようとする彼が腹立しくつて、洋は吐き出すように云つた。

「よしてくれ、つまらない臆測なんぞ――」

二人共、満で数えてやつと十八歳なのだ。背のびして、大人の表情で友人の煩悶に手を貸すつもりだつた高野が、まず鼻白んだ。

その彼の正直な顔を見ると、洋は気折れがした。同時に云いようもない孤独な気持になつていた。洋は高野の表情よりも、そんな自分の寂しさに負けて、クセで膝を抱きながら、先頃からの自分の変貌について、低い声で語つた。

しかし、話出した時から、洋はもう後悔していた。

何故、喋る気になつたのだろう、僕は――。二十も年長の、しかも同性の柳沢を愛して、勉強も何も手のつかぬ僕をどう説明しようと云うんだ？――　ホラ、この友人は、まるで異人種を見るように僕の顔をみつめる――。

語り終つても、高野はしかつめらしい胸組みのまま、何も云わなかつた。そんな彼を洋は冷めたい表情で見てから、芝生に長く仰向きに寝た。なんだかすつかり疲れているのだ。頭の上を、まぶしいほどにも白い、初秋の雲が流れる。

口に出して喋つたことで、一層柳沢が恋しかつた。柳沢は定期演奏会の準備に追われていたから、このところ暫く逢えない。その柳沢の芸術家らしい風貌を思い浮かべた。やはり、息苦しいほど恋しいのだ。

「生方、君はセックスを……」

「いいよ、わかつてる！」

「しかしね、君、そんなアブノーマルな誘惑に引きずられて……」

洋は激しく起き上つて、重々しい口調でそんなことを云う高野を見た。額が蒼かつた。

「もういいんだよ、高野」

それから洋は、不意に白い歯を見せて笑つた。

酒宴歌

新橋駅から三、四分、妙に間違い易い小路の奥に、喫茶店ランポンがある。近頃はかくれたソドミアの社交場として、口さがない世間にも知られて来た。ここの常連たちにとつては、なんとも迷惑なことだ。

赤樫のガッシリしたドアには僅かな彫刻があるばかりで、その上部に銅版がはめこみになつているのが風変りだつた。其処に小さく店の名がつづつてある。ランポンとは佛語で「酒宴歌」酒盛りの、交歓の歌の意味だと、柳沢から聞いたことがある。

洋はドアを押して、畳間見る店の面変りした様子に、ちよつと気を奪われた。客もマスターもまだ居なくて、傍のテーブルではギャルソンが二人、気取つた手つきで、カードを切つている。

「おい、洋ちやん！」

カウンターの横の、時代物らしい鏡を覗きこんで、ランポン随一の人気者の新ちやんが、ネクタイを結んでいる。女がスーツにするタンタアンチエックのような派手なチエックのダブルが、凄いほどの美貌によく似合うのだ。

「新ちやん、何処へゆくの？」

「いやだな、あたしが洒落て出掛けるんだもの、あいびきに決つてるじやないか――」

「ふーん、だれ？」

「あちらさんの大尉さ。――一度洋ちやんを連れて行つて、柳沢さんをヤキヤキさせてやろうかしら……」

「ううん、あの人は、僕がなにをしたつて、怒りやしないさ」

スタンドに頬杖をついて、気がなさそうな洋に、新ちやんは持前の甲高い声で、

「あら、御馳走さまです」

「ちがうつたら、あの人は冷めたいんだもの、僕が誰と遊んだつてジエラシーなんぞしやしない……」

我にもなく語尾が震えた時に、新ちやんはジロリと洋の顔を見た。美貌で気ままで、小意地の悪いギャルソンなのだ。だけど誰にも愛される。

「洋ちやん、今日はヒスみたい」

「新ちやん、僕はね――」

はぐらかすような相手におかまいなしに、洋はせきこんで云つた。

「僕はね、柳沢さんに夢中なんだ。離れるともう不安で落着かない。学校でも家でも、あの人のことを考えると、もう何も手につかなくなる。又逢いたくつて、それが苦しいほどなんだもの――、僕かあどうしていいのか判んない……」

「いいじやないのさ、自分のいい人だもの、傍から文句のつけようはないさね」

「だけど、新ちやん……」

洋は口ごもつて赫くなる。

「だれでも、こうなのかなあ……逢いたくつて、つまり、抱かれて居たくつて――」

二つ並べたグラスにキュラソーを注ぎながら、新ちやんはそれがこぼれそうに笑つた。

「洋ちやんヤルね、――そうさ、あたしだつて、去年いい人と、二週間も伊豆の奥にかくれたことがあるよ。一緒に家族風呂に入ると豚みたいな宿の女中たちが、袖をひつぱり合いながら、笑つてんのさ――」

「だけど、あの人は僕のことを……」

「そう、冷めたいところがあるね、でも、あの感じは柳沢さんの持前なんだもの。洋ちやんだつて知つてるね、あの……」

グラスを洋の前にカチリと置いて、

「柳沢さんの伝説――」

洋は肯いて、スタンドに顔を伏せた。額が冷めたかつた。

天才的な作曲家で、又有名なオーケストラの指揮者である彼をめぐる伝説。過去に彼と関係があつた男が、二人までも死んだと云う噂――。



僕、死んだつていいや——

始めて柳沢の膝に顔を伏せた夜のように、洋はそう思つた。すると、目茶苦茶に涙があふれて来る。ヒヨイヒヨイと赤い靴の先で調子をとりながら、新ちやんは古いフランス映画の主題歌を口づさみ始めた。

常連の一人が現れたらしく、閑なギヤルソンたちが取巻いて、ドヤドヤとこちらにやつて来る。

「オヤ、シヤルマン同志で内緒話かい？」

「ううん、洋ちやんをカマつてんの、この子つたら、ムキになつて、見てられやしないもの」

新ちやんは薄い唇を尖らせて、わざと憎らしそうに洋を顎でシヤクつて見せた。賑かにワイワイ騒ぎ立つたところに、電話のベルが鳴つた。

「あ、いけない、大尉だろ、——おい、あたしは居ないことにしてね、今日はスツポかしてやるんだから……」

受話器をとつた小柄のギヤルソンが、新ちやんにウインクして見せて、

「ハロー、イエス、新ちやん？　オウ、ヒー・イズ・アブセンス……」

黒と白の樂器

帝劇の通りに出ると、もう劇場に入る人影はなかつた。もう入れないのではないか、と思つて、洋は思わず駈け足になつた。

少し息をはずませながら切符を渡すと、ほかに人影がないためか二十ほどの入口の女の子は、しげしげと洋の顔を眺めた。受取つた切符の一片を切るのにも、洋の顔から瞳を放さないのだ。そして、異性のそんな視線に洋は慣れていたし、ただ、五月蠅く感じられるばかりなのだ。

製帽に白ワイシャツで、黒サージの上衣を抱えた自分の美貌が、若い女の子たちの瞳にどのように写るかと云うことなぞ、洋は考えても見ない。

厚いドアを押すと、客席は薄暗かつたが、まだ幕は上つていない。洋はホツとして、舞台に向つて右横手の席についた。彼の隣席の、派手な和服の令嬢らしい女性も、驚いたように、汗ばんだ洋の横顔を見る。彼はその令嬢がもてあそんでいる、ひどくコツた、黒いチユールの手袋だけを美しいと思つた。

ベルが鳴り終らぬうちに、幕が静かに上つた。拍手が場内一杯にひびくと、洋は胸苦しくなつてくるのだ。

舞台は黒と白だつた。六、七十人ものオーケストラが、中間色なしの黒と白だけで、整然と居並んでいる。それは混然と溶けあつた巨大な一つの楽器だ。舞台の左の袖から、長身の柳沢が現われて、又拍手がひびく。洋は赫くなつて、始めて見る、舞台の上の彼を見た。

柳沢はものぐさそうに、聴衆に向つて一礼すると、次の瞬間、もうサツと指揮棒を振る。曲目はベートーヴェンの第三。行儀のいい客席は、咳一つないのだ。洋は無意識に自分の胸を抱くようにしながら、クセの多い、柳沢の後姿をみつめた。

柳沢さんたら、やつぱり凄いや——。

ムキになる洋をからかいながら、酒を飲んでいる時の彼とは、当然ながら人が違つたようなのだ。あの何時も彼につき纏つている、虚無的な非情なかげは、やはりその尖つた肩のあたりに、ただよつてはいたけれど——。

彼の指揮棒につれて、シンホニーは高潮に達する。だが柳沢のアクションは鋭いが地味だつた。

「派手な、大袈裟な指揮なんぞ、ありや、自己満足だけのものさ」

洋は柳沢の、そんな放言を覚えている。彼は妙に誇らしく、甘えた気持で、酔つたような聴衆を見渡した。

柳沢さんと僕が、愛人同志だつてことを、この人たちは知らないんだ——。

だから、演奏が終つた時、満場の拍手のうちに美しい振袖の女性が、柳沢に花束を贈呈するのを見ると、カツとなつた。柳沢がちよつと頭を下げた様子にも、洋は我慢が出来なかつた。

裏切られた思いで聴衆のうしろから外に出ると、夜の街は小雨が降つている。横の駐車場にはまだ五、六台も車が停つていた。洋は楽屋口の近くで、雨に濡れて立つていた。今夜の柳沢はいろいろな会合があつて、躰が空かないことを知つてはいたのだけれど——。

楽屋口から七、八人もの人々が談笑しながら出て来た。その中の一番長身の男が彼だつた。しかし、洋が近づく前に、人々に囲まれるように車に乗込むと、すぐ銀座の方にすべり出して行つた。

同じ車の若い男が、笑いながら彼になにか囁いた様子にも、洋はひどく傷つけられていた。さつきの誇らかな気持が、僅かな間に変

化した、その自分の病的な心理に、彼は気がついていなかつた。

疲れて家に帰つた。黙つて自分の部屋に入ろうとすると、茶の間から呼び止められた。

「洋ちやんたら、毎晩何処に行つてるの？　本当にこの頃は目茶苦茶なのね」

「そうよ、いやに深刻な顔しちやつて、まるで不良少年だわ」

洋は、この母と二人の饒舌な姉とで構成される、茶の間の雰囲気が苦手だつた。あまりに女臭さすぎると云つてもいい。父の居ない家の、たつた一人の男性で、しかも末つ子と云う位置から、逃げ出したくなることもある。

「あら、帝劇のプロだわ、ふーん、ベートーヴエンを聴いて来たの――」

長姉が目ざとく、洋のポケットからはみ出したプログラムをひろげた。

「まあ、この人が柳沢直人つてコンダクターなのね、ちよつとナイスぢやない？」

「そうね、なんだか、芥川龍之介に似ているわね？」

「よせッ！」

洋は蒼くなつて、姉たちの手からプロを取り上げた。おそろしく不愉快だつた。

「洋さん！」

それまで黙つていた母親が声をかけた。

「今日高野さんが心配して来て下さつて、母さんはこの頃のあなたのこと、みんな聞きましたよ」

「高野が……、畜生！」

「いいえ、心配して来て下さつたんですよ。――ねえ洋、母さんは何も云いませんけれど、あなたは、仮にも生方家の当主じやありませんか、そんな変態的なこと……。とにかく、暫く学校も休んで、家にいらつしやい、え？　わかりましたね？」

女ばかりのこの家に閉じこめられるぐらいなら、死んだ方がいいと、洋は思つた。

旅の誘ひ

例の土曜日の夜のランポンは、席がない程の大入りだつた。煙草がぼんやりするほども渦を巻いて、人々は薄暗い中でジツと顔をみつめながら、低い声で語り合つた。

その表情の奥にはさまざまな生活があり、悲劇もある筈だつたけれど、誰もそんな片鱗ものぞかせない、静かで穏当な、常識人の集りに見える。子供が四人もいる紙問屋の主人と、五十を過ぎてまだ独身の老学者がしめやかに語り合つたりする。誰も気がつかぬうちに消えてゆく、極く大人しい二人連れもあつた。

これがアブノーマルな、倒錯の世界だとは、どうしても思えない。異様な光景と云えば、客席と客席との間を縫う、あまりに美しく、多忙そうな、ギヤルソンたちの姿かもしれない――。その御仕着せの白い上衣が、この店では唯一の派手な動きなのだ。

新ちやんは横浜から来た、太つちよの華僑の膝の上に乗つていた。

「そうね、横浜もいいな。お店が看板になつたら、ドライヴに連れてつて貰おうか知ら――」

「オウ、若しあなたがのぞむなら、香港までも連れてゆきます」

その時新ちやんは、重いドアが動いて、憔悴した洋が顔を出したのを見た。洋が傍を通る時、器用に指を二本たてて合図してみせたけれど、彼は気がつかないで、一人でスタンドの傍に行つてしまう其処の高い椅子に腰をかけて、やつと落着いたようにあたりを見廻した洋を、マスターがニコニコと迎えて、

「どうしました、洋ちやん、なんだか痩せたようですね？」

「ええ、マスター、僕、家の方が五月蠅くなつちやつて……、学校も休んでるし、どうにもならなくつて――」

「そんなことだろうつて、柳沢さんも云つてましたよ。ええ、毎晩此処で飲んでいたんですけど、一、二、三日前から、関西に演奏旅行ですつてね」

洋は知らなかつた。逢えない――と思うと、ガックリ気落ちしてあたりの空気が、なんとなく白々しいものに思えてくる。

あんなに憧れて、逃れ出て来たランボンも、柳沢が居ないことでこうも索寞としてしまう。

そして、一心にあの人に向つて倒れかかつてゆくのに、あの人はそんな僕をちよいと支えるだけで、僕以外の、いろいろな世界を持つている。もう、僕は目茶苦茶なんだ――

「洋ちやん、なにをぼんやりしてるの？　ラジオを入れればいいじやないか――」

白い上衣の新ちやんが後に立つていて、ニコリともせずに云つた

「柳沢さんのオーケストラ、大阪から中継があるんだよ」

ダイヤルを廻している新ちやんの後姿を、無感動に見た。疲れてもの憂かつたのだ。

「唯今から、ブラームスの交響曲三番ヘ長調を御送り申上げます。演奏は××公響楽団。指揮、柳沢直人……」

ほどのよい高さで流れでるオーケストラの調べに、ある近親感から、この店の人たちは和やかな表情で耳を傾けた。

「洋ちやん、どうです？　悪くない気持でしよう？」

「ええ……」

洋は口ごもつて、ニツコリ笑つた。やはり誇らかな、甘えた気持が甦がえつてくるのだ。

「洋ちやんたら、現金なものさ」

それがクセの小憎らしい表情で新ちやんは唇を尖らせてみせる

「僕、今夜、大阪に行こうかなあ――」

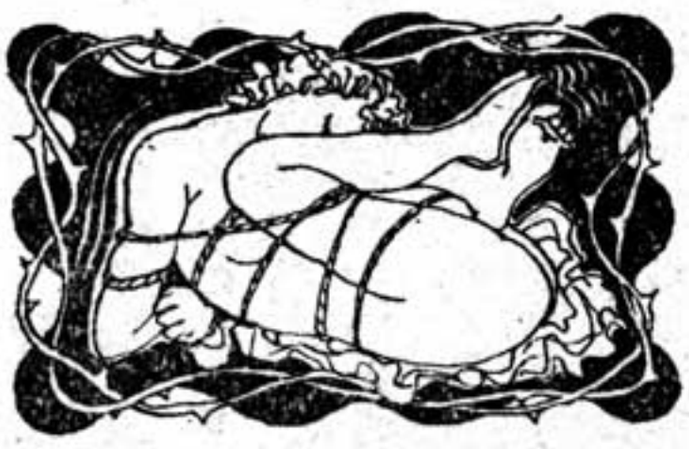
「オヤ、シヤレてるじやないの、御馳走さま」

何時も柳沢と並んだスタンドに頬杖をついて、繊細な旋律を聞いていると、クセのある彼の風貌が思出されて、洋は放心したような瞳になる。

最後の旋律が消えるのを待つて、洋は薄暗いランボンから飛出した。そのまま新橋駅の階段を駈け上る。急激な気持の飛躍も、それから先のことも、洋は何も考えていなかつた。ただ柳沢の指揮棒に招かれたように、大阪行の汽車に乗つたのだ。

變態十二ケ月

叡られた繩と鞭



變態的な肉親間の情事を身上相談から拾うエツセイ

武野藤介

1

僕が、某紙で身上相談の回答を担当していた時、次のようなケースがあつた。

私は本年四十一歳。先妻の子供が二人ある現在の夫と再婚しました。夫は一つ歳下の四十歳。昔から、妻が一つ歳上の結婚は幸運だなどと申しますが、俗説ながら、ほんとうに私も、しみじみと、わが身の幸福に感謝していました。奥さま運の悪い夫で最初の妻は戰災死、二度目の妻は中毒死でした。私も過去は不幸で、三十歳で離婚し昨年再婚するまで獨身で、その獨身中に戀愛は二つ三つありましたが、こんな幸福な再婚生活に惠まれて、夫もそれを口癖のようにに云いますし、勿論、私もそう思つています。ところが、この夫に二つ三つ歳上の姉があつて、この姉がたびたび私たちの新家庭を訪ねて參り、子供もあることだからと云つて洗濯物などの手伝をしていつてくれるのですが、ふと気がつくと、その洗濯物でもつくろい物でも、それが夫のものばかりで、夫の寢卷、猿又など、私たち夫婦の寢る夜具のシーツなどは、来るたびに、かならず洗濯して行きます。三十七、八歳の晩婚の姉で子供はありません。それまでオールド・ミスで、夫の家に同居していました。或日、この義姉の、その洗濯物のことで私が笑いながら夫に話しますと、意外にも、夫は坐り直して、思いもかけないことを告白しました。それによると、この姉と弟はこれまで不倫な関係を結んでいたのです。勿論、今では姉にも夫があり、この関係は絶たれているそうですが、しかし、この意外な告白は私を真ッ暗な気持にさせました。それ以来、姉が訪ねて參りますと、私は嫉妬に気が狂いそうになります。どうしたらよろしいのでしょうか。

（文京区・芙佐子）

そんな馬鹿なことがと、我々の常識と良識は、これをあたまから否定するのであるが、案外、この肉親姦のケースは世間に多い。たまには、「父と娘」というのもあるが、一番多いのがこのきようだいの場合で、而もこれには貧富の別がない。誰にでもすぐに想像されることは、殊に、戰災都市の住宅難で、その性生活にも、不自然な雜居生活を余儀なくさせられているため、両親の夜の「いとなみ」を見真似て、その好奇心が動機だつたりするが、貧民階級では、もともと、この雜居生活があたりまえのことになつているから、

自然、きようだいで不倫な関係に陥入るようにもなるのである。

また、このケースが、時にブルジョア家庭というのではなくても、その育ちのよさからきた性格的なはにかみや、娼婦に対する神経質的な不潔感などから、この好奇心が自からコントロール出来なくなつた兄が、手近な妹を無理に「手ごめ」にしたのがその動機となつたりするのだ。

が、その動機はいずれにしろ、この不倫行爲を反省し煩悶しながらも、激しい慾情にはうちかち得ないのであろう。

モウパッサンに『港』(Le Port)という小説がある。これも兄と妹の不倫をテーマにしたものだ。もつとも、この妹は娼婦であるが、その事後、血をわけた兄妹であることをその身上話から互いに知るのであるが、その煩悶を作者は次のように描写している。

「私、兄さんは死んだものとばかり思つていたのよ」

「なにしろ、あの頃はお前も小さかつたからなあ、それがこんなに大きくなつて、俺もすつかり見違えてしまつたぜ。だが、お前のほうからなら、この俺つてことが……わかりそうなものじやないか」

「だつて私、随分と男という男を知つているので、皆な、同じようにしか眼に映らないのよ」

と、彼女は捨鉢になつたような身振りをして云つた。彼は尚も、そういう彼女の眼の中をじツと見詰めつづけていた。が、この激しいショックに感極まつたのか、彼はまるで殴られた子供のように、大声をあげて叫び出したくなつた。彼はまだ、彼女の膝の上に馬乗りになつて、両手で抱きすくめたままの恰好でいたが、そうやつて見詰めているうちに、あれからずうツとながい間、海で暮していてときどき、思い出した生れ故郷や、その故郷に、今は亡き両親たちと一緒に残してきた可愛い妹の面影が、だんだんと胸によみがえつてきたのだ。と、急に彼は、船乗りのざらざらした手で、その思い出の妹の顔をかかえ、まるで、肉身に接吻するようなきよらかな清いキスをしたが、忽ち嗚咽が、このあらくれた男の波のようになが い慟哭となつて平気でいるから、そつとして平気でいてあげなさい。あなた達夫婦の性生活は非常に満足なものらしく推察されますが、それなればこそ、御主人も二度と昔の過失を繰返さぬ決心で、あなたに告白されたのだと思います。御主人を信じて幸福に暮して下さい」

「だつて私、随分と男という男を知つているので、皆な、同じようにしか眼に映らないのよ」

と、彼女は捨鉢になつたような身振りをして云つた。彼は尚も、そういう彼女の眼の中をじツと見詰めつづけていた。が、この激しいショックに感極まつたのか、彼はまるで殴られた子供のように、大声をあげて叫び出したくなつた。彼はまだ、彼女の膝の上に馬乗りになつて、両手で抱きすくめたままの恰好でいたが、そうやつて見詰めているうちに、あれからずうツとながい間、海で暮していてときどき、思い出した生れ故郷や、その故郷に、今は亡き両親たちと一緒に残してきた可愛い妹の面影が、だんだんと胸によみがえつてきたのだ。と、急に彼は、船乗りのざらざらした手で、その思い出の妹の顔をかかえ、まるで、肉身に接吻するようなきよらかな清いキスをしたが、忽ち嗚咽が、このあらくれた男の波のようになが い慟哭となつて平気でいるから、そつとして平気でいてあげなさい。あなた達夫婦の性生活は非常に満足なものらしく推察されますが、それなればこそ、御主人も二度と昔の過失を繰返さぬ決心で、あなたに告白されたのだと思います。御主人を信じて幸福に暮して下さい」

2

右の身上相談で、僕がすぐ思い出したのも、モウパッサンのこの小説のことだつたが同じ肉親姦でも、これは全然、それと知らなかつたのだから、その夫が、きようだいと知つていてそうなつたのとは、おのずから非常に違つていた。

が、その姉が、弟の寝巻やパンツや、弟夫婦の寝るシーツのようなものばかり洗濯するというのを、僕は甚だ興味深く思つた。晩婚の姉がその夫に性的不満を持ち、肉身の弟の肉体を慕うコンプレックスに違いないのである。僕はこの身上相談に回答して、

「しかし、ここで姉さんの世話焼きを無理に抑圧すると、そのコンプレックスが爆発するおそれがありますから、そつとして平気でいてあげなさい。あなた達夫婦の性生活は非常に満足なものらしく推察されますが、それなればこそ、御主人も二度と昔の過失を繰返さぬ決心で、あなたに告白されたのだと思います。御主人を信じて幸福に暮して下さい」

その敵娼の彼女も、ベッドの脚のほうにう

が、僕のこの回答の何ンというおざなりさだ！　三ケ月ばかりたつて、田代芙佐子と名乗るこの婦人が、直接、ひとりで僕の書斎を訪ねて来て「その後のこと」を聞かされた時は、まつたく、僕は横ッ面をはりとばされたようにさえ感じた。

「先生は、私の主人が、二度と昔の過失を繰返さぬ決心で、それを私に告白したと仰言いましたけれど……」

「……」

「そうじやないンですのよ」

僕は黙つてこの婦人客の打明け話を聞いたのだ。

「主人の申しますには私と結婚いたしました時は、勿論、姉とのこの不倫行爲を絶つ決心で、事実、結婚して半年ばかりは、何事もなく過ぎましたのですが、やはり主人にも、あの姉と同様、肉身の姉の、その肉体が忘れ兼ねて、過去のこの過失を私に告白したのは、公然と、これを繰返したいためだつたのですわ」



「あとは、燒けぼッ杭のようなもので……」

「姉さんの旦那さまも御存じなのですか」

「いいえ……」

これがわかれば、勿論、姉は離縁されたろうから、これは万事、内緒事のスリルで、姉のこの夫は、いまだに何も気がついていないというのである。

「それじや……公然といつても、それはあなたに対して、結局、この既存事実を認めさせようというのですか」

この婦人客は肯いてみせ乍ら、

「公然と、と申しましても、私の眼の前で、そんなことをしてみせるわけではありませんけれど」

「……」

「あやしいと見て、私が、夫を問い詰めますと……」

この夫は、またしても犯した過失を告白して、泣いてあやまるのである。その煩悶の様子は気の毒なほどだつた。が、泣いてあやまるぐらいだから、再び、この過失を繰返さず、清算するつもりだろうと、もう一度だけ、彼女のほうでも許してやる気はなるのだが、やはりまた、夫はこの過失を繰返すのだ。どうにも手がつけられない。

「泣いてあやまり乍ら、俺を罰してくれと申しまして、嫌がる私に、無理に、体じゆうを抓ねらせますのです。もつと、もつと、抓ねつてくれと云つて。多でも、汗をびつしよりとかいて。体じゆうがアザだらけですのよ。こないだも、子供を連れて、銭湯に参り、帰つて来て子供の申しますには、皆ながお父さんをじろじろ見ていて、僕、何ンだか、きま

当地のソドミニストの方々にお願ひします。多年同好の士を求めてゐますが、当地にソドミアの喫茶店のような集合所があれば、御教示下さい。尚二十歳以上の清潔な青年を求めています。何卒御連絡下さるよう、切望いたします。（高知　T生）

★

貴誌創刊号を知り、狂喜しております。小生未だ大学在学中で、殆ど経験らしいことはなく、ただ日夜懊悩をつづけるのみです。噂にきく公園や、ソドミアの喫茶店に出掛ける勇気もない弱虫で、勉学も手につきません。年輩の紳士の方御交際下されば、この身心を捧げつくす覚悟です。多情を好まず、ただ一人の方との邂逅を夢にまで描いています。お救ひ下さい。（奈良　高山生）

大宮の川辺様御心中御察し致します。私は年配であり、貴方の愛人とはなり得ませんが、よき話相手になりたいと思います。

九州U・T様、私も宮崎県出身です。同好の士として御交際下さい。（鶴見　M・O生）

★

りが悪かつたなんて。お父さんのあのアザ、どうしたのッて、私に聞きますのです」

「子供さんはおいくつですか」

「この子は尋常三年生ですのよ」

その妹の、来春から小学校へあがるという女の児、先妻の子はこの二人だつた。

「御夫婦の寝床でなんでしようね？」

「そうですわ。勿論、夜になつて……子供たちが寝てから……」

「子供さん達と一緒の部屋へ御夫婦でおやすみになるんですか」

「いいえ。子供たちは二階」

ところが近頃、その抓ねる「折檻」だけでは夫が満足せず、細紐で、肌に喰いこむほど手足を縛らせ、その上にも、箒の柄を鞭がわりにして、体じゆうをところきらわず撲たせるのである。勿論、二階に寝ている子供たちの眼を覚まさせないように、夫婦ともも、それだけは気を配つた。が、最早、このようになつては、その身上相談も、小説家の僕の手には負えなかつたのだ。

3

「それで一体、あなたのほうはどうなんですか」

「私？」

「嫌がるあなたに……無理に、御主人がそうさせるのだと……」

「はじめのうちは……」

「嫌でしたか？」

「嫌でしたわ」

ところが近頃、彼女にとつても、これが必ずしも嫌ではなくなつたのである。汗ばんで熱ッぽくなつた夫の体。その体じゆうが亢奮していて、そのあと味は彼女にも悪くはなかつたのである。いや、そればかりではない。細紐で、夫の手足を縛り、その自由を奪つたまま、箒の柄で、これもアザになるほど撲つて、そのあとのこの「いとなみ」も、彼

女は満足以上のものを感ずるようになつてきた。第一、自分の思いのままに、手足を縛られた夫を、「赤子の手をねじあげる」という喩どおりに、自由自在になる閨房だから、彼女の、その時の女のよろこび……、これが今は彼女にも病みつきのようになつた。僕にもそれが想像出来たのである。

そこまで僕に打明けると、この初対面の婦人客も、流石に、顔を赧くして、

「先生のごらんのとおり、私はこんな小柄な女ですけれど、主人は、中学時代に、相撲部の選手だつたというほどの巨身なものですから……」

と、こんなことも云つて、

「私たち夫婦は、一体、夫婦とも病気なのでしようか」

僕は友人の精神科医に紹介状を書いた。

名古屋にあつた殺人事件がある。昭和二十二年九月。これも兄と妹と肉親姦だつた。この兄は二十六歳。妹は二つちがい。百性であるのは、妹が養女にやられていたからで、この兄妹は、宿帳にも兄妹と名乗つて、泊つた旅館で、兄が妹を手拭で絞殺したのだ。その犯人の兄が自から警察署へ訴え出たのであるが、本人の陳述によると、インフレの悲劇、生活難から食えなくなつたので、兄妹心中をするつもりだつたけれど、死におくれたとのことだつた。

が、型の如く、死体検視をした警察当局は、泊つた宿屋にその妹の体に不審な点があり、ついても調べた結果は、

「あの二人が本当の兄妹ですつて……そりや宿帳にはそう書いてありますが」

と、宿の女中が、意味ありげな笑顔で云つた言葉を裏書きするように、二人の泊つた部屋の、その蒲団の下から、まるめた鼻紙が出てきて、この鼻紙を顕微鏡で検証するまでもなく、ちよつと、そのにおいを嗅いでみただけで、これが動かぬ証拠となつたのだ。

彼も遂にこの事実を白状して、

「養女にやるまでは別に何ンともなかつたのですが、一昨年の夏、妹がうちへ来て泊つた時、蒲団が無いので、私と一緒に寝ました。お互いにおとなになつてから、一つ蒲団で寝たのは、これが初めてなのでとつたら夫婦みたいじやと、二人で笑い話をしているうちに、妹が私に、兄さん夫婦つてどんなにするものだろうとくすくす忍び笑いをしながら、羞かしそうに、好奇心を起してるものだぞと、冗談半分に、こうすると、インフレの悲劇、生活難から食えなくなつたので、兄妹心中をするつもりだつたけれど、死におくれたとのことだつた。

が、型の如く、死体検視をした警察当局は、泊つた宿屋にその妹の体に不審な点があり、ついても調べた結果は、

「あの二人が本当の兄妹ですつて……そりや宿帳にはそう書いてありますが」

と、宿の女中が、意味ありげな笑顔で云つた言葉を裏書きするように、二人の泊つた部屋の、その蒲団の下から、まるめた鼻紙が出てきて、この鼻紙を顕微鏡で検証するまでもなく、ちよつと、そのにおいを嗅いでみただけで、これが動かぬ証拠となつたのだ。

彼も遂にこの事実を白状して、

「養女にやるまでは別に何ンともなかつたのですが、一昨年の夏、妹がうちへ来て泊つた時、蒲団が無いので、私と一緒に寝ました。お互いにおとなになつてから、一つ蒲団で寝たのは、これが初めてなのでとつたら夫婦みたいじやと、二人で笑い話をしているうちに、妹が私に、兄さん夫婦つてどんなにするものだろうとくすくす忍び笑いをしながら、羞かしそうに、好奇心を起して聞くものですから、私も冗談半分に、こうすると、兄妹の心安さでふざけあつているうちに、ちよいと、夏の暑い盛りで、二人とも素つ裸みたいな恰好だつたものですから……」

冗談から駒が出たようなものだつたが、この一夜のアバンチュールが二人には忘れ兼ねその後も、ちよいちよい、この不倫行為を重ねているうちに、妹の養家先の親父にその現場を見つかり、口ぎたなく、畜生道と罵られた言葉を裏書きするように、二人の泊つた部屋の、その蒲団の下から、まるめた鼻紙が出当人同士にもその反省があり、煩悶もしていた所から、ぷいッと、二人で家出したのだつた。

持ち出した金のあるうちは、二人であちらこちらと泊り歩いたが、その金も心細くなつてきたところへ、

「月のものが先月からとまつて……」

と、妹が云つたので、どうせ因果な片輪の子が生れるだろうと、二人で心中する気になつたというのである。

名古屋医大の杉田教授による精神鑑定の結果は倒錯性色情症と診断された。

（終）

アクロバット・ダンサーの告白

肉の曲藝師

「腰入れ」「うしろトンボ」「前トンボ」「オープン」「風車」「いも虫」……虐待と死に瀕する訓練がアクロダンサーを仕立てゝ行く。異常な嗜虐と被虐の交錯するサーカスのSEX

原　純子
画　大橋彌生



A　サーカス仕込み

スージー・原といつたら、

「はて、どこかで聞いたような……そうなんで」

と思い出す人もあるでしよう。そうです。あたしがアクロバット・ダンサーのスージー・原にちがいありません。あたしの踊りを見たことのない人でも、芸能新聞か雑誌で写真ぐらいごらんになつたことがあるでしよう。床の上に蜘蛛みたいに俯つて足と足のあいだから首をのぞかせているところ。逆立ちして、股が裂けるほど水平にひろげているところ。身體を丸く輪にして、車のようにころがるさま。やつと前をかくしただけのバタフライがハチ切れそうになつて、乳房がいつぱいに張つて、……そんなさまが、たゞ踊るだけのストリップより一そう妖しい魅力があるらしくて、あたしみたいな女が、いつのまにかスージー原だなんて、いつぱしの舞台芸人として通用する世の中。もちろん、あたしアクロバットは「色物」といつて踊りの中には入らないんだけど、そんなことどうでもいゝわね。

あたしつて、物ごゝろついた頃からアクロバットとともに、泣いたり血を吐いたり、そんな異常な苦痛の中で生きて来た。そして、こゝに書くこと、書きたいこと、それが異常な苦痛のことなんです。そりやあ、とつてもひどくて、ちよつと信じられないくらいの話よ。主に、あたしのサーカス時代の話。あたし、いまみたいなストリップ劇場の舞台に立つまでは、サーカスにいた。五年間……。



「ははあ、なるほどそれで……」

とうなづく人は、だからよつぽどアクロバット踊りを見馴れた人です。ほら、あたしの踊りつてサーカスの癖が抜け切らないもんだから、どこか違う。ふつうの踊りからアクロバットに入つた人は、音楽のリズムに乗つてスーツスーツと動作が流れるけど、あたしのは一区切り一区切りに「アーイ、アイッ！」というふうな調子のきまりがつく。ね、こんどヒマがあつたら、他の踊り子のとくらべてごらんなさい。

あら、ごめんなさい。餘計なお喋りをしちやつてかんじんなのは、あたしのサーカス時代の話だわ。少女の肉体が、世間の人の覗くことも出来ない囲いの中で、どんな鞭を受け、傷つき、そうしてさまざまな曲技に馴らされて行くか。考えてみると血みどろの生活が、あたしの人生なんだわ。

B 裸の見世物

東京で生れたけれど、あたし、育つたのは田舎。それにみなし児みたいなもんだわ。両親はちやんとあるのに、赤の他人から育てられたんだもの。そして十三のとき、ちようど戰爭が終つた年の秋祭の、田舎に来たサーカスに売られた。いくらかは知らない。いまでも、民主々義とか児童憲章とかいつたつて、人間の売り買いはあるわ。

「いゝ身体してるぜ、このタマ」

つて、サーカスの人がいきなり云つた言葉あたしちやんと覚えてる。十二のときから月経あつたから、ふつうより成熟が早いほうなのね。サーカスの人たちは東京の人とかで、男はみんな痩せてた。太夫元、つまり一座の親方は五十すぎたガラガラ声の男で、金歯がいつも唇から覗いていた。それでいつも気味悪く笑つてるようにみえた。息がとてもくさくて、それなのに顔を近づけて物を云うので、あたしが顔をそむけるようにすると、

「エ、エゝ」

と勝手な声を出した。なんでも「エ、エゝ」で、すぐその晩にあたしは太夫元のものになつてしまつた。すこし恐ろしい感じだけで、あたしはまだ、不幸とか人間の悲劇とかはわからなかつた。あたしの生い立ちのせいかもしれない。

「身体がヤワこうなるで」

と太夫元が云つたけど、意味はよくわからなかつた。よく世間では、身体を柔軟にするため、サーカスの少女たちは酢をのまされるつていうけど、そんなことは一度もなかつた。毎晩太夫元が、あたしの身体を、「ヤワこうする」のだつた。あとでわかつたけど、サーカスの女は必ずみんな、太夫元のいうことをきかされる。あたしはいつそ無知のまゝ太夫元に犯されたわけで、大したことはなかつたが、矢張り本能的に拒む女は、ひどい目にあわされた。又、ついでの話だが、太夫元に手をつけられている最中、若い男と恋に落ちたりすると、そりやあひどい目にあわされるのだつた。恋の情熱のまゝ、ある女とある男が逃げたことがあつたが、むろんあの世界から脱出できるものぢやない。すぐつかまつて、二人とも、足の裏を二枚のカミソリの双でゾリッと斬られた。こうすると歩けなくなる。

毎晩毎晩、あたしの仕事は太夫元に小さい

肉体を捧げるだけだつた。三ケ月すぎて、やつと太夫元は、毎晩の酷使から解放してくれた。するとあたしは、みんなと同じように、天幕を仕切つた楽屋住いとなり、それも玉乗り少女のチームと同居で、しきたり通りタタミ一疊の広さに二人の割の暮しだ。その上にこんどは当分、玉乗少女たちの家来みたいにコキ使われる。つらくはなかつたが、癪にさわつた。それで、

「おまえは裸の見世物だ」

といわれたとき、これでやつとあたしの役割が出来たと、むしろ単純に喜んだ。裸の見世物というのがアクロバットのことで、実はその役割なのだつた。

C 夜の侏儒

サーカスにはつきものの侏儒。舞台ではヨチヨチして道化師につきころばされたり、綱渡りの女にオカシないたづらをしたり言廻しをつとめるあの小人が、ふしぎなことに、あたしのアクロバットの師匠だつた。ジョンという名前の小人は、子供のとき軟骨症にかゝつて、そのまゝサーカス向きの小人になつたようなものだつた。軟骨症というのは骨無しみたいなもの。ジョンは、頭がやつと入るくらいの穴やスキ間なら、ニョロッと通り抜けられる。トコロ天という土管くゞりは身体をよじり、もがいてみた。ところがゴムはあたしの肉体に喰い入るばかりで、そのうち感覚がしびれ、頭にセルロイドの輪がかゝつたみたいに、ボーッと意識がかすれてくる。とうていゴムのいましめから抜け出せるものではなかつた。十分間くらいであたしは失心しそうになつた。

「フフフ」と笑つてジョンはゴムの呪縛をといた。ときはなたれたとき、あたしはいのちがけで、からだ中の血の高鳴りにしばらく襲われつゞけた。

「こんどは、ボクを縛つてみな」とジョンは命令をつゞける。あたしは云われた通りにしなければならぬ様に、半年近くの生活でしつけられている。ありつたけの力をこめて、タイツ姿のジョンに、チューブを何本も巻きつけた。グイグイとしめると、心なしかジョンの身体がグニャグニャと伸びるようだつた。しかしジョンの顔も紫色にふくれた。

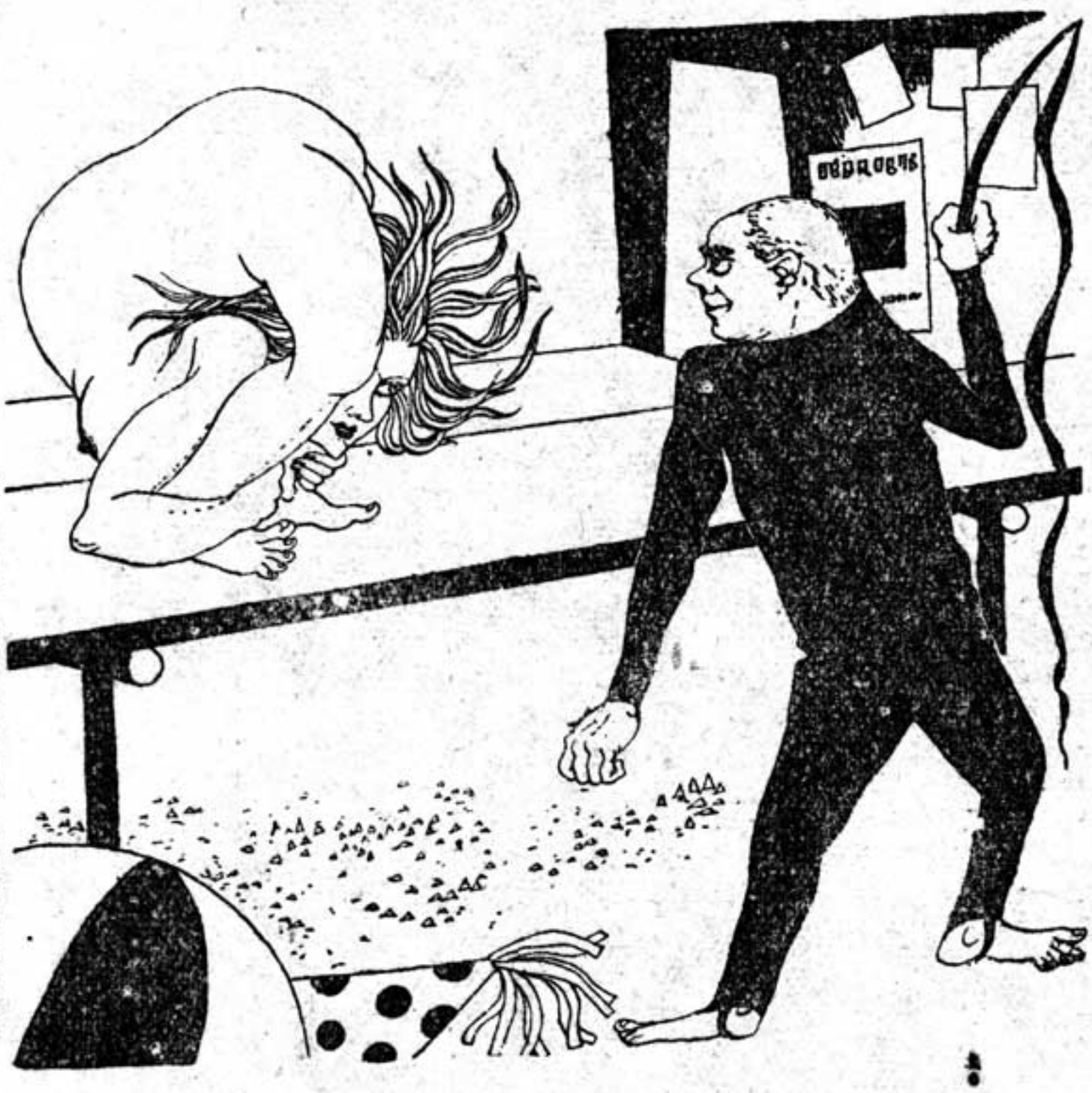
「いゝか」と云つたかと思うと、ジョンは奇妙なしぐさで、あたしの力の限りをつくした呪縛から、クネクネとすりぬけた。あたしは得体の知れぬ恐怖に身がすくむのだつた。

こうしてチューブ責めの訓練が、あたしに課された当分の日課となつた。あたしは何度も死ぬ思いをした。どうしてもチューブのいましめが、不具者特有の残忍性を刺戟して、ときどきジョンはあたしを縛りつぱなしにしてそれから箒のワラ先を一本ぬいたので、体をくすぐつたり叩かれるよりつらい、気の遠くなるようないじめ方をするのだつた。

D 鞭韃症（フラゲラチオーン）

チューブ責めのせいか、あたしの身体がふつうのときも、非常に身軽になつたようだつた。気のせいか屋根から飛び下りてもフワリといきそうな感じがする。それがジョンにはわかるらしい。次の訓練が始められた。いよいよアクロバットの基本動作だ。

「腰入れ」というのを繰り返してやる。足を少し開いて立つて、上体をうしろに除々に反らせて、頭が床につくまで。腰がグンと入らないと、筋を痛める。最初は股や下腹のあたりが攣けるように痛かつた。ジョンが胴をさゝえてくれると、うまく力が抜けてくれるが、しまいには支えなしでもやれるようになつた。



「腰入れ」といつて、両足を水平に開いて、ペタンと尻を床につける練習もやつた。こうした色々の訓練を経て、「風車」とか「いも虫」というような、動きのはげしい技術に進む。最後に踊りの振付をもらつて、アクロバットダンスが出来上る。

とにかく前にも云つたけど、身体がやわらくなるのは酢なんかぢやなくて、一にも二にも稽古なのよ。でもまア、アクロバットは「腰入れ」が一番大切な基礎ね。そして「腰入れ」の秘訣というのがあるわ。この秘訣はしかし、アクロバットダンサーの生命だから誰にも教えないのよ。いま日本でアクロバットのナンバーワンは、岡本八重子さんといわれるでしようよ。その岡本さんが一番恐れているのは、「腰入れ」の秘訣を盗まれること。あたしも、そう。……

稽古稽古の明け暮れは、一疋の淫獣を仕込むみたい。たとえば月経中だつて容赦なくやられる。腕の力を充分作つておかないと、次の段階の「うしろトンボ」「前トンボ」に進めない。もうひとつ「オープン」といつて、両足を水平に開いて、ペタンと尻を床につける練習もやつた。こうした色々の訓練を経て、「風車」とか「いも虫」というような、動きのはげしい技術に進む。最後に踊りの振付をもらつて、アクロバットダンスが出来上る。

とにかく前にも云つたけど、身体がやわらくなるのは酢なんかぢやなくて、一にも二にも稽古なのよ。でもまア、アクロバットは「腰入れ」が一番大切な基礎ね。そして「腰入れ」の秘訣というのがあるわ。この秘訣はしかし、アクロバットダンサーの生命だから誰にも教えないのよ。いま日本でアクロバットのナンバーワンは、岡本八重子さんといわれるでしようよ。その岡本さんが一番恐れているのは、「腰入れ」の秘訣を盗まれること。あそう。……

稽古稽古の明け暮れは、一疋の淫獣を仕込むみたい。たとえば月経中だつて容赦なくやられる。腕の力を充分作つておかないと、次の段階の「うしろトンボ」「前

稽古中に血を出したりすると、飛行機乗りが吐いたものを食べさせられるように、その血をすつかりナメさせられたわ。賞血を起して倒れたりすると、ムチで叩かれたり、蹴られたりは、よく世間の人が話に聞くとおり



よ。まつたくサーカスの太夫元とか幹部連中は、鞭韃症という病気にかゝつてるみたいに叩いて叩いてこつちがヒーヒーいうのがタマらないらしい。でもあたし、わざとしくじつてやつたことが何度かある。というのは、棍棒やムチで打ちのめされて、動けなくなつて身体全体に脹れ模様のアザが出来て、翌日高い熱が出て、便所に這つて行くくらいになると、どうやら一日休めたもの。あたしたちの休日は、こんなときだけだつた。

E 淫（アスモデウス）鬼

さて大急ぎであたしを一人前に仕立てなければならなくなつたのは、例の馳落ち事件がこの頃起つて、唯一のアクロダンサーが、足裏を切られたからだつた。

「前トンボ十回！　ハイッ！」

あたしはクルリクルリと、矢つぎ早に回転する。といつたら簡単だが、この前トンボはタタミ半疊くらいの広さの中で、一瞬の停頓なしにやるのだ。いま手がついた床に、足がつき、足がつき、さながらあたしは一本の棒になつてプロペラのように急速度にまわるのだ。ちよつとでもよろめいて、位置がずれると、ムチが身体にからみついて皮膚に焼火箸の苦痛が走つた。

それにしても、こんなうちはまだ序の口。高いヤグラの上に追いあげられて、そのテッペンの座ぶとんくらいの範囲の中で、

「ハイッ！　うしろトンボ三十回！」と命令されると、あたしは断崖の上に立つたような絶望を味つた。でもやらねばならない。呼吸をのんで、パッとうしろにのけぞり、手でパッとうしろに返り、一、二、三四五六七、十回、十三、十五回、……ア！　と戦慄したとき、あたしはヤグラの上から手をすべらして地面に墜落する。どこを打つたのか、息がとまりそうに痛い。とたんに怒声罵声が殺倒して、もつともつと痛い目に合わされる。前の痛みをあとからあとから痛みが重なつては消し、ヒリつくノドの奥から、気味の悪いヌルヌルした血のかたまりがこみあげてくる。つまり、稽古で失敗したら、それ以上痛い目がやつて来て、結局稽古が一番楽だと思わされるのだ。

さらにいうなら、「風車」は、身体をシャチホコ型に丸めて、つまり顔をお客さんのほうに向けてその顔というのが床の上にあつて、ぐるつとうしろから反りかえつて垂れて来た両

足が顔をはさんでいて、その両足を両手でつかんでいる恰好でゴロン〳〵と車のようにころがつていくのが「風車」。これを細長い平行台みたいな上でやらされた。落ちると両側には忍び返しというか、よく塀の上にあるようなガラスのカケラの山がニョキニョキ生えていて、身体はズタズタに切れてしまう。

どうせ生傷のたえたことのない身体だつたけど、これだけはしくじると死ぬにきまつていた。いや、死にたいと思つたことのあるあたしなのにこのときは恐ろしさが強くて、風車に神経を集中したのだつた。いやいや、あたしは、すでに説明しがたい快感を知つていた。それは、とても恐ろしい稽古で責めつけられるほど、何ともいえない、酔うような、麻薬的な快感が体内にみなぎるのだつた。太夫元に教えこまれた肉の喜びより、もつともつと強烈な、陶然としたものが、あたしを狂喜させるのだつた。十四のときに覚えたこの妖しい感覚は、官能を司る悪魔のうち、もつとも甘美な淫鬼が、あたしにプレゼントした最高の性の神秘かもしれない。

F 飛〝ァンタジー〟縁魔

虐待に虐待を受けて、いつしかあたし自身が被虐の快感を知り、いわゆる倒錯した変態性慾患者になつたことは、笑うべき運命だろうか。ムツかしいことをいつてごめんなさい。これはあたしが、近頃本で読んで、あたし自身の性癖をちよつと解剖してみたくなつた結果の云い草よ。

サーカスでは、その後うまくいつた。だつて、あたしの物凄いアクロバット、田舎のお客さんには一番受けたし、そうなると太夫元も、もう大切な商売道具のあたしにヒドいことはしなくなつたんだもの。それに太夫との関係は、一号妾級に進んだもの。フフフ……云いましようか。こんどはむしろ、あたしのほうが太夫元をいぢめる役だつたわ。いわば太夫元つて、あたしを仕込んどいて、逆にあたしのトリコになつちやつたのね。あたしつて、小人のジョンとも通じたわ。

「こらクラゲ！　あたしのおなかの中にもぐりこんでみろ」

なんて、あたしつてすつかり変つちやつたわ。クラゲといえば太夫元が、すつかりクラゲになつて、あたしの云いなり。太夫元の首を股でしめつけて、ウン〳〵と呻らせながら「何か歌をうたえ」

とか、「逆立ちオープン」の姿態で、太夫元をジラしてやつたり、それが崇つたのでもないでしようけど、一昨年、太夫元はポックリ死んぢやつた。それがきつかけで、あたしは自由になつた。いやサーカス小屋がイヤになつて、ちようど話のあつたストリップ劇団に転向した。サーカスを去るのに、文句をいう人もないくらい、出世していた。

本を読んだ中に飛縁魔という言葉があつて、あたしのことをさしてるみたいな態度で男という男を誘惑するつけ。それがあたしのアクロバットを見て、男も、もう大切な商売道具のあたしにヒドいい。挑発的な女。真夜中墓地から抜け出て、人々の生血をとはしなくなつたんだもの。あたしのアクロバットを見て、男吸う魔女。あたしの人の血が騒ぐんですつて。ところがあたし舞台で踊りながら、急テンポのルムバか何かと一緒に、暗い客席に殺気が生じるのを感じると、ゾクゾクしてくる。あたしに噛みつけるのよ。まともな人生なんて退屈でしよ。男共！　と、あたしの踊りは、いつも叫んでアクロバットで行くのよ、人生も。たまらないわ。サヨナラ。

（おわり）



日本刑罰史・第二回

女切支丹拷問秘史

あたりの雪にも劣るまい、白玉のような深窓そだちの膚が、炎々と燃え上る火の舌にチリチリと舐められて行く……飽くことなき拷問に責められる殉教の群……

深田徹

(一) 火責めの雪女

雪の津軽高岡――、いまの弘前、津軽越中守の城下町は、この度お召捕りになつたご領内の豪農トマス助左衛門と、その女房のジュリヤの火炙りが執り行われると聞えて、数日まえから噂が姦しかつた。

評判になつたのは、たゞ刑が残酷な「火炙り」だつたからではない。助左の妻の、洗礼名ジュリヤがこの四、五年前まで津軽小町とうたわれた領内切つての器量で、廿三の水もしたゝる若妻であつたからである。

――弁天さまを、あたら火にかけるとは、お殿様も情ないお方じや！

――それでもお前、そのご政道のおかげで、津軽小町の生裸を拝めるは、儂らの果報よ。

刑のなり行きを見物して、語り草にしようと、近郷近在から馬ソリを駆りたて、藁靴に雪を蹴立てゝ御城下へ入り込んでくる彌次馬の群れは、旅籠でも、茶店でもてんてこ舞いさせるほどの賑わい。

――寛永二年の春、北国の雪まだしきりな頃のことである。

「旅の衆の話じや、まえの月は仙台様のご城下でも、切支丹さわぎがあつたちうでねえか」

「そうとも。伴天連のカルバリオちう名高けえ紅毛を隠した宿主だちうこつた。茂兵衛よソレ、その爺さんは何たらいう名じやつた

の」

「ヨハネ安斎よ、その神さんも一しよにお仕置を蒙つたゞよ」

「だども、助左旦那のお上さまほど、別嬪じやなかんべえが……」

「あゝ、仙台領のあ、あんでも六十幾つの婆さまじやちうこつた」

「それ見い、津軽のはうが眼の法楽だて。南無阿彌陀佛、なむあみだぶつ」

仙台領では同年二月、新將軍家光の威光におそれた独眼龍政宗がそれまで大目に見ていたキリシタン宗門の禁を急に嚴しくし、領内の布教にながい間功のあつた老神父はじめ、宿主、おもな信徒の群れを一網打盡に召捕つて、悪家老の茂庭周防の策をいれ、城下衣瀬川に設らえた「水牢」に投げこんで、六日のあいだ寒風と水流にさらし、ことごとく凍死させてしまつたのである。

あすの午後に火炙りをうけるトマス夫妻も、またヨハネ安斎とおなじく篤信なキリシタンの信者で、これは蝦夷えはるゞゝ渡るという元気なイスパニア人の伴天連神父をかくまい、渡海の世話をしたお咎めを蒙つたのであつた。

——あしたは、どうでも晴れてくれゝばよいが……。

見物を楽しみにまつ彌次馬どもの祈つた甲斐か、明くれば夜半より吹雪もピツタリ靜まり、晝まえの一とき、曇りつゞきの空が割れて、かすかな陽の目さえ拝まれる雪日和——。

城下はづれの、前日から積雪をのぞいて用意された刑場では、その中央に二本の太い柱がふかぶかと土中へ埋め込まれ、まわりに矢来を組むてまをはぶいて、仮りに杭をワ形に打ちナワを張つて、槍を持つた足軽たちが警固に当たつていた。

お仕置きにあう不幸なキリシタンの信者夫婦が刑場へつくと、待ちかねた群集はわーつと喊の声を上げた。

「それ、両人を裸かにして、柱に括りつけい」

非人どもが、下知を受けて得たりと、ジュリヤに飛びかゝり、縛

めを解いて荒々しく着物を剝ぎとろうとする。

「お許しなされて、アレ、こればかりはお見遁し下されませ、もしお役人さま」

「しからば、その方、転ぶ（改宗する）か」

「いゝえ、天主さまに背くことは叶いませぬ」

「では、愚図々々申すな。見せしめの爲じや」

お差図だ、神妙にしろいと云つて、非人どもは情け容赦もなく彼女の衣類を脱がせ、羞恥に寒気のきびしさも忘れて、身をかばい、濡れた地面へ膝を突いてかゞまるジュリヤの、腰布さえむしり取つてしまつた。

あたりの雪にも劣るまい、白玉のような深窓そだちの、滑かな膚がすつぽり布をはらつて裸かに曝されると、息をつめていた周囲の見物のあいだに、ふたゝび騒ぎが起つた。

手どり足どり、滅多にない役得に有りついた非人どもは大悦びでジュリヤを抱えて柱の根かたに縛りつける。ふだんなら傍へも寄れぬ大家の美女を、勝手気まゝにヌメの肌に触れるのだから、有頂天になるのも無理はない。小鼻をピク〳〵させて、やたら丸い肩先や乳房を、撫でまわすように遣つてのける。良人のトマス助左は見るに忍びないか、観念し切つた表情で、かたく両眼を閉じている。

束ねていた黒髪がなかく肩のしたへ垂れ、後手に柱へ括られたジュリヤは、一糸もまとわず、百千の淫らな視線にたえねばならなかつた。陽の目にあつたことのない、青味をおびた、ふつくらと、豊かな裸形の線。むつちり盛上つて、玉を伏せた二つの乳房。下腹から太股えかけてのなだらかな起伏……。男たちが溜息を吐かずには眺められぬ、美事さであつた。

——まるで生き菩薩のようじや、と手を合わす年寄りさえあつた。

キリシタン夫婦をそれ〳〵柱につけ終ると、奇妙なことがはじまつた。わきへ掻き除けておいた雲の山を崩して、運び、どんどん夫妻の身体のまわりへ盛りはじめたのである。残虐きわまる刑罰の施しようで、火炙りに加えて雪責めでじつくり苦しませ、落ち入るのを長びかせる気である。

観衆があれよ〳〵と指さして騒ぎ立てて見ている間に、たちまち柱のまわりに、顔のところだけ残してこんもり固められた、二つの雪ダルマができ上つた。

その周囲にすこし離れて、ワラ束と薪が山づみに置かれる。さいごに役人が、歩みよつた。

「助左衛門夫婦、もう一度確かめる。どうじや、天主を拒むか……」

「叶いませぬ」

雪のウロになつた中から、二人の声だけが一致して、答えた。立会いの奉行が諦らめて、手を上げると、ワラの方々に松明の火が移された。あなやと云ふ間に、炎々とワラ束が天を焦し、薪に燃えうつゝてゆく。散る火花があたりの雪を染め、紅蓮の舌が舞ふ——。

物凄いとも、何とも形容しがたい壮絶の光景であつた。熱気が火焔の渦のなかを、旋風を巻いて立騰るにつれて、雪だるまはシュウシュウ湯気をたて、形が溶けキリシタン夫婦の裸形が火に映えて、焦げてゆく——。

苦悶のながーい叫び、肉の生身のジリ、ジリ、焼けたゞれる異臭……。

——南無阿彌陀、なむまいだ、……念佛を唱えて、首をのばしていた老人が見るに堪えかねた様子で、そこらの雪をつくねて雪玉にして擲りはじめると、群集心理というのが憑いて、すべての見物人が手に手にユキを掻いて、ナワ張りのそと一面から降るように、大小の雪つぶてが飛びはじめた。役人の制止もこうなると、何の効目もない。

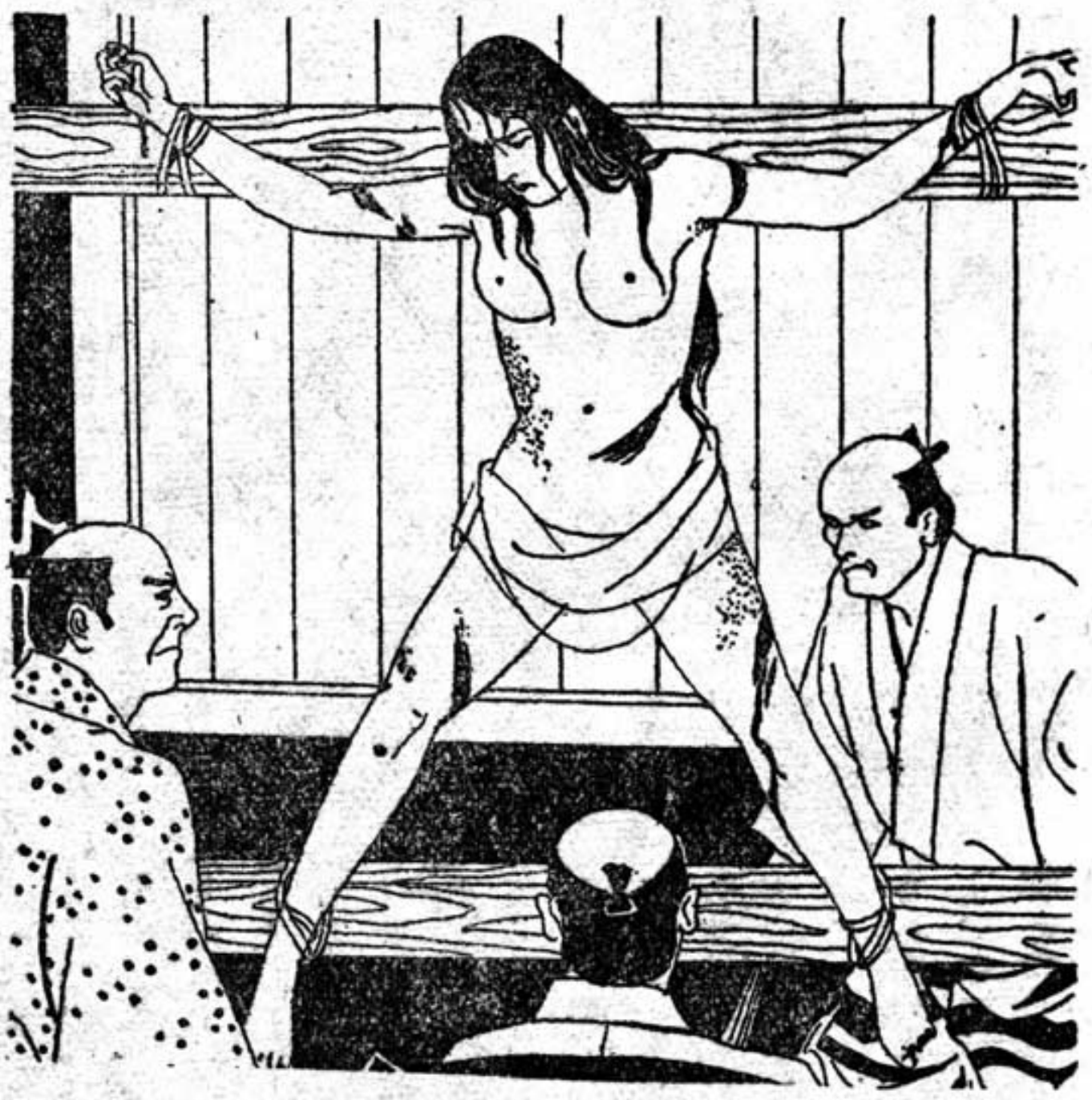
苦しみを少しでも軽くしてやろうという人間らしい慈悲心と、すばらしい美女の苦悶ぶりを、なるたけ緩くり賞玩したい悪魔の歡こび……が群集を盲目にしたわけだつた。

トマス助左衞門夫婦の絶命は、彼等のえせ親切によつて引延ばされ、期せずしてキリシタン拷問の実効を助けたといえる。

(三) 鮮血を賭けた殉教のあと

わが国キリシタンの江戸幕府による彈圧は、慶長十九年、徳川家康の発した「切支丹棄教」の令が手はじめであつた。家康は国ぢうの大小名に命じてキリシタンの勢いの復活を気にして、禁令をさらに強化させ、——伴天連と交通したり、宿貸しをした違反者は、火炙り闕所、罪科は妻子のみならず、五人組に及ぶという厳重な掟を廻したが、それでも神信心の真剣さに対しては大した効果をもたらせなかつた。

一六二一年には、迫害のもつとも厳しかつた肥前の大村の牢に十二人からの外人司祭が投げ込まれており、斬罪などの殉教者がイエズス会はじめ各派の司



七隻の船に乗せて比島方面へ追放してしまつた。

盛んな頃は百万をこえたと思われる天主教の勢はこれで根絶したかと、表むきは考えられるが、その粘りづよい伝道力は地下へ潜つたまゝ繁殖をつゞけ、大阪夏、冬の陣から関ケ原、つゞく内府自身の死にいたる豊家との戰乱につけ入つて、禁圧のゆるんだスキにふたゝび地盤をとり戻してきた。

家康にキリシタン宗門の根絶を唆しかけたのは、あだむす三浦安針をはじめ和蘭や英国系の商人、船乗り連中の策略であつて、この時代には迫害もあとに較べてみると、まだ手ぬるい物があつた。

二代將軍の秀忠は、治世のはじめキ

祭十六人、修道士廿人をふくめて、総数じつに百廿人あまりと記録にのこつている。

ところが一方、この神聖な殉難の報せが一たび海をわたつて、極東伝道の中心マニラへとどくと、これに感動をうけた各会の修道者たちすべてが、爭つて日本への布教師たらんと云つたので、彼等みなの希望にまかせた日には、むこうの修道院がカラつぽになるという騒ぎであつた。

この年、高齢のフロレス神父が長崎郊外の丘で火炙りにされたときなど、異端の佛教徒になかばする三万人からの隠れた信徒が姿をあらわして、刑場をとり巻き、神父たちを励まして一せいに讃美歌を歌いはじめ、大デモを行つたという。

つまり、彈圧、拷問を強めればつよめるほど、かえつてキリシタンの信仰を堅くするという、逆の結果を招くことになつた。信徒たちはその主の犠牲をまねて、殉教をば一つの光栄と感じ、迫害の苦しみのうちに法悦を見いだすよう神父たちから教えられ、そう信じこんでいたのだから、始末がわるい。

また、わが信徒たちを導いた伝道者たちの、熱心と、勇気もまことに恐るべきものであつた。大膽そのもので、神のほか怖ろしいと思わぬ彼等は、うまく支那人に化けたり、召使いに身をやつして、ハダシのまゝ、聖祭やミサにつかう祭具、聖服を背におい、茨を分け、雪の野や泥の沼をわたつて、人跡まれな蝦夷（北海道）のはてから、沖の小島まで夜をくぐつて、宣教してまわつた。

この信仰への狂熱が、どれほど単純なむかしの農民などを揺りうごかしたかは、ちよつと測り知れぬものがあつた。ことに神がゝりに罹りやすい無智な女たちはたやすく憑かれたヒステリー状態に陥いつたので、あらゆる拷問に対して、時として、男子がタジ〳〵するほどの烈しい精力をあらわして見せた。

その好い実例が、カストロ神父に宿を貸したゝめ拷問にあつたペトロ荒木という男の妻スザンナである。

彼女たちは、その神父を四年間もかくまいつゞけ、長崎の代官の末次平蔵の手で、寛永四年に検挙をうけた。

はじめ、スザンナは全裸にされて、髪毛で木のうへから吊り下げられた。たつぷり脂肪のついた女体の重みが、そつくり一束ねの頭髪にかゝるときの痛さは、想像したゞけでも背筋がゾーツとしてくる。血がすつかり頭へ上つて、動かずにはいられないし、ピクリと身動きでもしようなら、頭の皮が毛根ごと剝ぐれそうになる。

吊された白豚のように苦痛に撥ねまわる、スザンナの狂態を下から眺めて、係りの足軽たちは手をうつて、笑いあざけつた。

「どうだ女、これに懲りてコロぶか！」

彼女は頑として、改宗はしなかつた。代官の末次平蔵は苛酷ではヒケをとらぬ役人で、切、支、丹の三つの極印からなる鉄の火責め道具を工夫したぐらいの男、カッとしてこんどは手をかえた。

裸体のまゝ、彼女は二本の横木に磔けられ、晒し物になつた。三歳になるスザンナの娘をその下まで伴れてきて、彼はスザンナを仰ぎ、脅しつけた。

「改宗いたせ、さもないと、この子をおまへの目のまえでズタ〳〵に切り殺すぞ、よいか」

スザンナは、答えた。



「妾の腹にできたものは、創世主さまのお蔭です。妾のものではございません」

代官は子供をハダカにして、母の磔柱のしたへ縛りつけ、夜ぢうそのまゝ放つておいた。幼女は寒さにうち震え、母の名を呼んでしきりに泣き叫ぶ。代官がスザンナの無情を責め立てると、スザンナはあべこべに恐れる色もなく高々と、柱の上から上役人の非を攻撃しはじめた。

役人は激昂して、彼女の子供をとらえ母親の見ている眼前でやけ火箸をもつて、柔かい幼な子の身体を掻きちぎつた。スザンナは、悪魔の吠えるように喚き立てたが、それでも転ぶ気配もない。業をにやした代官は、爐の火でまつ赤に燒いた鋏を持ち出させ、スザンナの指をゆつくり、順番にこまかく挟みとらせ、次いで指の骨をバラバラに斬らせた。

スザンナはしまいに失神したが、それでも改宗しようとは決していわなかつた。さすがの末次も根まけして投げ出し、スザンナの首に鉄の輪をはめて長い間とじ閉めてみたが、やつぱり何の効もなかつたので、とう〳〵立腹して首をはねてしまつた。

スザンナの例でみても分るように、彼女など烈婦と呼べばそうかも知れないが、この女が受けたどの拷問一つとつても、動物でも耐えられぬほどの肉の責苦ばかりである。ふつうの人の神経で堪えられるはづがない。どうしても狂つた神経だつたろうと想像するのはそこのところである。

㈢ 雪仙岳の地獄責めの慘

キリシタン宗徒の圧迫、拷問が、かようにしてその極限に達したのは、三代將軍の家光のとき寛永年間であつた。彼の將軍職の宣下は新たなキリシタン殉教のきつかけとなつて、やがて国ぢうが切支丹信徒の鮮血でみち溢れるときがやつてきた。

宗門改め役という專門の係をおいて、老中の一人をこれに宛てることにしたのも、家光である。家光という若い將軍は、生れながらに病的な疳性の持主で、狂暴でありきらに又、性的にもはげしい変質者であつた。一説によると、なんでも先天性の黴病やみだつたとも云われる。

したがつて、彼の性行が一種のサデイストであることは間違いなく、彼によつて一そう拍車をかけたキリシタン迫害もそれだから見方によつては、暴君のサデイズムと、いまのスザンナ式な狂信徒のマゾヒズムとの闘いであつたとも、いえるわけである。

祖父の家康や、おとなしい父秀忠においてはたゞの政治上の配慮にすぎなかつたものが、家光の場合には、もつと個人的な憎悪をまじえた意味でかんがえられる気がする。

家光が職について間もなく、お膝もと江戸の市中でずつと廿年このかた地下に潜んで教えを弘めていた、二人の宣教師、名だかい原主水などが密告されて捕まつた。將軍はこれを耳にして、文字どおり烈火のごとく怒つて、老中をド鳴りつけた。

「全国あげての叛乱も、わが江戸に二人のバテレンが現われたほどに、感じぬぞ。不届きしごく、嚴刑にいたせ」

しかし、日本中にもうキリシタンは一人もいないと、信じさせられていた將軍がこれほど仰天するのも、無理といえぬ節もある。ま

ある夢

佐川千枝

私はその時、曙染の中振袖に、駄斗目の上下をつけて、まるで水芸か、娘淨瑠璃の太夫のように華やかな扮装だつた。でも、髪はあんな島田ではなくて、キリキリとした前髪立ちの、匂うような御小姓姿なのだ。

城内の奥醫院の一間、六双の金屏風が逆さに立て廻され、床の間の七宝の大壺には大輪の白菊が咲きこぼれて……、すべて華かに寂しいのだ。これは私の最後にふさわしく、私は満足だつた。

やがて鐘が五ツ、六ツと鳴りひびくと、中年の侍が型通りに三宝の上に小刀を乗せて運んでくる。それはかつての日に、殿様から拝領した黄金の小刀だつた。私はしずかに肩衣をハネる。肌ぬぎになると、下は覚悟の白裝束——。

検死の人々がかすかにドヨめいた。私が御小姓姿をしていながら実は女だつたことを、人々は始めて知つたのだ——。傍の燭台がチラチラとまたたいた。私は一礼すると、三宝の上の小刀に静かに紙を巻きつける。

キツチリと晒布を巻いた腹を静かに撫でる。そして私は後の人を振かえつて、

「いざ……」

「御心靜かに——」

低い声でそう答えた介錯の侍は、誰あろう私の愛人なのだ。この人がある爲に私は殿様の意にそむいて、死を賜つた。抜身をさげたその人の、万感をこめた瞳——。

私は小刀をグサリと、左の腹につき立てる。灼熱の火花が散る。だが、息を呑んだ人々の、驚嘆の視線の中で、私は躰の浮くような陶酔。あまりのその壯絶な美しさに、私の愛人は、双を振り下すことも忘れている——。

へのスザンナの狂信ぶりからも察しがつくように、天主えの信仰を放つておいたら、幕府や將軍の權威など、またゝく間に引つくり返つてしまう心配が決してなくもなかつたからだ。

そこで信徒彈圧のためには、凡そありとあらゆる苛烈な拷問の手段がとられている。磔とか水責め、火炙りはいうも愚か、地方によつて石子責め、俵づめ、釣責め、膾切り、鉛責め、倒磔け、烙責め指詰め、鋸挽き……等々、人間の頭で考えられるだけのすべての責めの工夫がとり上げられ、用いられたといつて、宜い。

それだけでなく、切支丹信徒の死骸は処刑がおわつた後には、大抵が重石を吊した袋に入れて、海中ふかく投げこむか、又はバラバラに刻んで川などへ流すのがふつうだつた。きつと、キリシタンの魂が天国へ行けないよう邪魔する気でやつたことだろうが、それでも信徒たちは屈しなかつたようだ。

家光の時代には、上にたつ將軍が乱暴なだけに、その家臣のなかにも、ほとんど鬼畜としかうけとれないほど残忍なタイプの役人や大名がでゝきて、キリシタンの禁圧について悪虐のかぎりを働らいている。その中でも悪名の天下に鳴つたのが、豊後の大名で、かの島原の領主である松倉豊後守と、寛永六年のはじめ、前住の水野河内守と交代した、長崎奉行の竹中安女正のふたりであつた。

例えば、これは松倉豊後のやつた拷問の一つであるが、島原のある貧しい百姓の家内マグダレナという女は、夫とゝもにはじめ顔と軀ぢうところ嫌わず、炭火のオキ（熾）で灼かれた。口のなかや、眼の上まで入れられた上、ワラで顔を炙られ、棒で、骨がバラバラになるまで、撲ちまくられた。その娘のマリヤというのも、頭と顔を炙りつけられた。

それでも親子とも、転ばない。そこで今度は、裸かにして、燃えた爐にわたした横棒にかたく縛りつけられ、丸焼きにする鳥みたいな式にグル〳〵廻して、炙られた。皮膚一めんにだん〳〵ヒゞが入り、やがて火熱が身うちへ廻つたらしく、マグダレナたちは口中からからかすかな煙りを吐きはじめた。

次いで彼女たちは、柱に括りつけられ、ほとんど瀕死にちかい状態で耳や頬を削られ、額にキリシタンの極印を押されたのち、手当もせず、一晝夜のあいだ放つておかれた。そして、息を引きとる間ぎわになつて、死にがけの駄賃に四本の指を切つて取られた。

死骸は、首へ石をつけて、海中へドブーンである。

竹中安女正も、その道では先輩格の松倉侯と腕くらべみたいに、似たりよつたりの無茶をやつてのけた。彼の発明した新手としては硫黄とか猛烈なにおいを放つ有毒物を竹のつゝに詰めて、これを囚徒の鼻のアナの一方へ押しあてる。もう一つの鼻孔には灰をつめ込んで、口はむりに閉じさせておく。こうすると、顔は爛れ、もちろん息が止まつてしまう——といつた凝つた責め方が伝えられている。

この男の性格は、ちよつと蛇みたいな気味わるさを持つていたらしく、責め方もチビ〳〵陰険そのものである。

雲仙岳の地獄谷で、長崎で捕えたポルトガル貴族の母と娘などを拷問したときなど、彼女たちを下着（パンテイ）だけ残して裸かにして、首と手足を五本のツナで締めて縛りあげ、つる〳〵滑つてじつと一所に立つておれぬ円石の上に立たしておき、三米ほどの長い

柄のついたヒシヤクを使つて、硫黄の毒のつよい熱湯をチビリ、チビリ、その白皙な肩へ振りかけた。

ヒシヤクの底に小さい穴があけてあつて、そこから一滴づゝ滴たるのである。こうして彼女らひとりの肩へその器に三杯づゝ、それもすぐ死なせぬよう、たえず刑具を引廻してゆつくり異国婦人の肉体の責めを、たのしんだという。

しかし、雲仙岳の地獄ぜめを思い付いたのは、松倉豊後である。彼のほうは、やり方がもつと猛烈果敢で、たとえば竹の鋸でウデや首を何日もかけて輓いてゆき、そのあいた傷に塩をつめて苦しませ硫黄の湯のなかに坐らせておくといつた調子で、さしも頑固なキリシタンを参らせ、一ぺんに五十人、六十人を改宗させてしまつたぐらいの豪の者だつた。

悪魔にちかい男で、硫黄の熱湯を肩へかけたぐらいで転ばないキリシタンは、縛つて猿ぐつわを噛ましめ、爛れそうな硫黄の源泉へ何時間もそのまゝ投げ込んでおいた。キリシタンは生きながら皮を剝がれ、肉が骨から溶けてしまい、地獄の苦しみのなかでやがて形骸をなくしてしまう。

これを平然とつぎ〳〵やつてのけた神経の松倉も、こうして悶え死をした、多くの信徒の祟りであろうか、寛永七年、長崎からのかえりの船中から急に気が変になり、城にかえつて狂死してしまつた。

島原の一揆は、悪領主や奉行たちの、このような非道が招いた結果だつたといえる。

艶麗の筆！　凄艶の姿態！

喜　多　玲　子

悦　虐　姿　態　素　描　集　(2)

責め絵画家としてユニークな王座に君臨する喜多玲子氏の豪華悦虐素描秘帖

○前回と同じく悦虐の画家として知られる玲子さんの未発表のものの中から第二集をあつめてみました。人生の苦悩と悦びのうちに描かれた此の作品は、その流れる様な線を通じて作者の体験の生々しさを皆様に訴えることでしよう。
○前回発表致しました第一集は三百部限りでございました爲残部はありません。

申込所
京都市中央
局区内若宮
花屋町下ル
玲光社
高月大三

コロタイプ　B5　合紙付　八枚組限定版〒共三百円

あぶのーまる・まにあの手記

まぞひすとの街

吹岡清一郎

「なによ、バカな奴ねえ、奴隷のクセに——」八千代にそう罵られながら私は恥かしいのも忘れて蹴り上げる彼女の靴を胸に抱きしめた。



踏みつけられた手

私が靴屋の店員と云う職業を選んだのは、決して意識してのことではなかつた。知人にすすめられるままに、その人の親類筋に当る銀座の其靴店に勤めることになつたのだ。

しかし、今になつて考えると、それは決して偶然とばかりは云えないのだ。やはり私の裡に眠つているなにかが、無意識の裡に靴屋と云う職業を選んだのだ——と、最近になつて私は気がついた。

忘れもしない、三年前のメーデーの日だつた。私がぼんやり立つていると、ツカツカと入つて来た女性がいる。大柄で肉付もよく、エキゾチックな容貌で、服装もなかなか豪奢だつた。当時新米だつた私にも、一目で、いわゆる「ためになる客」だとアタリがついた。

これが八千代だつたのだ。彼女は一直線に奥のカウンターの処までくると、其処の椅子にゆつたりと腰を下してから、

「ねえ、この服に似合う靴を見せてくれない？」

と、云つた。その調子がなんだか少し投げやりで、素人の奥様のようではない、と思つたが、上客だから私は懸命になつた。

八千代は紺地にカスリのように細い横縞が入つた、いづれは船来らしい布地で、仕立もひどくコツたワンピースを着ていた。なかなかシックな好みだけに、ピツタリする靴の色やデザインもむづかしい。

私はまづピロードの靴台を彼女の足許に置いてから、五、六足の靴を選んで彼女に見せた。そして、彼女が一足づつ履いている足許にひざまづいて、

「これでございますと今の最新流行で——」

などと、御気嫌をとり結んでいたが、その時はもう、彼女の足の美しさに魅せられてしまつていた。

極く薄いナイロンのストツキングに包まれた、八千代のふくらはぎから、カカトにかけての美しい線——。足の先も普通の日本人のようにペタンと広がつていず、スンナリと纏つて、高貴な相さえただよつている。

私は心中、舌を巻く思いで、この足の美しさに見惚れた。両手に乗せて、押し頂きたい

ような気持だつた。こんな美しい足の持主はこの世に二人とはいるまいとまで思つた。

彼女の好みはなかなかむづかしく、気に入る靴がなかつた。それで彼女が靴を脱いだり履いたりする度に、私はイソイソと、紐を結んだり、ボタンを外したりしたのだ。そしてそのことに夢中だつた。心中、そうして彼女の足に触れることが、嬉しくてたまらなかつたのだ。

普通の女客なら、こんなに店員の手を煩わせることを気の毒がるものなのに、その時の八千代は、さも当り前のことのように、平然として、私の顔の先に足をつきつけるのだ。

この女性には、女王の風格がある。美しい女性はこうでなければいけない！　と、私はひそかに思つた。

「この靴、小さいのかしら、入らないわ」

「いえ、このサイズですと、御客様にピッタリの筈でございます」

御承知のように、靴と云うものは、本人が履く気がなければ、履かせるのはなかなか困難なものなのだ。私は靴と、八千代の足の甲とを持つて、履かせようと骨を折つているのに、彼女はシャンソンなどを口づさみながらコンパクトを出して、口紅を塗つたりしている。

終いには私の膝の上に靴を乗せ、彼女の足を両手で抱くようにして履かせたのだ。私は永遠につづけばよいと思つた。

解放されて、彼女の靴を包装する時には、指が自由にならず、私は幾度も紐をかけ直した。そして、すがりつくように見送る私に、彼女は複雑な微笑を見せて去つた。

私はそれから、閉さえあれば、彼女のことを思い浮べた。そして、殊にあの踏まれた時の緊張した足の線や、彼女の勝ち誇つた表情を思い浮べた。そして、再びあの満足を味いたいと考えるようになつた。

私はもともと婦人靴の係だつたが、それからは女客がくると、飛び立つように迎え、商売気を離れてサービスに夢中になる。しかしなかなか美しい足の持主は少いのだ。それに私がいろいろ世話をしようとしても、恥かしいのだつたつた。私はそんな時、そうに私の手を避けて、自分で履く女性も多魔にくわれてしまえ！

と、呪はしい思いをするのだつた。

たとえ、私の好みの脚線美の持主でなくとも、応援に私の手を拒まぬ女性の場合は、私は女王に仕える奴隷のようなつもりで、サー

快感めいた満足が浮び上つてくるのを知つたのだ。五秒――、十秒――、私はこの時間が



ピスにつとめた。

そのために評判もよく、店の主人の受けもよくて、私にとつては、これ以上たのしい職業はないと思われたが、あの八千代のように踏みにじつてくれるような、激しい気性の女性は現われなかつた。

ところが、三ケ月振りに、彼女が再び店に来たのである。私は夢のようだつた。その時は主人も留守で、他の店員も、倉庫や男子部の方に居たから、私は奥の椅子を運んで、彼女にすすめた。

この椅子は主人が最近外人からゆずり受けたもので、背も腕木のところも沢山彫刻があり、非常に装飾的な椅子だつた。私は日頃から、この椅子に彼女が足を組んでかける処を見たいものだと、しきりに思つていたのつだつた。

その時は盛夏だから、真白のツーピスで、スカートはフレーヤーが多いものだつたから、その椅子に腰を下した彼女の姿は、思つた通り美しかつた。私は彼女の注文も聞かず、自分の好みのままに、さまざまの靴を持つて来ては、彼女の足に合わせた。

そして、何よりも私の自由に任せ、身分違いの高貴の人のように、平然と煙草を吹かしたりしている彼女の態度が、ゾクゾクする程嬉しいのだつた。

美しい女性なら、これでなくてはいけない！　と云うのが、私の美に対する一つの信念だつたのだ。

その日は、私の懇願に面倒そうな様子で、彼女はアドレスを書いて渡してくれたのだ。納富八千代と云うのが、彼女の名で、跡で知つたのだが、政界の某士の二号で、且つ銀座裏の或るバアにも、何かの関係があつたらしい。

奴隷の陶酔

私は店の公休日に、教えられた彼女のアパートを訪れた。澁谷から私電で二つ三つ先の駅で下りると、十分足らずで、新しいアパートの前に出た。なかなか瀟洒とした建物で、ゴミゴミした下町しか知らない私には、素晴しくブルジョア的な雰囲気に思えた。この、圧倒されるような気持が、私には嬉しいものの一つだつた。

その時私は、土産のつもりで靴を一つ持参したのだ。私はそれを選ぶのに、さまざまに迷つた。最も美しく、驕慢な靴、女性の美しさを、最も鋭く見せてくれる靴がいいのだ。私はさまざまの靴を履いた八千代の足を幻想しながら、やつと一足の靴を選び出した。

それは、全体が細い革紐で編んだようになつている、華やかな表情を持つた赤い靴だつた。このような靴は、普通の日本人の女性では、到底似合う人はいないのだが、大柄で肉付のいい彼女には、きつとピツタリすると思われた。彼女の白く豊かな足が、赤い靴によつて、一層魅惑的に見えると思つたし、又、それは紐を組むようになつているから、履かせるのに非常に手間がとれることも、私には有難かつたのだ。

彼女はまだ寝ていたが、私の顔を見ると、

「お前、なにしに来たの？　マゴマゴしてると承知しないよ」

と、無愛想に云つた。私はその声を聞くと身震いを感じる程だつた。薄い紗のような、ノースリーブの寝衣を着て、薄い布団を恐る恐るベッドの傍に近づいた。薄い紗のようかけていたが、寝返りを打つと、私の目の前に、その美しい足がベッドから落ちそうにブラブラとゆれた。

私は馬鹿のように、暫くその素晴しい宝物のような足をみつめていたが、たまらなくなつて、持つて来た靴を履かせにかかつた。彼女は動いたりして、故意に履かせ憎いポーズをとつたので、私は汗をビツショリかいたが事な構図で迫つてくる。

「たかが靴屋の店員のクセに、あたしの足に接吻するなんて、大それた奴だね、お前は……」

そして、それは思つた通り、素晴しい効果だつた。私は苦しいほどの嬉しさに、思わず……」

「ああ――」

と呻きながら、両手の上に捧げるように乗せた。その時、その赤い靴が、ガツと私の顔を蹴つた。

そして、八千代は着ていた寝衣をパツと投げ捨てた。下には人魚と海草の縫ひとりのあるブラジヤアと、レースのついたパンテイだけの姿だつた。

私はみじめに、仰向きにひつくりかえつたが、八千代は面白くてたまらぬと云つた顔で小気味よさそうに、

「ハハハハハハ」

と、笑うのだ。

その時私は彼女を最も美しいと思つた。讃嘆、と云う言葉が一番その時の私の気持に近いように思う。蹴られた瞬間の、赤い靴と、白い足の動きの美しさに我を忘れて、彼女の足に接吻しようといざりよると、今度はそれで蹴りかえされた。倒れると、その靴が私の顔や胸を踏むのだ。

「なによ、バカな奴ねえ、奴隷のクセに――」

私は恥かしいのも忘れて、蹴り上げる靴を両手で胸に抱きしめた。甘美で、まるで天国にでも浮き上るようだつた。

八千代はそんな時には腰に両手を当てて片

足でスックリと立ち、征服者のように、ひびきのいい声で笑うのだ。私にはその声も又、天上の音楽のようだつた。

私はそれ以来、月に三回だけ、彼女のアパートを訪れることを許された。八千代は何時もブラジヤアとパンテイだけの姿で靴を履き私がヘトヘトになるまで醜弄するのだ。

或る時は彼女の女友達がいる前でも、そんな戯むれをして遊ぶことがあつた。

「あたしは運動不足だから、肥りそうなのよだから、美容体操のつもりで、この犬をからかつてやるの」

と、八千代は云つた。友達は苦笑していたが、私は犬と云われたことさえ、喜びの一つだつた。

又、八千代は、私が彼女の足を抱いて、自分で満足することは許可したけれど、それ以上のことは、決して許してはくれなかつた。

又、私の方でも、それ以上のこと、例えば肉体関係を望む意志はなかつたのだ。私にとつて、彼女はあくまで、犯すべからざる女王であり、私はその靴に蹂躙される奴隷に過ぎない、と云うことが、私の最高の理想でもあつたのだから——。

驕慢であるほど、女性は美しいと、私は思うのだ。だからお茶を運んだり洗濯したりしている女性の、世帯やつれした姿ほど醜悪なものはないと私は信じている。それは凡そ美とは縁の遠いものに思われるのだ。

八千代はたわむれをしつくすと、ベッドに横になる。それから私は忙しいのだ。

私はまづランニングとパンツだけの姿になつて、湯をガスで沸かす。それから手が焼けるよ



うな熱湯でタオルを幾枚も絞り、彼女の全身に巻きつけて蒸すのだ。そして、全身にスペと栄養クリームを磨りこんで、丹念にマッサージを施す。殊に、脚部には念を入れた。事実、彼女の足をもてあそんでいる時が私には最もたのしかつたのだ。

この爲めに、私は夜間ひそかに、マッサージの講習も受けたし、さまざまな美容の本なども精読したものだつた。

最後にオーデコロンを磨りこむ頃には、八千代はスヤスヤと眠つてしまう。私はそれから足元に廻り、足の爪を切り揃えて、マニキユアを美しく仕上げる。それがすむとホツとして、彼女の眠りが覚めるまで、その恰好のいい足を唇にあてたり、頬ずりしたりして、たのしむことが出来る。

彼女は起きても、礼一つ云わない。それどころか、いろいろと難クセをつけて叱言を云う。そして美しく着飾つて出かけてしまうのだ。その時には勿論、私はひざまづいて彼女に靴を履かせる。

彼女が出かけると、部屋の掃除から、汚れ物の洗濯まで、私はどんな家政婦でも出来ないような、細心の注意をもつて仕上げた。ブラジヤアやパンテイの洗濯をして、アイロンをかける仕事もたのしかつたが、どう云うものか、私にはやはり靴の手入れが最も嬉しかつた。

一坪の玄関のタイルの上に、彼女の靴を全部出して並べ、私はその真中に坐つて磨くのだ。靴にはさまざまの表情があり、彼女がそれを履いた時のことを想像するだけでたのしく、私は口笛を吹きながらその仕事をするのだつた。

そして、彼女が今夜、旦那か、又は何処かの男と寝むであろうベッドをキチンと整えてから、やつと私は彼女のアパートを出るのだ。家に戻ると、グツタリと疲れていたが、その日一日は満ち足りて、とても幸福な気持だつた。

私はその頃二十五歳で、まだ童貞だつたが女性と肉体的な交渉を得たいとは望まなかつた。と云つても、性欲がないわけではなく、それは女性に奉仕したい、美しい女性の靴でラリとのびやかな姿態で、私は一目見た時からある予感に躰が震えた。それは一種独特のインスプレイションのようなものだつた。

童貞でも、人の話を聞いたり、猥画をみたりして、男女の交渉が如何なるものかは知つていたが、そのスタイルそのものが、なんとなく男性が女性を蹂躙しているようで、私には野卑に感じられた。それは私には不快で、嫌悪さえ覚えるのだ。

八千代の許に、月に三回、奇妙な奴隷の奉仕をつづけながら、普通の日には銀座の店で沢山の婦人靴に囲まれて私は仕合せだつた。

この頃では婦人靴もひどく派手になつて、赤、黄はもちろん、グリーン、ピンク、朱色と色も形もとりどりで、一つ一つ羽毛で埃を拂うだけでも飽きないのだ。

この店は最近、私の好みもあつて、ドレッシイな高級品を多く仕入れたから、映画女優や、ダンシングチームの踊り子たちも大勢来るようになつた。従つて、美しい脚線美の持主も多かつたが、私の好みにピツタリするような女性は、そうザラにはいないのだ。

或る日のこと、母親らしい人と二人づれでウエイデング用の靴を買ひに来たお嬢さんがあつた。まだ二十一、二の若さだつたが、スラリとのびやかな姿態で、私は一目見た時からある予感に躰が震えた。それは一種独特のインスプレイションのようなものだつた。

実際にいろいろの靴を合せて見ると、この女性は私の予想以上の素晴しい足の持主だつた。サイズは九文半で、どちらかと云えば小さな方だが、甲が高く、くるぶしや、ふくら

はぎのスタイルも、「水も垂れるような」と云う形容詞がふさわしいような、素晴しい脚だつた。

私は彼女の足元にひざまずきながら、手が震えて困つた。近く結婚すると云うのに、子供のように無邪気なお嬢さんで、私が脚に手をかけても、少しも拒ばないのが嬉しかつた。しかし、傍に母親がいるので、必要以上の振舞ひには出られないのだ。

新婚旅行用の、茶のバックスキンはすぐ決つたが、ウエイデング用の、白靴が、丁度合うのがなかつた。普通この場合には純白のサテン製のものを用いるのだが、それでは彼女の気に入らなかつた。

結局、新に調整することになり、七日後、私は出来上つた靴箱を抱えて、大岡山の彼女の邸に届けに行つた。この日は朝から胸が躍つて、私は平静になれなかつた。

内玄関に現われた女中は、

「丁度今、御式服が出来上つて来て、御嬢様は着てごらんになつている処だから、御部屋に御通り下さい」

と、云う。

案内されて明るい部屋に通ると、姿見の前に、純白のドレスをつけた花嫁姿の彼女が立つている。

「丁度よかつたわ、さあ、履かせて――」

彼女は相変らず無邪気にそう云つて、両手で長いウエイデングドレスの裾を上げた。映画の一シーンのようで、目がくらむように素晴しかつた。

ブルブルと震える手で、彼女にこの靴を履かせる私を、お嬢さんは不思議そうに見下しているのだ。

「いいわ！　オーケーよ。これで花束を持てば全部揃うのね」

この女性が結婚するのだろうか、と私は思つた。嘘のようだつた。挨拶してドアの処まで来たが、もう一度振かえつて彼女を見ると私はもう自分を抑えることが出来なかつた。私は姿見の前の、お嬢さんの足許に転がるようにひれ伏した。

「お、お嬢様！　お願ひでございます！　私を思ひつきり踏みつけて下さいまし！」

彼女はぼんやりした顔で私を見下していたが、それが生々とした表情になると、

「可笑しな人ね、こうなの？」

白い裳裾と、白い靴が私の額の上に乗せられた。私が思はず嬉しさに呻くと、その靴にグイと力が加つた。

「ヘンな靴屋だわ、男のクセに……」

そして花嫁姿の御嬢さんは、私をグイ〳〵踏みつけながら、声をあげて笑つた。あの八千代と同じように、それは勝ち誇つたような笑声だつた。

愛讀者通信

こんな手紙を書きますのは、とても勇気がいるのですけれど……私は実は不具でございます。五ツの時にベランダから落ちまして……、左の足を相当にひきずります。其の他の容貌などは普通でございます。母などは身びいきから、口ぐせのように、

「足さえ悪くなければ、何処に出しても……」

などと申しますが――。私はこの劣等感から、何処も出ません。陰生植物のように、家の中ばかりで母と二人暮して居ります。そのためか、この頃、非常にマゾ的な傾向になり、逞しい男性に罵られ、虐待される自分の姿ばかり夢に見て……

もし、こんな不具者の私でも、御嬲り下さるのでもいいから、相手にして下さる方があれば――。この私の希望は母もよく承知しておりますので、私共の家に御越し下されば と、私は外出致しません。

（大磯・妙子）

責められる女の表情

段々撮影の數を重ねて行く内に女の唇は痙攣を起して來た。
唇をワナワナと震はせて眼の色は赤味を帶び、瞳孔は……

伴俊男

百叩きの咄

風俗草紙の編輯長より責められる表情という題下に私の経験を書けという注文に、いさゝか面喰つた。それは実際問題として、私が女を縛つて責めた時の表情の写真等は全部疎開先きの千葉市の川村剛一郎という人が、直撃を受けたという話で焼かれて了つたので、之を実物に徴して読者に示すことが出来ないのは甚だ残念であるが、死んだ児の歳を数えるような真似をして愚痴を云つた処で始まらないので、過去五十余年に渉つて試みた責場の表情を記す事にしたが、写真に依つて示す事でさへ至難な責の表情を文字の上に現わす事は、更に至難中の難事であつて、食物の風味を文字を以て表現せんと試みるのと同様に之を物に譬うれば磨滅せる路傍の古き断碑の文字を手を持つて摩滅して読まんと欲する如く靴を隔てゝ痒きを掻くが如き感じを免れないであろうと思われる。且責めの種類に依つては実際に之を試み得ざるものもある。例えば蛇責の如きものを実際に試みた人は絶無であるので、茲には私の体験を基礎にして筒で打たれる女と雪責めに就て語る事にしておく。

百叩きの咄

他人から伝聞した咄を自分の経験に交えて語る事は不合理だが、併し旧幕時代の目撃者の談として捨てるには余りに惜しい話であるので、聞いた儘を記す事にする。但し之れは表情というより医療の方法に近く且又被害者が男であるという点に本題とは少しかけ離れて居るので其点は読者のお許しを願いたいと思う。

時は安政の某年歌川国芳の門下の芳盛が時の政治を諷刺した判じ絵を出版した。宮竹外骨氏の著筆禍史にも記載されてあるが、織田信長と明智光秀が餅をついて居ると、秀吉が猿の顔になつて之を固めて居る。その傍に徳川家康と思われる武者が座して之を喰つて居る一枚刷りで、徳川家康の狡猾を諷刺した判じものであつた。事實は実に此の如きもので

あるから、売れる売れる飛ぶ様に売れた。これが奉行所の耳に入つたので筆者の芳盛は伝馬町の牢え打ち込まれた。裁判の結果五十叩きという当時にあつては軽い判決で、奉行所の門前の砂利の上で裸体で手足を牢役人に押へ附けられ、竹に觀世よりを巻いた箒尻で、背中を叩かれて許されるのであるが、此時国芳の門下大勢が芳盛を引取りに行く時に長屋の戸板を担いで行つたという。而して叩かれて半ば人事不省になつて居る芳盛を大勢で担いで帰り当分粥を喰わせて、養生させ、稍健康が恢復したのは三ケ月の後であつたという事がこれによつても判る。此談は数年前歿した新井芳宗翁が、筆者に語られたものである。

箒尻で打たれると肉が柘榴の様に割れて、血が流れるのを医者が燒酎で洗つて布を巻いておく。燒酎で洗われるのだから泣き声を出してヒーヒー云うそうであるから、其表情の如きは自ら推察に難くなかろう。

棒で打たれる女

女を縛つて棒でピシ〳〵撲る——としたら眉を寄せ口をゆがめ、身体をくねらせ、七転



八倒して泣き喚ぶであろうと思うのが普通である。しかし想像ではそうであつても、実際の場合にはこれと正反対になるのは実に意外である。私が廿八九才で向島須崎町に世帯をもつて居た頃、毎日の様に向島の土手を通行すると、或日青葉隠れの掛茶屋で夫婦喧嘩の結果、亭主が女房を掛茶屋の柱に縛り附けて手頃の棒でピシ〳〵打つて居る。その傍らに五、六才の男の児が女の身体にすがつて泣いて居る。

今でもハッキリ憶えて居るが、女は木綿物の平常着を着て、黒襟のかゝつた袷に腹合せの帯を締めて居る色の白い、卅代の一寸澁皮の剝けた女房で、丸髷の根がガックリと抜けてお約束の通り後れ毛がハラ〳〵と顔に掛つて両眼から滝の様に涙を流して居る。女の泣いた顔は実はあんまり美しいものでは無いと思い乍ら、私は好奇心に駆られて掛茶屋の葭簀の影から見物していた。

女を打つて居る亭主らしい男は五十がらみの丸く太つた男で、頬鬚の濃い、一見してこの附近の農家の人らしい、この頃は附近に多少農家があつたのだ。原因は男の嫉妬にあるらしい。太さが五分位の木の枝を持つて女の背中をピシリ〳〵と叩いて居る。ところが女は打たれても何等の反応も無いといつた顔をして、涙を流し乍ら声を呑んで居るので、私は意外に思つた。芝居や小説の如く泣き喚んでは居ないのである。或は往来である関係から声を出さないで我慢をして居るのではないかとも考へたが、それは後の事で、力一杯に撲つて居る音は物に譬へれば丁度大掃除や煤拂いの時に竹で疊を叩くトントンという音をもう少し低音にした様な音であつたであろう。芝居の責場に必ず十中八、九、割竹を用いるのは、割竹それ自体の音を利用して、切迫感を起させるので、割竹のザラ〳〵という音が効果的である。これは、旧劇の場合に用いられる手段であるが明治卅年前後、俗にいう壮士芝居の時分まだ新派という名称のなかつた時分の新演劇は、俳優にも素人上りが多くて、真実に近い責方をしたのである。即ち打たれる部分に板を入れ其上に衣類を着て板の上を叩いて責めた形を見せたのは、考へたものと云はなければならない。或は実際の体験から思い附いたのかも知れない。何となれば当時は壮士芝居といつたように、壮士とは現代の暴力団のような種の性慾をそゝられるので、大正二年の一月から十二月迄一年間に東京内の大小劇場で演じられたこの雪責の芝居は通計五十余日に及ぶものである。

雪責の女

芝居の雪責といへば先づ中将姫の雪責で大名題を「雲雀山古蹟松」というが今はこれを省略して中将姫雪責と書きつ放しの名題にして居る。其他には「明烏夢泡雪」山名屋奥庭の場、これは誰でも知つて居る浦里の雪責であるが、雪布を敷きつめた舞台に三角の紙を切つた雪が降つて浦里を割り竹で責めて居る。やり手おかやと、禿みどりと緋の長襦袢一枚に白茶の帯、黄色いウコン繻黒い浦里の乱れた髪に雪の積る配合のよさに観客は或種の性慾をそゝられるので、大正二年の一月から十二月迄一年間に東京内の大小劇場で演じられたこの雪責の芝居は通計五十余日に及



んだ。これによつて女の雪責が如何に好奇心をそゝるかという事が分る。そこで、私は古来の絵画や芝居の雪責をもう一層深く堀り下げて見度いと思つて、女房を研究の材料として実地に雪責を試みたから、其体験を語つてみよう。

私の試みた雪責は前後約十数回に亙つて居る。最初は大正十年の冬から昭和五、六年に及んで居る。其間三人の女、前後二人の妻を裸体或は長襦絆一枚にして、雪責の実見を試みた。勿論責められる方も承知の上で写真の撮影を主にしたのであつたから拷問を主にしたのでは無いので、責の表情という点からは證拠が稀薄になるが、雪中に裸体で縛られて雪を踏み乍ら、長時間寒気に曝されて居た経験は、全然研究的態度をとつたと思つて居る。

最初の雪責は自宅の庭で行つた。或大雪の朝、一尺以上も降り積つた雪を幸ひと、前夜から妻の髪を島田に結わせ夜の明けるのを待つて、写真師を自宅に呼び寄せて置いて、女には酒を呑ませ、午前九時頃から約二時間余に渉つて十四、五枚撮影をした。

最初は長襦絆一枚で雪中に埋め、シャベルで雪を掛けて撮つた写真は物凄い迄に効果的なものが出来上つた。撮影の咄はグット飛ばして段々撮影の数を重ねて行く内に、女の唇は痙攣を起して来た。唇を震わせて眼の色は赤味を帯び、瞳孔は中心のみを見詰める様になつて、顔の色は蒼味というより少し黒味を帯びて来た。身体は固くなつて縛つた処はすこし許り紫色となつている。庭から座敷へ上げると足の裏は全然感覚が無くなつて歩く事が出来ないので、繩を解いて火鉢に当らせ様として火に当らせると「痛い」といふ。冷えた患部が急に痛さを感じたらしかつた。

「大丈夫かい」「大丈夫、まだ我慢出来る」「気が遠くなる迄やつて見様」「えゝ」そうした問答が交わされて、縛つた彼女の腰の辺に火鉢を置いて、徐々に足を暖めさせ、再び

庭に引出し数枚のレンズを使用してハレーションの可成起らぬ様に写したが、今気絶するか今どうなるのでは無いかとハラ〳〵仕乍らレンズを覗いて居るので気疲れのする事甚だしく、責められる方より責める方が骨が折れるものだという事がこの時始めて判つた。

段々時間の立つにつれて女は無表情になる。決して芝居の舞台に於ける様な艶も美しい表情もない。責の時間が長くなる程、女の表情は苦痛の表情をすると思うのは、想像であつて雪責の場合に却つて女は寒さに負けまいという意識が段々強くなつてくるので、身体を硬直して女性特有の柔さが無くなり、男性的な荒削りになつて、内輪に踏んで居た足が外輪になつてくるので、絵画美は段々責めの時間が長くなるに従つて失われて行く事が特色である。

尾上梅幸と私は極めて懇意な間柄であつたので、梅幸氏と一夕閉談の節女の責場に就て意見の交換をした時「足の裏が雪に滑る咄」を梅幸氏は喜んで聞いてくれ、梅幸氏が最後の浦里（帝劇）でこの仕草を加へて居たのを覚えて居る。

吊し責の咄

戰後一時燎原の火の如き勢を以て流行したカストリ雑誌に現れた女の責場は、剣で押した様に女を縛つて梁に吊し上げて責めるという、小説ならばまだ罪が軽いが、中には実験の体験の様にさも真実らしく書いてある記事が多かつた。どうせ一夜積けの原稿料目的の青年文士（？）の嘘ッぱちと笑つて居ればそれ迄であるが、責め場専門の雑誌等に之れを「文献」扱いにされては堪らないし、又そうした雑誌の投書家が自分の投書を掲載して貰うのを畢世の名譽と心得て、さも実験をしたかの如くに吊し責をやつたと書いて居るのは瞞着な咄しである。「吊し責」は、滅多矢鱈に行へるもので無く、徳川時代に在つても伝馬町の拷問庫で行う時は、縄の掛け方に特種な工風を仕て居るし、又民間で女を吊し責にする場合は女の足の先丈けは床に着けて置く様にしたものである。

この頃の大衆小説に女を縛つて一晩中梁に吊し、翌日になつて又責め直したなんていうのが数限り無くあるが、女の身体が特種の構造に出来上つて居ない限りは、そんな事が出来るものでは無い。嘗て筆者が吊し責を撮影した際には、普通の秘絵にある如き形で梁から女を吊して、下から女の身体を綱で引き上げた。ところが、女の体が梁の上に吊されていよいよ写真の原版を入れて撮そうとすると、女は苦しい声を出して「台を足の下に入れて下さい」と云う。

撮影した後に梁から引下して手首に喰い込んだ縄を解いて見ると、手首に又両腕に縄の跡が深く喰い込んで痕跡を残して居る。女は虹の様な深い息をついて居るので、段々聞いて見ると、乳の上に掛けられた縄の為に息苦しくなつて来て四辺が暗くなつて今少し之れを続けられたらば絶息する処であつたと云つて胸部を撫でゝ居た。之につけても思い出すのは明治時代の「夏柳夜半仕梁」と題する、春錦高柳櫻の四ッ谷怪談の秘絵（水野年方筆）に、お岩が本所吉田町の夜鷹宿で吊し責に逢う所である。乳の上え縄を掛けて無いのは写生である事が判つたし、徳川時代の刑罪大秘録にも吊し責の縄は乳の上へは掛けてないのが正しいのである事が判つた。但し之を承知の上で「芸術は誇張なり」という建前から又絵画美の上から胸へ縄をかけた處を描くのならば、それも一方法で敢て咎む可きでは無いが事実は上記の通りである。

今其写真は戰火に失つてしまつて手許に無いが、其時の女の表情は決して苦痛の表情は

無く、むしろ眠つて居る様にウットリとして吊り下つて居る。それは「四辺が暗くなつたといつた時は既に恍惚境に入つて居たので、丁度柔道で落ちた（気を失つた）人の如くいゝ気持になつて居たのだと考へて居る。これを其儘放置すれば生命に関する事は云ふ迄も無いので、其写真は死の一歩直前という所迄いつて居るのだと断言して差支ないであろう。吊し責の咄で巧いと思つたのは明治卅六年頃都新聞に連載した渡辺黙禅作「堀のお梅」の中の、お梅の吊し責で、お梅の責られて居る苦痛の表情と髪の乱れ工合がいゝ出来であつた。此画も亦戦火に失つてしまつたが筆者は松本洗耳であつた。

擽り責の快感

継子いぢめなどに用いられる擽り責は、女の身体を柱等に縛り附け、大勢寄つて女の腋の下をくすぐる方法で、之を足の裏と同時に行へば快感を感じ乍ら漸次に気を失つて行くので、責場の中で一番快よく絶息し得る方法であろう。

筆者の知つて居る某女性は擽り責の快感を知つてから、自分の方から進んで男に擽られ男が一夜マンヂリともせずに責めるのを楽しみにして居た。この女は新橋の有名な女で其旦那というのは今大衆小説に有名な大家であるる事だけをソット記しておく事にする。

無表情な責められる女

女の責場の絵に殊更に苦痛の表情を現わすのは画家の想像で、責場の女の表情は他人が見てさのみ苦し相に見えないものが多い。それは幾多の殺人現場の死体の写真と同じで、女は責めに遇つても男より感覚が鈍く、極端な苦痛の表情が無いのでは無いかと思う。故に女の責場は全く無表情にかくのがいゝとは思うものゝ、それでは大衆を目標とする小説の挿畫として其使命を果さない事になるから勢い止むを得ず其姿体に就て「姿の表情」とでも云う可き形式美を構成して、表情美の埋め合せにするより外に手がないのだと思つている。

責められる女の表情は人によつて異なるかも知れないが私の数多く見た人々には（そうした機会に私は恵まれて居た）芝居や想像画は別として、実際は無表情のもので、女が捨撥になつて身を投げ出してくると、男より強くなるので眉をしかめたり口を曲げたりするものでは無い。この点は玄人の画もいゝ加減なものだと思はれる。

伊藤晴雨画伯筆

恵の露

——彩色新浮世絵——

一枚毎に補筆色差ししたもので随分手数のかゝつた版画です。（目録第一）落城の賦、第二行燈部屋の責、第三四畳半の責、第四海賊船、第五女の嫉妬、第六糸框の責、第七石子責、第八そろばん責、第九竹弓責、第十くるま責、第十一待女の肉を夫に喰はせる話、第十二馬上の枠責以上

画面の大さ立八寸七分横六寸合紙解説付

どれでも分売一枚金二百二十円〒十六円

全十二枚一時拂金弐千五百円（書留〒共）

本図は手刷石版画を土合として画伯が

東京都文京区本郷丸山福山町十三粋古堂（振替東京七四三五二）

あぶのーまる・まにやの手記

共同便所の秘密

私は息をつめて見つめた。煤けて臭氣のたゞよう便所の中で、その女の赤い服が鮮かだつた……

宗方綾子



その日は夜来からの雨だつたから、階段をおりると、もう例の、アンモニアの臭気が、鼻を衝くように漂よつて来た。私はそれでもう、思わずたぐりよせられるように、足を早めてしまうのだつた。

このK駅の便所は、ちよつと人眼につき憎い場所にあるのだ。それは駅員詰所の横手を曲ると、すぐ右手に、暗くポツカリと、その入口が見えるのだけれど——。私が入口を入ると、入れ違いに日雇人夫のような男が、ズボンの前ボタンをはめながら、ゆつくりと出ていつた。

駅の便所の御多分に洩れず、此処も真黒く煤けて、ジクジクと濕気がただよつている。それは如何にも「陽の当らぬ場所」と云つた感じなのだけれど、私はもうつとりと、此処の雰囲気に酔わされてしまう。

二間ほどの長さの、コンクリートの男便所の台の上に、男が二人立つて用を足していた。大抵の男性が、この時にはいく分、前かがみになつている。そうして、自分の前に視線を落した姿勢は何か煽情的だつた。しかし若い青年などが、大きく両足をふんばつて立ち、生々とそり身になつた姿勢も、とても男性的な風景だつた。

私はゆつくりの男たちの後姿を眺めてから例の、奥から二つ目の大便所に入つた。心配して来たのだけれど、例の個所は、誰も手を触れた気配はない。昨日つめて置いたねん土をとると、かすかに隣りの便所の便器が見える。

私は大急ぎでハンドバッグから七ツ道具をとり出すと、仕事にかかつた。錐、糊、ナイフ、ねん土——。ここの仕切りの板は、真黒に汚れているけれど、五分板と云うのか、なかなかしつかりしていた。ナイフをあてて静かにけずると、小さな木屑がコンクリートの床に落ちる。

この仕事にかかつて、その日は三日目だつた。しきりに出入りする人たちに気取られないように、私は息をこらしながら、丹念に仕事をつづけるのだ。両隣りに人が入ると、私は板壁をけずるのを止めて、この共同便所が生み出す物音に耳を傾けた。

リズミカルな放尿の音も、脱糞の気配も、身震いする程私を楽しませてくれる。こんなに虚飾を離れた、そして詩的な場所が他にあるだろうか。——だから、夫が出勤すると、私は毎日のように共同便所を求めて、街に出てくる。まるで歌舞伎座か帝劇にでも出かけるようにイソイソと——。

しかし、此処も一種のショウには違いなかつた。私は板壁に穴を明けて隣りの便所をのぞこうと云うのだから——。どうても、私はこの思いつきを諦めることが出来なかつたのだ。

九分通り出来上つた時、パタンと戸が明いて、隣りに誰か入つて来たらしい。私は慌てて黒いねん土を穴にさしこんだが、やがて少しずつそれをズラして隣りを覗きこんだ。赤いプリントのワンピースを着た女が、しやがみこんで勢いよく放尿している。女はうつむいていたから、私は安心して大膽にのぞきこんだ。

始めて見る他の女の姿態！　私の選んだ位置は発見を怖れて少し横だつたけれど、非常にいい高さだつたから、放尿する女がまざまざと見えるのだ。私は息をつめてみつめた。煤けて臭気のただよう便所の中で、その女の赤い服が鮮かだつた。

どうやらこの駅の近くの飲み屋の女らしく小肥りで、下着なども清潔とは云えなかつた。用を終えて立ち上つた女は、しかしズロースを下げたまま、しきりに自分の腹部を撫で廻している。白い腹がふつくりとふくらんで、どうやらこの女は姙娠しているのかもしれないと思つた。

女は真剣な表情で、自分の腹部の隆起をみつめていたが、今度は慌ただしくワンピースの胸を押しひろげて、乳房をむき出しにすると、又しげしげとみつめるのである。青白い静脈を見せて見事に盛上つた乳房は、まるで、その乳首だけが茶褐色に黒ずんでいる。子供のない私にも、それは姙婦に違いないと思われた。

やがて女は、フーッと大きく溜息をついてズロースを引き上げると、大儀そうに出てゆくのだ。私はなにか悲痛な人生の断片を見せられたような気がして、ビッショリ汗を掻いていた。

すると、又隣りに客があつた。今度は六十近い、しかつめらしく中折帽をかぶつた老人だつたが、入つてくるなり、内ポケットから封筒をとり出すと、百円札を四、五十枚も、丹念に数え始めた。指をなめながら、老人は二回も三回も根気よく数えた。そして、しつかりと内懐にしまいこむと、やつとしなびた肉体の一部を露出して、まるで居眠りでもするような表情で放尿を始めるのだ。

私はこんな老人の、体を見るのは始めてだつたから、非常に面白く、又滑稽でもあつた。この老人と入れ違いに、飛び込むように入つて来た女学生があつた。美しいボップで、愛らしい顔をしていたが、いきなり奇妙なポーズをとる。

この女学生はノーパンテイだつた。しかし

それより驚いたことは、彼女がややこしい恰好をして、あそこから取り出したモノだつた。どうやらそれは、避姙用のスポンヂらしく思われたが、この女学生はそれを素早く鞄の中に押込むと、又慌ただしく飛出して行つてしまつた。まつたく、眼にも止らぬ早業なのだ。ノーパンテイの功得だろうか——。

それから、私はさまざまの他人の秘密な姿態を、胸を躍らせながら盗み見た。

夕暮れが近づいて、雨の音が強くなつた。そろそろ引揚げなければと思つていると、又隣りの便所の戸が明いた。例のようにのぞくと、四十過ぎの男が立つている。別段用を足す気配もない。

「おかしい——」と思つた時、再び戸が明いて、今度は和服の女が入つてくる！「あツ！」と声を押し殺していると、二人はいきなりピツタリと抱き合うではないか——。思ひがけない光景に胸が早鐘のように鳴つた。

だが驚きはそればかりではなかつた。なんと云うことか、彼女は女ではない！　二人とも男だつた！　噂に聞く男娼と云うのだろうか、私は二人の動作を見守りながら、思わず赤くなつてしまつた。狭い便所の中で抱き合つた男二人——。それは男女の場合よりも、私にはグロテスクで、又卑猥な感じだつた。

気取られるのも忘れて、私はマジマジと二人の姿態を見守つた。男娼は女のように躰をくねらせて、狭い便所の中で男の気嫌をとる。

やつと二人が出て行つてから、私は不自然でないように、丁寧に穴を埋めて其処を出た。グツタリと疲れていた。

夕飯後、夫と二人差向いになつた時、私はあの刺戟を一人で包んでいることが出来ず、思わず夫に話かけてしまつた。

「世間にはずい分変つた人たちがいるのね、男同志で愛し合つたり……」

「そんなのは変態さ」

「でも、どんな心理なのかしら？」

謹厳な夫は、私の顔をたしなめるようにジロリと見て少し強い調子で云つた。

「そんな馬鹿げた、けがらわしい話は止しなさい」

私はうなだれてしまつた。私が、そのけがらわしい行爲をひそかに盗み見る、もつと恥ずべき窃視症だと知つたら、この夫は一体なんと思うだろうか——。それを考えると私は不安で、夫の前に居たたまれぬ思いだつた。

もう止めようと、思いながら、翌日になると、やはり何かに引きずられるように、私は共同便所に来てしまうのだ。あの駅の便所ばかりでなく、都内のサマザマの共同便所を遍歴するのが、日課のようになつた。

そして、其処でさまざまの人々に逢つた。つまり、私のように共同便所に憑かれたマニアや、猥画専門のレギュラー。又それを模写してゆく人や、此処をランデブーの場所にしている男女たち——。みんな共同便所の雰囲気に、魂を奪われた哀れなマニアたちだつた。

そして、私は前のように、ただ慢然と便所を訪れて、壁一杯に描かれた猥画を見たり、物音を聞いたりするだけでは満足出来なくなつていた。それも同じ便所だけではもの足りなくて、ひそかにあの七ツ道具をハンドバツグに入れては、方々の便所に通うようになつた。

板ばかりではなく、壁でも、私は巧妙に小さなのぞき穴をこしらえて仕舞う。そして、首や肩の筋肉がコツて苦しくなるのを忘れて其処にくりひろげられる構図に見惚れた。しかし、これはあながち私一人だけの趣味ではないらしく、見知らぬ便所に入つて穴をこしらえる場所を物色していると、既に巧みに作

られている、それを発見することもあった。

私はそんな覗き穴を見つけ出すと、自分一人がのろわしい変態性慾者ではないと証明されたようで嬉しくて上機嫌になるのが常だつた。

或る日のこと、それは丁度半年ほど前のことだつた。私は澁谷の、繁華街からちよつと離れたところにある共同便所を訪れた。街頭のことだから小じんまりして、大便所は二つしかない。その一つに入るとすぐ、私は独得のカンで、もうのぞき穴を発見していた。

フシの多い板壁の、そのフシの一つが、ポツカリと抜き取れることが判つたのだ。私はたのしい期待で、隣りに客が入つてくるのを待つた。

私は不思議に共同便所に出掛ける時には、和服の方が気分的にピツタリする。それも大事な御気に入りの着物をつけて、盛装をする習慣だつた。だからその日も、クリーム色の小千谷ちぢみに、扇面を縫い取つた紗の帯と云う、華かな姿で、パンテイはつけずに、桃色縮緬のすそよけをつけていた。



五、六の詰衿の中学生だつた。ボツボツニキビの現われ始めたこの少年は、モソモソとズボンを押し下げると、便器に向つてうずくまつたが、用を足すのでもなく、漸く成長期に入ろうとする、自分の体を、もの珍らしそうに眺めていた。

その白い下腹部も、わずかばかりの徴も、なにか幼く清潔で、微笑ましかつた。そして少年が一人で××××××××私は新しい亢奮で息づまりそうだつた。かすかに喘ぎながら、無心にそれを行つている少年の姿を見守つている時、私は不思議な衝動にかられて仕舞つたのだ。

そして、何故か自制しようと云う気持は起らなかつた。私はそのまま便所を出ると、隣りの便所の戸に手をかけていた。その鍵はこわれていることを私は知つていたのだ。

不意に戸が明いて、盛装の女性が立つているのを見た時の、少年の驚き！

彼は「アツ」と小さく叫んで立ち上つたがその足元にズボンがずり落ちた。その青い堅い尻！　慌ててズボンを持ち上げる少年を尻目に、私は彼を押つけるように、便所の中に入つていた。

「いいの、吃驚しなくつても……」

「……」

だが、少年は鳩のように瞳を見張つて、青くなつた唇がふるえている。それから、慌てて、バンドをはめようとする手を止めて、私は囁いた。

「ねえ、あなたがしてたこと、××××××」

それから十五分ばかりして、私は道玄坂を歩いていた。それは若妻の買物姿と見られたかもしれないけれど、私は先刻の少年のことを考えていた。思わず微笑みが浮んでくるのだつた。

なんのやましさもなかつた。ブルブル震えて行つてしまつた少年の姿を、反芻しながら楽しんでいたのだ。

ふつと、誰か肩にさわつた。人ごみの中だから気にもとめずにいると、ヘンな男がグッと近よつて、スレスレに並んで歩く。薄汚い服装の、ヒゲの濃い男である。

眉をしかめて離れようとすると、グイと肩をぶつけ、顔をのぞきこんで、

「知つてるぜ、今の……」

低いバスをひびかせて、ニヤリと笑うのだ。とたんにスーツと、私は血が凍るようにつた。身内の底から震えが上つて来て、歯の根が合わなかつた。

見られた？　あの破廉恥な行爲を——。きつと、蒼白になつていたに違いない。反射的に、逆の方に逃げ出そうとすると、男はピタリとよりそつてくるのだ。

「そうスゲなくすることないだろう？　まあ俺にもつき合いなよ。取つて喰おうとは云いやしねえ」

絶望だ、と私は思つた。まるで、蛇に見込まれた蛙そのままだつた。私は声をあげることだけで、気持が一杯だつた。

奥の便所の戸を明けて入つた。それから、震えて立つて居られなかつたから、汚れた壁にもたれかかつた。そして、チラと、夫の顔を思い浮かべた。その時、ガタン、と音がして、男が入つて来た。狭い中に立つと、よけいに男は逞しく、大きく見えるのだ。

そして、いきなり私の肩を摑んだ。狭い場所だから、逃げることも出来なかつた——。

両手に力を入れながら、男は耳の傍で囁いた。

「あの、一番奥の便所に入つてろ！」

低いが、それは否応を云わさぬ調子だつた。私は叫び出したくなる程の胸騒ぎで混乱しながら、哀願するように男の顔を見上げたが、恐しくて言葉にはならなかつた。男は強く、グイと顎をしやくつた。

私はフラフラと、歩き出すより外に仕方がなかつた。男に秘密を摑られている、と云うことだけで、気持が一杯だつた。

奥の便所の戸を明けて入つた。それから、震えて立つて居られなかつたから、汚れた壁にもたれかかつた。そして、チラと、夫の顔を思い浮かべた。その時、ガタン、と音がして、男が入つて来た。狭い中に立つと、よけいに男は逞しく、大きく見えるのだ。

そして、いきなり私の肩を摑んだ。狭い場所だから、逃げることも出来なかつた——。

両手に力を入れながら、男は耳の傍で囁いた。

「あの、一番奥の便所に入つてろ！」

低いが、それは否応を云わさぬ調子だつた。私は叫び出したくなる程の胸騒ぎで混乱しながら、哀願するように男の顔を見上げたが、恐しくて言葉にはならなかつた。男は強く、グイと顎をしやくつた。

私はフラフラと、歩き出すより外に仕方がなかつた。男に秘密を摑られている、と云うことだけで、気持が一杯だつた。

奥の便所の戸を明けて入つた。それから、震えて立つて居られなかつたから、汚れた壁にもたれかかつた。そして、チラと、夫の顔を思い浮かべた。その時、ガタン、と音がして、男が入つて来た。狭い中に立つと、よけいに男は逞しく、大きく見えるのだ。

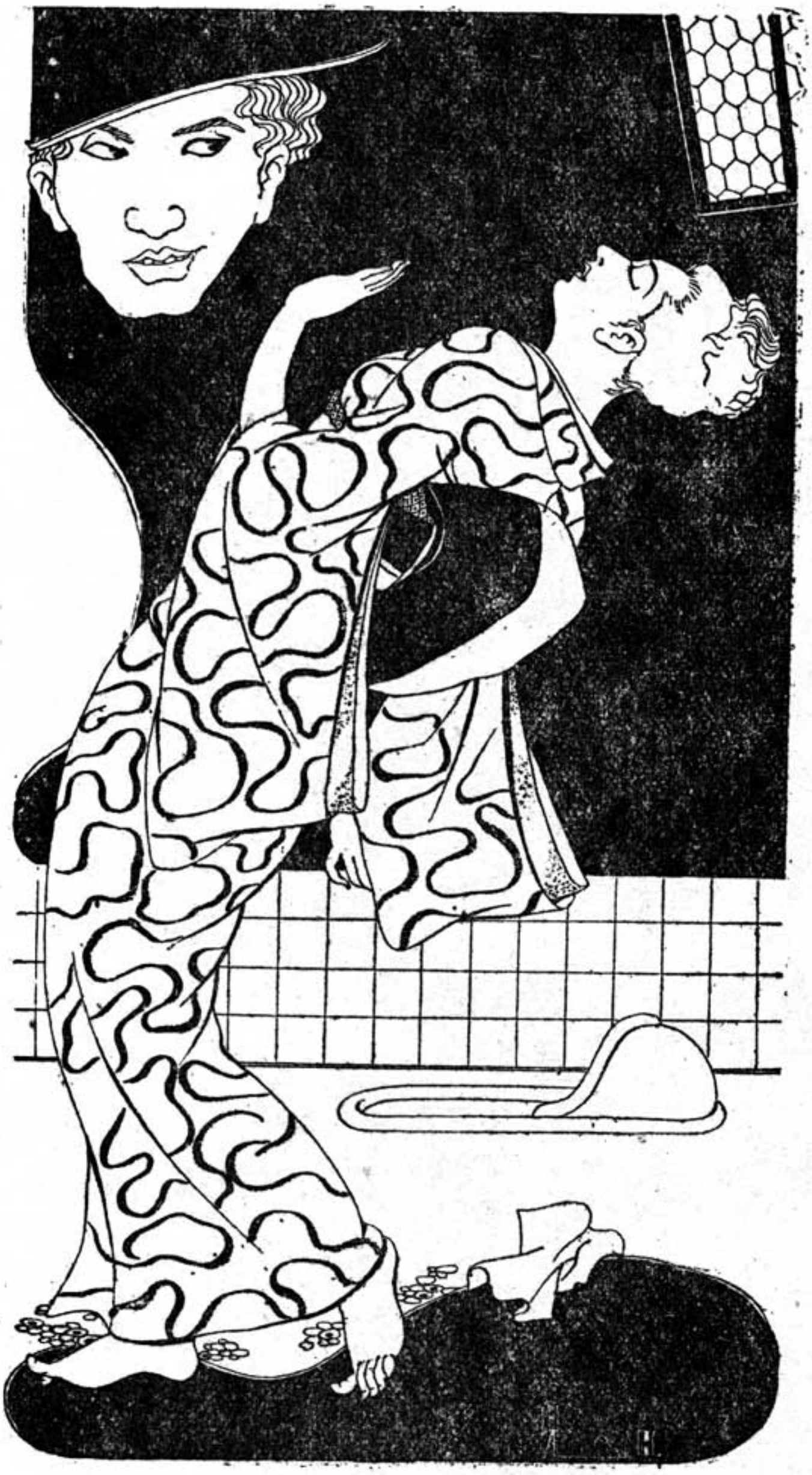
そして、いきなり私の肩を摑んだ。狭い場所だから、逃げることも出来なかつた——。

両手に力を入れながら、男は耳の傍で囁いた。

「俺もずい分共同便所通いをしたが、お前のような、上玉は始めてだぜ」

そして、すえた体臭が、一杯にかぶさつて来るのだ。

「この男も、マニアだつたのか——」そう思つた。とたんにスーツと、私は血が凍るように



うと、私の気持はなんとなく軽くなつてゆくようだつた。そして——、それから先は、思いがけない、歡喜が待つていた。

それは、夫との抱擁にはなかつた、未知の感覚だつた。

それが、この男の爲か、それとも狹く汚れた、この便所の雰囲気の爲なのか、私には判らなかつた。さつぱりした表情で、出てゆこうとする男にすがりついて、私はしどろもどろに、口走つていたのだ——。

「ねえ、また、また逢つて頂だい！　きつと！　ねえ、きつと、また逢つて！」

それから——。以前にもまして、清潔な我が家の寢室での、夫との營みは味気ないものになつた。其処には何の亢奮も、歡喜の一かけらもないのだから——。

私はそれから、相手を求め、共同便所を求めて、街をさまよう女になつた。私の躰には何時か、人の嫌う臭気が、ドロドロにしみこんで仕舞うだろう——。でも、私は行かずにはいられない。

私の喜びは、この世で、其処だけにしかないのだから——。

あの男の次には、下谷の方の運送屋のトラックの運転手をしている、Nと云う男とも知り合つた。この場合はむしろ、私の方から誘ひかけたと云つてもいい。

そして、一度こんな秘密の喜びを知つてみると、どうしてこの私のすべての感覚をしびれさせてしまう逢びきを、諦めることが出来るだろう……、私はズルズルと、その共同便所がもたらす陶酔のなかに溺れていつた。私は比較的経済的に余裕があつたけれど、彼等と一度も、ホテルや旅館に行つたことはない。そんな場所では、なんの喜びも味えないことを、私は本能的に知つていたのだ。

（おわり）

特集・囚獄の記錄

男色營倉

自分がなんだか女になつたような甘い感觸で軍曹の頬の邊りからプーンと漂つてくるクリームの香を鼻腔で味はつていた……

松尾亮



(一) 慰安演藝會の夜

〽橋を渡ればなつかしや
雨がふるふる　柳はゆれる
粉おしろいの　壹の雨

小がらな体軀のどこから、あんな甘い、きれいな声がでるのだろうかと、疑がはれる、惚れぼれするほどの唄声だつた。

きみが情の　ああ紅の傘

うつとりと我が声に醉うように、おわりの一節を歌いおわると、どーつと鳴りもやまぬ拍手だつた。

「可えぞ！　可えぞ！」

「班長はん、泣きたいわあ！」

後方の椅子にとぐろを巻いた古年次兵、上等兵のアルコールの廻つた、野卑な喊声——。

「ホン、誰じやい？　厭らしい声出しくさるのは……」

奇体な女の声色に首をすくめて、壇上の加藤軍曹はそれでも万更でもないらしく、愛嬌のある大きな眼玉を、ひいきんにクル〳〵廻して、暗くてみえぬ後の席を睨む。舞台にちかい初年

兵たちが、どつと笑つた。

中部四二六部隊の、戰時中の、九月の或る晩だつた。内地勤務のこの部隊では、真夏のころ隊内に腸チブス患者がでて以来づつと、ここのところ一月あまりも防疫のためといふので、日曜の外出が止められていた。こんどこそ外出どめが解けるだろうと全員が当てにして、楽しんでいた今日の日曜もやつぱりダメになり、隊の内ではみな腐つてふてくされていた。

週番士官に当たつた営内居住の見習い士官もご多分に洩れずで、脾肉の嘆をかこちついでに、兵の士気を鼓舞するためと称して、その日の夕食後の「中隊演芸会」の開催を命じたのである。

下士官も、兵もヤケ気味のところ、「のど自慢」にここを先途と喚きたて、ひごろの積つた鬱さを晴らすより仕方がなかつた。演芸会は、ふだんの倍もの盛会をきわめた。そこで番組がすすみ興が添い、油がのつてきたところを見澄して、のど自慢のはうでは他の中隊にまで聞えた加藤軍曹のとび入りとなつたのだ。

「さて、もうえゝじやろ。堪能せんうちに交代とゆこうかい」

加藤軍曹はもつ体をつけて、机のコップを手にとり、ぐつと水を呑みほしたものだ。悲鳴のような抗議のどよめきが波になつて、舎前と舎後の班内をぶち抜いて腰掛けをならべた会場の、まへから後へと揺れていた。

「班長さーん、非道いわよ」

「頼みまつせ、可え男ー」

一しきり姦しい声援がおさまつた頃、内心それを待つていた加藤軍曹はニヤリとして、

「困つたもんじやのう、お前等も……」

などと、ぶつくさ云いながら、それでも首をふり〳〵歌いはじめた。

〽柳のかげで　泣いたとさ

燕がのぞいていつたとさ

……

彼の十八番であつた。おわると、割れるような喝采がつづいた。

場内の熱狂と、いまの加藤軍曹の美しい歌声で掻き立てられた、その晩の私の興奮はともすればジツとわが席にとどまつて、他人ののど自慢をおとなしく拝聴していられぬ気分になつていたてた。その年の六月に入隊したばかりでまだ一期の検閲さえ済まぬ初年兵の私は、それまで幾度かのこの種のもよほしの折も、目だつのが厭さにいつも機会を見送つていたのである。

が、この晩は、ふしぎに身内のムズ〳〵する誘惑を抑えきれなかつた。なに俺だつて、加藤軍曹ぐらいに負けはしない！　明かるい舞台のもとで、心ゆくまで皆の賞讃を浴びてやらう。そう決心すると、急に大膽になつた。

男ばかりの世界で、渇きたつ熱い血潮のやり場になやむ、私も二十才のわかい兵士だつたのである。得意げに壇をおりる加藤班長と入替つて、私はおもい切つて机を重ねたくら〳〵する舞台へ上つた。

「四班松尾二等兵、――「伊那の勘太郎」を歌います」

頭を下げると、わーつと拍手と、掛声が湧いた。

「いよう、色男！　しっかり頼むぞ」

みながゲラ〳〵、初年兵もまじえて笑つた。

けれどもその叫喚や笑声も、一息呑みこんで、訊いた。

私が歌いはじめると、ピッタリ水を打つたように退いて、辺りに緊張がみなぎつてゆくのが快よく感じられた。

「おつと先任上等兵どの、この色男、借りて行きまつせ、ええかな」

加藤班長はむつくり肉がついた、小柄なピチピチした軀をかがめて、その枕もとでおどけて頼みこんだ。

一曲歌いおわると、それこそ怒濤のごとき喝采が満場をうづめた。私がお辞儀して退こうとすると、端しの方にすわつていた前の出演者の加藤軍曹が起上つて、赧らんだ丸い顔を振りたて、

「こりや儂以上じや！　加藤軍曹が許す、もう一曲やれい」

と、ほがらかに怒鳴つた。ふたたび賛成の拍手……。

その晩、点呼がおそく終つてからの事である。寝るまへの一服をふかしている最中、班内の通路へ加藤軍曹があらわれた。

「おい、さつきの声のいい初年兵、おお、おお前じや。ちよつと尾いてきなさい。先任上等兵はどこじやな」

先任の梅田上等兵はもう、毛布に潜つていた。何です班長さん。と上等兵は首だけ出して、訊いた。

「松尾二等兵、参りましたあ」

加藤軍曹の居室というのは、中隊の建物の長い廊下を突つ切つた、陣営具の倉庫にとなる、隅つこの、人気の少い下士官室であつた。奥行きのある、八疊ほどのその室に寝台をならべて、彼は功績係の奥本曹長と二人きりで起居していた。

「へい、どうぞ〳〵。盛大、可愛がつてやつとくなれ。それでも朝までには帰してやつとくなはらんと、困りまつせ」

ふん、ふん、と無雑作に肯づいて、班長は私を指でまねいてさつさと自室のはうへ、歩きだした。私は、なんだか不安だつた。

「松尾よ、加藤班長は河童だでのう、尻こ玉引き抜かれんように、要心せいよ」

と、ほがらかに怒鳴つた。ふたたび賛成の拍手……。

その晩、点呼がおそく終つてからの事である。寝るまへの一服をふかしている最中、班内の通路へ加藤軍曹があらわれた。

「おい、さつきの声のいい初年兵、おお、おお前じや。ちよつと尾いてきなさい。先任上等兵はどこじやな」

先任の梅田上等兵はもう、毛布に潜つていた。何です班長さん。と上等兵は首だけ出して、訊いた。

「おつと先任上等兵どの、この色男、借りて行きまつせ、ええかな」

加藤班長はむつくり肉がついた、小柄なピチピチした軀をかがめて、その枕もとでおどけて頼みこんだ



だつた。

「ひとりで早寢してもつまらんでせう。分つてくれよ、な。じやから松尾二等兵、おまへを話相手に、呼んだのじや」

私がモジ〳〵して、呼ばれた用事を尋ねようとすると、気配を察してさきに軍曹は、そう答えた。軍隊では軍曹ともいへば、初年兵などにとつては神さまも同様な存在である。その営内の神さまから同輩か友達みたいな扱いをうけて、私は怖れと嬉しさが半ばした、混乱を感じた。

消燈ラッパのすすり泣きが尾をひいて、消えたあとの闇の営庭はしんと物音もなく寢しづまつた、むし暑い夏の晩だつた。

その夜、私は加藤軍曹に唇を奪はれたのである。酒ひがきつかけだつた。

「班長殿は、奥さんにお逢いになりたいでせう」

なにを喋べつていいか間誤ついていた癖に権力に尾をふる兵隊のもろさで、私は媚びるようにそんなことを口にした。もちろん、あいての加藤軍曹はただの鉱工場勤めの下士官にすぎず、自班の担当者でも班附きでもない軍曹のご機嫌をとる必要はなかつた。が、彼が私の班で食事を運んでいる班長であるかぎり、気に入られておきたい拔目なさが、私を動かしたのである。

「わしは、奥さんなんかないよ。これでも独身ですよ」

と、彼は片目をつぶつて、いつた。

「松尾はどうじや、童貞か、あん」

彼のずるそうな表情に甘えて、私は気をラクにし、笑つて肯づいた。

「ほんとかい、あとで調べてやるぞ！　だいじやから」

ぶ、女を泣かしおつた癖に、……おまへ、加　や」
藤班長を盲目にするなや」
　私はその時分、ほんとにまだ童貞であつた
のだ。冗談まじりにしろ、上長者からそうキ
メつけられると、訳もなく頬だの首筋へ血が
のぼるように思つた。
「ほら、ほら、赧うなりよつたぞ。は、は」
　と、快活に、あたたかい指先で私のその頬
を突ついて、彼は席を立ち、隅のベッドの下
へ腕を差しこんで、ゴト、やつていたが、
「どや松尾、一杯やろう。おまいもこつちへ
来い」
　寝台の毛布のうへに横ずわりに坐つた、軍
曹の両手には、ビール瓶が明りをうけて光つ
ていた。
「結構であります。見つかると、うちの班長
殿や上等兵殿に叱られますから」
　私は初年兵らしく尻ごみしたが、彼が膝の
わきの毛布をたたいて、ことともな気に、
「構へん、構へん、なんじやあ、桂班長が怒
つたら、俺が謝つたる。あんな奴、なんじ
と、しきりに誘うので、はじめは遠慮して
一杯もらうのも、おつかなびつくりだつたも
の、そのうちビールのほろ苦さを舌に感じな
くなるにつれ、だん〳〵大膽になつていつ
た。
　看は、手箱から取りだした牛鑵だつた。私
がしだいに酔つて、目もとや、耳たぶへポー
ツと血の色がさしてゆくのを、班長は好もし
そうにジッと瞳を据えては眺めていた。
「どれ、手を貸してみろ」
　私は入隊するまで時計の組立工で、ピンセ
ットより重いものを持つたことがない。音楽
家のように、しなやかで、優しい手の指をし
ていた。肉の厚い、しつかりした軍曹の掌は
シットリと濕りをもつていて、握りしめられ
ると、逞ましい血の音と、ほのかな溫か味が
こちらの皮肉を通してきた。
　どうして、そうなつたのか分らない。この
瞬間、私はふだんから濶達で、陽気なこの人
の男らしさに、無性に懐しいものをそそられ
居ぎわに、私の入隊以来の教育班長である桂
軍曹が立つていた。独身だとうち明けた、身のまわりに漂よ
う、ヒゲの臭いのまじつた清潔な体臭にも、
心を惹かれる気がした。
　彼の腕が私の肩にかかり、一たまりもなく
分厚な胸に抱え寄せられて、滑つこい唇がつ
よく重ねられ、息のつまるほど吸はれるの
を、私は夢心地で、すこしも抵抗はしなかつ
たのだ。
　じぶんが何んだか女になつたような、甘い
感触で、張り切つた顎の辺りからぷーんと漂
よつてくる剃りあとの、すずしいクリームの
香を鼻腔で味はつていた。
　私が気がついて、羞恥に目ざめた手で拒み
だしたのは、軍曹に荒々しくベット上に押し
倒された時であつた。
「班長殿、止めて下さい、班長殿……」
　彼の手は無言で、私の意志を裏切りつつあ
つた。その時であつた。トン、トン、力づよく
室の戸が叩かれた。
「誰だ？」
　戸がひとりでみたいにスーツと開いて、敷
居ぎわに、私の入隊以来の教育班長である桂
軍曹が立つていた。ベッドから飛びはなれた



私たちは、さすがに二人とも、息をはづましていた。桂班長は、候補生あがりの乙幹の軍曹で、その春ごろ予備役に廻つたばかりの真摯な下士官である。

無口で、めつたに笑顔もみせぬ、嚴格なインテリの彼と、呑気でらいらく磊肌の加藤軍曹とが、ひごろから角目だたぬにせよ互いにそりが合はぬ空気は、はたから見てとれた。私はどうなることかと、脅えた。

「加藤班長、あすの訓練に差支えます。松尾を、もう寢かして下さい。」

情火に潤んだ私たちの瞳、すべてを感づいたらしい桂班長のまじろがぬ眼底には、憎しみと激怒が、燃えているように思はれた。

「班長殿、——班長殿」

下士官室を退つて、班内のはうへ行きながら、私はずん〳〵先へゆく教育班長に止まつてもらいたかつた。

「時間がおそい。早く床につけ」

それだけだつた。私は、じぶんの居室へ去つてゆく班長を慕つて、階段わきの暗い処まで追つていつた。平素から特に目をかけて、自習時間などにも優しいいたわりを示してくれた、彼の気嫌を損ねたくはなかつた。

「班長殿、申訳ありません」

戸のかげで、二つの視線だけが輝やいてみえた。

「ばかつ！」

動作は小さかつたが、叫び声もでぬほど、はげしい平手打ちだつた。

……ダメだ！　もう上等兵にはして貰えない。三ケ月の苦労も、これで水の泡だ……

両親などに合せる顔がなかつた。背骨のふるいだすような絶望を噛みしめて、私は夜つぴて毛布のなかで涙を拭いた。

(三) 軍人ノ名譽ヲ瀆シタリ

私がすつかりすて鉢に陷いり、心理的に墮落しはじめたのは、この日からである。私は班長のこころを誤解していたのだ。

そして自分でも、もはや完全に教育上で見放されたと見きわめがつくまで、訓練など怠けていた。そして荒々しく抱擁して来るのだつた。

とつ然、空きベッドを横にして蹇いであつたのである。

そうした間も加藤班長は、態度や素ぶりに私に対する特殊な親しみを、あらわに働らかしていた。それは十一月に入つたのち、明治節の祭日の夜だつた。

成績不良のむくいで、外出も許されなかつた私は、まえのように加藤班長に呼ばれて、彼の下士官室でその日もビールを飲まされていた。そして、酔うたあげくふたたび、班長と私とはさきの過ちに駆られたのであつた。

こんどは、私も、彼の腕力をこばむほどの理性すら失なつていた。

休日だけ許されている、奥本曹長の所持品であるラジオが、棚でなにか訴たえていた……。消燈後の時間である。

私は軍曹のベッドの上にいた。

「おまえ、ほんとに童貞なんだな！」

加藤軍曹は私の軀に触れてみてようやく気がついたか、愕ろきと、満足を声に洩らした。そうして荒々しく抱擁して来るのだつた。



た室のドアが、その鉄寝台を突きとばす勢で開いた。週番肩章をかけた士官の姿が、入口に立ちはだかつて、見下していた。

「あつ、隊長殿……」

うろたえ切つた加藤班長は、ベッドに飛上つて、毛布に足をとられ転げ落ちた。週番司令として服務中の私たちの中隊長、瀬古中尉のふいの巡察だつた。沈黙の、気の遠くなるような何分かが、……経つた。

「加藤軍曹、その兵隊はどこの兵か？」

「はつ、中隊、四班の初、初年兵であります」

「莫迦者つ、服をつけて、俺の部屋へ来い」

ことさら軍紀に喧ましい中隊長が、週番勤務ちう発見したでき事だけに、彼は唇もとまで蒼ざめていた。夜ふけに伝令が走つて、内務係り準尉が隊へ呼びつけられた。

——陸軍二等兵松尾亮、右者、本十一月三日兵ノ本分ニ悖リミダリニ営内ノ風紀ヲ乱シ軍人ノ名譽ヲ瀆シタリ。右ノ行爲ニヨリ、明四日ヨリ軽営倉三日間ヲ命ズ

中隊長

当夜は中隊事務室のかたい腰掛けへすわつて、謹慎を命ぜられ、翌朝その申渡しを聞かされた。罪のおもい加藤班長のほうは、私とちがつて重謹慎であつた。

(四) 獣の住む穴

「松尾、隊長殿に営倉入りの申告をするんだ」

「はい」

翌朝、登営してきた準尉は、事務室へ顔を見せるとすぐ、私たちに命じた。

桂軍曹は、ふだんになく強硬だつた。現役中隊長のまえに整列をした。

——瀬古隊陸軍二等兵、松尾亮ハ、昭和十八年十一月四日ヨリ軽営倉三日間ヲ命ゼラレ只今ヨリ服務致シマス。コゝニ謹ンデ申告申上ゲマス」

中隊長は、うんと一つ気拙げに肯づいて、申訳けめいた注意と慰さめをちよつと附加えたきり、横を向いてしまつた。

桂軍曹が、準尉に呼ばれた。

「桂、こいつの入倉の仕度をしてやつてくれ」

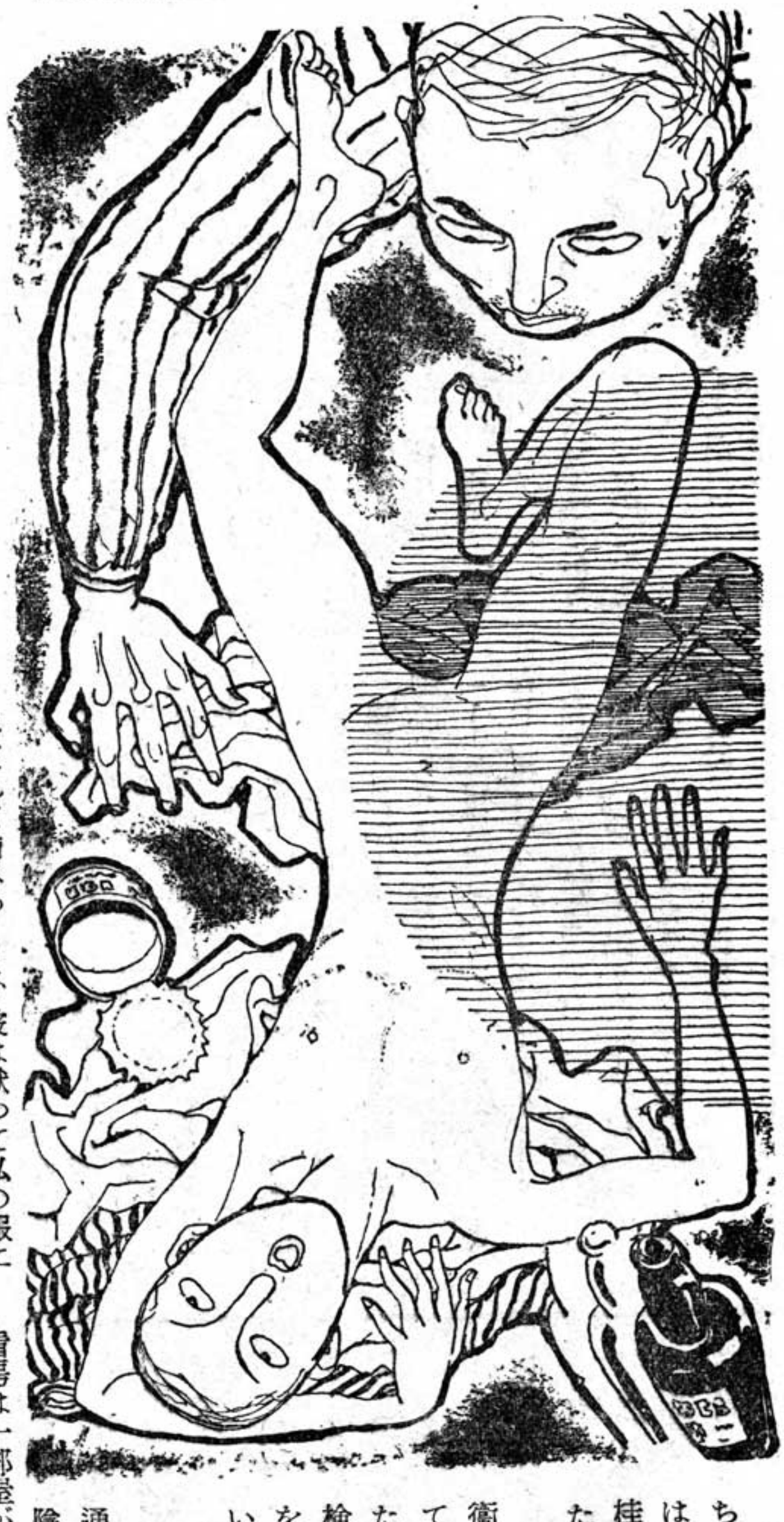
「は、承知しました。が、準尉殿じぶんお願いがあります。今日の衛兵司令に、原田班長が当たつているようですが、じぶんを勤務に代えてください」

「そんな急に、そら、あかん」

「そう云はずに是非お願します」

「えらい切込み（頼み込み）よるな。もう要員の人名、本部に届けてしもたんやで」

「司令はうちの親爺だし、電話一本ですぐ交代させられるじやありませんか」





しく〳〵と感じられた。

「それからな、加藤とこいつ、別にして一諸の房に入れるなよ」

準尉は、顔をよせて班長に小声で囁いた。

「分っています」

桂班長の顔に、かすかに血が騰つた。

呼ばれて前へゆくと、彼は默つて私の服に手をかけ、服といふ服のボタン、それから襦袢、袴下のあらゆるボタンから紐、——私の服裝についている自殺に用いうる一切のものを、千切りとり、鋏でパッ、パッ、パッ、截りとつてしまつた。

看房は一部屋が六疊じきくらいの縦長な板の間で、奥の板壁に小さな明りとりの窓が一つ切つてあるだけ。

四寸角の太い格子仕切りの一部にある、犬の潜りのような入口が開かれた。

「さー、内へ入るんだ、初年公」

薄暗い——、両側を看房の鞘（牢格子）で遮ぎられた土間の通路には、異臭といい樣のない陰慘な空気が満ちみちていた。

身がらを受取りにきた衞兵たち、の間に挟まれて、われ〳〵は衞兵所へ向つた。中隊からは桂軍曹が、一しよに尾いてきた。

營倉は、衞兵所の棟のなか、衞兵たちの仮眠所の奥に附接している。衞兵司令の伍長が、私たちを受取り服裝など細かく点検して、奥へ通じる堅固な板戸をあけ、その向うへ私どもを導いていつた。

こんな挟い処から――と、形容のできぬ屈辱に身を慄はせて、私がためらつていると、勤務兵の手がその背中を押さえつけ、尻を蹴込むようにして内部え、突きいれられた。

私は冷い板の間を手で匍い、獣みたいに、うす暗い房内にうづくまつた。立つと、締紐もボタンも取られたズボンや、上着が開いて足首までズリ落ちてしまうのだ。噫、これが名譽をやかましく云はれ、郷党の歓呼に送られてきた、陸軍軍人の態だろうか！

「――莫迦野郎、きちつと座るんだ。正座して、壁にもたれちやいかん。トロ〳〵してやがると、どづき廻すぞ」

格子ごしの、司令の罵声――。私はあわて、かたい板の間に膝を曲げて、座つた。

「どつちえ向けば、よいでありますか」

「入口の方に決つとる、阿呆んだら！　それとも貴様、地獄えでも向きたいか……」

桂班長の顔が、入口のせまい四角な、暗やみの中にのぞいた。

「松尾、いまに俺が司令を交代して来るからたつた三日間の辛棒だ！　早まつた考えを起すなよ」

熱つぽい、なにか異常なものが声に、こもつていた。私はハッと、ある予感につかれ、身を退いた。桂軍曹のおもい迫つた様子のなかには、加藤班長のある一瞬の不貞ぶてしさに共通するものが、漂よつていたのだ。

その時私は初めて、以前から桂軍曹に抱いていた不思議な、一種形容しがたい感情の正体が知れたように思えた。私は桂軍曹にも愛されたかつたのだ。そう、桂軍曹も私も、加藤班長と同じく同性を愛する仲間だつたのだ

格子戸のうえから、ピーンと大きな錠が下ろされた。彼等が出ていつた後、外部とまつたく隔絶された営倉の、孤独と空莫感がひしひしと格子のスキから忍び込んできた。

「人間の暮らす処じやない、人間が暮らす処じやない……」

私はうつろな脳裡で、幾度も繰返して、自分にそう云い聞かせていた。

松尾、松尾……、二つ離れた、向いがわの看房から、ひそかな呼び声がきこえた。

「――松尾、済まん、許してくれ、な、こんな目に逢はせて。すまんよ、すまんよ……」

語尾がヤミに消えてゆき、幽かな咽び泣きの音が、いつまでも辺りへ漂よつた。

衛兵交代の暁々たるラッパの響きが、その頃、外部の営庭から流れてきた。

風俗草紙七月号

凄艶嗜虐秘畫集　喜多玲子
私が拷問した女　根津明治
男色喫茶店　かびやかずひこ
のぞきの悦楽　最上京子
新しい責め古い責め上田青柿郎
鞭の家　須川夏枝
特集・責めにつかれて……
華麗な惨虐の回想　進藤江利子
嗜虐放浪記　天野鉄治
怖るべき教師　丸岡泰子
特集・倒錯の夜
うーるにんぐの嘆き眞下光二
保名狂乱　有馬千鶴子
逃げた妻　香川扇次郎

レスボス通信　園村恵子
そどみあ通信　藤井晃
嗜虐倶楽部　大槻久良二

残部僅少です。御入手洩れの方は本社宛直接御申越下さい。

犯罪變態考

水死・縊死による女體の苦悶表情



（元警視廳刑事部情報主任）
荻原秀夫

鮮紅色の肌

水死人のことを、俗に「土左衞門」と云う。むかし享保の頃成瀬土左衞門と云う、大兵肥満の角力がいて、隅田川に上る溺死体の、ぶよぶよと膨れあがつた姿が、ちょうど、この土左衞門に似ているところから、いつとはなしに、溺死体を「土左衞門」と呼ぶようになり、今日に及んだものだと言い伝えられている。

水中に死体があると、夏ならば四日乃至五日で、水面に浮上る。これは、死体の中に、腐敗ガスがたまるからで全身がふくれあがる頃には、水との比重がずつと軽るくなるから、水面に浮くのである。他殺死体におもりをつけて海の中へ放りこんだときには、たとえ、おもりをつけなくても、死体の自重で沈むが、ガスがたまつてくると、死体に結びつけたおもりも用をなさなくなる。

頸を絞めて殺した死体を、水中に投げこんだときは、どんな現象が起きるか？　溺死体のように身体は重くないが、さりとて浮くほど軽るくもない。だが、身体の上半身は肺の作用で、下半身よりも軽るいから、死体は足が水底につき、上半身がフワッと、浮き上る。浅い沼や池だつたら、頭を上にした死体が、ゆらりゆらり揺れて見えることであろう。女は尻が重いから（解剖上骨盤が男女で違う）後面に重みがかかつて仰向きになる。髪の毛が波のまにまに揺れ、白い肌が碧い水にすき透つて見える構図などは、畫ならばとにかく、月光の洩れる古池などだつたら、まさに怪談ものであろう。

他殺死体ならばとにかく、普通の水死体であつたら、女だからと云つて、とくべつの苦悶表情は見出せない。大体水死の原因は、肺のなかに水を吸込む溺死が主であるが、ショック死による場合もある。

大体において、溺死のはじめ一分間ぐらいは息をしない。心臓も一時停止する。これはびつくりした瞬間に心臓がとまるから、そのためであろうと、むかしは考えられていたが法医学のすすんだ現在では、この原因がはつきり説明されている。

つまり、先づ冷水で身体の表面の血管が收縮して、血は急激に心臓におしよせる。心臓と云うものは、一定の分量がリズム的に入つ

てきてこそ、規則正しい働きを示すものだが一時に、こうした状態になると吐き出す能力を失つてしまい、停止してしまうのである。

つぎに、頸動脈の、頸動脈球と頸動脈洞に血がおしよせて、血圧が昂まると、その神経裝置が呼吸をとめる反射をひき起す。

この間は水は肺には入らない。はじめのうちは失神しないが、一分近かくも息をしないとなると——血のなかに酸素が消費され、炭酸ガスがたまつて、腦の作用を麻痺すると共に、呼吸中枢を亢奮させるから（炭酸ガスが或程度たまると、呼吸中枢を刺激し、これが大量であると麻痺させる）水中ではあるが、盛に呼吸運動をやる。そうすると、肺には水がどんどん入つてくる。苦悶の表情は、こゝらあたりがクライマックスというわけで、呼吸運動もはげしいから、息苦しいこと切なるものがある（海水浴のとき、波に乘りそこなつて、潮水を一杯ご馳走になつたときのことを思出して貰いたい。水死の瞬前は、一杯だけではない。つゞけて、二杯、三杯とやるわけである）

眼球は吊上り無我夢中で、咽喉をひつかきために頸部に爪による表皮剝奪さえ出来ることもある。

肺のなかへ水が入ると、反対に、肺のなかの空気が出てくる。冷水の刺激で、気管支の中にある粘液が分泌される。粘液（蛋白）と空気と、強い勢で入りこむ水とで、渦をまくように攪拌され、泡を生ずる。

湖沼のように、水面が靜かであると、このとき、ブク〳〵と水面に泡が出てくる。このときに救出すれば、溺死の一歩手前で蘇生せることが出来るが、十数分をブク〳〵の状態だつたら、お終いである。

だから、海水浴場や、プールの監視人は、よほど注意して、水面を監視する必要があるのである。

この結合は寒冷においては堅く、三十七度以上ではゆるい。水死体は大低水底で冷却されているから、このヘモグロビンとの結合が堅いわけだ。こうした原理は、凍死体の場合にも共通することで、凍死体の死斑も赤い。

死斑と云つて、死後に起きる身体の色は、普通の場合は黒味がかつた紫色をしているが溺死でなくとも、水中から引上げた死体は、この死斑が鮮紅色をしている。雪をあざむくとまで云われる、女の白い肌が、パッと、紅に染つている風情は、見た眼には美しいものだ（ブク〳〵とふくれ上つていないかぎり）これは、水が皮膚からしみこんで行くと、水の中にある酸素が、死斑部の血液のヘモグロビンと結合して赤くなるからである。

この結合は寒冷においては堅く、三十七度以上ではゆるい。水死体は大低水底で冷却されているから、このヘモグロビンとの結合が堅いわけだ。こうした原理は、凍死体の場合にも共通することで、凍死体の死斑も赤い。

縊死遂行中の表情

金がかからなくて、もつとも簡単に死ねる方法が縊死である。だから、自殺の方法として屢々用いられ、青酸加里などという、調法な自殺薬が横行するようになつた現在とちがつて、戰前の自殺手段としては、縊死はまさに、自殺中のNO1であつた。

縊死は頸部の絞扼手段に因る窒息死である。つまり、気道、両動脈圧迫のほかに、頸動脈洞、頸動脈腺、迷走神経が圧迫されるから、脳貧血と反射的変化が起きて、迅速に死ぬ。これは縊死の行爲遂行中に、心臓から頭部へ血液を送る頸部大動脈が圧迫され、直接に血液の供給が停止するから、そのために脳貧血を起すのであつて、これによつて人事不省に陥るわけだ。

木の枝や、家の鴨居に紐をかけて輪に結び何か踏台にして、この輪を頸に巻きつけ、足でポイと踏台を蹴飛ばせば、それで縊死は遂行できるのである。日本の縊死は、大低の場合、足が宙に浮いて、ブランコの形になつているが、外国ではこんなのは例外で、その位置が、着坐、佇立、横臥という姿勢が多いと云うから、縊死の方法まで、毛色が変つているわけだ。

縊死の頸の痕には出血がない。絞めた痕は多くは頸の前の方が、アダム果の上を水平に走り、左右側頸部では、下顎隅から耳の後へと、後上方に上り、頂部では自然にその痕跡が消えてしまう。もし、ここに結節痕が認められれば、これは絞殺（つまり他殺）したのちに、縊死に見せかけた、僞装死体と云うことになる。

縊死の遂行中の苦悶の表情として、もつとも一般的なのは——先づ、頸にからんだ紐の下側が、大低は蒼白に変色し、出血がなく、紐で圧迫される部分と、非圧迫部位との境界が僅かに充血し、ぷーツと腫れる。

これが著しいか、軽微な程度かは、紐の粗密、広狭、柔剛によつて異る。

これは体重で圧迫されて、これが強まつたり、ゆるんだりしないから、圧迫されて、血管の中の血が追出されたまま、戻らないで死んでしまうからである。

しかし、血が循環している間は、何らかの原因で紐が解かれたり、切れたりすると、反動的に、一時に充血して、ブラ下つている間に破れた筋繊維や毛細管から、夥しい出血を見ることがある。夏の夜など、シュミーズ一枚の若い女が悲愴な覚悟で木からブラ下り、途中で紐がブッツリいくと、死の一歩手前でこの羽目に陥り、頸から胸へかけ、ボタボタと鮮血が滴り、おまけに、蒼い月の光りに浮出されるという景物まで添えて、その凄惨な姿は、老練な刑事でもタヂタヂとなる。

このときは、出血症状ばかりでなく、閉じられた眼が、衝激を喰つて、カツと見開かれておまけに充血を来たすなら、まさに、ゾクゾクものである。

これは、不幸にも死損つた女の表情だうか？　ブラ下つて、しばらくすると、手や足に死斑が出る。もしも、顔がだらりと前に傾いて居れば、この顔も、死の瞬間は蒼白だが、やがて死斑に彩られる。舌はペロリと上方にまくれ上つて、咽喉を塞さいでしまう。手足をバタ〳〵とけいれんさせ、もしも附近に石や硬い突角状の物体があれば、これに突つかかつて皮下出血を見ることもある。

手足をバタバタさせるのは、人間の本能で頸がしめられるから呼吸困難は当然であり、またそれを利用しているくせに、反対に空気を吸込もうとモガく。これが痙攣の前兆で、やがて四肢にはげしい痙攣を起すのである。

このとき小便の排泄や、射精症状も惹起すのだが、男性が勃起するという説に対しては死んだ浅田博士は否定している。

☆

☆

あぶの一まる・まにあの手記

私が責めた六人の女

縄を掛けると小菊模様のメリンスの長襦袢が覗える程に美しかつた。サンバラになつた髪が繪のようである……

林　譲介

これは私の前後三冊に亘る、アブ・ノートからの抜萃である。その期間は私の大学在学中から、三十七歳の今日にまで及んでいることを、始めに御断りする。

識者から見れば、如何にも貧弱な記錄に過ぎないかもしれないが、知己各位の御批判を仰ぎたい。

てる子　十七歳　××の玉突屋のカウンター。小柄で肉付よし。可愛い顔立で眼がトロンとしている。今まで自虐の傾向は多少あつたらしいが、責められた経験なし。処女だと云うが本当だろう。

玉突に行つた時、閑散だつたから相手もないし、てる子の胸を冗談半分に軽くキューで突いたら、躰を少しも避けない。それに怒りもせず笑つている。その時に、

「これはモノになるかな？」

と思つたが、そのカンが当つたのだ。誰も居ないのを幸に、長いキューで彼女のヒップを何回も突いた。相当強く突いてる子はよろけた位だ。その内一度は突かれてドタリと倒れた。しかしハア〳〵と息をはずませながら、眼は一心に僕の顔をみつめている。僕の方もかなり誘かれた。その時にドヤ〳〵と二、三人客が来たから、仕方なく離れた。

翌日又早く行つたが、主人がいたから、彼女が歩く度に、そのヒップの動きを眼で追うだけで、非常に切ない想いをしたのだ。しかし、帰りがけに、

「僕の下宿に来ないか？　一緒に遊ぼう――」

と云うと肯いたから、急いでアドレスを書いて渡した。そして彼女は本当に来た。

ワンピースを脱がすと、キヤラコのシミーズを着ている。ズロースも黒い木綿のだつた。ズロースを脱いだ跡には、太股に、きつくゴムテープでクビレた跡がついて



いた。

非常にヒップが美しくて見飽きない程だつた。だからうつぶせに寝かせるのが素晴しかつた。背中から一度へこんでなだらかに盛上つて、二つに分れた両半球の肉付の美しさ！　僕はどうしていゝか判らなかつた。傍にあつた薄い本でブツと、「ピシヤリ！」と、とてもいゝ音がした。

てる子は笑つて、

「算盤ない？」

と云う。小さい時偶然算盤の上に腰をおろした時の事が忘れられず、今でも算盤の珠を使うのだと言う。

僕は早速算盤で、うつぶせに寝たてる子のヒップを、××××××××白い肌がみる〳〵赤くなつて、幾筋もの美しい縞になつた。

僕は算盤を放り出して、壁にかゝつていたチリハタキの細い竹の柄で、××××××××ジーンと手ごたえが全身にひゞいて、激しい衝動に僕は頭がクラクラした。

これが、それまで空想ばかりを逞しくしていた僕が、女を責めた記念すべき最初の一頁になつた。てる子との遊びは前後六回で終る。春の休暇に故郷から帰ると、彼女はもう玉突屋にはいなかつた。

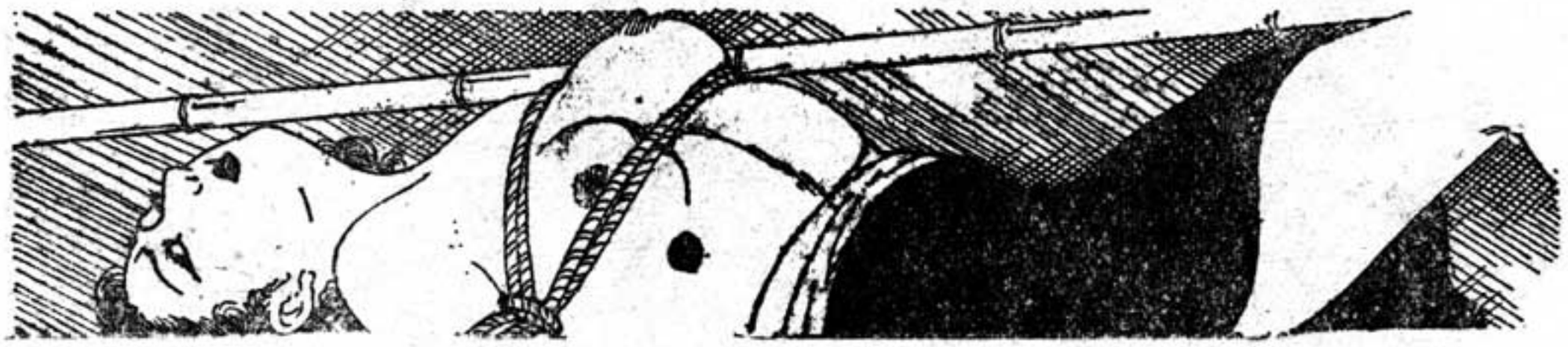
雪枝　二十二歳　京都近郊の某寺の養女、色白中肉。方法は殆ど蹂躙による緊縛。

年齢は十二歳。卒業間ぎわに、左肺の上部に空洞があることが判明し六ケ月ばかり、嵯峨の奥の禪寺の離れで靜養することになつた。畫間は文学書をあさり、夜はイメージの赴くまゝに、スケッチブックに、責められる女の姿態を描いて暮した。

掃除や食事の世話をしてくれた雪枝は、色白な、古風なタイプの美人で、この村でも評判の娘だつた。僕は一目で心をひかれたが、難を云えば、声が悪いこと、足の割には胴が長いことである。

此処に来てから三ケ月程経つて、散歩から帰ると、彼女はホウキを片手に、僕の例のスケッチブックに見入つているのを発見した。すぐ、「しめた！」と思つたが、声をかけると、彼女はスケッチブックを放り出し、庫裏の方に逃げて仕舞つた。

それから、顔をみるたびに、徐々に説得した。写真や古い絵画なども見せたが、鞭打などのものを見せると、彼女は眉をしかめる。どうやら縛りに興味を持つているらしいと見当がついたが、内気な娘だから、ジレツたくなり、飛びかゝりたくなる衝動を自省するのに骨が折れる。



説得を始めて十三日目。やつと着物だけ脱がせて繩をかける。小菊模様のメリンスの長襦袢。まづ亢奮を押え後手に荒繩で縛つたが、震える程に美しかつた。束髪に結つた髪がほどけて、ザンバラになつた黒髪がたれたの

が絵のようだ。それから、僕は髪を手に巻きつけて、グイと引き起した。彼女の眼がつり上つて、歌舞伎に出てくる女のようだと思つた。

夢中になつて長襦袢を剝ぐと、女は泣いて拒んだ。しかし、その恨みのこもつた眼ざしが、僕にはゾク〳〵する程いゝ。下はやはりメリンスの赤い腰巻。肌はまるで蒼いような白さ。

柱に縛るのもいゝが、簞笥のカンに縛るのもいゝ。それから欄間から繩を下げて、両手を一緒に緊縛して中腰に吊つた姿——。前がはだけるから、彼女は必死にみもだえる。繩から解放すると、喘ぎながら胸を抱いてうづくまる。この間、小さく呻くだけで、一言も口を利かない。緊縛する爲のステッキ等は使用したが、他の、例えば殴打、鞭打ちなど、一切行わず、これは彼女が忌避せるため。

ピツタリ躰に密着するタイトスタイルを好む。

始めに責めた夜から、事後約四ケ月、責めと同時に結びついた。半年後、隣村の某寺に嫁ぐ。

朱實　二十九歳（当時の僕と同年）銀座某バアの女給。年期の入つた莫蓮女だが、徹底せるマゾヒスト。彼女と同棲二年、僕は多くのものを失い、虚無的になつたが、又、多くの陶酔も得た。

朱実の好んだ鞭は、極く細いものに限られた。男物の革バンドなどは、

「野蠻だわ——」

と云う。彼女の嗜好に応じて、丸いゴムテープ、電気のコードなど使用したが、力が入らない。竹を細く裂いて、なめらかに磨いた鞭は、当りがいゝ、と云つて彼女はひどく気に入つたが、一打で折れ飛んでしまう。

僕はひどく苦労した揚句、浅草の古物商から、サーカスで猛獣使いが使う、細い鞭を手に入れることが出来た。これを素振りすると、朱実は眼をギラ〳〵させて戦慄し、八疊の部屋を声をあげながら逃げ廻る。彼女の場合は、逃げるのは僕を挑発する爲の擬態なのだ。

しかし、五尺三寸五分、十四貫五百の体格だから、否応なしに此方もエキサイトする。それにこの女は多少露出症的な傾向がある。夏多を問はずノーズロで、洋服もまぐるしく逃げ廻る。その癖にちよつと力を抜くと、

「弱虫！　男のクセに力はたつたそれだけなの！」

と、ジレつたがる。遂にはこの猛獣用の鞭の先を、三本に細く裂かせた。この方が肌にまといつくようでいゝと云う。

鞭打の頂天に達すると、軽いテンカン的な症状を呈して、瞳がつり上る。又、腰紐で首を緊縛することを強請した。危険が伴なうから僕も彼女が好むほど力が加わらない。後には工夫して、縮緬（ちりめん）の紐で縛り、これに枕元の水をかけた。縮緬だから水気を含むとキユッと縮む。彼女の顔色は紫色になり、口から泡が溢れる。



このまゝでは死んで仕舞うから、危険が察しられると僕は鋭利なメスで紐を切る。紐が肌にくい込んでいるから、時々肌を傷つける。このために朱実の後首は傷だらけだから、彼女は決してアップの髪を結わない。

妻加奈子　二十三歳。痩身で眉も頭髪も薄い。冷え症でコイツスも嫌悪気味。或は子宮発育不全か——。新婚旅行一週間は索寞たるものだつた。帰宅後三日目の夜、意を決して僕の性癖を打明けたが、結果は手きびしい拒否。それにさげずむような瞳に痛く胸を刺されて、甚だしい屈辱を味つた。

それ以来、妻に対してインポ的になりあわてる。非常に煩悩したが、結婚後百日目頃、加虐行爲なしでは、交渉不可能なことも打明けて哀願した。加奈子は冷然と、

「そんな、ヘンタイなこと——」

と云う。カツとなつて妻の寝衣に手をかけて剝いだ。彼女は恐しい叫び声をあげた。痩せて肌の色も黒い。僕は無意識にそれに嫌悪を感じたらしく、手近にあつた薄い夏布団で加奈子をクル〳〵巻いて、コブ巻きのように縛つた。

妻の叫び声で、若い女中が飛んで来たが、手出しも出来ずオロ〳〵している。それも一つの刺戟になつた。それでもあまりヒイ〳〵声を出すから、猿ぐつわをはめた。この時は始めて愛情でなく、腹の底から意に従わぬ妻への憎悪で、我ながら夢中で責めた。

加奈子は必死に疊の上を転がり廻つている。見ろ！俺をさげずんだ彼女の瞳に、必死の哀願の色が浮んでいるのだ。——憤怒と復讐の快感。

割れた竹刀で足の裏を強打すると、加奈子は一間ばかりも縛られたまゝ飛ぶ。痩せた肩を竹刀で突くと、すぐ其処に血がにじむ。髪の毛を巻きつけると、割れた竹刀の先に髪がまきついて、部屋中ひきずり廻すことも出来るのだ。

それから繩と布団を剝いで、すはだかの彼女に、犬になつて歩けと命令した。痩せた醜い女は、恐怖の色を浮べながら、必死に部屋中を這い廻る。あの、高慢ちきな、気取り屋の妻が——。この時、僕は異様に激しい陶酔を感じた。

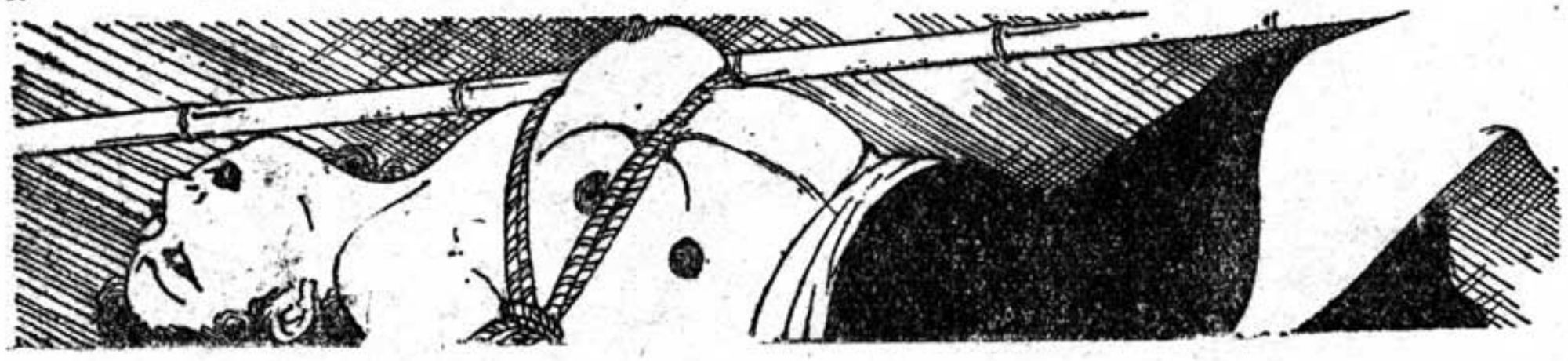
テーブルに縛りつけようとすると、妻が実家から連れて来た若い女中が、手にすがりついて、

「も、もう、奥様を御許し遊して……」

ぽつちやりした小娘の、必死の表情が可憐だつた。僕は急にある衝動を覚えて、彼女の肩を鷲づかみにし、縛つた妻の両眼に絆創膏を貼りつけたから、彼女はいやでもその後の光景を逐一見なければならなかつた。

蝶丸　年齢不詳　某三流地芸妓　相当肥満型、臀部が甚しく巨大。したゝかなマゾヒスト。躰の線もくずれ、躰中に傷が無数にある。いわば手垢まみれの女。

待合「よしの」で前後数回会う。この待合の女将の推



贔で呼んだのだが、自堕落で頽廃的で、実のところ、僕の手にも余つた。天成のマゾらしく、セックスや衝動だけによらず、金のためなら、どんな被虐にも甘んじる。

「雛妓の頃、大変な変態爺さんに、お金の威力でいやいやながら囲われていたの。それからはもう責めなしぢやいよう――」

と笑つている。しかし、責め道具などの知識はさすがに詳しく、僕の方が仕込まれたと云つてもいゝ。

つぶし島田の裸体は後姿がたまらなくいゝ。両足を一緒に縛つて、蚊帳の釣手に縄を通してつり上げると、島田の根がガクリとゆれる。それをブラ〳〵と、時計の振子のように振動させると、女の顔は紅潮するが、ウウ、と、歓喜の呻きを洩らした。

次いで肥満した躰を海老責めにする。苦しいだろうと思つて、さすがにためらつたが、この女は海老責めを非常に好む、最後は何時もこれにしてくれ、と云つた。そして呻きながら僕の胸に顔をよせてくるのだ。こんな無理な姿態のまゝ……。

ミドリ　十九歳　新宿の不良、弾力ある猫のような姿態。乳房の隆盛が著しいのが自慢。自分で混血児と称するが、たしかにエキゾックな風貌。

出来てから三度目に、某温泉に出かける。二人ではない三人で――。浅草某町の、刺青師を伴つたのだ。

ミドリの腕に四つ葉のクローバーの刺青がある。尋ねると、彫つた時のことをウットリ回想する。痛いけれど、又とない快感だと云う。僕は女が刺青する苦痛の姿を、是非見たいと思つたのだ。

旅館では静かな離れに陣取つた。それにすぐ傍の渓流の音が凄く大きいから、少々の悲鳴をあげても大丈夫だ。ミドリの自慢の、乳房と乳房の間のやゝ下方に、朱彫りの牡丹を彫ることになつた。これは僕がミドリの場合、仰向きに寝た姿が好もしいこと、又、ミドリが自分自身、彫られる処を眺めたい、と希望したためだ。

刺青師も下帯、腹巻だけの姿になり、まずアルコールで彫る場所を消毒してから、針を二十本ほど束にしたもので筋彫りにかゝつた。ミドリは「アッ、アッ！」と短く叫びながら、両手で宙をつかんでのけぞる。刺青師は、

「此の場所は、とりわけ我慢がむつかしいんで――」

と云いながら、器用に押えつけて彫り進むのだ。五分すると、ミドリの全身がベッタリと油汗になり、体臭がたちのぼるようで、僕はカタズを呑んだ。髪をふり乱して、それでもミドリは大きく瞳を見ひらいて、刺青の手もとをみつめている。呻きながら、

「あ、あッ、躰が、躰がボーッと、あゝ――」

と、ウワ言のようなことを口走つていたが、苦痛と快感が同時に女の躰を責めさいなんでいることが、まざまざと感じられ、僕自身も戦慄のような喜びがこみ上げて来るのだつた。



艶色浮世絵秘画集

春閨秘画集

手梳和紙台紙付豪華艶麗彩色特型帙入
限定会員頒布版
第一集（五枚一組）
会員頒布価 五百円

限定段につき
至急御申込乞

伊藤晴雨先生が後世に残す愛憎絵巻の傑作秘画集堂々出来!!

艶麗・爛熟に酔いしれた江戸に、くりひろげられた凄艶女体絵巻——。苦痛にもだえる雪肌に、悦虐のしもとは飛ぶ、縄目はギリ〳〵とふくよかな素肌にくい込んで行く。裾もあらわに羞恥と悦楽の境を彷徨う女体のあえぎ、紅唇にまつわりつく乱れ髪は何を訴えさせようとするのか、悦虐の極致に放心した瞳に映るものは何か？本画集は独特の豪華印刷の上に不世出の名人伊藤晴雨先生が要所に直々手指しをほどこした艶麗豪華他に類を見ぬものである。

特選寫眞

むせび泣く悦虐秘圖

弊社が他に全く類なしと確信をもつて愛好者諸兄におくる特選写真集は悦虐の極致をとらえたカメラ最高の技術が如何に諸兄の胸を打ち幻想に狂喜せしめるかを如実に物語るものである。速刻御申込を乞う。

キヤビネ判・印画紙燒付　三枚一組　五百円（送共）

☆會員募集☆

草紙風俗（通信）

愛好者同志、会員同志の相互通信をほしいままに出来るのがこの通信です。そして又、本誌には出来ないお つきあいをいたしましよう。入会手続きは別に定めてありません。会費納入されれば会員になれます。

会費は一ケ月五十円です。

日本特集出版社
申込所 東京都千代田区神田神保町二ノ三十四

特集・囚獄の記録

刑罰千夜

タキは手に持つた柄の長いタワシを便所の壺の中につつ込んでから、今度は倒れたあたしの口の中に押し込むのだ。避ける隙もない！

大塚ルリ



あたしが居た「青葉園」という少女感化院は、都心から約二時間半。北多摩郡のM村のはづれにある。

あたしは一度仙台の方の孤児院に入れられたことがあるけれど、其処を逃亡してからはずつと上野界隈で暮していた。だから、始めて園に連れられて来た時は、駅の前から田甫があるのを見て、あたしは面喰らつてしまつた。

あたしがこゝに收容されたのは、丁度八月の一本道を、二十分ばかりもテク〳〵歩いたものだつた。

あんまり暑かつたからいつそ逃走して、その護送のおつさんに、一泡吹かせてやろうか——と思つたのを覚えている。でもその時は、お金と来たら、一文なしの空つ尻だから、汗を掻くだけ無駄だと判つてはいたけれど。

園内は九百坪ばかりだと聞いたことがある。何かの拂い下げの建物だそうだけれど、薄汚れた上に、どう云うつもりか、壁だけ明るいクリーム色に塗りかえている。建物はチヤチだけれど、ちやんと鉄格子がはまつて、塀は高いコンクリートなのだ。

に二棟並んで建つている。建物はチヤチだけの半ば頃で、上衣を脱いで抱えた、××署のおつちやんタイプの係員に連れられて、炎天

に二棟並んで建つている。建物はチヤチだけの半ば頃で、上衣を脱いで抱えた、××署のおつちやんタイプの係員に連れられて、炎天

は、都心から約二時間半。北多摩郡のM村のはづれにある。

あたしは一度仙台の方の孤児院に入れられたことがあるけれど、其処を逃亡してからはずつと上野界隈で暮していた。だから、始めて園に連れられて来た時は、駅の前から田甫があるのを見て、あたしは面喰らつてしまつた。

あたしがこゝに收容されたのは、丁度八月の一本道を、二十分ばかりもテク〳〵歩いたものだつた。

あんまり暑かつたからいつそ逃走して、その護送のおつさんに、一泡吹かせてやろうか——と思つたのを覚えている。でもその時は、お金と来たら、一文なしの空つ尻だから、汗を掻くだけ無駄だと判つてはいたけれど。

園内は九百坪ばかりだと聞いたことがある。何かの拂い下げの建物だそうだけれど、薄汚れた上に、どう云うつもりか、壁だけ明るいクリーム色

此処は当時（昭和二十六年夏）百二十名ばかりの園生が収容されていた。みんなあたしと似たりよつたりの身の上で、だから根性も思ひつきりひねくれている。とても児童保護委員なんぞの、小父さん小母さんたちが考えるようには、甘つちよろく更生なんぞ出来やしない。そして、此処の先生たちは、それを百も承知だつた。

もうテコずつた揚句、たゞ都の方への体裁だけ保てばいゝと云つた風で、殆ど教化なんてことに、力を入れる様子はなかつたのだ。だから、この青葉園で、一番恐しいのは園長でも舎監でもなく、あたしたちの仲間の、タキという女だつた。

一番古株のタキは、凄い勢力を持つていて発作がおこると、半気狂いのような狂暴性があつたから、この女の御天気次第で毎晩のようにも、もの凄いリンチが行われる。

あたしは収容された晩から、たてつゞけにタキのリンチを喰つた。カチヤン〳〵と、アルマイトの食器が鳴る、妙にうら悲しい夕食がすんで暫くすると、軍隊の点呼のような、舎監先生の巡視になる。

この時は園生はみんな寝具をのべ、寝衣に着更えて、自分の枕元の通路に並んでいる。

部屋は細長くて、真ん中に一間巾の板の間があり、両側が五十糎ほど高くなつて、申わけのような畳敷きになつている。通路の方を枕にして、こゝに園生は真黒の木綿布團を敷くわけなのだ。

新入りは逃亡を防ぐためか、一番奥の場所に決まつていて、私の隣りは松ちやんと云う何時も鼻がつまつているような娘だつた。

巡視の先生が出て行つた跡、慣れない場所だからあたしがぼんやりしていると、

「オイ、其処の新入り、チヨイと来な！」

振かえつた時には、もう、あの不安と恐怖。——そして一時に真暗になつて、数人、或は十数人が躍り上リ毛立つ思ひだつた。

布團蒸しをされたことのある人なら、誰でも知つている、あの布團がパツとかぶせられてしまう。その布團の上に、数人が乗つかつて、手拍子をとりながら、唄ひ出した時の苦痛——。頭の上も、胸も腰も足も、ところ嫌はず踏みつけ、ジヤンプする。息はつまつてくるし、もがく力もなくて、私は本当に殺されるような、と思つたのだ。

そんなことはしりやしない。それに、なにか喋べろうと思つても、気持が上ずつちやつて、巧く言葉が出て来なかつたのだ。

「なんだよ。そんなにトボケやがつて、こつちはお前より、一年も二年も永く、此処の飯を喰つてるんだ——」

すると、グルリと取り囲んだ連中が、一度にゴチヤ〳〵と、口汚い罵声を浴びせかけるのだ。あとで知つたのだけど、こいつ等はタキの腹心の子分たちだつた。

「ヨシ、この新入りに、青葉園の作法を教えてやんな！」

命令一下、あたしは衿首をつかんで、ねじ伏せられた。ハネ起きようともがく上から、厚い木綿布團がパツとかぶせられてしまう。一時に真暗になつて、あたしは恐怖に全身チリ毛立つ思ひだつた。

その布團の上に、数人、或は十数人が躍り上つて、手拍子をとりながら、唄ひ出した時の苦痛——。頭の上も、胸も腰も足も、ところ嫌はず踏みつけ、ジヤンプする。息はつまつてくるし、もがく力もなくて、私は本当に殺される、と思つたのだ。

そんなことはしりやしない。それに、なにか喋べろうと思つても、気持が上ずつちやつて、巧く言葉が出て来なかつたのだ。

「なんだよ。そんなにトボケやがつて、こつちはお前より、一年も二年も永く、此処の飯を喰つてるんだ——」

すると、グルリと取り囲んだ連中が、一度にゴチヤ〳〵と、口汚い罵声を浴びせかけるのだ。あとで知つたのだけど、こいつ等はタキの腹心の子分たちだつた。

「ヨシ、この新入りに、青葉園の作法を教えてやんな！」

命令一下、あたしは衿首をつかんで、ねじ伏せられた。ハネ起きようともがく上から、厚い木綿布團がパツとかぶせられてしまう。一時に真暗になつて、あたしは恐怖に全身チリ毛立つ思ひだつた。

布團蒸しをされたことのある人なら、誰でも知つている、あの不安と恐怖。——そして、その布團の上に、数人、或は十数人が躍り上つて、手拍子をとりながら、唄ひ出した時の苦痛——。頭の上も、胸も腰も足も、ところ嫌はず踏みつけ、ジヤンプする。息はつまつてくるし、もがく力もなくて、私は本当に殺される、と思つたのだ。

そんなことはしりやしない。それに、鼻血が出る頃には、もう顔も唇も切れて、鼻血が出る頃には、もう頭がボーツと霞んで、何がなんだか判らなくなる。あいつらは、あたしの躰の上で、手拍子を打つたり、踊つたりしながら、この青葉園の数え歌を唄つていたのだ。

一つとせ、ひもじい思ひも無理はない。

こゝは名代の青葉園トコ因果だね
二つとセ、ふた言目には不良だと
云はれた揚句が青葉園トコ因果だね
こんな文句はあとになつて知つたのだけれど、あたしにはまるで地獄の唄声のように聞えた。
やつと引きずり起された時には、前歯が二本折れて、顔も胸も真赤だつたけれど、あたしはタキに命令されるまゝに、埃つぽい板の間を這ひずり廻りながら、「ヤキを入れて貰つた御礼廻り」に、一人〳〵の前に這つて行つて、口上をのべなければならなかつた。
翌朝洗面所の鏡を見ると、見たこともないお化けのような娘が写つている。唇も鼻もはれあがつて、眼は糸のように細い。体全体がヤミクモに重くつて、うつむくと、前にツンのめりそうになるのだ。
鏡を見ながら、あたしはとんでもない所に来たものだと、つく〴〵思つた。親も兄妹もないけど、娑婆がたまらなく恋しかつた。あたしは不貞腐れた恰好はしていたけど、本当はこの青葉園に入つたら、真面目に手仕事でも覚えるつもりだつたのだ——。
起床は六時で、八時から作業が始まる。朝食の時、私が気分が悪くて半分以上余すと、左隣りのウタ子と云うのが、飛びつくようにして食べてしまつた。この娘は、大飯喰ひのウタ公と呼ばれて、何時も、
「あゝ、腹が空いた」と、云ひ暮している。
この日は午前中は裏の野菜畑のウネ作りで午後からはメクラメの手さげ籠編みの作業だつた。慣れた連中はドン〳〵編み上げてゆく。あたしはガン〳〵する頭で、何本もいりまじつた糸をみつめていると、涙がポタ〳〵落ちた。
夕方、入園の手続きの書類のことで、事務室に呼ばれた。あたしは園長と舎監の前で、昨夜のタキとその一党の仕打ちのことを、ブチまけてやつた。意外なことに、先生たちはそれ程驚きもせず冷淡な態度で、
「そんな筈はないがねエ」と云つた。
それでも、入れ違いにタキが呼ばれて舎監室に行つたから、あたしは「ざまあみやがれ！」と白い眼で見送つた。しかし、それが新入りの浅墓さだつたのだ。
班長に云はれて、あたしが便所の掃除をしていると、ガタン、と人が飛び込んで来た。タキだ。もの凄い形相のタキが立つて振りかえると、もよくも密告しやがつたな！」
あたしはアッ！　と思つた。タキの復讐を計算に入れなかつたのだ。逃げようとするタキはイキナリ傍にあつた、便所掃除用のあの長い柄のついたタワシをとりあげて、目にも止らぬ早さで、私の頬を強打した。
タワシのコワイ毛が、頬に喰い込んで、あたしはコンクリートの上にのけぞつた。タキはあたしの胸の上に片足をかけると、そのタワシを、便所の壺の中につゝこんでから、今度は倒れたあたしの口の中に押しこむのだ！
避ける閑もなく、汚物がベツタリついたタワシが、半ば口に押しこめられた。
「犬！　これでも喰いやがれ！」
つめたく汚物が、顔、首、胸に流れた。そして、嘔吐をよぶその臭気——。叫ぼうとすると、その汚物が口から咽喉を通る！
鐘が鳴ると、やつとタキは離れた。そして憎々しそうに見下して云つた。
「ふん、今はこれで勘弁してやるけどな。消燈になつたら、このタキにタテついた御礼はきつと返してやるから、たのしみにして待つてやがれ！」
これも後で知つたのだが、舎監などに、園生同志のことを告げ口することを、犬と云つて、この青葉園ではそれを一番重罰だとする

不文律があつたのだ。

うがいして、水で胸や首を洗つたが、臭気は抜けない。いく度も〳〵嘔吐を催して、あたしは絶望的になつていた。夕食の時、隣りの松ちやんやウタ公が、「臭い〳〵」と騒いでいるのも耳に入らなかつた。消燈後のリンチを思うと、全身の毛が逆立つのだ。

点呼、巡視、そして九時、怖れていた消燈の鐘が鳴つて、電気がパツと消えた。あたしは木綿の布団を頭からかぶつて、文字通りガタ〳〵震えていた。空襲で死別れた母親の顔を思い浮べて、口の中で、「母ちやん！」と叫んでいた。

しかし、五、六人の力で、布団が剝がされた。押えつけられて、寝衣とズロースをむしりとられる。あいつらはガヤ〳〵と嬉しそうにはしやいでいるのだ！　そして、髪の毛をグツとつかまれてのけぞると、口一杯にズロースを押しこめられてしまつたのだ。

「ヤイ、ルリ！　おタキ姐さんを密告するなんざ、新入りのクセにいゝ度胸だな――」

ボーツと明るくなつて、蠟燭を持つたタキの顔がその中に浮んだ時には、もう気が狂いそうな恐怖だつた。タキも眼をギラ〳〵させて、半気狂いの表情だつた。

皆であたしの両手両足を大の字にひろげ、



タキはあたしの脇の下に、蠟燭を近づけてくる！　密生していた。それが、チリ〳〵音をさせながら燒かれるのだ！　脇毛と一緒に、コンガリと肌も燒かれるのだから、その苦しさといつたら――。

躰をよじろうにも、皆ワイ〳〵笑いながら押えつけている。声は出ないし、たゞ地獄の火に燒かれるばかり。右の脇がすむと左脇。そして、今度は――灼熱のような熱さが、脳天を斬られるような感覚で走つた。

タキの奴は執念ぶかかつた。ポタ〳〵と蠟のしずくが落ちて、それが又凄く熱い。躰中の神経がみんなその一ケ所に集中されて、あたしはもう恥かしさも忘れて、足をバタつかせた。

タキも油汗を流しながら、最後の一本までも燒きつくすつもりらしい。他の奴等は笑いながら、みだらなことを云つては、ドツと声をあげて笑う。

「密告なんかしやがつた犬は、みんなこうなんだから、覚えとくがいゝ！」

凄い捨台詞でタキたちが引揚げた跡は、手も足もひろげたまゝ、あたしは閉じることも出来なかつた。松ちやんたちが、猿ぐつわを取つて、薬なんか塗つてくれたが、

「まつたく、タキの変態つたら！　ちよつと可愛いい子だと、すぐこれをやりたがるんだから――」

「タキの奴、自分がサ、此処で一番歳が上の癖に、まだアレがないんだよ。パイパンつて云うんだろ。だから妬つかんで、こんなムゴイことするんだよ」

何時も鼻がつまつている、少し頭が鈍い松ちやんと、大飯喰いのウタ公の話を聞きながら、あたしは、やつぱり感化院なんて、マトモな人間の来るところぢやないと思つて、馬鹿のように涙をタラしていた。

翌日から二日は歩けなかつた。便所にも這つてゆくのだけど、ベッドの上り降り、用を足す時の辛さと云つたら――なにしろ腫れて水ぶくれになつてしまつているのだから。

そんなリンチをされても、もう先生には訴えられないことを、身にしみて悟つたから、三日目にはもう起きて作業にも出た。股づれだと偽わつて、医務室に薬を貰いに行つたら看護婦上りの、キツネのような顔の衛生係がジロリと顔を見てから、ほんの儀かばかり、塗り薬をくれた。この衛生係の四十女は、園生が毎月のアレの時に脱脂綿や紙を貰いにゆくと、なんのかのと理由をつけて少ししか配給してくれず、そんな品物をひそかに自宅に持つて帰ると云う評判だつた。

それから、外から通園してくる男の先生はあたしがへんな恰好で歩いているのを見て、ニヤ〳〵笑いながら、

「お前、娑婆からへんな病気を持つて来たんじやないか？」

と、云つた。この先生たちは、みんなそんなものだつた。園生の教化など、薬にしたくもなかつた。

タキの奴は半気狂だから、時々発作的に惨酷なことを仕出来したくなるらしい。



蠟燭だの、煙草だの、マッチだの麻縄だのは勿論園では禁制品なのに、しかし何処から手に入れるのか、タキは何でも持つていた。あいつはそれ等を袋に入れて、疊を上げて床板の下につるしているらしかつた。

霊間の作業もなかく〳〵骨だつたけれど、それでもまだタキの暴力から逃れられるだけよかつた。怖しいのは夜なのだ。唯一のたのしみは食事だけれど、量も質も至つて乏しい。古くからいる園生たちは、園長が都から支給される、あたしたちの食費の上前をハネると噂している。それから、皆が作業にやる、手

工業製品のピンハネもするなどと云うけれどありそうなことだ。

なにしろ、園に参観者が来ると、とたんに食事の量がふえ、しかも普段から見ると、妻い御馳走だつた。普通、朝は外米入り御飯にタクアンかツクダニが少量。晝はコッペパン一個だけで、夜は大抵野菜入りのうどんに決つていた。

だから、あたしたちは、炊事当番に出るのが、なにより嬉しかつた。ウタ公などは、指折り数えて当番の日を待つている。そして、炊事場では係りの先生の油断をみすまして、大根でもキヤベツでも生のまゝむさぼり喰うのだ。要領のいゝのは、ツクダニなどをつかみ盗つて、ズロースの中になどしのばせ、タキに差し出して、おベツカをつかつたりする。

みんなタキが怖いのだ。あいつは一人悠々と煙草など吹かしながら、御天気次第で、どんなリンチでも平気で行う。自分の悪口を云つたという罪状で、四人も五人もの園生を並べて、下半身を裸にさせる。

この園の園服は、青いギンガムの上衣とズボンだつた。丁度菜つ葉服のような色だからこの園服を着ると、誰でも人相が悪くなるようで出来ていた。

そのズボンを外して、下半身だけ裸になつた娘たちが、その裸の尻を並べて立つているのは、タキとその一党にとつては、たしかに面白い遊びだつたに違いない。タキは煙草をふかしながら、その火のついた煙草を、一人〳〵の尻にあてゝゆく。これはまだタキの気嫌のいゝ時だつた。

松ちやんは洗濯場で、仕方なしにこの人間のマけたと云う理由で、この火のついた煙草を、腋の下に押しつけられたことがあつた。この時は猿ぐつわなしだから、松ちやんはヒイツーと凄い声をあげるし、何しろ十四貫もある園一番のデブが死者狂いで暴れ廻つたのだから、大騒ぎだつた。

とう〳〵、松ちやんは、カチ〳〵山のタヌキのように、両手両足の四本を一緒にくゝりつけられて、窓の鉄格子にぶらさげられて仕舞つた。そして、ウーンと呻いて、ヨダレなどを流して目をむいて仕舞つたりするから、あたしたちは、本当に殺されるのではないかと思つて、ハラ〳〵したものだ。

タキの奴は悪党だけに度胸もあつて、そんな時でも、

「なあに、松公はウス馬鹿だから、ちつとやソツとぢや死やしないよ」

とウソぶいて、失神してる松ちやんに、水を浴びせたものだ。

それから、仲のいゝ二人組がいると、タキの奴は妬つかんで、この二人を互い違いに、つまり69と云う恰好にしつかり縛りつけて、これを部屋中ゴロ〳〵、みんなで蹴飛ばして遊ぶのだ。

皆、命令されて、仕方なしにリを蹴る。タキの気に入られようとして、ワザ〳〵板の間の通路に蹴落す奴もあつた。なにしろ、申訳のように蹴つたんでは、今度は自分がタキの逆鱗にふれるのだから、あたしも、泣くような思いで、蹴つたものだつた。

こうして、タキの残酷なリンチが、毎夜のように繰返えされたから、脱走の計画がたてられたのは、自然な成行だつた。あたしたちは嵐の晩に、十三人もで集団脱走を企てたけれど、出てからはバラ〳〵になつて約束の上野公園に来たのは、あたしと、ウタ公だけだつた。あとの仲間はみんな連れ戻されたのだから、きつと又、タキの奴に半殺しにされたことだろう。

犯　罪　變　態　考

創傷と兇器



井田喬雄

創傷とは、一般に云われる「キズ」のことで、用器の種類やその用法――きりかた――で千差万別、大きくもあれば、迂濶にしていたら見落すようなキズでも、生命を奪うものもあり、また、見る眼も覆わしめる慘鼻のものや、唇でキズグチを吸つただけで、けろりと止血できるような、簡単なものもある。

兇行を演ずるために用いられた用器を「兇器」と云うのだが、この「兇器」の種類によつて、キズも切創、刺創、割創などに分けられるわけである。

生前に切られると、キズグチは人体の組織繊維が彈力性によつて、縮んで口を開けるが死体硬直が起きてからの――つまり死体に対して切りつけても、口は開かない。これは、創傷が生前のものか、死後のものかを判別するに大切なことであるが、死後三十分以内位のときは、まだいくらか彈力性が残つていてこの判定を困難にさせる場合もある。

大袈裟に云うとキズはすべて生命にかゝわるとも云えぬことはない。何故ならば、たとえカスリキズ程度の小さなキズでも、そこから、化膿菌が入ると、創傷伝染病と云つて、蜂窩織炎や、丹毒、膿瘍、敗血症、膿毒症などを起して、下手をすると生命をとられる。

切創

用器は双物又は硝子や陶器のカケラで、双を体の表面に直角にあてゝ引張ることによつて出来る。打つだけでは、薪を割つたようにワリキズは出来ても、キリキズは出来ない。切創の特徴は創縁と云つて、切りひらいた創のふちが、長く鋭い線状をしていることで、このいい例は、日本刀のように、双が長いものになるにしたがつて、その創縁もするどい線状となる。キズナカ（創洞）又はキズオモテ（創面）は尖つて、平で、キズソコ（創底）は三角の頂天のように尖つている。創口は生前のキズなら、柳葉状に開いている。

切創によつて即死する場合は、必らず一緒に動脈が切られているからで、全血量の1/3が出ると危篤に陥り、1/2を失えば死んでしまう。小供や病弱者なら1/3失つただけで、お陀佛になる。

上級動脈と云われる八M総頸動脈、七M股動脈を切られたら、二、三十歩は走れても、そこでバッタリ倒れてしまう。毛細管だ

けの場合なら、数時間、乃至数日間は生きていることがある。

嫉妬に狂つた男が、女を路上に追い、うしろから頸をめがけて斬りつけた場合、斬られてもなお、血まみれになつて数百米逃げたと云うのは、割合に小さな血管が切られ、筋肉の緊張、收縮で血の一時に出るのを妨げるからである。頸の血管と同時に気管を切られると、血が気管に入つて、窒息状態になる。一種の溺死というわけだ。失血で死ぬ直前までは意識は明瞭だが、気管を切られると口はきけないから、眼だけで意思表示をするほかない。

また、自殺行爲としてのクビキリは、外国人は右利きは頸の左側を上から下へ切ると云われ、日本人で右利きの者は右側を切るのが一般的だと云うことも、面白い対象である。

割創（かつそう）

兇器は日本刀、サーベル、斧、鉈、薪割等。これらの用法は、刃があつても、切創のように引張るのでなく、振上げて打ちおろすところに特徴がある。キズは、下に堅い骨のある頭部、肩、腰、向脛などに多く作られる。皮膚だけのキズは出血による圧迫がないかぎり死なないが、脳底にヒビが入つたり、割れたりすると死ぬ。キズグチ（創緣）は鋭くキズは深い。割創による他殺死体を檢視すると、創緣のあたりをキレイに拭つても、赤い洞口がぽつくりあいていて無気味そのものである。例の、築地八宝亭の四人殺しは、何れも薪割でメツタ打ちにしたものだが、母の死骸に縋りついた二児の頸から背にかけて、拳までずつぽり入るかと思われる洞口があいていて、さすがもの馴れた鬼刑事連中も、しばし声がなかつたほどだつた。

寸断（こまぎれ）

コマギレは生前には絶対に行われない。死体を双物又はノミ、槌などで寸断するのであるが、その多くは殺人犯行を隱蔽する手段として行われる。玉の井のバラ〳〵事件、宇野富美子の良人殺しなど、みなその例である。

死体をコマギレにすると腐敗は遲いが、結局は腐るから、莚に包んだり、行李詰にして海や川へ捨てゝも、腐敗ガスが発生して浮上る。コマギレ屍体を眼前に見るより、死体をコマギレにする犯人の鬼畜の姿を想像する方が、はるかに凄惨であり、妖奇にみちた場景である。

刺創（しそう）

兇器はサキの尖つた刃のないもので、皮膚に直角に突いて生ずるキズである。針、釘、錐、火箸、登山杖など、兇器の種類は多い。

ツキキズのキズグチは小さく、形はほぼキリキズと似て柳葉状にひらき、キズグチも割合鋭く、キズスミ（創角）も尖つている。

これは切れたのではなく、皮膚の繊維の走る方向に従て裂けているのである。刃のないもので突けば、各組織は夫々の繊維の走る方向に裂けるものである。

だから、腹を突くと、皮膚、皮下脂肪組織、筋肉層、腹膜と、みなそれぞれ別々の方向に裂ける。

ツキキズの洞口は兇器の直径よりも小さくなつているが、これは組織の彈力性のために、縮むからである。このため、自分では負傷を意識しても、外部的にわからないので、とんだ悲喜劇を演ずることもある。

★ ★ ★



みだらな指

男の影からほのかに消毒液の匂ひを嗅いだ。あゝ、院内の者なのだわ。——失神して行く感覚の中で、靄はそう思つた。

鳥羽瑛子

靄未亡人の寝室に灯がついた。

ベッドの主は寝がりをうつて、それから枕元の本をとりあげる。黒の革表紙に金文字が、原語で、マダム・ボヴアリイ。しかし、二三頁繰つてもう投げ出している。

今度は白い両手が、濃紅色の羽根布団の上に、もの憂そうに投げ出される。レースの布団カバーよりも白い、ふくよかなその手——このベッドは、独寝にはたしかに広すぎる。

これは彼女が養子の亡夫を迎えた時に、父なる能登博士が、わざ〳〵横浜の専門家に注文して調製させたもの。今ではもう、その父も夫も故人になつたが、これほどに見事なベッドは、日本ではそうはない筈。全体にルイ王朝時代風の品格と豪奢をきわめたものだけれど、殊に両端の彫刻がきわ立つた。天駈ける天馬や半獣人が、見事に浮彫りされている。が、それはともかく、このベッドの主題は蛇だつた。そのいづれにも蛇がからみついている——。

だから、このベッドを見たほどの人は、その豪華さに感嘆しながら、一様に小首を傾けたものだ。昔者のばあやなどは、

「御芽出たい御婚礼にまあ、こんなおぞましいものを……」

と、身震いしたが、博士は頗る会心の態だつたと云う。尤も博士は癌の研究では斯界の第一人者だが、又、性心理学の泰斗でもあつたのだから、その蛇にも、或いは愛嬢の結婚に餞ける、何かのいはれがあつたのかもしれない。

そのベッドを蔽つた紗のカーテンは、矢を嘴にくわえた鷹が羽をひろげたところから左右に別れて、ゆるやかに波をうつてロープ

で止められている。色はパールオレンヂ。

枕元のスタンドは、これも父博士が外遊の折りに持ち帰つたもので、小さな、ヴアイオレット色の笠をもつたスタンドが、燭台風に三つ灯いている。その一つに灯がつけば、丁度夜もすがら寝顔を見守るほどの明るさ。二つつけば本が読めよう。

若く美しくて、金にも暇にもことかゝぬ女性の寝室が見たかつたら、この霞未亡人の寝室を見るがいゝ。クラシックな優雅と、明るいモダニズムの調和。そしてこの部屋に充満するなまめかしさ——。だが……

「薔薇の香がきつすぎる……」

と、彼女は思つた。

出窓の壺にさした、七、八本もある暗紅色の薔薇である。

「今度の新種は、あまり香りが強烈すぎる。気になつて、眠れやしない——」

女性が花の香に煩はされて眠れない夜は、美しいようだけれど、或いは不幸なのかもしれない。

ベッドが輕くしなつて霞未亡人が起き上つた。もう一時はとうに過ぎている。今夜も眠れそうにはないのだ。

窓ぎわに立つて、厚いカーテンをひいた。ウインドに額をつけると、ヒヤリと心地よかつた。闇の中に浮んだ大きな建物は、癌で有名な能登病院。今は亡父や亡夫に代つて彼女の名義になつている。幼い頃から見慣れた建物だから、何の感慨もない。

だが、霞未亡人はフト、この母屋から鍵の手につながる左の建物に、皎々と灯がついているのを見た。

枕元のスタンドで、小さな、三つ灯いている。

「誰か、起きているんだわ……」

それで、行つて見る気になつた。きまぐれ、——眠れない夜の、子供のような思いつき。

深夜に現われた病院の女主人を見て、看護婦たちは慌てるだろう——。でも、何時も話したこともないけれど、こんな夜あの人たちの仲間に入るのも悪くないことね——。

そのまゝ、伊達巻だけしめ直して廊下に出た。母屋のはづれのドアを明けると、其処から一間巾のリノリユウムの廊下になつている。霞未亡人はちよつと衿をかき合わせてから、ノックする。——こたえはない。

他所ゆきの表情でドアを明けた。が、誰もいない。いや、電燈だけあか〳〵と輝いて、みんな寝込んでいるのだ。それも、枕を並べて、なんと云う熟睡の姿態——。霞未亡人は思わず苦笑を浮べていた。

電気を、誰かゞ消し忘れたのだ。若い、しかも晝間あれだけの労働をする看護婦たちが、この深夜に起きている筈はなかつたのだ。当直で病院に詰めている者の他は、みんなそれ〴〵の、しどけない恰好で寝むりこけている。

云い合わせたように、薄い夏布団さえふみぬいでいる。投げ出された両腕、裾からはみ出した太股、シミーズの胸、それからズロースにピッタリ蔽われた、臀部の曲線さえも——。これはなんと云う奔放な、娘たちの眠りのポーズ……。そして、その粗野なまでにた

くましい若さ——。

霞未亡人は呆れたように入口に立つて、この若き眠りの群れをみつめた。暫くして、白い頬に微苦笑が浮ぶ。スイッチを消し、ドアを閉める。未亡人はこの娘たちの若さに対して、かすかな羨望を意識したのだ。

深夜のきまぐれ心は、見事にはぐらかされた。小さくスリッパの音をさせて、霞はひきかえした。暗い廊下に、彼女の寝間着だけがほの白い。しぼの荒い白縮緬地に、藍とわずかの鶸色で夕顔を染め出してある。

看護婦たちが、おそらくは一生かゝつても着れないだろう、贅をつくした衣裳を、霞未亡人は無造作に寝間着にしている。くびれた胴が細く、しなやかな後姿だつた。

妖夢

母屋に入るドアが見える曲り角まで来て、霞はうしろに、なにかの気配を感じた。ギクリと胸を立てた。振りかえろうとした、その一瞬、ガツと後から抱きつかれた。大きな掌が眼も唇も蔽つて、片手がグイと細腰を抱く。体が浮いた。

アツと仰天した時は、そのまゝ引きずられて、すぐ右手のドアの明く音と一緒に、ドサリと投げ出されている。肩を打つて、思わず小さく叫んだ。とたんに再びかぶさつて、細い手が二、三度藻掻くうちに、易々と猿ぐつわがかけられる。両手は後手に縛り上げられている。真暗な小部屋——。だが、霞未亡人は知つている。看護婦たちのトイレットの隣で、不用の家具や掃除道具が置いてある物置部屋なのだ。恐怖にひきつゝた瞳が、闇の中にこの狼藉者を見定めようと、わなゝいた。

つい鼻の先に、その黒い、かすかな影がある。強盗？　いや、それらしくはなかつた。しかし、一体なんのために？……深夜の物置部屋でこの影の男と対して、霞未亡人は、血さえ氷るような恐怖にうちのめされているのだ。

闇の中で、男が動く気配がする。

「だれ!?　いや、いやッ！」

猿ぐつわの奥で、それがぶざまな呻きになつたのを、彼女は聞いた。自由な足が逃れようとあせつて、誰かの体にふれる。その足首を、しつかり握つた男がいる！

「あゝッ！　なにをするの?!」

しかし、おびえて、もう力は抜けている。その足首がグイと引かれて、何か堅い金属にふれた。

足を、縛られる！

羞恥と戦慄が同時に来た。そして、再びもう片方の足をさぐる手！　霞は躰をちゞこめる。

背中の下で縛られた両手が痛い。しかしそれより、そうしたぶざまな恰好で、縛られた女の姿態！　そのことで彼女の意識は一杯だつた。霞は暗闇の中で唇を噛んで赫くなつている。

男の影が前をよこぎつた時、霞はほのかに消毒液の匂いを嗅いだ。

あゝ、院内の者なのだわ——。

失神して行く感覚の中で、霞はそう思つた。

女　主　人

あくる朝、霞未亡人の寝室の窓は、晝近くまでもひらかない。久振りの、恥かしいほどの熟睡。

誰とも知れない男に、あんないまわしい目に会つて、それでこんなに熟睡するなんて……

鏡の中の自分をみつめながら呟いた。そして、そのいまわしい昨夜の出来事を反芻している。——結婚して七年、未亡人になつてから三年。二十九年の平穏無事な生活にとつて、そればまるで雷に打たれたような衝撃だつた筈なのだ。それなのに霞未亡人は、

最近、こんなに顔色のいゝ私を、見たことがなかつたわ——。

と、思うのだ。

午後になつて、副院長の檜桓と、義弟の昭夫が打合せに来た。しかし、彼女は病院の経営など、なんの興味もない。殊に今日という日には——。

「おや、義姉さん、どうしたの？」

「あら、どうかしてゝ？」

ギクッと、胸を衝かれて伏眼になつた。

「だつて、今日は凄くロマンチックな顔してらつしやるもの」

檜桓が困つたように苦笑する。もの堅い学究タイプの檜桓には、若い昭夫の臆面もなさがくすぐつたいのだ。ソ、クサと用件を切り上げて立上るのを、霞未亡人はテラスの出口まで送つた。

ドアを明けて身をひくと、ちよつと頭を下げて出てゆく檜桓の躰から、フッと、あの匂いが漂つた。爽かに鼻をつく、だが冷めたい消毒液の——。

霞は息をのんで、檜桓の後姿を見送つた。昨夜の男が——まさか？

「義姉さん、僕、この間番町の伯父さんから、御説教されちやつたんですよ」



「そう――」

「なんだ、気のない返事だなあ、――能登病院をあのまゝぢや心配だつて……、伯父さんたちは、どうも手近な僕を、死んだ兄貴の後釜にするつもりらしいや――」

そして、それは又、あなたの希望でもあるわけでしよ？　靄はそんな皮肉な表情を、口元に浮べている。

「五月蠅くつて、僕、かなわないや。義姉さんから親類たちに、なんとか意志表示をして下さらないかなあ」

死んだ院長の弟で、二年前に医大を出て現在、能登病院で臨床をやつている。まづ資格に缺ける筈はないのだ。若い自信に満ちた表情が、靄未亡人を盗み見る。

一ツ歳上だけれど、きわ立つた美貌。そしてその莫大な財産――。昭夫はふと、もどかしさに駈られるのだ。

「僕、義姉さんに嫌らわれてるのかなあ――」

何気なく、だが、充分計算して、昭夫は未亡人の肩に手をかける。

「あ！――」

靄は顔色を変えて立ち上つた美貌。

「なんです？」

「匂い、消毒液の……」

「クレゾールでしよう？　いやだなあ、義姉さん、僕たちの躰にはみんなしみこんでますよ」

そうだ、私はなんて馬鹿だろう、病院の者なら、みんなこの匂いがする筈なのだ。しかし、それなら、院内の、一体だれだと云うのだろう――、

夕方、庭つゞきの病院の方も、めいている時、靄未亡人は母屋から廊下づたいに、あの物置部屋の前に来ていた。それはちようど、犯人がなんとなくひかれて、犯罪現場に現われる心理だつたのかもしれない。ドアに手をかけて、ちよつと辺りを見廻してから、彼女は素早くすべりこんだ。

雑然と古い家具が押し込まれた、二坪ばかりの物置部屋。だが、あの昨夜の暗闇にひきかえて、今は小さな窓から西陽がさし込んでいる。未亡人は足許を見た。埃の中の、かすかに乱れた足跡――。

左足を縛られたのは、この鉄の古いベッドの足。右足は、そうだこのケースの抽出しのカンに……、靄は赫くなつた。それ〳〵の道具の距離から、昨夜の、あの恥かしい記憶が浮び上るのだ。

それから、ハッとしたようにうづくまつた。硝子のケースと、大きなバケツとの間に何か華やかな色が見える。スリッパ――。そうだ、昨夜寝室に戻つた時、私ははだしだつた……。

その時、窓の外を誰か通つた。ギョッとしたが、ホウキを持つた山崎と云う、病院の雑役夫らしい。靄はその片方のスリッパを袂に入れて外に出た。そのまゝ庭を横切つて病院の事務室に急ぐのだ。

昨夜、病院に泊つた男は、誰と誰なのだろう？

事務員の青年は美しい女主人の前で、堅くなつて答える。

「昨夜の当直は昭夫様と、助手が二人。薬剤室の小田は整理があつて泊つたそうです。あゝ、それから檜垣先生も、気になる患者がいるとおつしやつて、お泊りになりました」

靄は黙つて肯いた。

昨夜の男は、そのうちの誰かなのだ——。

だが、その男も、昨夜未亡人があの場所に現われるとは、予期しなかつたに違いない。それなら、男はなんのために、あの場所に忍びこんだのだろう？

看護婦たち！　霞はあの若い娘たちの、太々しいまでに寝乱れた姿を思い浮べた。そして、かすかに傷つけられた思いがする。

深夜、看護婦たちの宿舎に忍びこんだ男！　それは昭夫かもしれないし、又檜垣かもしれないのだ。

闇の秘密

その夜も彼女は眠れなかつた。豪奢なベッドの上で転々と身もだえしながら——。ともすればあの夜の、虜らわれた自分の姿態が宙に描きだされる。

縛られた女、その屈辱とスリル——、躰が熱く、さわいでくるのだ。

彼女は部屋を出て、トイレットに入つた。寝室の前まで戻つてから、ちよつとあの看護婦たちの宿舎に通じるドアを眺めた。しかしそのまゝ寝室のドアを明ける。

暗い！　さつき出る時、たしかについていたスタンドが消えている。胸騒ぎを感じながら、壁のスイッチをさぐろうとした。その手がジワリと押えられる！　そして、カチリ、とドアの鍵が閉る音。

「だ、だれ!?」

あの男なのだ。——ぴつたりと背後に感じる男の体温、足がもつれて、彼女は思わず前にのめつた。その両足を、男はグイと引き立てるのだ。

「よして——よして！」

だが、霞はかすかな戦慄と、かすかな期待におの〳〵いている。この男は、又私を残忍に縛り上げようとするのだ——。

「だれ？　ねえ、あなただれなの？」

答はなかつた。

信じられぬことだが、こんな夜々が続いた。なまめかしく秘密を孕んだ未亡人の寝室なのだ。暗闇の夜だけ、男はひそかに訪れてくる、——誰とも知れぬ男が残してゆくのは、あのかすかなクレゾールの匂いだけ——。

晝間も彼女はうつら〳〵と過した。あまりに怪奇な夜に慣れて、晝の陽の光は煩わしくさえあつた。

それに、昭夫にも副院長の檜垣にも、其他の男たちにも、顔を会わせるのが面映ゆく、嫌わしかつた。その裡の誰かは、当然、あの男に違いないのだから、……それは霞未亡人の、女の誇りも虚栄も忘れた、夜の構図を知つている男なのだ。

それが誰だか、彼女は知らない。彼女が知つているのは、ゴック太いその右手。それは丁度マムシの頭のように、先が太くしなつている。そして、たしかに中指よりも薬指の方が少しばかり長い、不思議な特徴を持つた指なのだ。

（終焉）

放恣な夏が去つて初秋が訪れて来る。風が立つて、女のおくれ毛にもひそやかに、その気配がたゞようのだ。

霞未亡人は池の端に立つている。その足許に紅荻が倒れて小さな花々を見せていた。誰か背後を通つた。

「あ、山崎、おまえ、体の方はどうなの？」

彼は美しい女主人の前で小腰をかゞめた。

「へえ、もう、どうもいけませんで――」

未亡人は肯いて、かすかに眉根をよせる。青黒い皮膚、疲れた生気のない表情、それはみんな癌の末期の症状なのだ。山崎というその五十男は、胃癌で行き倒れ同様にこの病院に収容されて、いくばくもない残りの生涯を、癌の研究材料としてこの病院に飼われている。

病院の雑役をしながら、死ぬ日が来るのを待つている。そんな痛ましい人生もある。しかし過去も知れないような、この無口で醜悪な容貌の男を、能登病院の人々は誰も気にも留めてはいない。

「義姉さん！」

病室にそつた花壇の向うから、白衣をつけた昭夫が駈けてくる。

「義姉さん、御加減でも御悪かつたのですか？」

「いゝえ、どうしてかしら……」

「なんだか、少し窶れていらつしやるから――この頃、義姉さんは少し変つた感じだなあ」

無言で微笑している霞未亡人の手を、昭夫が握つた。それをふり拂おうともせずに、霞はジッとその昭夫の指を見る。細い、すんなりした、女のような指なのだ、違う！　それに、やはり薬指の方が短い、尋常な手なのだ――。

「ねえ、義姉さん、何時かの話、僕、又伯父さんから催促されちやつた……」

「……」

「それとも義姉さん、誰か恋人でもいるのかな？」

「そうかも知れなくつてよ……」

霞は複雑な微笑を見せた。だが、その笑顔がやるせなくゆがんでくる。恋人と呼ぶには、あまりに妖奇的であり、つかまえどころがないのだ。

それから二月近く、もう十月の半ば、母屋のホールにあか〳〵と灯が輝いている。上気した人々が群れあつて、気取つた背広がその間を縫う。

能登病院の創立記念日に名を借りた、霞未亡人主催の極く内輪のパーテイだと云う。私服で窮屈そうに裝つた看護婦たちの間に、その霞未亡人が落着かぬ瞳で立つている。

藤色地に黒と白の狂い唐獅子をあしらつた訪問着。それが青白い顔色を凄艶に浮き上らせている。帶は黒地のつゞれ織に思いつきり大膽に深紅の緋牡丹が織出されて、細い胴を締めている。

パーテイに慣れぬ人々の視線の中心で、霞未亡人はよくはしやぎよく踊つた。日頃はろくに話をしたこともない助手や、薬剤室の者や事務員までも誘つては踊るのだ。如何にも陽気に、この集りをたのしんでいるように見えた。

だが彼女は、踊る度に失望を繰りかえしている。この男でもない――。右手の指に触れてみるまでもなく、彼女にはそれが判つ



た。あの男は一体病院の何処にいるのだろう？　たしかに院内の者に違いない、それなら確かにこのパーテイの中に姿を見せている筈なのだ。入院患者は、みんな癌で死に瀕している者ばかりなのだから……

霞未亡人は次々とパートナーを代えて踊る。それは美しいが、なんとなく妖気を孕んだ姿だつた。

どうしても彼女は、あの男をみつけ出さなければならなかつたのだ！　彼はもう一月以上も訪れて来ない。夜毎、灯りを消した暗闇の寝室で、美しい女体がもだえながら待ち焦がれていると云うのに——。

だから、再び未亡人の寝室に不眠の夜がくりかえされる。彼女はどうしてもあの男をさがし出さなければならないのだ——。顔も名も知らぬ男を、彼女の体だけが知つているその男を、どうしてもさがし出さなければならない！

しつこくまといつく昭夫を五月蠅そうにふりきつて、霞未亡人は次々に院内の男たちと踊つた。だが、失望がくりかえされるばかり——、美しい額が蒼白くかげつてくる。

今夜、発見出来なかつたら、永久に彼を失うことになるだろう——。

未亡人は壁ぎわの椅子で談笑している副院長の檜桓の前に立つた。

「檜桓さん、踊つて下さらないこと？」

「いや、僕はどうも……、貴女の足を踏んづけちやいますよ」

身だしなみのいゝ、四十男の檜桓は、本当に困つたような笑顔を向ける。霞はその手許に、ジツと視線を止めた。だが判らない、パイプを握りしめて、その指の特徴は見えないのだ。

それまでにも、彼女は時折檜桓の指を注視したことがある。だが彼の指の特徴は何時もたしかめられなかつた。それが彼女には、檜桓が故意に指をかくしている、とも思われるのだ、気のセイか、薬指が長くも思えるのだ。

この人、檜桓があの男なのだろうか——この研究熱心の副院長が——。檜桓には妻も子もある。だが、檜桓があの男だつたら、あたしはすべてから、彼を奪つて仕舞うだろう！　踊りさえすれば、万事は判る——。「ねえ檜桓さん、踊つて下さるわね？」

「弱つたなあ——、ぢやあ、後で御怒りになつても知りませんよ」

彼は立ち上る。彼女は昂つた瞳で彼を見た。

だが、丁度その時、当直らしい白衣の看護婦が小走りに近づいて来た。「副院長！」

なにかヒソ〳〵と囁くのに、檜桓は肯いて答えた。

「ヨシ、すぐ行く」

「あら、どうなさつて？」

「いや、どうも、折角のチヤンスですが——、あの病院の雑役をやつていた、施療患者の山崎が、一月ばかり前からとう〳〵倒れましてねどうも今夜はダメらしいのです」

喋りながら、無意識に顎の下に当てた右手を、未亡人は見た。この人ではない——

病院に急ぐその後姿を言葉もなく見送つた。彼でもない。それなら、あの男は一体、何処にいるのだ——。男女の笑声や音楽が、今はたまらなくいらだゝしい。

「あッ！」彼女は、短く叫んで、棒立ちになつた。

山崎、……一月前から倒れた——。まさか、まさか山崎が……

だが、彼女は飛び出すようにホールを出た。長い廊下を、袂をひるがえしながら、パタ〳〵と走る。そのまゝ、施療病室に駈け込んでいた。

暗い電気の下で、白衣が二、三人かたまつて、檜桓が注射を打つている。その人々が驚いたように不意の闖入者を見た。暗く、みじめな施療病室には、靄未亡人の姿はあまりに華やかだつたのだ。

彼女は瞳をすえて、おそる〳〵ベッドに近づいた。其処に横たわつている。瀕死の病人、青ぐろく乾いた皮膚、そして醜悪な容貌。その落ち窪んだ眼。

こんな病み窶れた、醜い男が、あの闇の中の男だつたのだろうか——。

力なく投げ出された手を見た。そして、あゝ、中指より薬指が長い、あの不思議な手を彼女は其処に見たのだ！

「あゝ！」

殆ど無意識に、その指をとつて、彼女は唇にあてた。閉じた瞼から涙が流れ落ちる。唇は知つていた。

「あゝ、あんただつたのね？」

臨終の病人が、かすかに笑つたようだつた。

それにしても、不治の胃癌を宣告されたこの五十過ぎの男が——。

呆然とつゝ立つた人々の前で、靄未亡人はリノリユームの床に紙のように崩れ伏した。



續・悦虐の部屋

やわ肌を責めて……

多賀ちやんと私との交情は不思議な溶解力をもつて秘密のうちに續いた。それは縛りの魅力につながれた奇妙な密會だつた

喜多玲子

多賀ちゃんの轡の女体の中に、私が触れる以前から、そのような被虐的なものがあつたのかどうかは判らないけれど、鬱積した私の激情の流れが、あの夜の行動になつて現われてからと云うものは、時とすると多賀ちやんの方から、そつと私の夜の床に忍んで来る様なこともあった。

それは、何と云つていいか、奇妙な同性愛なのであつた。

未亡人と云う孤闇の苦悩が、そのどうにもならない慾情のはけ口を、こんなところに見出したのだと私が言い譯をすれば、世の中の人々は笑うだろうか。

多くの男性の中に身を置きながらも、私は孤獨であつた。その細々とした生活力に反して、悦虐の周期率はたえまなく私の夜の慾望を襲い、それは時には、獨り寢の夜具の中で声をあげて狂い廻るほどの、どうしようもない切なさなのである。

私は、縛られた女の絵を描きながら、知らず知らずのうちに自分自身の花を愛撫しているのに氣が付くことがあつたが、それは娘の頃、西六條の家の土蔵の中で、裸身に繩を巻きつけた妖しい絵草紙を見ながら、桃夢に浸つたあの情感に似ていた。

愛しあっていた夫との流転の生活のうちには全然忘れていた行爲が、夫に置き去りにされてから再び私の日常に復活したのでもあろうか。

勿論、悦虐の部屋のグループの中に、私のそのような、絶えまのない、はげしい情熱を満して呉れるべき男性は幾人もいるであろうし、それを根底にした誘惑も、そして機会も数え切れないほどあるのだけれど、私はそれ等の人々の中の誰かに身を投げ出すことがお

そろしかった。

おそろしい、と云う意味は相手の男性が私の身体に必要以上の危害を加えないだろうか？とか、身体中を傷だらけにされるのではないだろうか？　と云った様なことではなくて私自身の、底なし沼のような情熱がせきを切ってその対象に燃え上ったとき、理性も何も忘れ果てて、何処まで燃え上り燒きつくすか知れないその慾望のはげしさがおそろしいのである。

私には、その必然性がよく判っていた。

悦虐の愛撫には身も世も忘れ果てて、七色の虹の中に気死して行く私の性格であってみれば、そのような愛撫の表現を持つ男性に対しては一も二もないかも知れない、だから、そんな男性が怖いのであった。これは一種の矛盾とも云い得よう、しかしそれは実感であった。

一番好きな人の前でも、

「あなたなんか、大きらい」

と云う反語で意志表示をする同性の心理がそのまま私の人生にもつきまとって離れないでいて、一番牽引力を感じるものを、怖い、と云う言葉で表現しているのだと、誰かが考えて呉れたとしたら、私はその人に向ってこう云うつもりでいる。

「あなたなんか、大きらい」と。

多賀ちやんと私との友情は不思議な溶解力をもつて秘密のうちに続いた。

あの便所の展覧会のことは、あれつきりになつてしまつていたし、余分な収入を失つた私の生活はますます苦しくなつていつたけれど、反面、多賀ちやんを得た悦びは、それが一つの慾情のはけ口になつて、私自身は以前ほども苦悩は感じなかつたとも云える。

二階の四疊半を間借りしている私と、その家の娘である彼女とは、人の好い彼女の母親の眼を盗んで、奇妙な密会を続けた。

「おねえさん。今日遠藤さんが変なこと云つてたわ」

或る夜、私の部屋にいつものように寢間着のままで上つて来た多賀ちやんが、ふと思い出した様にそんなことを云つてコロコロと笑つた。

「どんなこと云つてたの？」

そう聞き返した私の間には笑えず、夜具の中に入つて本を読んでいた私の枕元に膝をくずして坐り込むと

「此の間の、遠藤さんからの手紙、読んだでしよう。どうして返事書かないの？　おねえさん」

と別なことを云つた。

「でも、あんなこと、おかしいわ。返事なんか書けるもんですか」

「あの手紙、どんなことが書いてあつたの？」

「……さあ……」

「でも、私が遠藤さんに頼まれて、おねえさんに渡したんでしよう、返事が欲しいって云うのに、おねえさんが返事を書かなかつたらかと思つて私が手紙を渡していない様に思われやしないんだもの」

「そうかしら」

「そうよ。あの手紙、一種のラブレターじやないの？　今までよく此の部屋に遊びに来た遠藤さんが、近頃顔を見せないでしよう。常のことなら直接逢つて話をすればいいのに改まつて手紙を書くのおかしいわ。それに今日変なことを訊くし……」

「だから、どんなことを云つてたの？」

私は枕元の本を伏せて、半身起き上りながら多賀ちやんの柔らかな手首をにぎつた。

遠藤さんはあの便所の展覧会の発案者であつた。そして一番多く私の絵を持つて帰つている人でもあつた。璽に似た顔をした奥さん



と、十五の男の子を頭に三人の子供のある質屋の主人なのである。

その人が私のどん底の生活を援助することを條件にして、私を縛らせてほしい、と云うのであつた。

お酒も煙草もものまない。

表面物堅く見える遠藤さんの世なれた風貌には、通り一辺の好感は持てるけれど、愛情とは全然別のものであつたし、二度も多賀ちやんを通じて、私の許にもたらされた遠藤さんの手紙には、私は一度も返事を書かなかつた。肉体の中に巣喰うマゾヒズムの悪魔と戦いながら、私のそこはかとない理性が、札束で作つた繩に身体を縛られてしまうことを嫌悪したのかもしれないし、男性のエゴイズムに対する見せかけだけのレジスタンスだつたかも知れない。

「だから、どんなことを云つてたのよ」

「いやよ、おねえさんはずるいわ、返事をどうするの、あたしが困るじやないの」

と、今の私には考えも及ばないことでもあつた。

女ひとり、食べたり食べなかつたりの生活をしながら泥絵具をこね廻していることより思いきつてそんな世の中の流れに身を投げた方が、いずれの面でも一番気楽なことかも知れないのだつたが、その対象は遠藤さんではなかつた。愛情を感じない人にもたれかかるよりも、私には食べられない日があつてもいいから、私自身の世界がほしかつた。

それに第一、愛情を感じていなくても、繩を根底にした愛撫には、私の肉体は見る見る崩れてしまうことだろう、それが怖ろしかつた。

三度も多賀ちやんを通じて、私の許にもたらされた遠藤さんの手紙には、私は一度も返事を書かなかつた。肉体の中に巣喰うマゾヒズムの悪魔と戦いながら、私のそこはかとない理性が、札束で作つた繩に身体を縛られてしまうことを嫌悪したのかもしれないし、男性のエゴイズムに対する見せかけだけのレジスタンスだつたかも知れない。

「だから、どんなことを云つてたのよ」

「いやよ、おねえさんはずるいわ、返事をどうするの、あたしが困るじやないの」

「そりやア、あなたの勝手でしよ、私の方から手紙を貰つて来て下さいって頼んだ訳でもないのに。さア、どんなこと云つてたのか云わないの」

「いやよ、いやよ、云うもんですか」

「多賀ちやんは可愛い顔してて案外強情なのね、ようし、云わなくつてもいいのよ、今あなたのからだに訊ねて見るから……」

「いや。いやッ」

それは突き上げる様に襲つて来た悦虐の誘惑だつた。今まで繰り返した問答はその爲のものだつたのかも知れない。

夜具の上に押し倒して、上からのしかかる私をはねのけようとする多賀ちやんの桃色の寢間着の襟元から、ふつくらした乳房が柔らかな蔭を作つてこぼれた。

ぞくぞくと身内から湧き上つてくる悦虐の血潮が、私のか細い指先にまで通つて、電流の様なものがたえず肉体の内側を走り廻つているのをいつもの様に感じながら、寢間着の襟元から、背後に捻じ上げて重ねた多賀ちやんの手首を左手で押え、右手で自分の腰紐をほどく。

つややかに、白く輝くあらわな上半身を見降しながら、もだえる手首に腰紐をきつちりと巻き付け縛り上げると、今度は多賀ちやんの寢間着の紐をほどいてつなぎ合せ、胸乳のあたりを二巻き三巻きしめつけた。

「さア、起きるのよ。みんな脫がせていぢめてあげるわ。云わなくてもいいから、たんと強情張つてなさい」

「あツいやツ、おねえさん、おねえさんツ」

私は虐げる者の快感に酔いながら、多賀ちやんを夜具の上に引きすえて、それから部屋の隅にあつた筆筒（ファッツ）を手元に置いた。

それは、夫が私に教えた通りの悦虐の遊戲であつた。私があの頃、膝の前に並べられてゆく一つ一つの責め道具に身を縮め、毛穴を震わせたのと同じ気持で、此のはたちの肉体は、総身を鳥膚立てているのであろうか。

だが、ふと常と違つた、彼女の表情を私は見た。

それは、いつもの、最後の悦びに震えるうつとりとした眼ではない。

「どうしたの、どうしたの多賀ちやん？」

私は半ばおどろいて、口を押えた手を離し抱き起した。

「おねえさん、あ、あたし、ああ」

「どうしたの。私がいけなかつたのかしら」

「……ちがう、そうじやないのよ、お腹が痛い」

「え？　どこ？　どのあたり。此処、このへんなの？」

今までにこんなことはなかつたし、私は急いでいましめを解いて夜具の中に抱き入れ、痛いと云う箇所を撫ぜ廻したりさすつたりしたが、これが多賀ちやんを入院させなければならないほどの大変なことになろうとは、その時は夢にも思つていなかつたのである。

楽園のうしろには、大きな穴が暗黒の口を開いて待つていた。

痛みは、臍の周囲に局限している様子らしく、それが、キユンメル氏圧痛点とか云う虫様突起炎の前兆であろうなどとは知るよしもなかつたし、少し熱つぽい彼女の體温も、刺激のある遊びの故か、ただの腹痛の爲ぐらいにしか考えていなかつたのが唯一の失敗でもあつた。

それから——

多賀ちやんは夜中じゆう、私の床の中で痛みを訴え続け、何も知らないおばさんは、私の介抱を感謝しながら、一生懸命に一人娘の枕元で神様を祈り明かした。

私は、神と云う存在を信じない女なのに運命と云うものには何か知ら一種の皮肉を感じることがある。

朝早く起こされて、しぶしぶやつて来た老医は私の耳に〝盲腸です〟とささやいた。

「速刻、入院の手続きをしますから……。こりやア、直ぐに手術をしなけりやア…」

そう云つた老医の言葉が石炭酸の匂いと共ににいつまでも私の耳もとから離れなかつた。

湯の入つた洗面器を階下に持つて降りながら私は、多賀ちやんやおばさんに対して突き刺す様な責任を感じていた。

多賀ちやん！　かんにんして。

おばさん、ゆるしてちようだい。

そんな私の気持を行動に現わす爲には、どうしても入院の費用を私の手で何とかしなければならないのであつた。

私は、ふと遠藤さんの脂切つた顔を思い浮かべた。

（未完）

喜多玲子さんが赤裸々に綴る半生の記「**悦虐の部屋**」は愈々凄艶な迫力を盛り上げてゆきます。本号は作者の都合で小分量となりましたが、次号は既に執筆中であり、その品格あるサヂックな文脈を長篇として、読者にお送りする計画となつております。御期待下さい。

☆☆ ある手紙 ☆☆

美佐子御姉様

昨日は泣いて帰つたりして、御免なさい。

顔をかくしたまま、御挨拶もしないで帰つてしまつて、御怒りになつていらつしやるのではないかと、今になつて心配でなりませんの。

もう百合なんかと遊ばないつて、呆れておられに、何時もとガラリと変つた、男のように乱暴な御言葉が、どうしてだか百合には、ギユツと胸をつかまえられたように――。

御姉様、ですから、御姉様が御望みになることでしたら、百合はどんなにでも……、あの、昨日「裸にしてしまいたい……」とおつしやつたことも……、その時はきつと百合、又泣いてしまうかもしれませんけれど、でもそれはきつと、悲しいからではないのだと、今からわかつていますの。

泣いてばかりいる百合が、本当は御姉様の手で、乱暴に惨酷に虐められたい、そのことで、一層御姉様と結びつきたい……と願つていることを、わかつて、お姉様――。

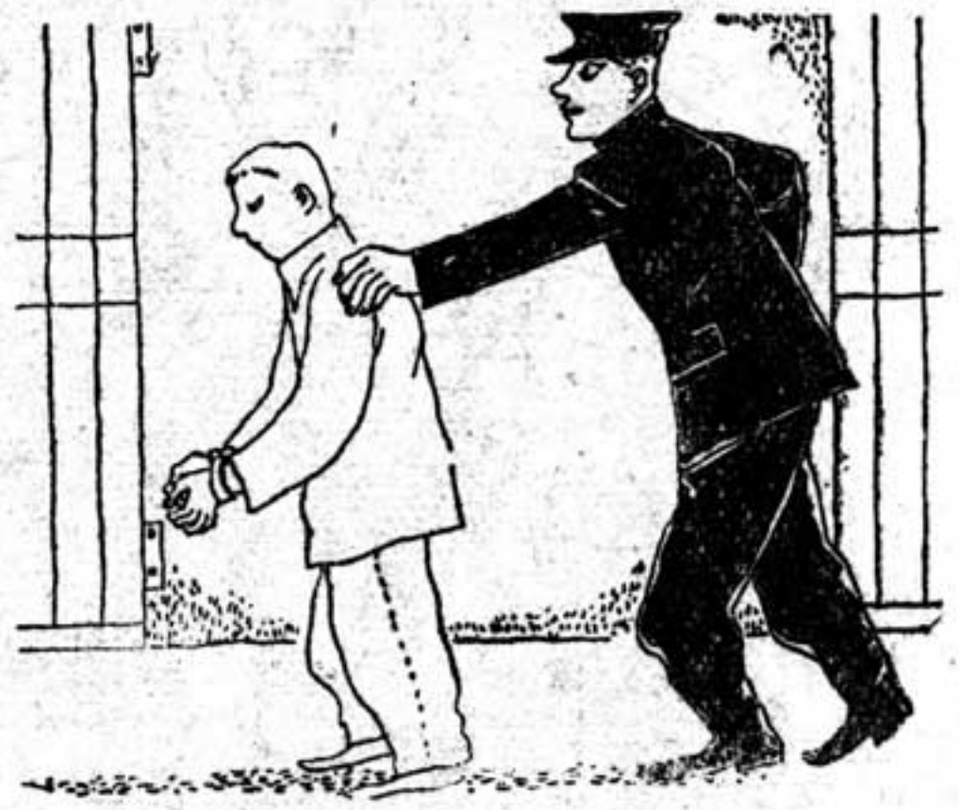
百合

特集・囚獄の記錄

少年監獄

だが、私がその樫の檻を半分も切らぬうちに、もう次の巡視が私の空の寢床を發見したのだ。警鐘が亂打され騒然たる氣配が漂つて來た……

安野洋治



人が少年時代の想出、快活だつた中學生活などを回想するのを聞くと、私の惱裡に必ず描き出される情景がある。

イガ栗頭、木綿国防色の作業衣、素足そして板張りの廊下に正座した私の姿なのだ。それは看守室の前の廊下だから勿論、窓越しに監視されている。足一つくずすわけにはゆかない。膝の上に両手を置いて微動さえも許されない。

晝間はまだいい。しかし深夜、しかも雪が降りしきる嚴寒の頃は、事実骨身に徹する辛さだつた。この時は缺食だからよけいに寒さがこたえる。膝からだんだん知覚がしびれて意識が朦朧としてくる。そして知らぬうちに前に倒れてしまう。勿論、巡視の看守にひきずり起され、氷を張つた冷水を頭から浴びせられるのだ。

戰後例の「曉に祈る」の池田隊長のノルマ事件が問題になつた。衆議院の公聽会でも、人權擁護の建前から調査を行つたが、私は新聞で見て馬鹿馬鹿しいと思つた。何でも明治年間に創立された某市郊外にあつて、相當歷史が古いと云うことだつた。

私たちが收容された少年審判所は、関西年監獄の記憶の一つだ。

證人ならば幾人でもいる。不具者になつた者は元より、肺炎、栄養障害其他で死亡した者の数も相當にのぼる。私の左手は頭から上に上らない。電車の釣革などにはつかまれないのだ。これも躰が覚えている少

私が入所していたのは、丁度大平洋戰爭の末期で、昭和十八年だから、日本にとつ



ても最悪の時代だつた。例の予科練などがもてはやされた頃だつた。審判所に入れられた不良少年などは、人間扱ひをしてはくれなかつた。

看守たちは殆ど陸海軍の兵隊上りで、頭は鈍いが、胸つ節は強いと云う連中ばかりだつた。そして環境柄、ここの看守を一年もしていると、完全なサヂストになるものらしい。彼等は外に用事はないのだから、四六時中、凄い眼付で監視している。

当時は十五人づつ一班に編成され、私はその第八班だつた。ここでは作業其他すべて班単位で競争させられる。他の班に比べて成績が劣ると、即座に全員懲罰を喰らう仕組みである。これは彼等にとつては賢明な方法だつた。

例えば炎天下の草取りなどでも、他の班におくれると一大事だから、班長などは必死の号令をかける。

「あと三十分！　全員死力をつくせ！　五十九号、なにをボヤボヤしるかッ」

番号のついた作業衣が汗まみれで、白く塩が吹き出している。横隊に並んで草取りをするのだが、疲労で前にのめりそうになる。犬のように歯をむき出しにして喘ぎながら、必死の力を振り絞つても作業後、看守の構評があり、

「第八班は敢闘精神に缺ける。作業能率が至つて低調だ。全員馳け足！」

今にもブッ倒れそうに整列していても命令一下、所内を二列縦隊で馳け足しなければならない。

特に意地の悪い看守は命じたまま所内に入つて仕舞う。しかし、命令なく中止したり、速度を落したりすれば大変なことになる。頭の中にとり扱はれなくなる。世間の眼とも審判所の当事者の眼も、冷めたい軽侮でしかない。それはまつたく酷薄の二字につきた。

だから、ここに来るまでは、多分に少年らしい純真を保つていた者でも、半年も生活すれば、札つきのひねくれ者に、ならざるを得ないのである。

私の場合は、作業後だと所内三周すればもう殆ど眼が見えなくなる。頭の中に赤や黄の火花や、三角や四角の幾何学模様が点滅する。倒れる時には意識はない。

こうして落伍した者は、先に述べたように、看守室前の廊下に正座を命じられる。この場合は缺食だつた。当番の者が食器などを持つて、前を通つたりすると腹が鳴つて、ひとりでにお腹がついてゆきそうになる。笞刑よりも何よりも残酷だつた。

このようにして体力の弱い者は、常に刑罰に晒らされる。しかも、私はどうしてもこんな審判所の規則に従順になれず、ことある毎に反抗したから、実際今、生き残つているのが不思議なくらいなのだ。

これで家庭にあれば生意気ざかりであり多感な少年期として夢多く成長するものを一度つまづいて審判所に入れられたが最後人間として取り扱はれなくなる。世間の眼も審判所の当事者の眼も、冷めたい軽侮でしかない。それはまつたく酷薄の二字につきた。

だから、ここに来るまでは、多分に少年らしい純真を保つていた者でも、半年も生活すれば、札つきのひねくれ者に、ならざるを得ないのである。

私はある時、所内で某看守に対して、敬礼を故意に怠つたと云う理由で、懲罰室に放り込まれた。近視だつた私の弁解などは勿論とり上げられない。

此処は、軍隊の重営倉に相当する。二坪ばかりだが、コンクリートの床で、冬の寒

さ、夏の暑さは論外だつた。小さな窓には嚴重な鉄格子がはまつて、多は吹雪が吹き込むし、夏は遠慮なく西陽がさしこむ。

この室内にあるのは小さな便器一つだつた。其処に三日も投げ込まれると、どんな頑健な者でも一貫匁は痩せて仕舞う。

私が入れられた時は真夏だつた。懲罰室入りを命じられた時には、私はまだタカをくくつていた。作業に出なくていいだけ、見つけものだと思つたのだ。

まづパンツ一枚にされてから、懲罰用の責め板を、胸と背の両面に当てられる。これは丁度膝から首の下まで程の長さ、つまり一尺二、三寸、横は八寸ばかりで、頑丈な木で格子に組まれている。丁度炬燵のヤグラのような感じの二つの板だと思えばいい。

これを胸と背に当てられ、両手は後に廻して、しつかりとこの格子にくくりつけられるのだ。用便の都合上、足は自由にしてある。この姿のまま私は懲罰室に放り込まれたのだ。

両面に厚い板を当てられているのだから、否でも応でもピンと直立不動の姿勢のままである。一秒間でも背中を曲げることは出来ない。自分の躰だと云う感じはない。これがどんな苦業であるかは、とても常識では計り切れないことであろう。

当人の私でさえ、始めのうちは、まだこの刑罰の過酷さに気が付かなかつたのだから——。

まづ、縛られた両手が腫れてくる。だから臓縄が肌に喰いこんで、身動きする度に、自然に呻き声が洩れる。次に腰と首が痛くなり、殊に首が重くなつて、どうにも自分の頭がささえ切れなくなる。

自分の頭ながら、どうにも扱いようがなくて、私は気が狂いそうだつた。なんとかしてこの物体から離れたい、足も手も全部切り落してしまいたいとそればかり考えるようになる。こんな恐しい責苦が、又とあるものだろうか——。

私の刑罰は四十八時間だつたが、第二日目の夜明け頃から、つまり二十四時間経たぬうちに、私はもう這うことさえ出来ぬようになつていた。

縛られた両手は元より、膝も足も、顔さえも腫れ上つていた。時々、看守が覗き窓から覗いて、

「どうだ。居心地は？　気入つたらゆつくりしていいぞ！」

と声をかけるのさえ、二日目には聞えなくなつたのではあるまいか——。

普通、懲罰室は食事を与えられないのだが、水だけは差入れられるしきたりだつた。ところが私の場合は、看守の怠慢か、又は私が憎まれた爲に故意にされたのか、しまいには躰中のありとあらゆる個所が痺れて、自分の躰だと云う感じはない。途方もない厄介な物体に変化して、この重いやりきれない物体が、憎くてたまらなくなる。

なんとかしてこの物体から離れたい、足も手も全部切り落してしまいたいとそればかり考えるようになる。こんな恐しい責苦



水さえ一度も与えてくれなかつた。

二日目の夕刻、私が死んだように倒れていたのが、丁度窓の下で、盛夏の午後の陽が、カンカンと私の體に照りつける。全身燒きつけられて、汗が出ては乾き、又吹き出しては乾くのだ。

なんとかこの西陽から逃れようと焦つても、もう体は一寸も動けない。二日間一滴の水も飲んでいないから、口の中はカラカラだつた。咽喉がひきつつて、他の苦痛は忘れ、とにかく水を呑まなければ死ぬと思つた。

声をあげて看守を呼ぶのだが、自分では精一杯怒鳴つているつもりなのに、咽喉の奥がひつついて、もう声が出ないのだ。

「水……、水……、」

と、のたうちながら、その時、私の瞳に写つたのは、部屋の隅の便器だつたのだ。

其処にはとにかく、水分がある。もう汚いと云う観念がある筈はない。其処まで行けば水分にありつけると思う一心で私はその便器の傍まで這いよつた。

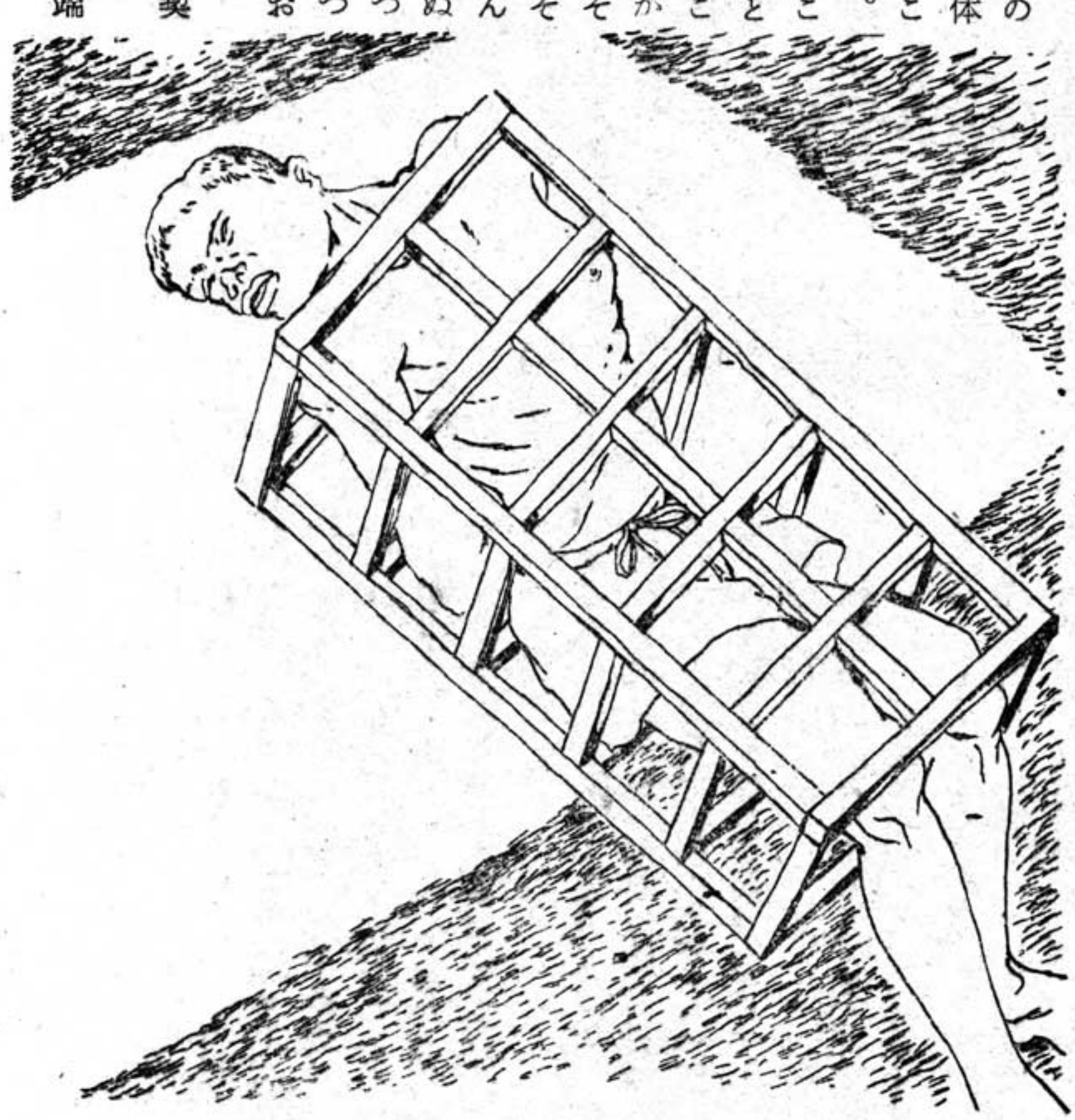
そして、昨日自分が排泄した尿を、貪ぼり飲んだ。顔中糞だらけにして——。

それはたしかに犬猫よりも浅間しい姿だつた。それから、漸く解放される三日目の朝まで、私はもう便器に用を足す元気はなかつたから、コンクリートの上に排泄してはいけないから、口の中は尿を再び体内に送りこんだのだ。

そして、これはなんとも云えぬ甘露であつたことをつけ加えておく。

それを契機として、現在の極端な汚物嗜好症の私が誕生したのだが、このことに就ては、又後日にゆずる。

この懲罰室以来、それまで多少茶目な点もあり、審判所と云う非情な世界で、尚純情な傾向を保つていた私が、ガラリと変貌





したのである。こんな所に收容された不良と云つても、もともと大した罪を犯したわけではない。

中学二年生だつた私が月謝として伯父から受取つた金を（私には両親がなく、市議をしていた伯父の厄介になつていた）失つたのが運命の転機になつた。

月謝の納期は迫るし、伯父に叱責されることを恐れて懊惱していた私が、思い余つて無分別にも、土蔵にあつた、従兄の空気銃を持出して友人に金を借りたことが発覚したのである。

「市議をしている自分の身内から、時局柄こんな不良を出して申訳ない。厳重に罰して貰いたい」

と云うのがその時の伯父の口上だつたが、実は伯父が、私の亡父の遺産を一人じめして、私を厄介拂いしたのに外ならない。

こうした、余りにも過酷な審判所の日常に、私はひそかに脱走を考えるようになつた。

毎日毎日、他の少年と一緒に、看守の罵声を浴びながら作業に追い廻される。寸時も休む閑はなかつた。しかし、私はその間も、脱走のことばかり考えつづけた。

食事の時間も、床の中に入つてからも私はそのことで頭が一杯だつた。私はあらゆる方法を研究して見た。しかし、審判所員たちも、こんな苛酷な取締りをするからには、当然少年たちの脱走を考慮に入れて、警戒を怠らなかつたのだ。

作業に出た時がよいと思つたが、これは発見される率が多く、又、単独では不可能だつた。夜、消燈後の脱走も、厳重に鉄格子と錠前で装備されたこの審判所を、脱け出す出口はなさそうだつた。

ところが或る時、それは作業後の掃除の時だつたが、私は洗面所を長い柄の床拭きで清掃していた。一応拭き上げてから、看守の眼がないのを見澄して、何気なくその床拭きの柄で、洗面所の天井を突き上げた。

勿論、脱走計画の意識はあつたが、まさかその天井の板が簡単に外れるとは思はなかつた。ところが、突き上げた瞬間その個所の天井板が、かすかに浮くではないか——。

私はもう一度ここころみた。釘が外れたのか、板が老朽していたのか、たしかに板が動くのだ。私は「しめた！」と胸が震える程嬉しかつた。それから、私の脱走計画は具体的になつた。まず、何と云つても約一ケ月半ほど後になつて、慚く所内の芥捨場から、安全剃刀の刃を一枚手に入れることが出来た。僥幸だつた。それから釘二本も入手出来たのだ。周到な用意を以て、決行の夜が選ばれた。

その夜は時雨が降りしきる、十一月の末だつた。消燈後、第一回目の巡視が廻つて来た。消燈後は看守が懐中電燈を持つて、少年たちの並んだ寝床を照らしてゆくしきたりだつた。

私は第一回の巡視がすむと、すぐ身支度にかかつた。と云つても、例の道具類を身につけ、ゲートルを巻くだけだつた。

私は洗面台の上に登つて、天井板を浮かした。それは一枚だけ外れれば、どうやら痩せていた私が入れそうだつた。しかし、板はなかなか外れそうもない。誰か仲間がその個所に起きてくれれば当然発見される。二時間後には次の巡視がある。私は焦つて、犬のように喘いだ。



やつと板をズラし、足がかりのない壁を登つて、天井裏に這い上つた時には、私は満身の汗だつた。板を元に戻すか戻さぬ裡に、誰か下を通る気配がした。それはまつたく、間一髪の差だつたのだ。

やつと天井裏にもぐりこんだものの、音を立てるわけにはゆかない。看守室の上を通るかもしれないのだ。私はクモの巣と埃だらけの天井裏を這つて、明りのさす方にすすんだ。通風窓がある筈だつた。

ネズミの走る音にもおびえながら、やつと一尺四方ばかりの通風窓を発見した時には、全身スだらけで真黒だつた。この窓には鉄格子でこそないが、一寸二分角もある樫の桟が三本もはまつている。

しかし、それさえ切ることが出来れば其処は丁度目の下に作業道具を入れる倉庫の屋根があつて、絶好の足場になつた。地面に降るのはワケはないのだ。

だが、私がその樫の桟を半分も切らぬうちに、もう次の巡視が、私の空の寝床を発見したのだ！ 警鐘が乱打され、人々が下を走り廻る気配が感じられた。ソッと通風窓から覗くと、大勢の人々が、時雨の庭を右往左往する。危くて、もう桟を切ることが出来なかつた。私は下の騒ぎを手にとるように感じながら、天井裏に横になつた。



朝になると、天井裏も幾分明るくなつたが、桟を切る仕事は中止しなければならない。私は焦燥に身が焼かれるようだつた。こんなにも通風窓の桟が頑丈だとは、計算に入れてなかつたのだ。

こうなれば、持久戦だつた。昼間は寝て体を休めた。しかし、思わぬ困難が起つた。それはどうにもならぬ生理的な排泄作用である。大便はともかく、小便をする場所がないのだ。しかし、排泄しないわけにはゆかない。

第二夜には二本の桟を切り、三本目も八分通り切れた処で、夜が明けた。もう仕事は続けられない。桟を元の通りにはめて、私は再び天井裏に横になつた。

ところが、この日の午後から、大規模な天井裏の捜索が始つたのだ。私は愕然とした。逃げ場がない！ 外に逃れた形跡がないのと、私の洩らした小便が壁にシミを作つたことが、この大捜索の原因だつたのだ。

発見されたら、殺される！　私は必死で逃げ廻つた。そして、結局、あの八分通り切り上つた通風窓から、半身を乗り出した。とにかくこの天井裏から、逃れたい一心だつた。追手はもう私の姿を発見していた。

捜索隊の手が、私の躰にかかろうとする瞬前に、私はこの通風窓から下に転落した。憧れの外には出たものの、私は同時に失神していたのだ。

気がついた時には、私の周囲には看守や仲間の者たちが、グルリと取巻いてもの〳〵しく覗き込んでいる。柔道自慢の看守が活を入れたらしく、

「コラツ！　逃亡なんぞしやがつて、何処まで度性骨が曲つてるんだ！」

と、耳の元で怒鳴つたが、私は左の肩と後頭部に焼けつくような痛みを感じて、再び気が遠くなつてゆくようだつた。

それから後のことは、御想像にお任せしよう。私の左手が不具になつたのも、実はその時の記念なのだ。それから終戦後に出所するまで、私は誰とも一言も口を利いたことがなかつた。そして、完全な偏執者の私が出来上つたのだ。

（鎌倉　富佐子）

愛讀者通信

風俗草紙創刊号を手にして、飛び立つ思いでございます。そして折角与えられました、この私たちの交歓のサロンを、たくさんの方々が御利用下さるようにと、ひそかに願つております。

と、申しますのも、実は私、御仲間が欲しいのですわ。今まで一人で楽しんで居りましたけれど……。女のクセに、とても恥しいのですけれど、誰方かグロテスクな絵画、見世物、文献、其他あらゆるグロなものに、興味を御持ちの方はございませんでしようか？

私、現在二十七歳独身ですが、十二、三年前から（初潮前後より）この方面に特殊な興味を抱き始め、コレクションと申すほどではございませんが、量だけは相当に蒐しました。

しかし、大変視野が狭く、殆ど日本のものばかりですので、西歐諸国其他の此の種のものに御詳しい方、御指導下されば、全身全霊を以て奉仕したいのです。それがどんなみじめな仕事でも、どんなに軽蔑されましても、小生にとつてはたまらない喜びなのです。容貌も醜い小生には、夢に過ぎませんが、この気持を抑え難くペンを採りました。

（大阪府　T・O生）

★

小生は事情あつて、みじめな生ひ立ちだつたためか、身分ある、高貴な女性に対して、止み難き憧憬を感じて、困惑する程に悩んで居ります。

現在某工場現場勤めのために、理想の女性に接触する折もなく、仕事から解放されると、さまざまに夢を描いているばかりです。勿論、小生は肉体関係など望まず、ただ、美しい上流女性に奉仕したい思いで一杯です。

こんな虫のいい希望が満たされるとは思えませんでしたが、耐え難い思いでペンをとつた次第です。尚、小生二十三歳で、小柄な方ですが、容貌も普通以下であることを、勇気をもつて付加えます。

小生の理想としては、威厳ある女性、気品高き夫人などの御手許で、願使して頂ければ、全身全霊を以て奉仕したいのです。それがどんなみじめな仕事でも、どんなに軽蔑されましても、小生にとつてはたまらない喜びなのです。容貌も醜い小生には、夢に過ぎませんが、この気持を抑え難くペンを採りました。

（大阪府　T・O生）

夏が来れば思出す、いや、海辺や水着を見ると思出すのだ。

東京の知人から紹介されて、私は或る夏千葉県某海岸の氷屋にアルバイトに行つたのだが、三日目にはもう饐になつてしまつた。

「客には無愛想だし、容器は破るし、こんな無器用な男ぢやどうもならん」

氷屋の親爺に無慈悲にそう宣告され、私は仕方なしに、八月の炎天をぼんやり歩いた。東京に帰えるには金もないし……、とさすがに心細くなつていると、

「あの……」

と、呼び止められた。振りかえると、派手なサンドレスの、眼がさめるような令嬢なのだ。

「失礼ですけれど、アルバイトをなさるおつもりはございません？」

「はあ……」

「もし御承知でしたら、明朝の九時、あそこに見える岩の向う側にいらしつて下さい。日当は千円差上げます、では……」

美しい令嬢はそれだけ云うと、私の返事も聞かず、颯爽と人ごみの中にまぎれて行つてしまつた。

翌朝、勿論私は時間通りに、指定の場所に行つた。驚いたことには、其処には三人の令嬢が私を待つていた。若く、美しい、ピチ〳〵した水着姿の三人の女性——。

「な、なにをするんです？」

「日当を出して雇つたからには、私たちはアッと云う間にパンツ一枚にされ後手に御主人よ、大人しくするの」

「お金で買われたクセに——」

これが荒くれた男たちなら抵抗もしたゞろうが、何しろムン〳〵するような水着姿の若い女性たちだから私には始末が悪い。



★コント★

海濱の暴君

竹岡杏平

「どう？」

腕組みした、昨日の令嬢がオド〳〵して立つている私を顎でシヤクつて見せた。

「OKだわ、さあ、始めましようよ」

それから、驚いたことに、三人の令嬢たちは、いきなり私のシヤツやズボンに手をかけるのだ。

「な、なにをするんです？」

「日当を出して雇つたからには、私たちは御主人よ、大人しくするの」

「お金で買われたクセに——」

これが荒くれた男たちなら抵抗もしたゞろうが、何しろムン〳〵するような水着姿の若い女性たちだから私には始末が悪い。

アッと云う間にパンツ一枚にされ後手にピチ〳〵した水着姿の三人の女性——。

一人の令嬢は岩の上から、縛られた私を蹴り落した。そして無邪気な声をひゞかせて笑うのだ。それから人気のない岩かげなのだ。

一人の令嬢は岩の上から、縛られた私を蹴り落した。そして無邪気な声をひゞかせて笑うのだ。それから縄尻りをとつて、嬉々として海の中に引つぱり込む。

私は泳ぎには自信があつたが、何しろ縛られているから躊躇すると、この女性たちは無慈悲にグイと引ずり込む。三人の令嬢たちが乗つたボートに縄で結びつけられ、一時間余りも海中を引ずり廻された時にはもう頭がぼんやり霞んでしまう。

私は美しいこの令嬢たちが唄う、ローレライの唄声を、夢うつゝの中に聞いた。

責め體驗記

木馬責め・滑車責め

私は素早く扉に鍵を下ろすとけげんな顔の妻を
尻目に木馬を部屋の中央に引つ張り出しました
……自ら責めを體驗するマニアの記錄……

上田靑柿郎

責め道具としての木馬

木馬責めは公刑として行われたものではないらしく、私は、この計画を思いついて手もとにある文献や絵画をしらべてみましたが、木馬の形態や寸法については、いずれも首も尻尾もない「木馬」という体裁には遥かに遠いものばかりで記録したものが見当りませんでした。

嘉永年間に刊行された朝川鼎著述の「善庵随筆」や「徒然草諸抄大成」に木馬責めのことが出ていますが、代官や名主などが年貢をおこたつた百姓を拷問したときに私刑の責め道具としてつかつたもので、公刑の責め道具ではなかつたようです。

外国のものにも木馬責めの例が多く見られますが、まず、サド侯爵の三角木馬などは、手頃の木片で組立てたきわめて原始的なものですし、その他のものも、丸太を三角形に削つたものとかサド侯爵の木馬にすこし工夫を凝らした程度の、いずれも首も尻尾もない「木馬」という体裁には遥かに遠いものばかりです。

陣出達郎の小説「艶魚肌」のなかに木馬責めの場面が出てきますが、この木馬には簡単ながら、どうにか首らしいものがついているようです。が、こういう文芸作品に出てくる木馬は、たいてい作者の意図によつて都合よく創作されたものですから、実際の責め道具としての木馬とはどこか違つているようです。

木馬責めの實感

いずれにしても、木馬に跨がせられた被虐者（女）の足が床から二尺前後は離れていなければならないのです。これは、被虐者の足首に重石とか分銅を結びつけて、自由を奪つておくためで、同時にこの重石なり分銅は被虐者の軀に安定をあたえる役目をするので、そのまゝ木馬の上の被虐者に鞭打ちや擽り責めができるわけです。

この場合、木馬の上の被虐者は痛さと、木馬から転げ落ちまいとして腰をよじつて軀の中心をとろうと身悶えるので、その煽情的な姿態に、加虐者はサディズムな悦びを二重に満喫することになるのです。

大体、こんなことが想像されるので、私はおよその形態と寸法を考えてこの責め道具をつくつてみたのです。首も尻尾もない、まるでハードルの合のようなもので、それに白木

のまゝでは責め道具としての雰囲気に乏しいので、薄墨色の塗装をほどこすことにしました。

「あら、なんですの、これ？　ハードルの台にしては変だし……」

案の定、寝室の隅に置いたこの異様の物体を見て、妻の麗子が訝しげに小首をかしげていましたが、やがて捜るような視線を私の方へうつしたのです。

大膽にカットしたブラウスの胸から乳房の谷間がチラリと覗いて、それがひどく官能的です。妻は、ブラウスの下で大きく揺れる隆起のあたりをおさえるようにして、ククと笑いをこらしながら、

「わかったわ。それ、三角木馬っていうんでしょう。でもおかしいわ、首も尻尾もないお馬なんて。ほつほつほゝゝ」

いつもなら、新らしい責めをおねだりして強い刺戟をもとめる妻なのですが、なぜか、きようは、この新らしい計画に同調の色を見せないで、たゞ全身をゆすつて笑いころげるばかりなのです。

「何がそんなにおかしいんだい。首も尻尾もない木馬がどんなに素晴らしい乗心地か、笑うんだつたら、その木馬の上で存分に笑つてごらん」

私は素早く扉に鍵を下ろすと、ベッドの上で笑いつゞけている妻を尻目に木馬を部屋の中央に引つ張り出しました。

「さあ、こつちへきてごらん」

私は用意の細引きを取出すと、むつちりとこの頃いちだんと肉付きを増してきた妻の手首をつかみました。

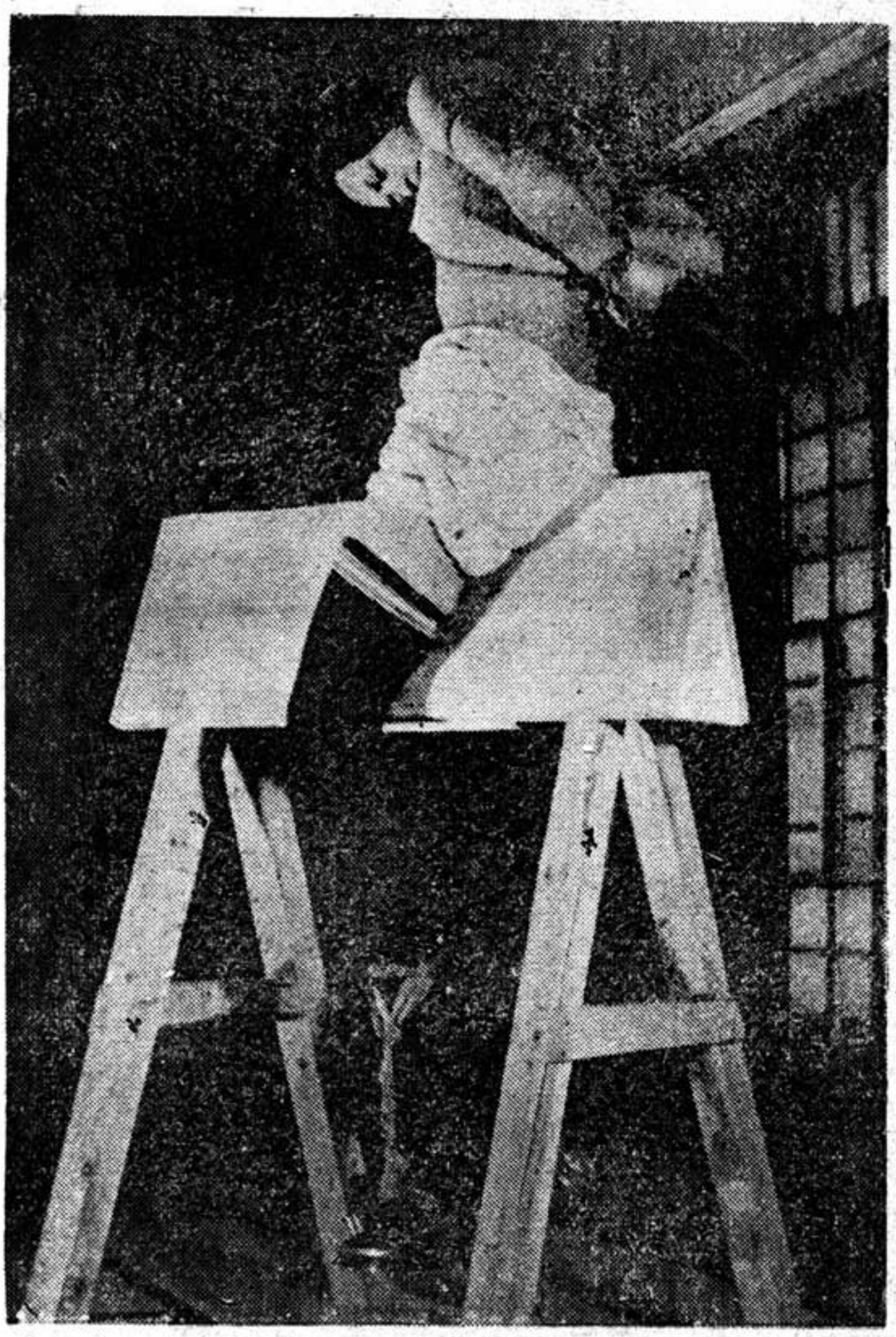
「痛いわ。こんなに尖つているんですもの……」

感じましたが、その手首は直ぐうしろ手に高々と上つて、細引きは容赦なく柔かい肉に喰いこんでゆきます。

スカートのホックを外し、ブラウスを脱がせると、ナイロンのブラジャーから透けて見える乳房が薄紅色に紅潮しています。

「早く乗るんだ、その椅子に足をかけて」

「痛いわ。こんなに尖つているんですもの……」



鋸の歯のように屹立した木馬の背を見てのではありません。

かつて浅草公園のメリー・ゴウランドで、若い母親が子供と木馬に乗つて嬉々としていた姿を、私はいま思いうかべましたが、この若い母親が、ちよつとはにかみながら、遊動円木のように揺れる木馬の背で、おぼつかなく安定をたもとうと軀を微妙にくねらせる姿は、なんとなく色気のあるものでした。

私は、もういちど木馬責めをやり直さなければなりませんが、そのときは寧ろ脚の下に懸のついたローリング木馬をつかつてみようと考えております。高く低く、前と後が交互に上下するだけの単純な運動ですが、それでも女は後手で縛られているのですから、おぼつかなく軀で重心をとる恰好は、あんがい見る者の眼を愉しませてくれるかも知れません。いやそれよりも、木馬のローリング運動で女は生理的に感情を昂ぶらせることでしよう。さらに、それに縒り責めを併用すれば、この木馬責めは、変化に富んだ面白いプレイではないでしようか。

滑車吊りの醍醐味

吊り責めといえば、責めのケースでは何かつと腰を下ろすと、

「痛いわア」

と顔をしかめて、腰を上げてしまいました。

「なんだい、麗子らしくもない。さあ、痛いのは瞬間、そのまゝ思いきつて腰を下ろしてしまえば乗心地は満点だよ」

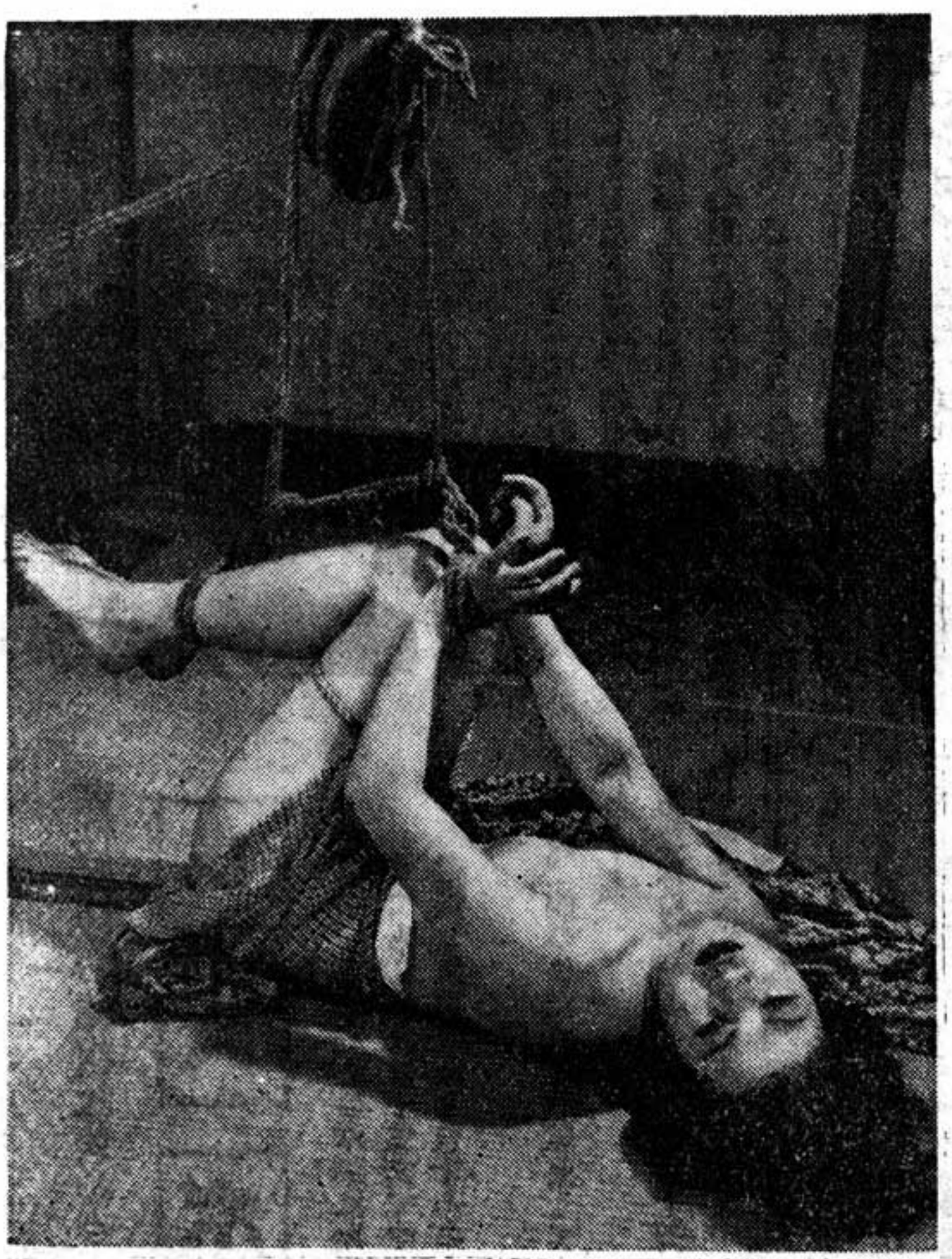
こんなふうに、妻を三角木馬に乗せその足首にアイロンを一個ずつ結びつけたのですが実のところこれは失敗だつたのです。誰しもちよつと考えると構図的には雰囲気がありそうですが、彼女は木馬の上にものの三分とは乗つていられないのです。屹立した木馬の背に苦痛をこらえる彼女の表情は、確かにサディズムな眼を愉しませてくれるものがありますが、肝心の彼女が肉体的に辛抱できないのですから、この情景をながくつゞけてはくれません。

責め道具自体が被虐者の肉体を傷つけるようでは、公刑の責め道具ならいざ知らず、女の軀からマゾヒズムな悦びを抽き出すための

妻惨なものが連想されて、まるで責めの最高度であるかのように考えている人がありますが。芝居などでも、番町皿屋敷とか高尾太夫の吊し斬りが構図的にも迫力をもつていて印象づけられております。

伊藤晴雨翁が、かつて生み月の妊婦を逆さ吊りにしたことが話題にのこつております。この写真は私も秘蔵しておりますが、あの写真は晴雨翁にして成し得た記録だけに、他の何人が同じポーズのものを撮つたとしても、あれだけの迫力のあるものはできないでしよう。私は、逆さ吊りに対してはいさゝかの魅力も感じておりません。構図的にも単純でたゞ棒を立てたようなものですし、第一、色気に乏しいのが決定的に私の感覚に合わないのです。

私は、滑車をつかつて「半吊り」をこゝろみたことがあります。後手に縛つた妻の軀が手繰り寄せるロープに一寸、二寸と上つてゆき、やがて爪先き立つた足が辛うじて床に触れるばかりになると、妻の足は次第に空を蹴るようになつてゆきます。もう一分でもロープを手繰れば、妻の軀は完全に宙吊りとなるのです。いや、そのまゝちよつとでもうごけ



ば、彼女の足はすうッと床から離れてしまいます。妻は己れの体重を爪先きに托して軀の重心をさゝえようとあせるのですが、その姿勢はもの〳〵一分とはつゞけられないのです。高手小手にいましめられた麻縄が容赦なく肉に喰い入るので、彼女はその痛さで思わず軀を縮めるのですが、たちまち重心が崩れてよろめき、爪先きが床を離れるとそのまゝ前に、後に、あるいは右に左に振子運動を開始するのです。

この滑車吊りで私の最も興味を感じたことは、被虐者の爪先きが辛うじて床に触れるということ、ちよつとでも軀をうごかせば爪先きが床から離れ、たちまち重心が崩れてローブで軀が緊め上げられてしまう、ということでした。

これが完全に宙吊りとなると、前記の三角木馬と同じように一歩間違えば被虐者の軀を傷つけることになり、いたずらに苦痛をあたえることだけで相手から被虐の悦びを抽き出す感覚を抹殺してしまいます。責めには一方的な感情は危険ですから、あくまで被虐者の感覚を考慮しながら行うべきでしょう。

こゝで、私の貧しい実験から得た吊り責めの要点をすこしメモしてみましょう。

まず女を縛る場合、乳の上からは絶対に縄をかけないこと、後手に縛つた縄と吊り縄とは別なものをつかうこと、この二つは他の責めの場合でもそうですが、殊に吊り責めの場合は注意しなければなりません。乳の上から縄をかけたまゝ吊すと、女は呼吸困難に陥り絶息することすらあります。また後手に縛つた縄を「吊り縄」に関連させると、それへ体の重量がかゝつて脱臼したり骨折したりする危険がありますから、吊り縄は絶対に別の縄をつかうことが必要です。

次に、「腰縄」をかけ、さらに腹部に晒布を幾重にも巻いて、その上から縄をかけ、別に用意した吊り縄で吊すのです。もつとも半吊りの場合はこの必要がないので、私は前記のごとく故意に一本の長い麻縄で高手小手に縛つて吊してみた訳です。

（おわり）



女性だけの秘密な愛のサロン

レスボス通信

園村恵子

恵子、まだ、この年齢になるまで（と云っても、まだ二十五歳ですけど）異性と戀愛した事はありませんの……

女性だけの秘密な愛のサロン

レスボス通信

園村恵子

先月この欄から、はじめて皆様におよびかけ致しましたときは、初めての事ですし、果して、御答え下さるかたがあるかどうか、恵子とても心配でしたの。もし、空しいこだまだつたら、どうしよう。淋しくつて泣いちやおうかしら——と思つて。……ところが早速三人のかたから通信があつたので、本当にうれしかつた！　こんなうれしい気持になつたこと、はじめて！……それで、またこの通信を載せて頂く勇気が出ましたの。

板橋の美佐子さま。恥かしいの？　それとも、恵子を信じて下さらないの？　悲しいわ。お所を知らせて下さらないなんて。……だから、あんな事書いてあつたけど、このお姉様を愛するよろこびや、男の方に愛されるよろこびを覚えて行くようになるのです。良いわ。他のかたにもお教えして上げられるから……。

あなたのなやみ、本当に恵子御同情出来るわ。今すぐにでも飛んで行つて、お姉様、きゆつと、あなたを抱きしめて上げたい位よ。でも、そんな事ちつとも心配いりません。そう云う心配しているつて云うだけでも、美佐子さんと同じなの。……ただお姉様のほがらかになること。そんな事は忘れてスポーツでもなさい！　あんまり、夜お寢床んなかで、ぽーつとするような恋愛小説なんかよんじやいけません。——でも、本当は、お姉様だつて、大きなことは云えないのよ。

美佐子さんとは、自分一人ではなく、相手のおちがうことは、純真な少女かつて分る嬢さんがあるつて云うこと。……だから、美佐子さんも同性のお姉様を愛するようになさい。——そうすれば、段々、なやみからもすれない悩みをもつているお嬢さんが、どんなに多いか、つて云うことが分るわ……。

みんな、はじめは、自己愛（ナルシシム）つて云つて、そういう所から出発するのよ。そうして段々、くわれるし、それから人を愛するつて云う人間本来の美しい気持を養うことが出来るでしょう？……これをみたら、恥かしがらないでお姉様にお所をしらせてネ。お姉様も、シク

ラメンの花好きよ。それから、堀辰雄の小説も大好きです。

同封の詩はとてもステキ。あんなものお書きになるの？　胸が、どきどきしちやつたわ。処女のあなたが、あんなひどい事頭のなかで空想してるのかと思つたら、……いけない子！　でも、軽蔑なんかしないわ。お姉様だつて、あの詩のような事考えるの。そして軀をお布団へおしつけて、もだえてしまいますの。御返事下さいね。きつとよ。あなたの可愛いい唇にキス送りします。それから、あなたの少つちやなつぼみに……。

横浜のS子さま、お便り有難うございました。でも、本当云うと、びつくりしちやいました。S子さまの方が大人ネ。こわいわ。ゴムなんてイヤだわ。――でも、とても惠子魅力感じました。惠子はまだ、S子様のようなひどい責めをした経験ありませんのよ。せいぜい、しごきで、両手をうしろにまわしてしばつて、「さア、どう、抵抗出来て？　抵抗出来ないでしよ。こうやつてキスしてもイヤつて云えないでしよ」なんて、いじめる位ですの。……でもS子様みたいにして、遊んだら、どんなに切なく良い事でしよう。思うだけでも、顔が真赤になつちやうわ。……でも、何だかこわいわ。いいたいでしようね。なんだか、S子様とおつき合いすると、惠子、重症患者になりそうでこわいわ。でも、S子様のお手紙は、それだけあやしい魔力をもつて私によびかけましたのよ。S子様は、花で云つたらブラック・ナーシサスね。

お写真有難うございました。どうやつてとりましたの？　セルフタイマー？　それともお二人の他に、もう一人お友達がいらつしやるの？　……お二人のすごい情熱的なポーズ。惠子ふらふらですわ。あてられて。――

あんな写真ありましたら、もつと送つて下さいませ。――私、みたいわ。もつと、ひどいのだつていいわ。みたくてたまりません。他のひとには、みせませんから、どうぞ、もつと見せてネ。

お申越しのもの、お送りしたいんですけど……でも、なんだか、やつぱりはづかしいので、キツスマークのハンケチだけ、お送りしますわ。うまく、つきましたらネ。大きな口だことなんて、おつしやつちやイヤよ。

惠子、来月になつたら、かならずまいりますの？

惠子、お写真のお友達みたいに、スラツとして、とてもキレイだわ。いつでも、ああいう風に、はだかのときでも、靴下だけはいていらつしやるのね。でも足なんて、いじめる位でいらつしやつちやイヤよ。

惠子、お写真のお友達みたいに、されたいわ。想像しただけでも、やつぱりはづかしいこと、なすつちやイヤ。ゴムはいやよ。

S子様は、情熱的で、惠子をきつと苦しめるでしようね。私、今から、そんな予感が致します。



ブルマーははきません。腰の形が悪くなるから。いつもフレンチパンテイだけです。それで大丈夫よ。あの時はD・M式を使いますの。私はいつも軽いので失敗した事はありませんけど、一つにはチャンスがなかつたからかも知れません。それに、私、引つ込み思案で、男のかたの前へ出ると真赤になつて何にも云えなくなつてしまうのよ……。こんな娘じや、仕方がありませんわね。

それから今まで、レスボスの愛で十分満足させられていたという事もあると思います わ。私、男のかたの愛つて必要じやないんですもの、——それより、可愛いい、つぼみのような妹をつくつて、愛をそそいだほうが、美しくつて良いわ。レスボスの愛にくらべたら、男のかたとの愛撫なんて、とても不潔な感じがしますわ。男のかたの軀のこと考えただけでも、いとわしくて、こわいわ。

それに、男のかたが、乱暴なのもいやです の。——男のかたが、私たちの愛をうばうときはほとんど、暴力でしよ？　粗野で、田舎くさくつて、デリカシイがなくつて、……私は、男の方なんてきライ。でも、本当はまだ、立派な異性に会わないだけの事なのかも知れません。

そして、私に

「同性のどこに一番魅力を感じるか」

困りましたわ。そんな事おつしやつても……。あんまりたくさんあつて云えませんもの。

でも、電車のなかなどで、若い女学生のうなじなど見ていて、思わずキスしたくなつてしまう事がありますわ。ろうのようにすき通つた白い皮膚に、生えぎわの毛がモシヤモシヤとやわらかそうに生えている所なんか見ると、なんて可愛いいんだろうと思つて、タマらないわ。若い十七八のお嬢さんなんて、体のどこから、どこまできれいだけど（この点少年なんて足もとにもおよびません）。ことにえり足のはえぎわなどに、たまらない魅力を感じます。

まだ、云うことや、する事は、子供つぽさがぬけ切らないで、あどけないのに、そういう所だけ、ちやんと大人になつて、自分を主張しているのが、とても可愛いいのです。お嬢さん自身は、とても、それを恥かしがつているのに、ちやんと、そこは、頭をもたげて「私はもう女よ」と云つて、イバつているのが、可愛いいわ。

「ねえ、どうなさるの？　いやよ。こわい

わ」

と云いながら、ちやんと本能の命じるまま、なにも知らないのに、そうなつて行くのが、とても神秘的な感じで、打たれます。

自分が、そうなつて行くのが、どうしてだか分らなくて、途中で、びつくりして、とまどつてしまつたりするのが、とても可愛いいわ。

そして、自分が、この人に、生の神秘を教えてあげるんだ、はじめてこのひとのつぼみをひらいてあげるんだ、と思うと、とてもそれを誇りに思いますの。何にも報いられる事がなくつても、そういう誇りだけで十分。——どんな事でもして上げようという気になつちやうわ。

私、自分がやせているせいかも知れませんが、若いお嬢さんの、ハト胸や、出つ尻にたまらない魅力を感じます。セーラー服のお嬢さんが、お尻をつき出して歩いているのを見るととても愛らしく思います。

「同性愛とはどんなものか。——物足りないほどの情熱——そして、終りと云うものがないのです。やめれば、もうその時から、愛がはなれてしまつたような感じがするのです。

思いはしないか」

この御質問にはお答え出来ませんわ。だつて、そんなこと……二人だけの秘密ですもの。私は、経験ありませんけど、男女間のこれはレスボスの、宿命かと思います。——物足りないのです。そこが、美しく、きれいで、味わいが深いのよ。いつも何だかちよつと物足りない——その物足りないところが、何とも云えず良いのよ。いつまでも、その思いが、私達を夢中にレスボスの愛にかり立てるのです。お分りになるかしら……

じや、今月は、これで、お便りの筆をおきますわ。……先月も書きましたけど、どうぞ惠子に興味をもつて、惠子とレスボスの文通をしたいという同性のかたがありましたら遠慮なんかしないで、どしどし惠子にお便り下さいませネ。惠子、胸をとどろかしてまつております。



レスボスの愛とはギリシヤ時代、レスボス島に栄えた女性同志の愛慕です。レスボスに興味を持たれる方は本社気付、園村惠子宛にドシドシお便りを下さい。

（編集部）



特集・囚獄の記錄

腐つた性臭

雜居房の夜は毎日の生活に何一つ慰安のない、しかも成熟し切つた女囚たちの抑制された感覺が、溢れるようにほとばしる……

中山麗子

担当看守の、就寢前の巡視がすむと、ヤレ〳〵と云つた表情でみんな横になります。

と云つても、勿論室長や役付たちの様子をうかがつてからのことで、もしそんな古株たちよりも先に、足一つでものばそうものなら早速鵜の目、鷹の目の連中の餌食になつて、いいなぶり者にされてしまうのです。

だから、一日のうちで一番楽な筈の就寢時間でも、うつかりは出来ません。看守の眼の届かないこの時間こそ、室長たちの暴力の前に晒らされる危険が最も多いわけなのですから……

私たちが入つていた第三雜居房は、十二坪で、疊数から云えば二十三疊。(房内に便所がありますから)其処に約三十二、三人もの女囚たちが押しこめられています。一人当り疊一枚も当らぬ上に、室長や役付たちは当然のことのように、広い場所を占領するのですから、あたしたちのような新入りたちは、タタミ一疊に二人も三人もの割で押こめられるのです。

世間の方々は、刑務所内の女囚の生活なんて、同じ獄舍に、同じ浅黄の獄衣で、違うのは仕切りと云つても、中ほどが僅かにかくれるだけ、つまり見通しが利くように、便所の上部と下部は外から見えるようになつているのです。

そのほかにも娑婆の便所と違う点は、逃亡を防ぐ爲に、便所の穴がとても小さいことですが、とにかく、上下ともに明いているのですから、その臭気と云つたらないのです。三十何人が、とつかえ引きかえ入つて用を足すは、衿につけられた番号だけ——、と、思つそのすぐ前に居る私たち新入りの苦しさと云ていらつしやるかもしれませんが、とんでもつたらありません。

獄衣にも何時か臭気がしみこむし、勿論食事もこの場所でするのだから、まつたく文字通りの「臭い飯」で、始めの二、三日はどう

しても咽喉を通らないのです。いくら覚悟して来たと云つても、とても娑婆で想像していたような、生優しいものではないのです。

それはとにかく、古参の役付たちが新入りを顎でつかつて、どんなに気ままな真似をしても、所詮は獄舎内のことだから、毎日同じことの繰返えしで、気のまぎれようがない、其処でさまざまの云ひがかりをつけては、房内で弱い者いじめをするわけです。それが習慣になつて、もう病的になつている者もある程なのです。

あたしが入所したのは昭和二十四年の六月で、忘れもしない梅雨のさかりだつたのです。その晩はとても誌上には書けないような恐しい、恥かしい思ひをしました。一ぺんでチリ毛立つて、こんな場所で二年も暮さなければならないのかと思うと、本当に死んだ方がいいと思いました。

「娑婆忘れ」と称して、入所の夜には新入りの度ギモを抜くのが、古参連中の常套手段なのです。その次の夜は「身上調べ」と云つて経歴や犯罪の動機其他を、きびしく責められるままに、詳しく告白するのですが、連中はそれにいろ〳〵卑猥な半畳を入れて、ワイワイたのしむわけです。

とにかく、そんな風に毎晩こづき廻され、入所して五、六日目の晩だつたと思ひます。例の便所の前でやつと眠ろうとしていました。しかし、むれかえる房内に、ギッシリくつつき合つて寝るのですから、なか〳〵寝つかれません。それに便所に入る女囚たちは、遠慮会釈なしに、あたしの躰の上をふんづけてゆくのですからしまつたら——

それでも少しばかりウト〳〵しかけている時、

「オイ、麗子とか云つたな……、其処の新入り！」

室長の富田つねの声で飛び起きたのです。

「肩が凝つちやつて仕方がないや、チョイと此処に来て揉んでくんな」

あわてて室長の処に行こうとすると、もう二、三歩、歩くだけでも女囚たちの躰につまづいて、

「ド間抜け！気をつけやがれ！」

「畜生！　眼がないのかよ！」

と、叱られる始末です。毛布の支給はあるし、お互の体温だけで、むれるままに、詳しく告白するのですが、連中はそれにいろ〳〵卑猥な半畳を入れて、ワイワイたのしむわけです。

漸く室長の処にくると、ここは畳二畳以上の広さはタップリあつて、つねはゆつくり手足をのばして寝ているのです。

「ひでエ作業にコキ使ひやがるから、体中痛くつて仕方がない、足の方から揉んでくんな」

ビリビリして来たのだけれど、割合に穏かに命じられて、あたしが揉み始めようとすると、

「室長！」

と、右手の方から近よつてくる女囚がある んです。

「マッサージなら、あたしに云つておくんな されればいいのに——、何時もあたしの役ぢや ありませんか、オイ新入り、サッサとどいと くれ！」

「いいよ信代、今夜は麗子にやらせるから——」

「だつて、室長……あたしがいいつて云つたら、そうだろう？　マゴ〳〵してないで、サッサと寝ちまえつて云つてんだ！」

信代と云う、二十一、二のその女囚は、ロ

惜しそうな憂い形相で私を睨みながら、自分の寝場所に戻つてゆくのです。私は水を浴びせられたように、ゾーッとしてしまいました。

「なに、ボーッとしてるんだよ、麗子、さあ始めてくんな」

夢中で揉み出したのです。

後で知つたのですが、この富田つねと云う室長は、銀座の社交喫茶にいた女で其処のマダムの情夫であるバーテンと共謀して、そのマダムを殺したと云う、したたか者なのです。懲役十二年を喰いこんで、その時はもう半分近くも刑期を務めていたのだから、まるで怖いものなしの女なのです。

当時、二十八、九才で、青い獄衣でもさすがに銀座の女給を務めていただけの、美しさが残つていました。

足から腰、背中から肩と揉み終ると、その室長が、あたしの手を、ヘンな場所に置くのです。ためらつて、少しづらして揉もうとすると、又、その場所に私の手を戻して、

「グッ〳〵しないで、しつかり揉んどくれ。この子は――」

――なにしてるんだよ、この子は――」

いくら云はれても、顔が赤くなるばかりなんです。ドキドキしてると、

「まつたく赤ん坊だよ、世話が焼けるねえ――」

アッ、と思いましたが、室長のつねに逆うなんて、及びもつきません。その時、この女が、ひどいワキガだと云うことを知りました。

なにしろ、房内は御承知のように、終夜電気がついています。すぐ横には、隠居格の、前科五犯と云う老婆などが寝ているのです。

その時、何処かですすり泣きの声がするんです。あたしはトッサに、信代だ、と気がつきました。そして、この室長と、信代との関係もその時悟つたのですけれど……

翌朝も早くから、便所掃除や寝具の片づけなどに、星の数の多い女囚たちに気合を入れられまいと、コマ鼠のように動き廻るのです。それでも、朝食の後で食器を集めに行つた時、私は室長の前で、パッと顔を真赤にしてしまつたのです。すると、隣りの前科五犯のおつねさん、初心な娘ぢやないか、云つてみりやあ、野郎共が生娘を手に入れたのと同じようなもんだ。満更でもないだろう、ええ？」

「フ、、、やつぱりパン〳〵や女工員なんぞと違つて、女学校を出てる娘だつて云うからねえ――」

その代り、信代の気狂ひ染みた眼が、あたしを追い廻すのです。秩父辺りの女工員で、捨てられた男の家に火をつけて此処に喰いこんだのだから、元々、嫉妬深い女だつたのかもしれませんが……

それから四日目に、あたしは作業場で、この信代と、つかみ合いの喧嘩をおつぱじめてきました。と云つても、勿論、売られた喧嘩だつたのですけれど……

ぼんやりしてたものですから、髪の毛をつかんでひきずられ、それに穴かがりの作業に使う、小さなノミのような道具を、信代は片手に握りしめているので、あたしはどうなることかと思いました。

勿論、女囚仲間に止められ、又、看守たちも房内の統制の都合もあるので、なるべく内輪揉めは室長に任せて、見て見ぬふりをしているのです。しかし、信代の憎悪のこもつた瞳と、赤裸々な罵声を聞いた時には、本当に信代も、この自分も、浅間しいと思いました。

「新入りのクセに、室長にデレデレしやがつて、人の相手を寝取りやがつて——、フン、女学校出がなんだい！」

それから、まつたく聞くに耐えぬ言葉を、次々に浴せかけるのです。

その晩は例の点呼巡視後に、信代に対する仕置きが行われましたが、さすがに私はこれには仕置係と云つて、若い、元気のいい女囚たちが行うのですから、気の弱い者は見ていられるだけでも寒気がして来ます。

「麗子、おまえも、もう少し責めておやり！」

と、室長に云はれましたが、さすがに私は手を下す気になりませんでした。



考えても見て下さい。狭い雑居房で、作業で汗まみれになつた女たちが、ひしめき合ひその汗と体臭の中で……、婆婆のように、見栄も外聞もない場所だけに、そのすさまじさの、抑制されたセックスが、溢れるようにほとばしる夜でもあるのです。

それに、雑居房の夜は、毎日の生活に何一つ慰安のない、しかも成熟し切つた女囚たちと言つたら……。

「麗子だつて二十一にもなるんだから、好きな男の一人や二人、居たんだろ？　なんだつて、娘のままこんな所に来たんだね、馬鹿だよこの娘は……」

ある夜、つねにこんなことを言われましたが、まつたく、私は馬鹿だつたと思ひました。

外人商社のタイピストをしていた私が、こんな監獄にくるようになつたのは、或る傷害事件をひきおこしたからでした。傷ついた相手は私の従姉ですが、このことに就ては書きたくありません。みんな私が浅墓だつたのです。

とにかくこんな状態で、囚獄に於ける私の毎日が繰りかえされていました。娘盛りを来

浅間しい——、と思いながら、あたしは夜になると、マッサージと云う名目で、つねの傍に呼びよせられるのです。御伽と云えば、聞えがいいかもしれませんが、刑務所の雑居房の中で、同じ女囚同志ですから、おぞまし

る日も〳〵浅黄の獄衣で、作業に出る時は共色のモンペをつけて、手製の薄い草履をはきます。

この作業に出るのは、経歴や体質其他によつて、作業の種類は違いますが、夏は五時半起床、八時には列を組んで作業場に出かけます。私は殆ど軽作業でしたが、後半には動力ミシンの操作も習い、エプロンだの割烹着だのを一日に何十枚も縫ひました。夕方五時まで一日中このミシンの音を聞きながら、気も変らない同じ型のエプロンばかり縫うのですから、まつたく飽き飽きします。

それで一日の作業の收入として、私たち女囚の手に入るのは、僅か八、九円で、一月通算してもやつと三百円足らずなのです。勿論それも、自由には使えないのです。

作業中は看守の眼はきびしいのですが、同房の室長や、役付の女囚たちの暴力からは解放されます。それで僅かなスキを見ては、

「麗ちやん、お前、いい体をしてるぢやないか……」

などと女囚同志が、みだらな手をつき出したりします。そんなのは大抵三十過ぎた世帯持ちが多いのです。娘というのは珍しいのでからかいたくつて仕方がないのでせう。

「室長の仕込みがいいんだろ、え？　室長の奴、おまえにどんなことをするんだい？」

「今夜、室長が寢ちまつたらあたしのトコに来ないかい？　え、麗ちやん」

母子無理心中をはかつて、子供三人だけを死なせ、自分だけ生残つたと云う千葉の女まで、眼を妙に光らせて笑うのです。朝晩は房内で、他の女囚たちから嫌はれるほど念佛を唱える癖に、こんな話になると、やつぱり人が変つたように、みだらになるんですから、見ていると、婆婆にいる、三ツ歳下の妹を思出して、云ひようのない気持になつてくるのです。

「コラッ、音を上げると承知しないよッ！」

「此処は御存知地獄の一丁目なんだ、泣き落しなんざ通用するかい、甘く見ると爲にならないよ」

「チョッ！　小便をしちまひやがつた、なんてド間抜けなんだ！」

「いいさ、ユルユル掃除をして貰ほうぢやないか、バカ、掃除つたつてお邸ぢやあるまいし。バケツや雑布の世話になることたないだろおまえが洩らしたんだから、今度はその上の口ですつかり掃除して貰ほうよ」

恐怖の余り、小用を洩らしてしまつた治子をつかまえて、さんざなふりものにする、そ

れを見ては、みんなゲラゲラ笑うのです。

それから何時の間にか、私は治子に対して特別の関心を持つようになりました。可笑しなもので、丁度戀人に対するようにいかと、ハラハラしていましたが、始終その姿が気になつて仕方がないのです。私は室長のつねが、治子に対してヘンな気を起さなて、髪の毛を撫でてやりました。治子は泣きじやくりながら、ジッと抱かれているのです。辺り近所の連中はふざけ合つた揚句、恥も外聞もない、あられもない恰好で、正体なく寝込んでいます。

「今度の新入のように、痩せた奴は好き〳〵いや、ありや、まるで肺病のニワトリのようぢやないか――」

なんて云つていました。やつぱりなのでせう。相変らず私を呼んではつぷり一時間はたわむれるのです。

或る晩、つねから解放されて歸つて隣りの治子がまだ起ていて、かすかに泣いているのです。

「泣いちやダメよ、又、仕置きをされるから――」

肯きながら、手足を縮めて、どうが止らないと云つた様子なのです。

「仕方がないよ、死んだ気になつてくつちや、これも持つて生れた因果だら――」

「だつて、あんな下品な女たちに……」

「ダメ！　それを云つちやダメ！　半殺しの目に逢うからだ。

痩せて眼を真赤にしているのを見ると、なんとも云えぬ可哀そうな気持になつて、ギッシリ押つめられているのを幸に、ソッと抱いて見ろつてんだ！」

グルリと取り巻いて、女囚たちが固唾をのんで見守つているその眼前で……、つねは青い囚衣の袖をまくりあげて、仁王立ちに立つているのです。もう、否も応もありません。

死ぬほど恥かしい思ひでいる私の丁度眼の前で、今は、何でも情夫に局の金を入れ揚げたと云う、郵便局の事務員だつたマサ子という仲になつている信代が、さもいい気味だと云はんばかりの表情で、ニヤニヤしているのでした。

勿論室長を裏切つた私へのリンチはそればかりではなく、三年後の、今でも、その時の傷は癒らないのです。

治子はその夜から高熱を発して、呻き通していました。五日目にやつと病監に下げられましたがもう手おくれで、間もなく其処で息をひき取つたと云うことです。

室長が殺したも同様です。私には今でも、治子のあの夜の呻き声が耳に残つていて、狂ほしい気持になるのです。

「そんなにペタペタしたけりや、一晩中だつて一諸にくくりつけてやらア――、まあ、おまえたち、どんな結構なことをやりやがつたのか、さあ、あたしの前でやつてごらん。オイ遠慮はいらない、昨夜のようにイチヤついて見ろつてんだ！」

そどみあ通信

——讀者交歡室——

藤井晃

(一) 同性の肌着を蒐める

ソドミア通信を通じて、全国の親愛なこの道の同志諸兄に、自分の気持をきいていただけることを幸福に思います。

私は今年二十三歳になる者ですが、体はきわめて貧弱な無力体質で、身長は五尺七寸余体重は十二貫弱です。

自分の体格が貧弱なためか、私はガッチリした体付の男性を見ると、堪らなくなり、その相手が自分より年少でも年長でも問題ではないのです。又、その相手の男性が、裸体に近い恰好、時に白いランニングシャツに白いパンツ一つの姿には烈しい魅力を感じます。

このことを何度親たちに発見され、意見されれ、それらの品を棄てられても、私のこの癖は治らないのです。現在手許にある品は、ランニング四枚、半袖アンダーシャツ二枚だけで、いずれも汚染で世界地図を描いています私は遺精に悩んでいるのです。

女性に対しては、まだ一度も興味をもったことがありません。女とは頭の毛の長い、顔は白粉をつけ、派手な着物を着た、肉体の臭い動物という位にしか感ぜず、恋愛小説などテンデ面白くありません。

私は酒もタバコものめず、ケンカもしたことなく、野球、水泳、其他スポーツは皆嫌いです。



しかし、私の最も好きなタイプの男性は、十二歳位から二十五、六歳までの白いランニングシャツ、白いパンツのスポーツ選手然たる色浅黒き人です。（桐生、A・K）

答　あなたの同性愛は、あなた自身の貧弱な体格に対する劣等感に、起因しているところ大なるものがあるように思われます。

こうした場合、抵抗意識の強い者なら、「ナニクソッ」と進んでスポーツなどをやり体を強健にするために努めるものですが、劣等感が強く気の弱いあなたには、それができないでしょう。

その劣等感が、あなたをますます女性的にさせ、「男性的」なタイプの男性は、又、あなたはフェチシズム傾向が強いようになつたものでしょう。

あなたが女性に何の興味も関心ももてないというのも、つまりなあなた自身が女性になつているからなのです。





あなたの同性愛は、あなた自身の貧弱な体格に対する劣等感に、起因しているところ大なるものがあるように思われます。

こうした場合、抵抗意識の強い者なら、「ナニクソッ」と進んでスポーツなどをやり体を強健にするために努めるものですが、劣等感が強く気の弱いあなたには、それができないでしょう。

その劣等感が、あなたをますます女性的にさせ、「男性的」なタイプの男性は、又、あなたはフェチシズム傾向が強いようになつたものでしょう。

あなたが女性に何の興味も関心ももてないというのも、つまりなあなた自身が女性になつているからなのです。

㈡　同志をもとめるあけくれ

日夜煩悶のあけくれをどうとも抑制しがたく、再三筆を執つては逡巡し、ここに意を決然でありましょう。

愛人の身に着けた物とか、相手の体の一部分たとえば頭髪とか足とかの特定の部分だけに対する崇祕的な性愛、これをフェチシズムと云います。

あなたのフェチシズムは、あなたの好きな型の男性が身に着けた肌着に対する狂崇となつて現れています。

尤も、あなたのこうした癖は、あなたが云われるように、自分が小心なために、相手に自分の意中を告白できないため、好きな相手の代用物として、その人の肌着を手にいれて慰めているのであつて若し相手と実際に抱擁できるようになつたら、治るかも知れません が、この文面で察するかぎりでは、あなたのフェチシズム傾向は、かなり強いように思われます。

記者は男色を咎めぬと同時に、フェチシズムも他人に危害を及ぼさぬかぎりは、決して悪い事とは思いません。世のいわゆる「善」と称せられるその中にも醜悪があるとともに普通人の「悪」と認めるものの中にも、美が立派に存在しているものなのです。

して、「ソドミア通信」にお便りする次第です。

何をかくしましょう。私も同性を恋うる変態性の一人で、世間には私と同じ傾向の人の多いのに、今更のごとく一驚すると同時に、非常に力強いものを痛感いたしました。「ソドミア通信」こそ、私たち男色者のオアシスと云つていいでしょう。

私の異常性は困つたもので、精神的肉体的に同性無しでは一日としてすごされない位です。と云つて、肉体的には別にこれといつた相手も居ないのですが。

私は本年卅一歳、平凡な勤人で、或る会社に職を奉じております。妻帯して五歳になる娘が一人居りますが、元来どういうものか、異性に対しては全然恋愛感情が起りません。尤も美しく着飾つた女の人を見ると、非常に美しいなあとは思いますが。

私が最も心を惹かれるのは、体格のよい中年の男性で、こういう型の人を見ると、非常に強い魅力を感じます。自分より年若き者には、あまり好感がもてません。あの好色的な目付きと執拗な態度には、非常にエキサイトいたします。



会社え通勤しております関係上、よく列車内などで、前に私の好きなタイプの男性が立つていたりすると、早くも胸は高鳴り、顔は火照つて、思わず寄添つて手を握り、接吻したい衝動にかりたてられます。そしてつくづく、この男性の胸に抱かれて、一晩一緒に寝て見たいと思うのですが、結局、それらは、自分の頭の中だけの勝手な空想で、想いの叶わぬなさけなさに、果ては涙さえ流れるのです。

好個の男性はよく見掛けますが、私の内気な優柔不断の性格が災いしてか、ただ恋々と思うのみで、実現したことはありません。ひとすぢに思いこんでも、所詮遂げられぬ不自然な愛情……と私は狂つて死んでしまおうかと思うこともあります。

己惚れのようではずかしいですが、私とて眼こそ近視ですが、容貌体格も普通以上で、心ある人たちには、好かれる方ではないかと



思つております。通勤車中でも、隣席又は前の席の男性から、好奇的な眼で見られたり、膝をつつかれたり、又、私が「品のいい立派な紳士だなあ」と見とれると、その男性の方もジツと見返して来て、お互いに興奮するようなことも往々あります。こんなとき、一つ誘いかけて見ようかと思いますが、大勢の男客の中では、到底そんなことはできないのです。

ちかごろは、相手の得られぬ寂しさのため多少神経衰弱気味になり、仕事も手に付かずいつそこんな苦しみを味うなら、東京え出て（聞くところによれば、東京には男色愛好者同志のグループや、社交場のようなものがあるとかなので……さしつかえなかつたら具体的に教えていただけませんか？）好きなことをして、一生を面白く暮した方が得策だと考えたりします。

私は俗に云うオカマに接したこともなく、また、ああいう職種の人間を極端に嫌いまつたことは四、五回ありますが、それは男色とされているのです。つまり、万人に共通する性欲発展の一段階に固定しているにすぎないのです。

が、たとえそれが事実ではあつても、まだ一般社会人の目からは、男色現象そのものは奇怪でありアブノーマルであつて、「変態」という蔑称をもつて呼ばれていることはたしかです。

そして、そこに、多くのソドミアが、自己の性状を他人に隠さねばならぬところがあるわけなのです。

又、も一つソドミアの悩みは、あなたの文面にも度々窺われるように、相手を得ることの困難さです。

あなたが、本気に男色者のグループとか社交場があるなら教えてくれと云つておられるのも、つまりは、その悩みを解決するためでありましよう。

グループとまでいかなくとも、同気相求めるためのソドミア同志が会合する機関はあります。ご希望なら紹介しましよう。

又、社交場としては、本誌前号の「男色喫

遠い過去において、中年の男と性交渉をもつたことはありません。

答 一般同性愛者の殆どすべてがそうであるように、あなたも、自分の同性愛傾向を、「異常性」とか「変態」とか云つているようですが、近代の医学では、同性愛は嘗て云われていたように、決して退化変質でもなければ、病気に属するものでもなく、いわば「人類の常態変化」の一種にすぎないのです。

茶店」にも記されているように、ソドミアが経営する喫茶店や酒の店が、東京各所にありそこはウールニングやペデラストの集る場所とされております。

ソドミアのためのこういうグループや社交場は、又、あつて然るべきなのです。同性愛者ほど、世の中に容れられない者はないのですから、こうした機関は、むしろ公共的に設けられていいとさえ云いましょう。

村田氏よ、「狂つて死んでしまいたい」などと自棄的な言辞を弄してはいけません。「ゆけよ、さらば開かれん」です。

㈢　父親に對する愛情を基點として

私の男色歴を申上げますには、先ず私の父親のことから記さねばなりません。

私は六歳のときに父親と死別しました。私はこの亡父が好きでした。「好き」というより、何か私の胸をドキドキさせるものを、彼はもつていました。

彼は商人――私の家は代々呉服商なのです――にしては無口で、態度も無アイソな方のようでしたが、それだけに、ペラペラと口軽く客えの世辞にのみ專念しているような番頭や小僧の中で、一段と「男らしく」幼い私の眼に映じていました。

彼はメッタに子供の私を相手に遊んでくれたことはありませんでしたが、時に気が向くと、風呂に入れてくれたり、座敷の中で私を相手に相撲に興じたことが、数回ありました。

そんなとき、父親に抱きすくめられ、その躰にジカに触れると、変に胸がときめくような気持になつたことを憶えています。殊に彼のひげの剃り跡の青々とした頬に、頬擦りされたりすると、私は、「イヤだ〳〵」と口ではそれを拒むように見せながら、実は自分の方から父親の頬に頬をすりつけるようにせずにはいられませんでした。また、異性の母親と一緒に入浴するときは、むしろ何でもないのに、父親と同浴したときは、私はいつも父の股間を、憧憬と畏怖の念をもつてながめずにはおられませんでした。

このように、私は、亡父を内心怖れながらも、深く敬愛していたのです。

この父親の死後、私は、母親の手一つで育てられました。母親は、私を亡父のように、「男らしく」育てようとしていたらしいのですが、私は、彼女の期待に反して、どういうものか、女性的になつて来ました。

自分の家の番頭の一人に、Gと呼ぶ男がいましたが、彼は私を非常に可愛がつてくれ、私も彼が好きでした。

Gも亡父と同じように、円顔というより顎骨の張つた、見るからに、エネルギッシュな風貌で、モミアゲからアゴにかけてひげがつづき、その青々とした剃跡は、惚々するばかりに美事なものでした。

このGから、私は十歳の夏の或夜、母親の留守中に鶏姦されました。好きな彼を私は拒みませんでした。イヤ、むしろ、そのとき異様な興奮を覚えたものです。そのときのGの体臭や、体から発する物の臭いが、その後当分の間、鼻につきまとい、子供心にもあやしい気持になつたことを憶えております。



中学に入つて二年のとき、一級上のKという少年から可愛がられました。私は親譲りの円顔で、躰も肉付よく、膚もやわらかで、男色覚からはよろこばれるタイプだつたのです。

中学を出てから上京し、或る專門学校に入りましたが、それから卒業するまでの期間に、銀座、浅草、新宿などの盛り場の映画館の内で、隣席にいた男性と瞬間的な相互的手戯を交したことが、十数回ありました。

昭和十九年卒業すると間もなく、応召の赤紙をうけて、外地え派遣されました。故国を遠く離れた外地の軍隊、そこでは兵たちの性の捌け口として、また異常性の者もあつて、放埒きわまるソドミー行爲がおこなわれていました。

私は、部隊で一番乱暴者で通つた上級者から可愛がられました。体格もすぐれ、容貌も魁偉な男で、心底から私に愛情をそそいでくれました。この人とは、現在でも文通したり、タマニ会つたりしております。

云い忘れましたが、私は本年廿九歳、郷里で父親の業を継いでおり、人並に妻帯もしております。

（静岡、宇山生）

答 あなたも認めていられるらしいようにに、あなたのこうした傾向は、エディプス・コンプレックスに基因しているようですね。

あなたは幼少より父親に明かに性的な慕情を感じていたのです。ところが、あなたの母親は、夫——つまりあなたの父親の死後、あなたを彼女の夫のように男らしく育てようとしました。しかし、あなたは、母親の期待に反して、却つて女性的になつていつた。

そうしたあなたの心理は、母親に対する幼いレジスタンス（抵抗）でもあり、又自分を彼女と同じ女性の立場において、愛する亡父えの慕情を、母親と競い合おうとの現れと解せられます。エディプス・コンプレックスとは性を異にする親子間の精神的抑圧関係を云うのです。

さじすちつく

歴史小説

秘色大阪城繪巻

（みだら蛇の巻）

岩堀光
畵古庄英生

縛られた志野の白い肌を慕つて無數の蛇が……志野の絶叫が長く尾を引いて大阪城の壁にこだまする……

1



張天井は立派な細工の格子造り。棧には、燻金銀の飾鋲が、澁い品格のある艶を漂はせていた。（座敷牢にしては、贅沢な……）と当の捕われ人、琴が思つたも道理、もとは故太閤のお局だつたひとの部屋だという。「どうしたおつもりでございましようか、上樣（秀頼）御直々に、この部屋を琴さまにと仰せだされたげに承はりま す」と志野がけげん顔に話した時、琴は不覚にも頬の赧らむのを覚えた。

志野は琴の姉里同樣、駿府から、千姫の輿入れに從つて來た御女中だつた。彼女は囚人看視という表面の名目で、琴の身の廻りの世話を命じられていた。それを引受けるために千姫を通じて秀頼に話して貰つたのは彼女だつた

琴が、彼女の兄伊賀兵太の許嫁だつたから——。その志野がふいにいつた。

「おにげなさつて……ちかぢか、また、淀殿のお取調べが……いままでにもたび



「たびあなたさまを渡すよう申しこられましたが、その度、上様が御承知遊ばされず……」

そこで彼女は戸惑ったように、淡い紘月眉をひそめた。「……秀頼公にはお眼のない淀殿、ふだんに似げない上様の御様子に、女らしい邪推を遊ばされたらしく、もしや敵の女間者と上様がお約束をでもなさろうお考へではと……とはいえ御方の誤解遊ばすのも、むりもなげな上様……それで琴さまを……」

「あたくしを？」

「お逃げ遊ばさねばどれほどの怖ろしげな事が……淀殿の関東のいきのかかつた者にたいする憎しみは狂気に近いのです。加えて、あなたさまには……姉上様以上の屈辱を」

「でも、それなら、あたく

しが逃げれば、あなたさまのお身に難儀の……」

「でも、でも、いいのです。……まさか、あたくしには……いいえあたくしには考えもあります。あなたさまに万一の事があれば……お願い、逃げて、兄のためにも……」

（逃げたい……けれど、それはあなたの兄上、伊賀兵太様のためではない）と琴は思つた。「お心はありがたいと思います。けれど……」と琴は端正な額をきつとあげていつた。「兵太様は、あたくしが城をぬけだす事をお聞みになつてはいないでしよ」

「え？」

「幼ない時、こちらへ移られた志野さまには、兄上のお気質も充分ご存じないでしようが、兄上は、大御所さまから伊賀の姓を給わつたほどの忍者。駿府の間者取締り。敵に現わされた間者は、たとえ敵の情けに救われようとも、味方の手で始末をつける掟。偏狭なほどにいつてつな兵太様、琴の運命は駿府にかえつても定つているのです」

「でも女として、あのように淀殿のむごい調べにあわれたのです。兄だとて……」

「いいえ、姉上は、姉上は死なれました」

地獄の底に等しい地下牢。太陽に見離されて棲息する陰獣のような下人たち。そこで姉の里は、彼らの力の限りの暴力に、滅茶滅茶にされたのだ。……そして、その痛ましいよろめく姿を淀君たちに笑われて……。例え誰に見られる事もない密室でも、そんな恰好にされた裸像。大の字に手足の開いた白いからだが、枝葉のみどりの前で揺れていた。もう夜つぴて知り盡した筈なのに、下人たちは、尚もその場所を確めるように、姉の眞下から仰ぎみつつ、狙いを定めて鋭どい長穂の槍尖を……。それは、最初の起点がそうだから、出るのは上の口からでなければならぬというように、残酷な串刺しの刑。その姉の叫びに續いて呻きが消えた時、琴の順番だつた。姉の血にぬれた男たちの腕が彼女の衿許に……その裸にされるために繩の解かれた時間を利用し、彼女は逃れたのだつた。追われて……彼女の、それまでの闘志が、急に失せてしまつた……。（あの人だつたのだ！）薄疊に毛皮を敷いて端座、本を読んでいたらしく、面長な蒼白い顔を靜かに琴の方に向けた。

声も無く二人の瞳が暫時、空に絡みあつていた。襖の外で騒がしく声がした。「御居間に曲者が！　上様！　御警護を」

忍び入りました様子にござりまする……そやつは手裏剣の名手とか……」返事を待つように、ちよつと間を置いて、襖に手をかけるけはいがして、「上様！　御警護を」

「よい！　退つて居れ！」

落着いた、嚴しい声で部屋の人は応じた。呆然と立ちつくした琴に微笑してみせたとすれば、あまりに淋しい笑顔だつた。「あなたの投劍では、いのちを救われたね。はずかしいが秀頼、あれから一刻も忘れなんだ……」涼しい瞳がうるんでいるのかと思われた。

（あたくしだつて、あたくしだつて）と琴は思つた。（あの時、平野川の堤で、兇漢の逃げ去つた後、二人でやわらかい草に並んで坐つて、まるで身も心も許しあつた間のような安らかな信頼感を覚えながら、田の青波をみつめていたあの時から、忘れられなかつた。そして、知つていたのだ秀頼公だと……けれども、そう思うことの

宿命から逃れたくて、ただ、長身白皙の、颯爽と駢馬に鞭を当てる若武者として、あなたさまを胸底に秘めていたかつたのだ……）

琴はその時たしかに、激しい叱声をききはした。（前にいるのは敵だ……秀頼だ。機会だ、絶好の……殺せ！　投げろ剣を！）

「痩せた。僅かの間に……」と秀頼が痛ましげにいつた。（何もしらない。この人は、何もしらなかつたのだ……）そう琴は思つた瞬間、ふらふらと膝の力が抜けた。秀頼の大柄な白羽二重の膝に、子供のように、面を伏せていた。さすがに驚いたらしく、まだ大人びてはいるが、どこかに残つている童顔を愚わせて、秀頼の掌は琴の髪を撫でた。彼のしつている女、たとえば千姫や奥の女には、彼女のような、いちづで、素直で、たくましげな心がなかつた。

（あたくしは生きたい……淀君にも、許嫁にも、殺されたくはない……）琴は、志野の掌をとつた。「敵の前に、反抗もなく、自ら身を投げるようにして捕われたあたくし……大御所や兵太殿にも裏切者……あきらめて」

（恋！　恋をなすつているのでは……）ふと志野の脳裏に、そんなせつない思いが流れる。彼女は、また報らむ。琴の恋より、兄の憤怒より、志野もまた、自分の想いを描いたのだ。彼女は、秀頼の近従、真田家の御曹子大助幸昌が好きだつた。大助は、彼女よりたしか、一、二才年下だが、ませていて、ある場合は秀頼公より年長にさえ見えた。紀州で浪人の父の許で野放図に育つたせいだろう。志野は、ちかぢか、女間者の死刑があるらしいというわさも大助からきいたのだ。「淀君が紀州猪名の蛇村の者を招いて、蛇を使つた拷問の事を訊いたり、大量の蛇を紀の熊野、江州伊吹に註文したげな……。あのお方は狂信者、何をたくらんでか、女の心は恐いて……」最後は、志野を茶化すように、女に苦労しつづけた男のようにいつた……。

2

志野は三の丸近くまで忍び出て、名残りを惜むように、千姫の小座敷の方向を眺める。だが、あたりには、灯影も洩れず、櫓と石垣の深い闇が重々しくあるだけだつた。小袖の下では旅の装束。夕暮それとなく姫に別れを告げてきた。琴の座敷牢の鍵はわざとかけ忘れておいた。志野の危険をいい張つて逃げようとしない琴に、志野は、それじや、あたくしもと約束した。十年振りに、父母の顔を見て、すぐ歸城するつもりだつた。「今度の御手切れがいのちの果て」と真田大助もいつていた。ふるさとの人々に別れを告げて……と思い定めた。合戦になり、いざとの場合は千姫城内脱出の手筈は何かとついていた。今度の琴の間者の使命にもその事が含まれている。けれど、志野は大助と生死を共にする覚悟だつた。彼女は自分の使つている下女かねに、大助への文を渡してきた。かねが琴の世話をする志野に疑いを持つた大野修理亮に買収されていることまではまだ志野の人生体験では、思い及ばぬ事だつた。

「志野さま」

ふいに背後で呼声がした。琴が石塀に添うように立つているのを、志野は、見定めるのに手間取る。琴は鼠染めの装束に身を固めていた。動作も女と思えぬ敏捷さ、闇にとけいるかに見えた。（兄に、ただいたずらに遁身の法を習つたことがあると話していらつしつたけれど、ほんに凛々しい……）と志野は思つた。三の丸を抜ける

と、玉造りから平野口にでる御門がある。そこを抜ければ城外……志野は門札を持つて、低く呼ぶ。

「御門衆！　御門衆！」

番人が、彼女に注意を向ける隙に、琴が、すり抜ける手筈だつた。その南番門は、ふだん、大奥の火急御用に使われていて、志野ちよつと志野の門鑑に手燭を当て、気軽く門番がいつた。には顔見知りの番衆が多い。

「やあ、こんな時刻に、御用が……」

「はい、御台様の御用で」と答えて、志野はわざと頬の染まつた様子を肩先に見せる。最近、女中方の時間外、外出が多いというわさである。志野もその程度の演技は出来た。

「通つてようございますか？」

「御台様付の志野殿でしたね」

「はい……」

「お通し出来ません」

「ええ？」と志野は、思わず番衆の顔を見上げた。同時に、そつと組んで、警戒の眼を光らせていた。明らかに、非常警備である。

「なぜ？　なぜ、このように、火急通行の門札のある者が通せませぬか？」

「志野殿は通せぬのです。命令です」

志野は危険を感じた。「わかりました。戻りましよう」と二、三歩、番侍を離れる。

「お戻りの方はありません」

「えッ？」

「お連れの方は？」

「知りませぬ……何を仰せなのか？」

「あなたのお連れです。共々引捕え、淀君様御用人まで渡すよう命じられています」

「あッ」と志野は、身を翻して、門外に走つた。「琴さま！　逃げて！」

「待たれい！」と追いすがつた番侍が、志野の小袖を摑んだ瞬間、うわッとのけぞる。肩先に、しびれる痛みを感じたのだ。

「早く！　志野さま！」

二間も先の闇から琴の声。さッと南番門の窓から照り出す手燭の光尖に、黒い影が浮いた。「あッ、琴さま！」すでに、四人の足軽に、胴と足をかつぎあげられた志野、懐剣を抜く隙もなかつたのか……。

琴の投げた柳生流十字剣はチカッ！　チカッ！　と次第に数を増す手燭や提燈の光の空間を、横に白い鳥の走るように飛ぶ。だあッ！　いたッ！　と叫んで倒れる一人、二人。志野は、地上に投げだされ、起き直る足を、再び、ずるずる引かれた。「あッあれッ！」と反抗に羞恥を籠めて、志野は裾の乱れをふせごうとする……。

人数は次第に増した。口々に何か喧しく喋りたてては、右に左に馳ける。「こつちだぞ！」……琴は、志野に近寄ろうとしては、襲いかかる人々にさえぎられ、横にかわし、走り寄ろうとしては、棒や槍にはばまれる。いつか、彼女は、身のまわりを囲む捕手から身を防ぐのに力を盡した。馳けるとみせて横にすべり、また馳け、地に伏せる……空濠の草に逃れたのが幸いだつた。石垣を寄じ登つ



て再び出た時は、人気がなかつた。ホッと肩でいきをして、はや、黒々と閉ざされた門を見る。急に、志野が気になる……引返してと思つた時、その肩を摑まれた。

「あッ！」と身を沈めて逃れようとする足のくるぶしに、火のような痛み「うッ！」

「逃げてみい、琴！」

「離して！」

「離さぬ。御家を裏切り、敵に身を委ねおつた憎い反間者。いやそれでなくとも、約束した良人のある身で、不貞の夢に総てを忘れた憎くい女、伊賀兵太が成敗しようぞ！」

「ああ！　兵太さま！　いつて、早く、志野様が、いま！」

「ばかめ！　妹の名など出しおつて、そのような反間の法、幼ないぞ琴！」

「いいえ、うそでは！　いま！」

「いうなッ！」と兵太の右腕が、ぱッと琴の乳下を突いた……。琴は倒れる……。

3

「ホホホ、よいともよいとも。志野がそのように、蛇を嫌うてなら」と淀君がいつた。豊艶な彼女のからだが、白蛇のように妖気を持つ美しさだつた。志野が一日二夜と責め問われても、蛇責めのうわさが怖ろしうて、と繰返し答えるだけだつたから……。

「琴という敵の女子が責苦、なにをおもとまでが一緒に逃れる譯がある……」

「でも、でも、恐ろしうて……」

「大阪の城が燃えるがかえ……？」

「いいえ、志野は大阪の者。城からは離れませぬ。城を愛して……」

城という言葉が、真田大助と置代えれば、真実だつた。しかし、淀は、「憎い、憎い、憎いぞえ」といつた。

「千殿もそなたたちお側も関東の狸口をよう真似てじや。ぬけぬけと。女童の頃から育つた恩も忘れて……よいとも、そなたも年頃じや、嫌う者を肌に抱く苦をしつてじやろうが。抱かしようぞ、抱かしようぞえ。その蛇を……蛇村の男をのう……」

「志野にいつわりはござりませぬ、お方さま志野は……」

「好きになろうぞ、嫌でものう。しずが里の村女さえ、嫁ぐを嫌うという蛇村……さぶらいの娘は、男に選り好みをつけぬがならい。ほほほ、抱かれてみい、抱かれて……」

「嫌だといつたな！　拒み通してみせるか琴！　二人の男に抱かれぬと……立派だ。立派だ！　主を、親を、夫を裏切り、抱かれた男に、みさをがたとうぞ！」

兵太はいつか、ただ、敵に伏した間者の制裁という境から離れていた。徳川家間者の秘密会合所の土蔵。太黒柱を通した太縄に両手首を縛られて、琴は釣り下げられていた。足指が床に僅かについて、身体を支えている。裸にされた上半身に、みみずばれた鞭の跡が、はや五、六條も……。蒼白なひたいを伝つて油汗が、乳房の上を辿つている。

「お殺しなさりませ、兵太さま！　琴は、琴は、いかように責められましても、秀頼公にからだを売つて救われたのでは……」

「うーむ。ならば主も許し親も許した男の拙者が、身体にきこうというをなぜ拒む。舌かみ切つても、琴の心に許した以外はと！」

「琴には、良人がございませぬ！」

「おのれ、また、ぬかしたな！　そちが心にきめた秀頼、いまに……」

戦いの明け暮れに成長した兵太は、十四、五才も年下の許嫁、妹と同年の女を、激しく恋うるいとまもない。関ケ原合戦に、すでに廿才。五才か六才の婚約者を思うより、戦の先々に、荒々しい抱擁に堪える女がいた。今、眼前で、鞭打つために裸にした肩や胸に、意外に完全な、そして、彼がそれまで知つた女たちより、遥かに秀れた女をみて、彼は（しまつた！）と思つた。

琴はこの家に連れこまれ、はじめて、平野川の堤で、秀頼を襲撃した竹売りたちも、伊賀兵太の部下なのを発見した。「あの時はあの武士が、秀頼公だとは、知らなかつた」といまさらいつても、弁

解にならない。城内での彼女と秀頼の間が、いつか間者により邪い関係のあつたものとして報告されていた。「死ね！　狂え！　ふふッ！」と兵太は、妻に情慾を遂げる呵責のなさで、琴の背を打つていた。びくッ！　と身体の震えと共に、中心を失つて、琴の爪先が動き揺れる。「ひッ！」と喉声が洩れた。

「痛いか！　ええ、痛いかッ！」

「痛くわない！　なーに、痛くもない、恐くもないわな……」

抗つて必死に上半身を反らした志野の顔の上で、青草い匂いのする唇が動いた。

「あーあッ」と志野は、身体の自由を失つていきをのむ。彼女の膝近くを、青大將が、事もなげに、すいすいとうねり走つた。

「こりや、邪魔しやんすな、おぬしら」

男は足尖で青大將のからだをひつかけてぽいと、部屋のわきに投げる。彼の腕は、志野の胸と胴を這つていた。

志野は本丸御庭の築山裏、韓骨櫓に移されるまで、秀頼や千姫の救いを期待していた。だが、韓骨櫓は囚獄という地下牢と共に、城内の不思議な箇処になつていて、そこへ行き無事に生還したものがないとされていた。一説には、海に抜ける地下道の場所ともいわれる。韓骨というのも、故太閤が朝鮮から連れ帰つた捕虜に作業をさせ、そのまま密殺したところから、そう通称される。じめじめした廊下には、蛇が群れ遊んでいた。そこの番衆は、紀州猪名の番衆だつた。

番衆たちは絶好の獲物を得た蛇の瞳で、奥育ちの可細い志野を囲んだ。その中のひとりが、まきつくように、志野を引寄せた……。

男と板の間を這う蛇と、志野は二つから身を守らねばならなかつた。「痛うはない。ほんのちよつとの辛抱やわ。ほれ、のう。蛇めは長からうが、あんなではないほどに。……蛇めは狙つとるぞ。早う素直にせんとほれ。あたたかい、草叢の、ええ眠り穴を狙うとる」「うッ」と志野は短かく呻いた。ひやりとふくらはぎをなでる触感があつた。

「こら、おぬし、あつかましや」

志野を押えた男が、青大將を摑みあげて投げた。はねる蛇の尾が、軽く志野の額を打つ。

4

かたッ！　と微かな音、五三桐金巻絵の手函の蓋が開かれた。秀頼が微かに身動きした。薄眼を開けているかに見える濃い睫毛だ。蒼白で面長な顔は眠つていると尚、清々寂々と冴えている。金襴べりのたたみに、紫地に白く桐を染めぬいた夜具。黒漆金高巻の刀掛に、石玉造りの佩刀が置かれている。黄金の鳳が飛ぶ鉄打。金銀粉散らしの襖が五・六寸開いたままだ……琴が逃げるための用意である。鼠装束凛々しい姿だが、かがんで、書類をみる尻が、なまめかしく大きく張つている。

伊賀兵太に最後は犯され、殺される覚悟だつたが、ふいに、覆面

した立派な老人に救けられた。殿！　殿様！　と兵太たちは呼んでいた。琴の許される條件は、一ツ、淀殿又は内府（秀頼）のいのちをちぢめる事。一ツ、城内黄金秘蔵場所を探る事。一ツ、秘密城内図を奪う事。この内一つは成し遂げねばならなかった。老人はいう。「内府殿に抱かれついで、枕許の手函を探れ。秘密図があろう。最も戯れ絵もあろう故、楽しむがよい」

琴はむしろ秀頼のために、老人の素姓を知りたかった。彼は大阪城内の事をよくしっていたし、逆に駿府の大御所をも家康殿と親しげに呼ぶ……しかし、今は老人の命令に従う事が絶対だった。「そちのいのちがなくなるですむまいぞ。駿府の父母、兄などすべて切腹……」と冷めたい声が続いた。

琴は抱かれてはいなかった。忍ぶにすぎなかった。彼女は忍んだ……ちらと取り上げた紙面に、絵図らしい線が見えた。（あった）と秀頼の枕許から身を引く瞬間、「琴！」

はつと琴は絵図を胸に抱いて立ちすくむ。

「琴！」と秀頼がいう。微かに身を動かして、やすらかな寝息。

（まあ！）……琴は動けない。呆然と、仄かな燈台の灯に浮ぶ顔をみつめる。秀頼の額と小鼻に汗がにじみ出ている。



彼女は絵図を落した。ばさッと小さな音。秀頼のからだが寝たままの姿で横に転んだ。刀掛に腕がのびたとみた時、刀身がさやを抜け、すいと琴の足許を拂う。淀君の手に甘やかし育てられても、さすがは戦乱の子、見事だった。……琴は、はッとわれにかえり、一尺ほど後にすべった。

「曲者！」

「御免！」と琴は身を返して逃れでようとした。

「あッ！琴！」

琴は振向いた。「お許し遊ばせ」彼女のからだは、引開けられた襖に隠れようとしていた。

「待て、琴！」

「お見逃がしを……」

「ならぬ！　話が、話したい事がある」

二人の瞳がいつかのように、空間で絡みはじめた。琴の肩がせつなげにあえぎ揺れる。

「予は、予は、そなたを……」

「いいえ。おおせにならないで！」と泣き叫ぶに似た琴の声が残って、扉装束は、庭の闇にとけた。

5

常は陰鬱な鞳骨櫓の内部も今宵ばかりは廊下のわき



した空気だけは、どうにも拂い切れぬらしい。

御居間の上段には淀君が、朱塗の盃を手にして藤色夏草散らしの小袖姿で着座している。その膝下に敷かれた朱布団が、いやに生々しくなまめいて、それにふれるばかり、中段に大野治長が坐つていた。地下道があるといわれたり、黄金隠匿所といわれたりするのも、櫓の奥や築山の影に、横穴、井戸、石塀などが、草に蔽われるように存在するからである。蛇はその秘密を守る重責を担つているのかもしれない。淀君のいる居間からななめ下の一方は細い竹網で小一尺ばかり仕切られていた。その内側には重

柱などに、尺余の間ごとに灯影が立ち、畫にまがう有様……壁や柱を伝う青大将の姿も嘘のように見られなかつた。だが、地底から吹き起るような、ひやりと

なり絡れあつた無数の蛇が棲んでいる。白く塗り固められた倉底の中央に、志野が倒されていた。この番兵養成所は四隅の上から、光りが照りゆらめくようになつている。それは、志野の裸身に、やわらわな陰影を与えた。彼女の右の足首は床に打ちつけた環に一尺ほどのたるみをもたせて太綱で結ばれている。左の足首も、倉の上にのびた横木から下る綱でしばつているが充分よゆうをみせて動きに不自由はない。同じ事は右の手首についてもいえる。その綱は頭の方向の壁に向つてのびている。そうした、自由な身動きのために、志野は、すでに小半刻近く、手足の首を結ぶ綱をほどこうともがき続けていたのだ。だが全く自由なのは左手だけである。右手首は、足首に達するには、少し足りず、足もまた、倉を駈け出る事を許してはいない。眼前の竹網の中で蛇共が肌すれあつて蠢めくのを、空しく身悶え眺めていた。シイツ……シイツ……と鳴声ならぬ声が、ぶきみに、倉の中をなでる風のようにし続ける。青臭い匂いに満ちている。「いやか、いやかな匂いが？」と蛇村の男がいつた事がある。「したがな。こやつの匂いは、それ、あんたのこれ、ここの腐つた青草の匂いよ」彼にそこを刺し示されて言葉もなかつた。

自分が何をされるのか、志野は男共に、詳しく聞かされていた。彼等はそれを聞かすことで、志野をおびえさせた。抵抗力を彼女から滅殺した……。だから、彼女は、今も必死に、網をとこうとしている。彼女に許された自由の中で……。

志野はすでに、男共を恐れない。彼等を彼女は知らされ盡していた。爬蟲類の冷血な本能は、志野の中に親しい蛇村の人間の匂いを嗅いでいた。眼覚めの床の中で、溫みを求めてまるくとぐろを巻く青大將に、志野は何度か叫びをあげた。「恐がることはない。今日が最後だ。こいつらと一緒に眠るのもな。時がくれば、お前がこいつらの寢床になる」と男共が笑つた。

絶望したように、長い垂髪をふりさばいて天井を見上げた志野の顔をみて思わず淀君が呟いた。「まあ、変りやつた！」

可憐だつた紘月眉の小さな顔、その眼のふちはじじ黒く染みかげろい、ただ、ぎらぎらと瞳のみが光つていた。豊かな胸や腰のやわやわしさのみ、前と相違がなかつたけれど、そのなめらかな肌に、点々と、紫紅色の血の模様がついていた。淀君には、それが、唇や歯、指爪の跡とすぐ察しられる……「ふふッ志野のようなおぼこでさえ……」彼女はやがて、自分の体内で、美しく開花する、志野の若い生命を物慾しげにみつめた。哀れとは思えない。なぜなら、志野より自分が愛されたから……。

淀君の続けている蝮蛇の埋没療法はしだいに狂信的になつていた。それは、五十才にほど近くなつた彼女の肉体の夕映えと軌道を一つにしていた。「もつとよう効く方法がないのかえ……？」と蛇村の者にいらだたしげに質したりした。「蛇めを、若い女の精で育てましたら」……むかし、蛇村の秘法として、他部落からさらつてきた男女を、そんなことに使つた法が伝つているのを、男は洩らした。さすがに淀君も、そうしろとはいわなかつたが、たまたま、敵に寢返つた志野を捕えて、いずれは死刑になる女と……。

蛇のつまつた樽が運びこまれると、滝のように、竹網の内側に流しこまれる。その度に志野は、今にも網の壞われそうな恐怖に襲われた。蛇は青大將、黒蛇、蝮蛇と雑多だつた。その中から、蛇村の男が巧みに、蝮蛇をえり分けて、顎を押え毒牙をぬいた。蝮蛇はその度に、少量の液を盃に吐きだす。そうした十数匹の蝮蛇と青大將

のつまった樽が、志野のいる床に、流しいれられる……。

志野はからだをちぢめる。側によろうとする蛇をさけて身をずらせば別の青大将の上に尻をおいた。真白い床や壁は、蛇共を苛立たせた。隠棲場所を求め、影を草原を穴を求めて這い伝つた。敏感な蝮蛇は、いち早く、蠢めく志野に、温みと影を認めた。しかし、怖れて近寄らず、顎骨の張つた三角頭をもたげじつと狙いをつけた。あるものは、彼女の左足をしばつた。倉上の横木に這いのぼつて、上から、茶色の瞳をこらしていた。

やがて、ぷーんと香の高い焼酎瓶が運ばれてきて、倉の壁から床に流される。いままでにふく床をはつていた蛇は、急に活潑に、すいすいと走りはじめた。大嫌いな酒の香から逃れるため……ただ一つの岳をめざして。

「あッア、あーッ、あれえッ！」

志野は絶叫した。彼女はある種の恐怖を忘れたかに見えた。自分をめがけて、急によりはじめた蛇共を摑み、蹴りつけた。ぐるぐる廻り転げてはねる彼女の裸身、黒く長い頭髪自体が、すでに一匹の爬蟲類に見えた。

「引け！　綱だ、綱だ！」と蛇村の男のひとりが叫んだ。じりじりと、志野の手首と左足の綱が引かれた。

「あッ、あッ、救けて！」

志野は、しだいに自由を失つてゆく恐怖に雄叫びをあげた。「うわッ！　あーッ！」

だが、彼女のからだは、完全に、片手をのばしきつて床に横に固定されはじめた。自由なのは左手と、腰だけである。彼女はその自由を最大限に利用して、手を振りたて、腰をまわした。……すると彼女の左足首が床を離れて、空間にのびはじめた。

横木にかけられた綱がぐいぐいちぢまりはじめた。志野の左右の足首が、尺、二尺と離れ離れに開いてきた。

「ひえッ！」と彼女は絶叫した。

同時に、蝮蛇は青大将共の背を乗り越えて飛んだ。横木の上の奴は、頭を振つて調子をとると、ぽとりと、音もなく落ちていつた。

「きやッ！」と志野は、額に伝う触感から逃れようとして自由な左手で蝮蛇の胴を摑んだ。すると、蝮蛇は、憤怒したように、くるくるるそれに巻きついた。

うッツ、あッ、うッツ、と、志野は激しい吐息を洩らす。いまは、彼女の裸身のびくびくと震え動くのにもなれきつた蛇の群が思うままに、なまあたたかな体温を慕つて、彼女のからだにまつわりむれた。

彼女の首、肩、胸、腹、また、そして足をするすると蛇は樂しげに、絡みつき、這い走り、巻きつきしていた。

「ひイッ！」

と志野はふいに、全身の無礼な侵略者をふり落すように、身悶えた。蝮蛇の一匹が、絶好の遁身所を発見したように、彼女の体内に三角頭を突き入れたのだ。

「うッ、ひーッ！」

床と空間に離れた足は、蛇体をふせぐよしもない。すでに、何匹目か、草のかげりに、細い尾を僅かにだして、全身を没していた。

（この項終り）



★先頃シロシロの客引きが、近頃は堅気の娘さんも観に来ますと、自慢していた。不良な上役や同僚の男社員に誘われて、恐いもの見たさの好奇心から来るのだろうが、女性風俗も変つたものである。

☆その客引きの曰く、アベックならシロクロ、おひとりならシロシロがよろしい。そうして最近は專らシロシロの方に人気があるそうだ。

★料金はお一人なら二千円、お二人で二千五百円、三人で三千円と言つたところ。

★しかし、実演なんぞというものは、誰しも話の種に一度は——と思うだろうが、観て終えば至極アホラシイものである。マア初心者にラーゲや前戯の参考に多少なる位のもの。

スッカリ職業化されているから、各動作をナメラカに、次から次えと展開する。女同志でもあるし、追力のないことおびたゞしい。観賞用においても、シロシロはシロクロの敵ではない。



★二ケ月程前、東京の某夕刊に、「シロワン」と称する記事が出ていた。女と犬のとり合わせである。念の爲に前記の客引き氏に聞いてみたら、「いや、あれは嘘ですよ。そんなものありません」と、断乎たる言であつた。

いずれが果して真なりや？

★職業化と言えば、ことイロゴトに關する限り、職業化は禁物だ。セックスは未知なるものえの情念だから、あんまりあからさまに羞恥やういういしさが無くなると、興味索然となる。

★先日Yレコードを聞いたが職業的な女の声で、感興は浅かつた。終りに、「ネエ、お母さんに默つてゝね」と女が言う辺り、憤飯物である。これも、話に聞くうちは一度、と誰しも思うだろうが、イザ蓄音機にかけると、突如、動物的なあの呼吸が響き渡る。君子人ならずとも、嫌悪羞恥の情を催さざるを得ない。意識的につくられた音声の鑑賞なぞは、ひそやかな春本秘畫による楽しみなぞに比べると、大部下のものと言えよう。ヤハリ色事は穩密なるをもつてヨシとする。情事はあく迄も当事者の楽しみであつて、他から覗いたり聞いたりするのは、邪道である。



★結婚紹介所で、女性を紹介された時、手数料にチップをやつたら、後日電話が掛つて来た。よき客と見て、別の女性を紹介する心算だつたらしい。むこうも商売だから、男女会員の電話番号を出来るだけ聞たがる。適当な相手と思えば、すぐ電話を掛けて、連絡がつけばその日にでも男女が会えるように取計ろう訳である。